研　究　紀　要

1995．3

財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団

研　究　紀　要

1995. 3

財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団

発刊にあたって

財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団は平成４年に発足し、以来磐越自動車道、上信越自動車道や国道のバイパス工事等の公共事業に関連した遺跡の発掘調査を実施しております。

近年、県民の歴史や文化財に対する関心が高まってきており、当事業団の果たす役割はますます大きくなってきており、埋蔵文化財の保護のため、「遺跡出土品展」・「発掘調査報告会」や「親と子の考古学教室」の開催、広報誌「埋文にいがた」の発行等をとおして保護思想の普及啓発に努めております。

発掘調査によって得られた成果については、調査記録の報告書として多くの県民や研究者に活用され、本県の歴史や考古学の研究に活かされております。

また、新潟県の歴史をさらに明らかにしていくために、今までの個別の遺跡の事実を他の遺跡や地域との関連性など総合的な研究を進めていくことは非常に重要なことであり、当事業団の役割の一つと考えております。

この研究紀要は、発掘調査や調査報告書作成等の日常業務の多忙な中での調査研究の集約でありますが、本県の歴史や考古学の研究に役立てられれば幸いであります。

最後に研究紀要の発行にあたり御協力いただいた関係者に対しまして厚くお礼申し上げますとともに、今後ともご指導くださるようお願いします。

平成７年　３月

財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
理事長　本　間　栄三郎

目　　次

発掘調査の概要とその成果……茂田井　信　彦……1

東蒲原郡三川村上ノ平遺跡・吉ケ沢遺跡の調査概要……沢田　敦・飯坂盛泰……3

東蒲原郡上川村北野遺跡の調査概要……高　橋　保　雄……7

五丁歩遺跡出土板状剝片石器の使用痕分析……沢　田　　敦……11

古墳出現前後における集落の動向
——越後の集落を考える上での基礎整理として——……滝　沢　規　朗……27

古代集落の展開
——越後を事例として——……春　日　真　実……66

小重遺跡出土の備蓄銭について……戸根与八郎・鈴木俊成……105

発掘調査の概要とその成果

調査課長　茂田井　信　彦

はじめに

当事業団は、平成４年４月に設立され、本年で３年目を迎える。

平成４年度は約12万６千㎡、平成５年度は約12万５千㎡、平成６年度は約13万８千㎡の発掘調査を実施した。磐越自動車道及び上信越自動車道の建設にかかる遺跡や国道バイパスの建設にかかる遺跡から、古くは旧石器時代に遡り、縄文時代、弥生時代、古墳時代を経て、奈良・平安時代、そして中世の各時代の重要な遺構、遺物を発見し、本県の歴史を解明する上で貴重な資料を得ている。

特に、上ノ平遺跡Ｃ地点及び吉ヶ沢遺跡B地点（ともに東蒲原郡三川村）並びに北野遺跡（東蒲原郡上川村）そして和泉A遺跡（中頸城郡中郷村）については、学術的にも高く評価され県内外から注目を浴びている。

当事業団が、平成４年度から発掘調査を実施した中から注目される遺跡の概要について、時代を追って紹介し、その成果を述べる。

旧石器時代

磐越自動車道三川サービスエリアの建設に伴い、サービスエリア内に所在する上ノ平遺跡及び吉ヶ沢遺跡からは旧石器時代から平安時代までのさまざまな遺構、遺物を調査した。日本の後期旧石器時代を特徴付ける石刃技法によって製作されたナイフ形石器や彫刻刀石器が出土しているし、また旧石器時代から縄文時代の移り変わりを示す遺物と考えられる全長27㎝と日本最大級の大型尖頭器や両面加工の石器なども出土している。次章で後述するが、いずれにしても旧石器時代の遺跡としては県内で初めての大規模な面積の発掘調査であり今後、整理作業を進めていく中で遺跡内での人間活動の全体をさらに考察したい。

縄文時代

この３か年で約50遺跡の発掘調査を実施し、そのうち約30遺跡は縄文時代が主体かあるいは縄文時代が含まれていた遺跡であった。関越自動車道堀之内インターチェンジの建設に伴い、インターチェンジ内に所在する清水上遺跡（北魚沼郡堀之内町）は縄文時代中期を中心として営まれた遺跡である。発掘調査は平成２年度から５年度までの４年がかりで実施された。環状集落に属する竪穴住居跡は約100基検出されそれら周囲からはフラスコ状土坑も検出されている。前期中葉及び中期初頭の遺物は県内でもまとまった出土例が少なく貴重な資料である。

また、上信越自動車道の建設に伴い平成５年度から発掘調査を実施している和泉A遺跡（中頸城郡中郷村）は、中期初頭から晩期の遺跡であり、特に中期初頭の竪穴住居跡（３基検出）は妙高火山から噴出した火砕流によってパックされ、良好な状態で保存されていた。また竪穴住居の周りに土石を盛って雨や風をしのいだ周堤が出土している。縄文時代の周堤の出土例は、鹿島遺跡（福島県）、はりま館遺跡（秋田県）に次ぎ全国的にもめずらしいものである。

最近、寺野東遺跡（栃木県）の環状盛土遺構、三内丸山遺跡（青森県）の盛土遺構など縄文時代の廃棄行為が注目されている。和泉A遺跡の集石帯も土木工事で出た土や石などを捨ててできた可能性があり、次年度の発掘調査で一層明らかにさせたい。

弥生時代

国道116号線和島バイパスの建設予定地に所在する奈良崎遺跡（三島郡和島村）は、弥生時代を中心とする

複合遺跡と考えている。今回の調査（平成４年度）は、法線内にがけ崩れが起き、その工事に先立っての部分調査のため、遺跡全体の調査はまだ終了していない。

遺跡の山頂部平坦面及び南北斜面で多くの溝を検出し、また山頂部には数多くの区画溝のほか、後期に所属する特異な形態の方形周溝墓と思われる遺構も検出されている。南側斜面肩部では植林の段切りによって壊れ不明瞭ではあるが、断面V字形の環濠となるらしい溝が確認されている。

奈良崎遺跡は高地性環濠集落の可能性も高いとみられるので今後の調査にその解明を期待したい。

古　墳　時　代

主体が古墳時代の発掘調査は、まだ実施していないが、国道116号線和島バイパス建設予定地に所在する大武遺跡（三島郡和島村）は、縄文前期、弥生中期、古墳前期、中世の四時期わたるものと推定される。地表から深さ約２mのところで古墳時代初頭の水田跡と水路が検出されている。畦は幅約50cmで土が盛られ、水路は深さ約40cm、用水口が１か所設けられていた。この水路から、農耕に使用したと思われる木製品も、加工途中の部材を含め４～500点出土し、また、集落の祭祀関係に利用したと思われる６世紀前後の古い須恵器をはじめ高坏や器台も出土している。大武遺跡は八幡林遺跡や奈良崎遺跡に隣接しているため、今後の発掘調査は、さらに慎重に実施して遺跡の全容を解明し、当時の人々の生活を知る手がかりとしたい。

奈良・平安時代

国道49線横雲バイパスの建設予定地に所在する上郷遺跡（中蒲原郡横越村）の発掘調査は平成４年度から３か年にわたって実施された。遺跡の中央部に幅1.5m、深さ0.7mの流水路が検出され、しかも流水路と直行して浅い溝が走り、微高地を区画している。また水田状の遺構からは、「一斗五升」の木簡が流水路からは建築部材（のこぎりによる切り痕が残る）が出土している。この流水路は、蛇行を繰り返す阿賀野川の支流の一つであろう。この流水路の自然堤防上の微高地に成立したのが平安時代の低湿地開発村である上郷遺跡である。自然堤防上を直線で分割し、これによって囲まれた部分を一軒の領域としていたものらしい。遺物が高密度で出土した所はどこも、柱穴、井戸、土坑などがかたまって検出されている。これらの生活空間を水から守るために溝や土手が機能的に配置されている。低湿地の開発を知るには格好の遺跡であると考えられる。

中　　世

国道17号線長岡南バイパス拡幅工事に伴い、この拡幅工事部分に所在する中潟館跡（長岡市）は、地元では「館」（たて）、「館の内」（たてのうち）と呼ばれ、土塁状の高まりが残っていた。館の周囲では、北側で幅６m、深さ1.8mの堀と土塁、南側では堀を一部掘りの越した土橋が確認された。内郭では建物の柱穴と考えられる直径15～50cmのピットが200基、溝９条、井戸、土坑等が検出された。井戸の覆土からは木札、曲物等の木製品や籾殻や炭化米が出土した。

「この場所に武家の館があった」という地元の伝承が発掘調査の結果、証明された。

お　わ　り　に

本県には、悠久の歴史と豊かな文化を象徴する埋蔵文化財包蔵地が約１万１千か所存在している。埋蔵文化財は本県の歴史と文化を知るうえで貴重なものであり、これらの遺跡を保護して後世に引き継いでいくことは私たちに課せられた責務でもある。一方、県民生活の安定向上を図るための県土開発も本県の大きな課題である。これらの開発計画と埋蔵文化財の保護との調整が重要な課題となっていて、適切かつ迅速な実施が求められている。そのためには、もっと県民の理解を得るために、埋蔵文化財の重要性をさらに認識し日ごろから研鑽に励み、専門職員としての資質の向上に努めなければならない。

東蒲原郡三川村上ノ平（うえのたいら）遺跡・吉ケ沢（よしがさわ）遺跡の調査概要

沢田　敦・飯坂盛泰

1　は　じ　め　に

上ノ平遺跡と吉ケ沢遺跡の調査は磐越自動車道三川サービスエリア建設に係る緊急発掘調査である。1992年は、上ノ平遺跡Ａ地点と同Ｃ地点の一部の調査を行い、杉久保型ナイフ形石器と神山型彫刻刀形石器を共伴する石器群を検出した。1993年は、上ノ平遺跡Ｃ地点の残り調査範囲と吉ケ沢遺跡Ｂ地点の一部の発掘調査を行った。調査の概要は以下のとおりである。

上ノ平遺跡Ｃ地点（1993年調査分）

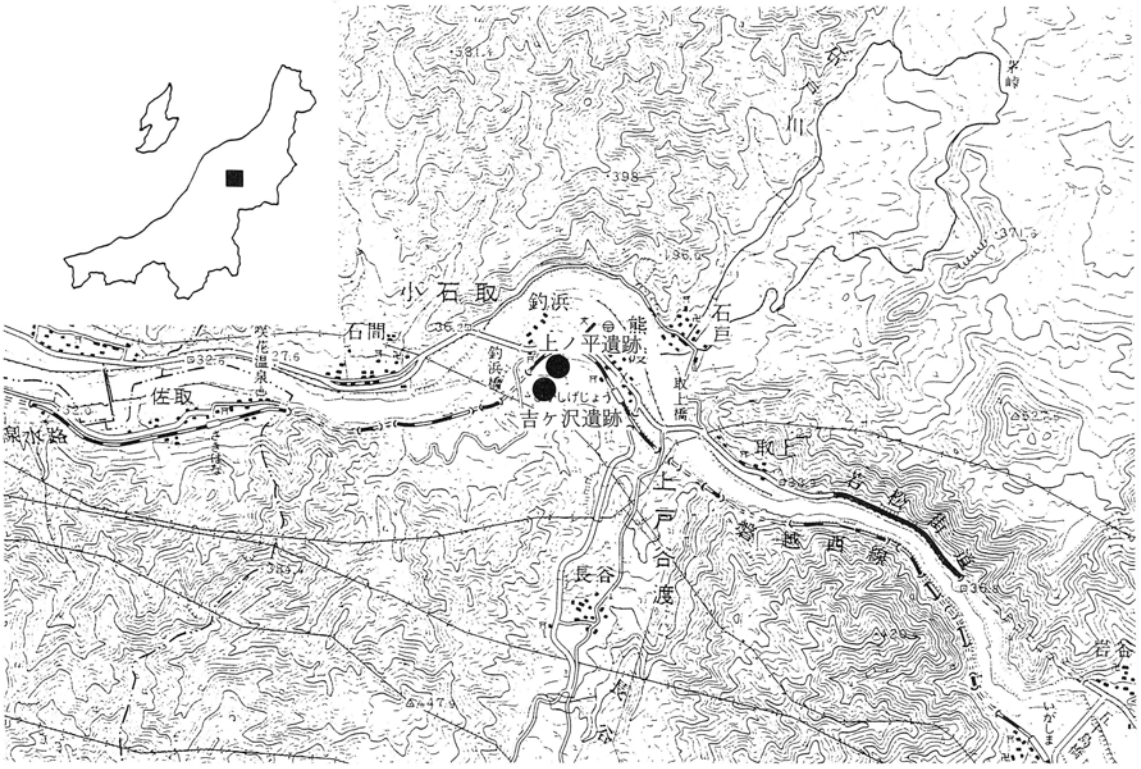
所 在 地：新潟県東蒲原郡三川村大字上戸谷渡字上ノ山6270他

調査主体：新潟県教育委員会

調査実施：財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

調査期間：1993年４月12日～1993年８月24日

対象面積：7600㎡



第１図　遺跡位置図（1：50,000）
（国土地理院「津川」1:50,000原図 平成4年発行）

吉ケ沢遺跡Ｂ地点（1993年調査分）

所 在 地：新潟県東蒲原郡三川村大字上戸谷渡字吉ケ沢6293他

調査主体：新潟県教育委員会

調査実施：財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

調査期間：1993年５月６日～1993年11月30日

対象面積：6480㎡

2　遺跡の位置と立地（第１図）

二つの遺跡は、遺跡の北側を西流する阿賀野川によって形成された河岸段丘上に位置し、標高は上ノ平遺跡Ｃ地点が約70ｍ、吉ケ沢遺跡Ｂ地点が約71ｍで、阿賀野川との比高差は約50ｍである。遺跡のある段丘面は阿賀野川と平行して東西にはしる谷によって開析されており、北側の段丘面に上ノ平遺跡、南側の段丘面に吉ケ沢遺跡が存在する。上ノ平遺跡は、東からＡ・Ｂ・Ｃの３地点で構成されている。このうちＡ地点とＣ地点から旧石器時代の遺物が出土した。また、吉ケ沢遺跡は東からＡ・Ｂの２地点で構成され、Ｂ地点から旧石器時代の遺物が出土した。

3　基　本　層　序

上ノ平遺跡Ｃ地点と吉ケ沢遺跡Ｂ地点の層序は上ノ平遺跡Ａ地点の基本層序に準じている。各層の厚さは場所によって大きく異なるが、平均層厚は各層10～15㎝前後である。吉ケ沢遺跡Ｂ地点では、IIａ層が20～30㎝と厚く、２枚に分層可能であった。III層以下はいわゆるローム層でIII～VI層に分層された。IV層はIII層よりも赤く、白い粒子が混じる。Ｖ層は白い粒子が密に入り、色調も淡くなる。VI層は、褐色で岩片が混じり、その含有量によってVIａ・VIｂ層に細分された。これらのローム層からは一次堆積のテフラは認められなかったが、上ノ平遺跡Ａ地点で行った火山灰分析で、III層上部が浅間－草津黄色軽石（AS-YPK）の、Ｖ層上部が姶良Tn火山灰（AT）の降灰層準に推定されるという結果が得られた。

4　調　査　成　果（第２図）

上ノ平遺跡Ｃ地点

上ノ平遺跡C地点では、今年度の調査で８か所の石器集中地点（以下ブロック）が検出された。昨年ブロック１か所（ブロック５）を調査したので、合計９か所のブロックが検出されたことになる。ブロックから出土した石器はナイフ形石器・彫刻刀形石器・石刃を出土するものと、大型の尖頭器・剝片・石核を出土するものの２つに大別される。両者は石器組成・石器製作技術から時期が異なるものと思われるが、出土層位等は今後の課題としておきたい。

前者は遺跡の東半部に位置する５か所のブロックである。遺物はIIａ層～Ｖ層まで出土しているが、主にIII層から出土した。ナイフ形石器は杉久保型で彫刻刀石器は神山型が主体である。石材は大部分が頁岩と凝灰岩である。また、トゥールが多いものの石核・砕片などは少なく、昨年調査した上ノ平遺跡A地点に石器群のあり方が類似している。

後者は遺跡の西半部に位置する３か所のブロックである。ブロック６のIIｂ層上部から長さ約27㎝の尖頭器が１点出土している。ブロック６は遺物がIIａ層～III層上部から主に出土し、遺物のほとんどが剝片や砕片であった。ブロック６から約10ｍ東にブロック１が位置する。ブロック１は直径約４ｍの範囲でＩ層～IV

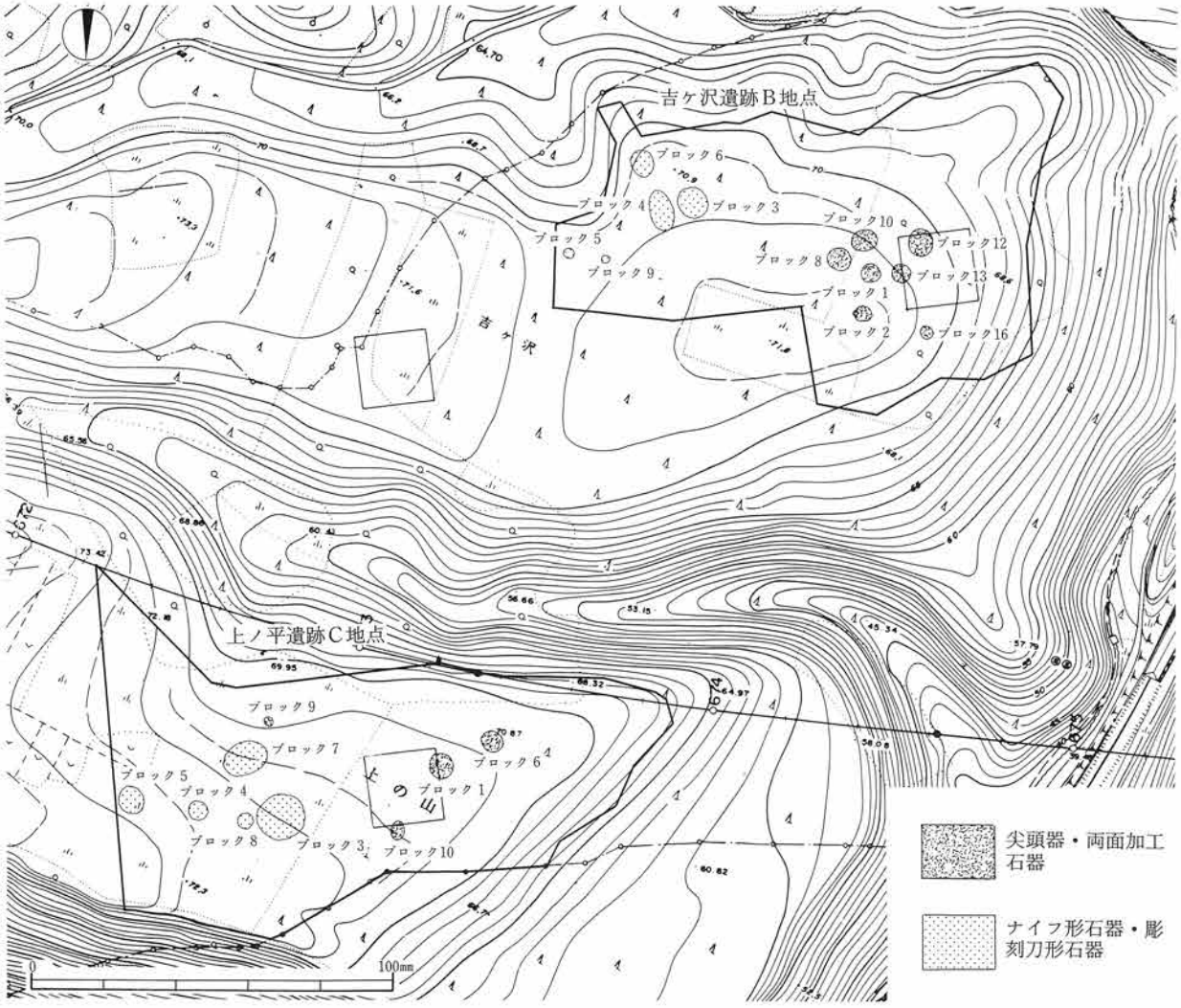
層から遺物が出土した。遺物の内容は多量の剝片・石核である。特に遺物が多く出土したⅡａ層下部～Ⅲ層上部に当時の生活面があったと推定しているが、今後の詳しい検討が必要である。石材は頁岩・凝灰岩が主体で、ナイフ形石器を出土する石器群に比べて粗粒のものが多い。石核・剝片・砕片が多量に出土しているので、ブロック１を中心として剝片生産が行われていた可能性が高い。この石器群の位置づけであるが、大型の尖頭器を伴っていることから縄文時代草創期のものであると考えられる。

吉ケ沢遺跡Ｂ地点

吉ケ沢遺跡Ｂ地点では、これまでに７か所のブロックを調査したが約2,000㎡が未調査であり、来年度の調査によってブロックがさらに増えるものと思われる。すでに、未調査部分に４か所のブロックが存在することを確認している。吉ケ沢遺跡Ｂ地点でも上ノ平遺跡Ｃ地点と同様の２種類の石器群が検出されている。

東半部には石刃生産が行われたブロック３を中心に、杉久保型ナイフ形石器・神山型彫刻刀形石器を組成するブロックが５か所存在した。ブロック３は遺物がⅠ層～Ⅵ層にかけて出土したが、生活面は大型の石核・剝片・礫が面をなして検出されたことからⅢ層中にあったと考えられる。遺物は出土地点を記録したものだけでも4000点を越え、それらの中には多量の石刃石核・石刃・各種調整剝片が含まれていた。トゥールとしては杉久保型ナイフ形石器・神山型彫刻刀形石器が含まれるがその割合は低い。

西半部には、両面加工石器・尖頭器・剝片を組成するブロックが検出された。遺物はⅡａ層～Ⅴ層から出土したが、Ⅱｂ層～Ⅲ層上部に集中する。両面加工石器には小型のものと大型のものがある。同一母岩の剝



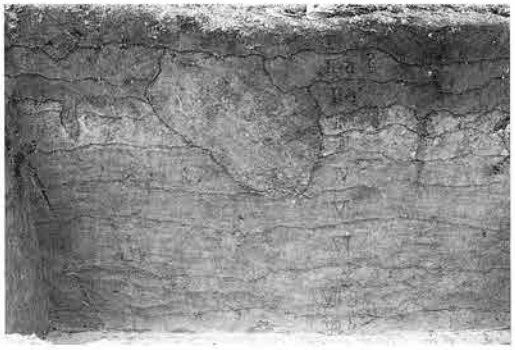
第２図　上ノ平Ｃ、吉ケ沢Ｂブロック位置図

片なども出土していることから石核の可能性が高いと考えられるが、石斧等の未製品の可能性もある。また、多量の剝片が出土していることから、剝片生産を中心とした石器製作が行われていた可能性が高い。石材は、頁岩・凝灰岩である。遺物の出土状況・出土遺物の内容が上ノ平遺跡C地点西半部の石器群と類似しているので、両者はほぼ同時期のものと考えられる。この石器群のブロックは来年度調査部分に延びると考えられるので、来年度の調査によってさらにその全体像があきらかになると思われる。

5 ま と め

今回の調査で、ナイフ形石器・彫刻刀形石器を組成する石器群と尖頭器・両面加工石器を組成する石器群が検出された。前者は上ノ平遺跡C地点や昨年度調査した上ノ平遺跡A地点では出土点数が少ないもののトゥールの割合が高く、吉ケ沢遺跡B地点では、石核・調整剝片・石刃が多量に出土した。同じ石器群でありながら遺跡でのあり方にこうした違いが認められた点は、今後の当該石器群の研究において重要な位置を占めるものと思われる。また、上ノ平遺跡A地点・C地点では良質の頁岩を石材としてもちいているのに対し、吉ケ沢遺跡B地点では石刃生産にもちいられた石材に粗粒のものが多い点は、当該石器群の石材の獲得・消費パターンをあきらかにする手がかりとなるであろう。今後の整理作業での課題としたい。

尖頭器を組成する石器群については石器製作技術・組成などの検討から上ノ平遺跡C地点と吉ケ沢遺跡B地点の共通点と相違点をあきらかにすることがまず第一の課題である。両遺跡は大枠では同時期の石器群であるが異なる点もいくつか認められるようである。また、両遺跡とも遺跡内で剝片生産が行われている可能性が高く、今後の整理作業をつうじていまだ不鮮明な当該期の剝片生産技術の一端があきらかになることが期待される。



吉ケ沢遺跡B地点基本層序

吉ケ沢遺跡B地点ブロック3石器出土状況

上ノ平遺跡C地点ブロック1石器出土状況

吉ケ沢遺跡B地点ブロック3礫出土状況

本論は『第7回　東北日本の旧石器文化を語る会　予稿集』に掲載したものの内容を変更しない範囲で書き改めたものである。ただし、6頁の写真4点は新たにつけ加えたものである。

東蒲原郡上川村北野（きたの）遺跡の調査概要

髙　橋　保　雄

1　は　じ　め　に

新潟県埋蔵文化財調査事業団では、磐越自動車道建設に伴い、平成２年度より本格的な発掘調査を実施している。新潟市～三川村間は既に終了し、津川町～県境間を残すだけとなっている。

北野遺跡は平成４年度に第１次調査を、平成５年度より第２次調査を実施し、平成７年度まで行う予定である。なお、調査概要を報告するにあたり、遺物・遺構の整理作業が未着手であることを断っておきたい。

所 在 地：新潟県東蒲原郡上川村大字九島（くしま）字長木（ながき）3,429番地ほか（通称：北野）

調査主体：新潟県教育委員会

調査機関：（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

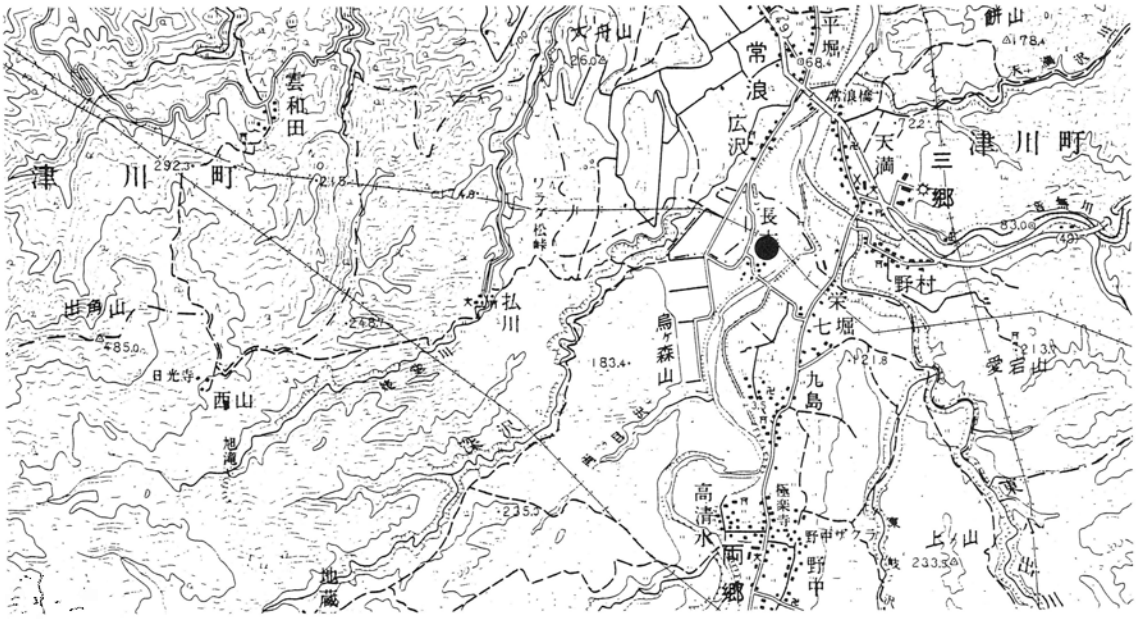
調査期間：平成４年７月14日～７月17日（第１次調査）　　平成５年４月19日～12月３日

　　平成６年４月12日～11月22日

調査面積：上層　7,900㎡　　下層　5,100㎡

2　遺跡の位置と立地

遺跡は県内の東側寄り、福島県境に程近いところに位置し、阿賀野川の支流常浪川によって形成された左岸の段丘の平坦地に立地する。この段丘は長さ約400ｍ・幅約120ｍでほぼ南北に延び、西側から北側にかけては比高差約20ｍの上位段丘の崖と小さな沢により区切られ、南側から東側にかけては常浪川が流れている。遺跡付近の標高は67ｍで、現河床との比高差は約６ｍである。調査以前は杉林に、一部は畑・水田・墓地等に利用されていた。また、遺跡名の「北野」は、遺跡付近が「北野」と地区民に呼称されていたことによるもので、かつて「北野（天満宮）神社」があったという伝承が残っている。



第１図　遺跡位置図（1：50,000）
（国土地理院「御神楽岳」1:50,000原図 昭和55年発行）

村内には本遺跡のほか約20か所の縄文時代の遺跡がある。その多くは常浪川及びその支流沿いの段丘に存在する。また、常浪川上流部にある小瀬ヶ沢洞窟と室谷洞窟は、縄文時代草創期・早期の遺跡として全国的に知られ、国の史跡に指定されている。

3 基 本 層 序

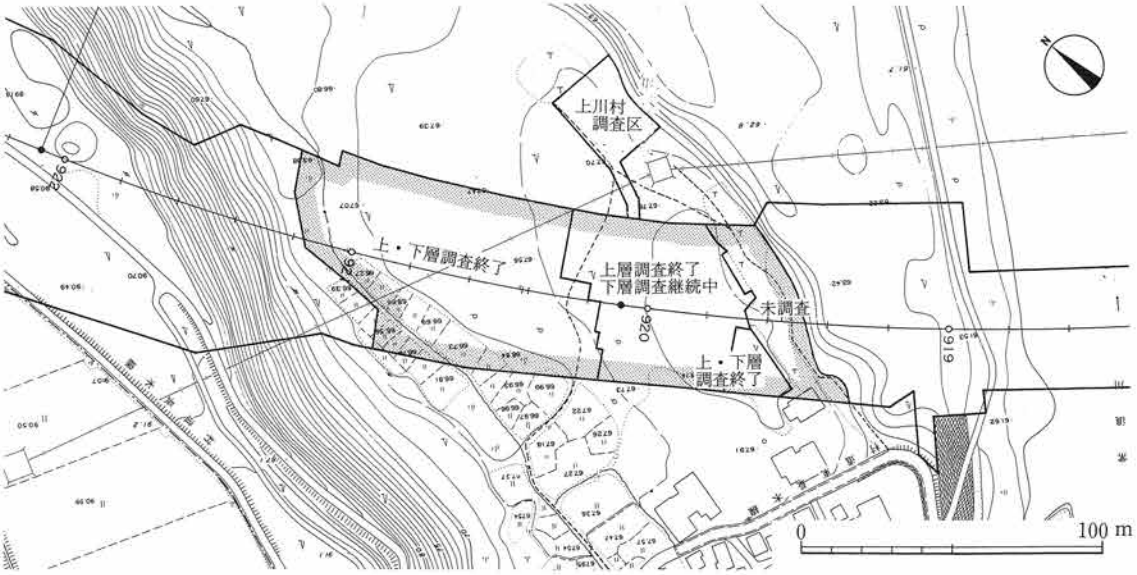
遺跡は段丘の平坦地に立地するため、調査区西側の沢地以外は、ほぼ同様の層序である。

Ⅰ層	10～20cm	黒褐色シルト。表土・耕作土・腐植土。
Ⅱ層	10～15cm	暗褐色砂質土。縄文時代中期～晩期の遺物包含層である。
Ⅲ層	10～20cm	黄褐色砂質土。Ⅱ層からⅣ層への漸移層である。
Ⅳ層	10～80cm	淡黄色砂。福島県金山町沼沢火山による火砕流の二次堆積物層である。徐々に堆積したため、何枚かに分層可能である。
Ⅴ層	10～15cm	黒褐色シルト。縄文時代早期～前期の遺物包含層とされる。前期後葉～末葉の遺物は、Ⅴ層上面で多く出土する。
Ⅵa層	0～5cm	暗褐色シルト。Ⅵb層よりやや明るい。
Ⅵb層	5～15cm	暗褐色シルト。Ⅵa層よりやや暗い。
Ⅶ層	5～10cm	褐色砂質土。Ⅵb層からⅧ層への漸移層である。
Ⅷ層	20～30cm	橙褐色砂。
Ⅸ層		砂れき。

Ⅳ層はほぼ5,000年前の堆積といわれているが、C^{14}年代法で沼沢火砕流が4,870±110y. B. P.、4,950±130y. B. P.、沼沢火砕流の二次堆積物が5,800±170y. B. P.、4,360±120y. B. P.という結果が得られている。

4 調 査 の 概 要

Ⅳ層を挟んで上層・下層に分け調査を行い、上層は調査対象面積の9割を、下層は6割を終了した。また、調査区東隣では上川村教育委員会が、調査区内にある墓地移転先の発掘調査を平成6年に実施した。



第2図　調査範囲図

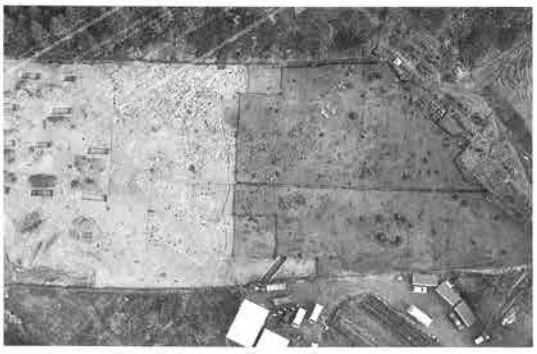
1）**上層**　縄文時代中期～晩期、平安時代、中世、近世以降の遺構・遺物が認められる。その多くは縄文時代中期末葉～後期初頭に属し、当時の集落跡に伴うものである。

遺構　縄文時代中期末葉～後期初頭の集落跡は、遺構の配置から径70～80ｍ前後の環状集落と推定され、内側には径約１ｍ前後の土坑が多数存在し、外側にはこれを取り巻くように住居跡・炉跡・埋設土器等が多数認められる。住居跡・炉跡は約50基検出されている。いずれも現地表面下約15～30cmの浅いところで多く認められ、遺存状況はよくない。したがって住居形態は不明なものが多いものの平地住居または浅い掘り込みのある竪穴住居と推定される。このほか県内では類例の少ない敷石住居が５基(内１基は柄鏡形敷石住居)検出された。これらの住居跡に伴う炉跡は、土器埋設複式炉と土器埋設石組炉の２種類で、ほぼ半数ずつである。炉跡の重複状況や他遺跡の例から複式炉から石組炉へと変遷するが、変遷過程を知る上での多くの資料が得られた。さらに遺構で特筆されるものに約130基検出された埋設土器がある。ほとんど正立で、土器よりやや大きい程度の穴に埋められている。扁平礫の蓋石のあるもの、横位に埋められてるものも少数認められる。土器内覆土の分析では、リン酸・カルシュウム含量が土器外より高いという結果が得られている。

その他の時期の遺構として、縄文時代中期前葉～中葉にかけての住居跡・フラスコ状土坑群、後期後半の住居跡、平安時代・中世以降の掘立柱建物跡・空堀・溝などが検出されている。

遺物　土器•石器など合わせて平箱3,400箱（箱サイズ60×40×10cm）ほど出土している。このほか常浪川から遺跡に搬入し、何らかの施設に用いた礫が多数ある。土器の多くは縄文時代中期末葉（大木10式）～後期初頭（三十稲場式）に所属する。文様等から東北地方南部との関連が強く窺われる。器種は深鉢が多く、他に浅鉢・ミニチュア土器・蓋・台付鉢等が認められる。石器は石鏃・石錐・石匙・不定形石器・凹石・磨石・敲石・砥石・磨製石斧が比較的多く、打製石斧・三脚石器・板状石器・石錘・石皿は少ない。石製品・土製品では石棒・土偶・石製玉・土錘などが少数見られ、土器片円盤は多数出土している。

その他の時代の遺物としては、縄文時代中期前葉（大木７ｂ式）～中葉（大木８ｂ式）、後期後半（加曽利


中期末葉～後期初頭の集落跡

柄鏡形敷石住居

土器埋設複式炉

埋設土器

B式）の土器、平安時代の土師器・須恵器、中世の珠洲焼、近世以降の陶磁器等が認められる。

2）**下層**　縄文時代早期後半、前期前半、前期後葉～末葉の遺構・遺物が認められる。その多くは前期後葉～末葉の集落跡に伴うものである。下層面はⅣ層が厚く堆積していたため、後世の攪乱等が及ばず非常に良く保存されていた。特に前期後葉～末葉の集落跡は、遺構が半埋没状態でⅣ層が堆積したため、集落跡廃絶時に近い状態で確認された。

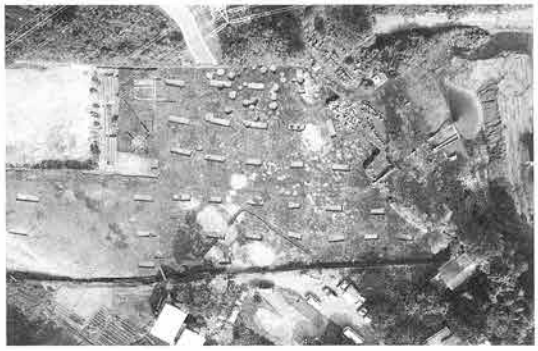
遺構　調査継続中のため詳細は、平成７年度調査で明らかになるものと思われる。前期後葉～末葉の集落跡は調査区外に範囲が延びるものの、遺構・遺物が極めて少ない広場と推定される周りに、多数の住居跡・土坑・焼土が認められる。また、集落跡西側のやや低い部分には、土器・石器の捨て場が検出された。住居跡は12基確認されているが、いずれも竪穴住居跡で、住居構築時に出た土は周囲に盛られている。この内２基のみ完掘した。径約3.5ｍの円形小型住居と長さ約16.4ｍ・幅約7.4ｍの隅丸長方形大型住居である。住居内に炉跡は検出されず、住居外に焼土が認められることから屋外炉の可能性もある。

その他の時期の遺構としては縄文時代早期後半、前期前半の土坑が数基検出されている。

遺物　土器•石器など合わせて約330箱（箱サイズ60×40×10cm）ほど出土している。土器の多くは縄文時代前期後葉（大木５式）～末葉（大木６古式）に所属する。文様等から東北地方との関連が強く窺える。また、大木６新式の土器が認められないことから、この時期にⅣ層が堆積したものと推測される。石器は石鏃•尖頭器・石錐・石匙・不定形石器・石錘・磨製石斧・打製石斧・凹石・磨石・敲石・砥石・石皿等が認められ、特に石錘の多さが注目される。石製品・土製品は、ほとんど出土していない。

その他の時期の遺物としては、縄文時代早期後半（田戸上層式）、前期前半（関山式）と推定される土器•石器が出土している。

＊この報告は平成６年６月に新潟県考古学会で発表した要旨をもとに、その後の調査結果を加え、書き改めたものである。



前期後葉～末葉の集落跡

大型住居と小型住居

竪穴住居の土層断面

土器・石器の捨て場

五丁歩（ごちょうぶ）遺跡出土板状剝片石器の使用痕分析

沢田　敦

1　はじめに

五丁歩遺跡は新潟県南魚沼郡塩沢町にあり（第１図）、関越自動車道建設に伴い新潟県教育委員会によって1983・84年に縄文時代中期前葉の環状集落の全域が調査された〔高橋・高橋ほか1992〕。また、五丁歩遺跡の調査と前後して清水上遺跡、城之腰遺跡の縄文集落の発掘調査が行われ、魚沼地域の縄文集落・土器・石器の様相があきらかとなった〔田海・高橋・高橋ほか1990、藤巻・国島ほか1991〕。特にこれら三遺跡の報告書では、土器だけでなく石器についての詳細な記述・分析が行われ、多くの重要な成果がもたらされた。

本論で問題とする板状剝片石器については、五丁歩遺跡と清水上遺跡の調査によって重要な知見が得られた。五丁歩遺跡と清水上遺跡では遺跡の主体となる時期がほぼ同じであるにもかかわらず、五丁歩遺跡では1034点もの板状剝片石器が出土しているのに対し、清水上遺跡では104点が出土しただけであった。高橋保雄は五丁歩遺跡の報告書の中で魚沼地方の縄文時代中期前葉から後期前葉の石器組成を集成し、このような板状剝片石器の遺跡間での遍在を指摘した〔高橋1992〕。

本論はこの板状剝片石器の遍在の背景を石器使用痕分析をもちいてあきらかにすることを試みたものである。

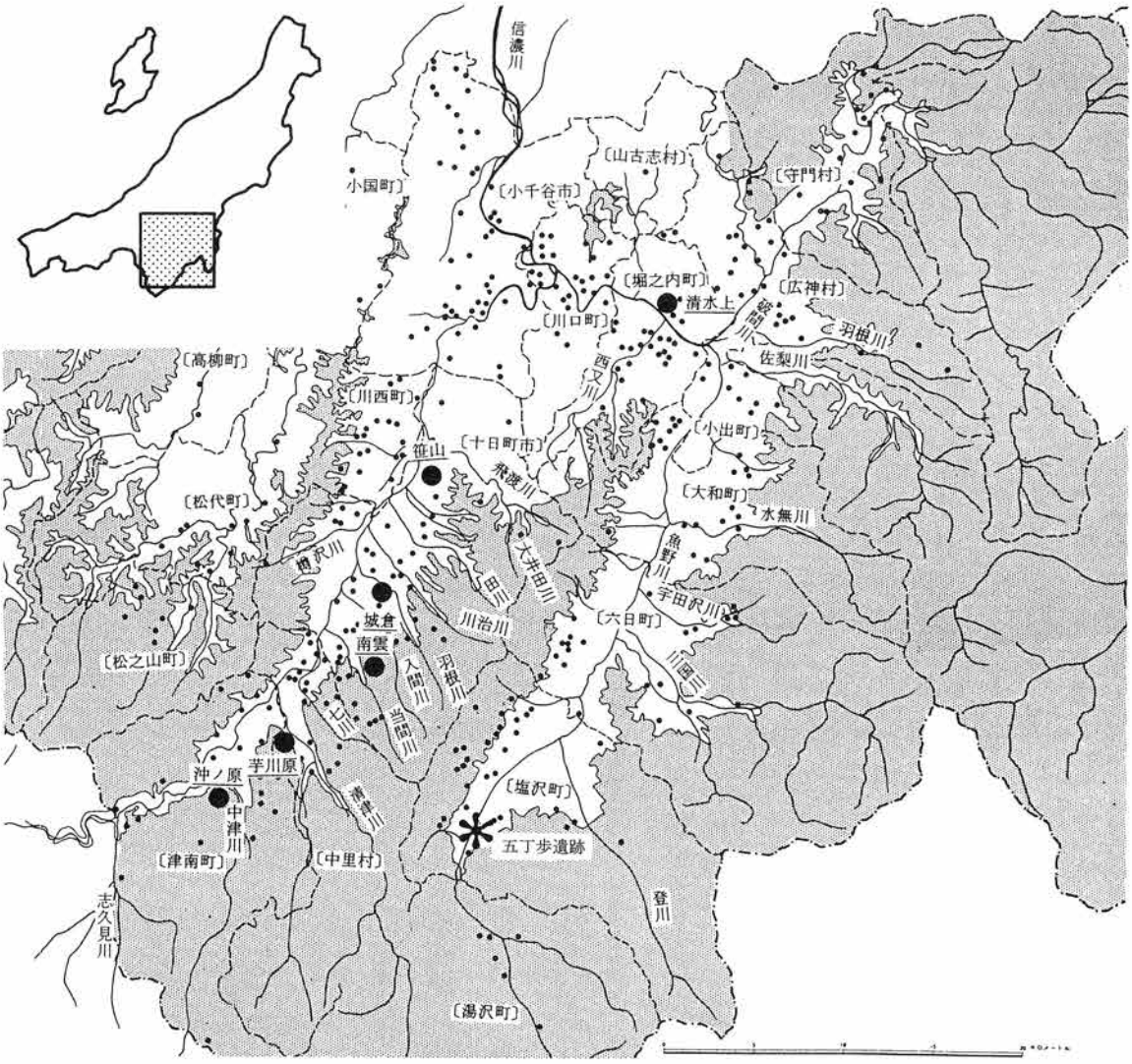
2　問題の所在と分析の目的

関越自動車道建設に伴い新潟県教育委員会によって五丁歩遺跡の発掘調査が行われたことはすでに述べたが、ここでは報告書にもとづいて五丁歩遺跡の内容を概観することにより問題の所在をあきらかにし、あわせて分析の目的について述べたい。

A　五丁歩遺跡の概要

五丁歩遺跡では集落の全域が調査された。集落はいわゆる環状集落で57軒の住居跡によって構成され、集落が営まれた時期は出土土器から縄文時代中期前葉から中葉で、関東・中部高地の狢沢式・新道式から藤内式、東北地方の大木7b式から8a式に並行すると考えられている。同じ魚沼地方で約28km離れた堀之内町清水上遺跡とは主体となる時期がほぼ同じである。また、集落が円形ないし楕円形と長方形の住居跡で構成される点も共通している。しかし、出土土器を比較すると清水上遺跡では北陸系・東北系の土器が主体を占めているのに対して、五丁歩遺跡では北関東・中部高地系の土器が主体を占め、その内容が大きく異なっている。

石器は、打製石斧・磨石類・板状剝片石器・砥石の多出という特徴が認められた。これらの器種のうち打製石斧・磨石類は魚沼地方の当該期の遺跡では普遍的に多出する器種で、五丁歩遺跡の石器組成は魚沼の当該期のあり方を逸脱するものではない。一方、板状剝片石器や砥石は多量の出土が認められたにもかかわらず、必ずしも普遍的な器種ではなく、五丁歩遺跡が突出している。



第１図　五丁歩遺跡と周辺の縄文時代中期の遺跡（高橋・高橋ほか1992第４図を一部改変）

B　問題の所在と分析の目的

高橋保雄〔1992〕は五丁歩遺跡出土板状剝片石器の詳細な観察・分析からこれらが実用品であることをあきらかにし、板状剝片石器を使用した特定作業の存在と生産物の他遺跡への供給を遍在の背景と推定した。また、清水上遺跡の三脚石器、時期は異なるものの城之腰遺跡の石錘の多出も、同様の背景を持つとした。

高橋の分析と解釈の重要な点について指摘しておきたい。第一点は石器組成の遺跡間での違いを強調した点である。従来の研究では土器型式や地域を単位とした石器組成の特徴から、生業の背景・差異をあきらかにすることが試みられてきた〔小林1974、1975a、1975b、1975c〕。こうした視点の重要性はいうまでもないが、時期・地域を限定した中での特定器種の遍在を指摘した高橋の視点は重要であろう。さらに、遺跡間の石器組成の差から縄文時代における集落間の活動の差・分業[1]について述べている点も評価されるべきであろう[2]。

ところで高橋の研究に限らず石器組成を生業や特定の活動と結びつけて研究する場合、石器の器種と機能の間に強い相関関係があるという前提に立っている。しかし、これまでの使用痕分析は必ずしも器種と

機能が結びつかないことをたびたび示しており〔梶原1982、Yerkes1987〕[3]、こうした前提を無条件に設けることには問題がある。高橋は報告書の中で肉眼ではあるものの板状剝片石器の使用痕を観察しており、必ずしも無条件でこうした前提を設けたわけではないが、より詳細な使用痕分析を行うことにより、この前提を検討することが必要である。

本論では高倍率法の使用痕分析によって高橋の解釈の前提を検討することを目的としている。また、高倍率法の使用痕分析では、石器の動かされ方だけでなく具体的にどのような対象物（以下被加工物）にもちいられたのかを推定することが可能である。被加工物から板状剝片石器をもちいて生産されたものを推定することが期待できるわけである。

3　五丁歩遺跡出土板状剝片石器の使用痕分析

A　方　　法

本論ではいわゆる高倍率法の使用痕分析を行う。高倍率法とは石器表面に残された使用の痕跡を100倍～400倍の倍率で顕微鏡観察するもので、L. H. キーリーによって開発された〔Keeley1980〕。分析方法の具体的な内容に関しては、わが国では山田しょう、阿子島香らが詳しく解説している〔山田1986、阿子島1989〕。特に、使用痕から機能を推定する基準が体系的な使用実験によってもたらされることがこの方法の重要な部分であり、こうした実験による解釈は観察方法にかかわらず、しばしば実験使用痕研究と呼ばれている。

高倍率法の使用痕分析は微小光沢面（以下光沢面）・微小剝離痕・線状痕をあわせて観察し解釈するが、被加工物の推定には特に光沢面が重要とされている。近年、光沢面と被加工物との対応関係に疑問が提出され議論されているが〔Newcomer et al 1986、Grace1989、山田1986、岡崎1989〕、筆者らは被加工物の推定にはやはり光沢面の観察が最も有効であると考えている〔Yamada・Sawada1993、沢田1993〕。筆者らは、刃部からの侵入度・巨視的断面形・微視的断面形・低部への侵入度・分布形・発達度・境界型・表面のなめらかさ・ピットの量・線状痕の種類・二次的線状痕の量[4]・線状痕の方向・刃部の摩耗度の13の光沢面の属性を観察し、光沢面をタイプではなく属性の組み合わせで記述することにより、光沢面と被加工物との対応関係を属性レベルで検討した（第2・3図）。本論ではこの方法をもちいて光沢面を記述するが、方法の内容についてはいまだ概要を発表しただけなので稿を改めて詳しく論じたい。

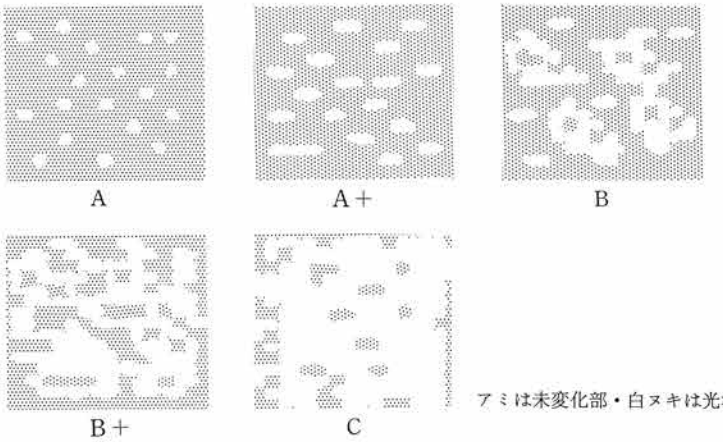
今回の分析の解釈は頁岩製の実験石器にもとづいている〔梶原・阿子島1981、芹沢・阿子島・梶原1981、沢田1993〕。分析対象となる板状剝片石器は泥板岩・粘板岩などを石材としているが、これまでに行われた使用痕実験をみると石材を越えた共通の使用痕パターンが認められる〔御堂島1986、1988、Keeley1980〕。したがって、頁岩での実験結果をもとに解釈を行うことに特に問題はないと考えられる。

遺物の観察はオリンパスBHT金属顕微鏡で落射照明をもちいて行い、アルコールで手の脂をふき取る以外の前処理は行わなかった。写真撮影はアダプターをもちいてオリンパスOM 2で行い、フィルムはフジネオパンFをもちいた。

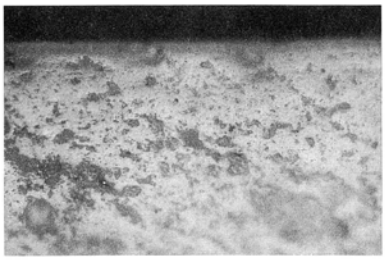
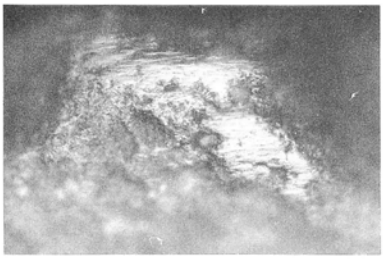
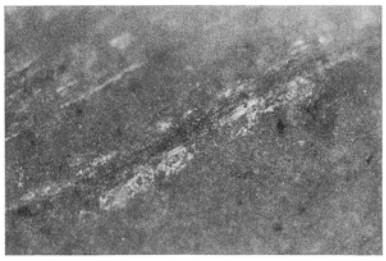
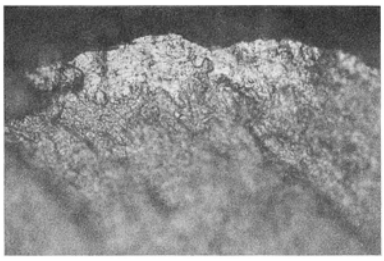
B　分 析 結 果

1）対象資料

分析対象としたのは報告書掲載遺物63点の中から抽出した23点である。ただし、抽出にあたっては報告書の分類結果を参考にして全体を反映するようにした。第1表に分析対象の23点を示した。分析は光沢面

属　性　名	スケール	定　　義 カ　テ　ゴ　リ　ー
刃部からの侵入度	Macro	光沢面の分布範囲の石器縁辺からの最大距離
		刃部に限定　200μm以下　500μm以下 500μm～1.0mm　1.0mm以上　刃部から離れる
巨視的断面形	Macro	100～200μmレベルでの光沢面の断面形
		丸い　中間　平坦
微視的断面形	Micro	20～30μmレベルでの光沢面の断面形
		丸い　中間　平坦
低部への侵入度	Micro	石器表面の微細な凹凸の低部への光沢面の侵入の程度
		高い　中間　低い
光沢面の分布形	Macro	光沢面の平面的な広がりのパターン
		面的　点状　線状
光沢面の発達度	Macro	100μm四方を単位とした光沢面の最大発達部位での発達度
		
境界型	Macro	光沢面と未変化部との境界の変化のタイプ
		明りょう　中間　漸移的
光沢面の滑らかさ	Micro	20～30μm四方を単位とした、光沢表面の滑らかさ
		滑らか　中間　荒い
ピットの量	Micro	20～30μm四方を単位とした、光沢面表面のピットの量
		多い　中間　少ない
二次的線状痕の量	Macro	顕微鏡視野内における二次的線状痕の数
		5以上　5以下　なし

第2図　光沢面観察基準（1）（属性のスケールで、Macroは100μm四方から顕微鏡1視野レベル、Microは20～30μm四方レベルで観察される。）

属　性　名	スケール	定　　義
		カ　テ　ゴ　リ　ー
線状痕の種類	Micro	幅数μm以下の線状痕の種類
		 埋められた線状痕（Filled in）　  溝・峰状  線状の光沢　  「見えない」線状痕
線状痕の方向		線状痕の主な方向で、石器縁辺との関係で記述
		平行　斜行　直交　ランダム
刃部の磨耗度	Macro	石器縁辺・刃部の使用による磨耗の程度
		大　中　小　無

第３図　光沢面観察基準（２）（属性のスケールで、Macroは100μm四方から顕微鏡１視野レベル、Microは20～30μm四方レベルで観察される。）

の観察を主として行った。これは、板状剝片石器の刃部すべてが二次加工によって作出されており、微小剝離痕と二次加工の際に生じた微細な剝離との区別ができなかったからである〔Grace1989〕。

２）分析結果

観察した23点の石器のうち17点に使用痕が観察された。観察された使用痕の特徴は第２表に示したとおりである。また、各石器における使用痕の強度分布図[5]と使用痕の写真を第４～９図に示した。

ここでは、観察された光沢面を類型化して記述した後で用途を推定することにする。筆者は以前、多変量解析による用途推定の方法を示したことがあるが〔沢田1993〕、今回観察された光沢面はやや特殊なもので稲科植物・木・骨・角・皮など多くの実験結果がある被加工物による光沢面とは異なっていた。したがって、今回は多変量解析をもちいなかった。しかし、筆者はデータおよび解釈の手順の明示化が必要であるとの立場にたっており、その確立のためにはさらなる実験の追加が必要であることを、今回の分析をつうじて認識することができた。解釈はデータから直接的に行われたが、できる限り解釈の根拠を示すようにした。

観察された光沢面

観察した23点の石器のうち17点に使用痕と考えられる光沢面が認められた。第２表にそれぞれの使用痕の特徴を示した。これらの光沢面は二つの類型に分類できた。

第１の類型（以下Ｉ類）は断面形が平坦で低部への侵入度が低い。光沢面のピットの量には一定の傾向は認められないが、線状痕は峰状・溝状であり、光沢面の表面は荒い。光沢面の分布は広範で石器腹面の内側まで光沢面が認められ、光沢面と非光沢面との境界（境界型）は明瞭であった。光沢面の発達度も比較的高いものが多い。この光沢面が認められた石器は256・257・259・270・272・290・297・300・308・311の10点である。これらの石器のうち270はほかの石器に比べて丸い断面形を持ち、境界型も中間である。また、308も比較的丸い断面形を持っていた。これらはＩ類の光沢面の特徴と異なるが、荒い表面や峰状・溝状の線状痕はＩ類の特徴であり、光沢面の分布パターンも共通していたのでＩ類と判断した。線状痕の方向は10点中５点がランダムであった。

第１表　使用痕観察石器一覧（高橋1992を元に作成）

番号	分類	長	幅	厚（cm）	重さ（g）	石材
256	A	6.6	7.5	2.2	137.0	泥岩板
257	A	6.6	7.3	1.0	69.0	泥岩板
259	A	4.5	5.6	1.9	35.5	泥岩板
264	A	3.9	4.4	1.1	26.0	泥岩板
270	B	5.8	8.3	1.0	65.0	泥岩板
272	B	4.8	6.7	1.2	49.0	泥岩板
277	B	2.9	5.8	1.2	26.0	泥岩板
279	B	3.3	4.8	1.1	18.5	泥岩板
282	B	2.2	3.5	0.9	9.0	粘岩板
283	B	2.0	3.4	0.6	5.0	粘岩板
284	C	4.5	6.4	0.9	31.0	泥岩板
286	C	4.0	6.2	1.0	29.5	泥岩板
290	C	3.5	3.9	1.1	19.0	泥岩板
296	C	2.5	2.6	0.5	5.0	泥岩板
297	D	6.2	7.5	2.4	118.0	泥岩板
298	D	4.1	5.5	1.3	36.0	泥岩板
300	D	5.0	5.8	1.0	44.0	泥岩板
303	D	3.3	5.0	1.6	28.0	粘岩板
308	E	4.5	5.5	0.9	32.0	泥岩板
311	E	4.4	4.4	0.6	18.0	泥岩板
313	F	4.5	5.3	1.8	52.5	微細斑糲岩
317	F	3.4	4.3	1.2	21.0	泥岩板
318	F	2.6	2.9	0.6	5.5	泥岩板

第２の類型（以下II類）は断面形が平坦なものが多く低部への侵入度が低い点、光沢面の表面が荒く峰状・溝状の線状痕が卓越する点、光沢面と非光沢面の境界が明瞭な点はＩ類と共通するが、光沢面の分布が狭く広がらない点、光沢面の発達度が低い点で異なる。光沢面は刃部に限定して認められることが多い。II類の光沢面が認められた石器は264・279・283・

第２表　観察された使用痕

	光沢面の属性												
遺物番号	刃部からの侵入度	巨視的断面形	微視的断面形	低部への侵入度	分布形	発達度	境界型	なめらかさ	ピットの量	線状痕の種類	二次的線状痕の量	線状痕の方向	刃部の摩耗度
256	1mm以上	中間	中間	低い	広範	B	明瞭	荒い	中間	溝・峰状	多い	直交	大
257	1mm以上	中間	平坦	低い	広範	B	中間	荒い	多い	溝・峰状	多い	ランダム	大
259	1mm以上	平坦	平坦	高い	点状	B	明瞭	荒い	少ない	溝・峰状	少ない	ランダム	不明
264	刃部に限定	中間	丸い	中間	点状	A+	明瞭	荒い	中間	溝・峰状	少ない	直交	不明
270	1mm以上	丸い	中間	中間	広範	B	中間	荒い	少ない	溝・峰状	少ない	ランダム	小
272	1mm以上	丸い	中間	中間	広範	B	中間	荒い	少ない	溝・峰状	少ない	ランダム	小
279	離れる	平坦	平坦	低い	点状	B	明瞭	なめらか	少ない	見えない	なし	直交	なし
283	0.2mm以下	不明	平坦	高い	点状	A+	明瞭	荒い	不明	線状光沢面	なし	直交	小
290	離れる	平坦	平坦	中間	中間	B	中間	荒い	少ない	溝・峰状	なし	直交	中
296	離れる	平坦	平坦	低い	点状	A	明瞭	中間	中間	溝・峰状	なし	直交	なし
297	1mm以上	平坦	平坦	低い	広範	B	明瞭	荒い	多い	溝・峰状	多い	ランダム	不明
298	1mm以上	平坦	平坦	中間	広範	C	明瞭	中間	中間	溝・峰状	多い	ランダム	不明
300	1mm以上	平坦	平坦	低い	広範	B+	明瞭	中間	少ない	溝・峰状	多い	ランダム	小
308	1mm以上	中間	丸い	低い	広範	B+	明瞭	荒い	多い	溝・峰状	多い	ランダム	不明
311	1mm以上	中間	中間	中間	点状	A+	明瞭	荒い	中間	溝・峰状	少ない	直交	不明
317	離れる	平坦	平坦	低い	点状	B	明瞭	中間	少ない	溝・峰状	なし	ランダム	不明
318	刃部に限定	丸い	丸い	高い	点状	A+	漸移的	荒い	少ない	溝・峰状	なし	直交	中

296・298・317・318の7点である。線状痕の方向は7点中5点が刃部と直交していた。

光沢面から推定された石器の用途

光沢面から石器の用途とりわけ被加工物を推定する場合、光沢面がある程度発達していることが条件となる。今回の分析では、Ⅰ類の光沢面からの被加工物の推定は可能であると考えるが、Ⅱ類の光沢面による被加工物推定は困難と考えられ、可能性を検討するにとどめたい。

Ⅰ類の光沢面は、断面形が平坦で低部侵入度が低く、光沢面と非光沢面との境界が明瞭なことから、石器が硬い被加工物に対してもちいられたことを示していると考えられる。硬い被加工物の代表的なものとしては、骨・角をあげることができるが、今回観察された使用痕は光沢面の分布が比較的広い点、光沢面の表面が荒いものが多い点で骨・角の使用痕とは異なる。むしろ、光沢面の特徴としては石器と石とをこすりあわせたときの光沢面に類似しているといえる。第10図の写真は石とこすりあわせた頁岩に生じた光沢面であるが、今回観察されたⅠ類の光沢面に類似している。Ⅰ類の光沢面に二次的線状痕がしばしば認められること、光沢面が石器の腹面側にきわめて広範囲に分布し、線状痕の方向がランダムな例があることを考えあわせると、五丁歩遺跡出土の板状剝片石器は石などを台としてそのうえで被加工物をすりつぶす（すりのばす）ようにもちいられた可能性が高い。そして、台との摩擦によって生じた光沢面が卓越したこと、砂粒等が混入して二次的線状痕が生じたことにより、被加工物に対応する光沢面の特徴を読みとることができなかったと考えられる。ただし、石との摩擦によって生じたと考えられる光沢面が認められた点は、石器が台と接触するような軟質のものを被加工物としていたことを示している。また、もし皮などの大きな被加工物であればたとえ軟質であっても石器と台は接触しなかったはずなので、被加工物は軟質であまり大きくないものが予想される。高橋は板状剝片石器を植物から繊維を取る道具と推定したが、今回の使用痕分析の結果はこれを決定づけるデータは得られなかったものの矛盾するものではない。

ところで、Ⅱ類の光沢面はどのように解釈できるのであろうか。Ⅱ類の光沢面は発達度は低いものの、Ⅰ類の光沢面に類似した特徴が認められる。このようなⅠ類とⅡ類の光沢面については次のように考えている。すなわち、Ⅱ類の光沢面はⅠ類の光沢面の未発達な段階ないし分布が限定された段階で、その原因として①作業量の違い、②使用部位の違いが考えられる。

①の解釈はⅡ類の光沢面が認められた石器は、Ⅰ類のそれに比べて行われた作業量が少ないため、光沢面が発達しなかった、というものである。ただし、この解釈では光沢面の分布の広がりの違いを説明することが難しい。②の解釈はⅡ類の光沢面が認められた石器では、刃部だけが限定して使用されたため光沢面が広がらず、また刃部は形態が不安定なため微小剝離痕や比較的大規模な摩耗によって光沢面が除去された、というものである。事実、今回観察した石器の多くは刃部縁辺が丸みをおびていた。今回の使用痕分析では石器の刃部再生に関する十分な証拠を認めることができなかったこともあり2つの解釈の優劣を容易には判断できないが、現時点では後者の解釈に可能性を感じている。したがって、板状剝片石器には石器の使用部位の違いによって少なくとも2通りの用途があったことになるが、光沢面の特徴の共通性から被加工物は同じであったと思われ、むしろ同じ作業での石器の形態などに応じた使用方法の差の可能性が高い。具体的にいえば、Ⅱ類の光沢面が認められた石器は、Ⅰ類の光沢面が観察された石器よりも刃部を立ててもちいられたのではないだろうか。したがって、今回の分析結果は板状剝片石器が台石・石皿などをもちいて軟質の被加工物をすりのばすような同じ作業に対してもちいられたことをしめしていると考えられる。

4　考察と課題

今回の分析の目的は、板状剝片石器が同一の作業にもちいられた石器であることの検討と生産物の推定を使用痕分析をつうじて行うことであった。分析の結果は対象物については軟質のものである可能性が高いものの明確に推定することはできなかった。したがって、具体的生産物の推定は未解決で高橋の繊維取りの道具という解釈については観察結果と矛盾しないとはいえるものの、その当否をを論じることはできない。一方、板状剝片石器が同じ作業にもちいられたかの検討については、今回の分析の結果その可能性が高いことがわかった。従って、高橋の石器組成の差[6]に基づいた解釈の前提は成立したことになる。

さて、縄文時代に集落間の関係（ここでは相互交流と呼ぶ）がきわめて強かったことはすでに多くの研究者が認めるところであろう。板状剝片石器をもちいた生産物もこのような集落間の相互交流によって流通していたものと思われる。そして、このような実用的な石器によって生産されたものが流通していたことは、この縄文集落間の相互交流が機能的・日常的なものであったことを示している。一方、こうした相互交流はものだけでなく情報の交換や婚姻をも含み、技術的側面だけでなく社会的性格の強いものであったとも考えられる。

また、日常的なものの交換は相互交流そのものを維持する機能を果たし、したがって、各集落はものの供給や中継地となることでこれに参加したと考えられる。ものの交換は得られるものの機能的価値が目的であったと同時に、社会的紐帯である相互交流そのものを維持するための手段であったとは考えられないだろうか。縄文時代の社会とは、編み目のようにはりめぐらされた同盟的な集落間の相互交流に支えられていたのであろう。

これまでも、翡翠製品・アスファルト・黒曜石・貝製品などの分布から特定製品の交易と集落間の関係が議論されてきた。近年県内では糸魚川周辺で製作された蛇紋岩製磨製石斧の流通が集落間の関係を示す事例として注目されている。今後、縄文時代の集落間の関係・分業のあり方をあきらかにするためには、翡翠などの特殊な遺物だけでなく、集落間でのものの動きの日常性やその意味を検討する必要があり、板状剝片石器のような実用品に注目した分析の蓄積が望まれる。

最後に今後の課題を示しておきたい。今回示した縄文社会における集落間の関係の解釈を今後とも具体的な分析をつうじて検討してゆく必要がある。本論における解釈は、五丁歩遺跡出土板状剝片石器の使用痕分析と魚沼地方の縄文遺跡の石器組成分析にもとづいたもので、その一般化は今後の課題であり、いまだ仮説の域を出ていない。同様の視点の分析を積み重ねてものの動きの実態を把握し、その内容をより具体的にしてゆく必要がある。こうして得られたものの動きの実態から集落間の活動の差の意義・計画性をあきらかにしてそれを評価することは縄文時代にかかわる重大な課題である。そのためには、縄文時代の生業全体の中で、ものの供給・流通の機能を評価しなければならない。これについては、事例研究の蓄積とならんで貝塚・低湿地など当時の生業に関する情報が多い遺跡での成果が重要な位置を占めるであろう。

6　謝　　辞

本論をまとめるにあたり五丁歩遺跡出土板状剝片石器の報告者である高橋保雄氏に多くのご教示を賜ると同時にたびたび議論に応じていただきました。感謝の意を表します。

以下の方々にも御協力・御教示をいただきました。御芳名を記して感謝の意を表します（敬称略）。
鈴木俊成、高橋保、田中耕作、寺崎裕助、富岡直人、藤巻正信、水沢教子、財団法人新潟県埋蔵文化財調

査事業団の職員の方々。

註

1）縄文時代における集落間における分業の存在は、当時の社会を考えるうえできわめて重要だと考えられる。縄文時代の分業を考える場合、自給自足的とされている縄文時代の生業の中で、こうした特定遺物の流通の実態をあきらかにすることによって、集落間での特定活動の差の意義・計画性を検討する必要がある。しかし、本論ではこうした視点での検討を十分に行ったわけではない。

2）藤巻正信は城之腰遺跡の石器を分析する中で、石錘の多出を同様に解釈している〔藤巻ほか1991〕。

3）梶原洋は東北地方の縄文時代前期の石匙の使用痕分析を行い、石匙が多様な用途に用いられていることをあきらかにした。また、R.W.ヤークスはアメリカイリノイ州のミシシッピー川氾濫原に立地するラブラス湖遺跡出土石器1009点の使用痕分析を行い、石器の形態から推定した用途と使用痕分析の結果を比較している。それによると、両者が一致する石器の割合はきわめて低く、完全な一致22%（49／225）・部分的な一致10%（23／225）・不一致68%（153／225）であった。

4）二次的線状痕とは砂粒・微小剥離の際のチップなどによって生じた擦痕で、高倍率法で観察される微細な線状痕よりもはるかに規模が大きい。

5）光沢面の強度分析図は仙台平野の磨製石包丁の分析の際に作成された〔須藤・阿子島1984〕。ここでは、肉眼で確認できる光沢面を強・光沢面のパッチが連結した状態を中・これ以下の光沢面を弱とした〔阿子島1989〕。

6）組成のかたよりという視点からいえば、清水上遺跡で三脚石器が多いことはすでに述べたとおりである。さらに、同遺跡出土の板状剥片石器は平面形が三角形のものが多く、五丁歩遺跡出土板状剥片石器が円形・楕円形のものが多いのとは対照的である。しかし、清水上遺跡の三脚石器・三角形の板状剥片石器はあわせても150点である。五丁歩遺跡出土の板状剥片石器のうち平面形が三角のものが130点（円形・楕円形のものは386点）と数量的には両者の差は少なく、現時点では円形・楕円形と三角形の板状剥片石器が機能的に相互補完的であったと考える必要はないように思える。ただし、現在整理中の清水上遺跡出土石器の中にはかなり多量の三角形および抉り入りの板状剥片石器があるという（鈴木俊成氏のご教示による）。もし、三脚石器・三角形の板状剥片石器と円形の板状剥片石器の用途が同じであるならば、今回の分析結果のみでは清水上遺跡と五丁歩遺跡の組成差を活動の差に直接的に結びつけることは難しくなる。縄文時代の石器は多様な器種を持ち大量に出土するため、かたよりのないある程度網羅的な分析が必要である。清水上遺跡の整理の結果をふまえて、三脚石器などの使用痕分析を行うことによってさらに検討してゆくつもりである。

引用文献

阿子島香　1989『石器の使用痕』ニュー・サイエンス社

岡崎里美　1989「石器使用痕ポリッシュ研究の疑問」『季刊考古学』29　pp. 52-56

梶原　洋　1982「石匙の使用痕分析―仙台市三神峯遺跡出土資料を使って―（東北大学使用痕研究チームによる研究報告　その3）」『考古学雑誌』68-2　pp. 43-81

梶原　洋・阿子島香　1981「頁岩製石器の実験使用痕研究－ポリッシュを中心とした機能推定の試み－（東北大学使用痕研究チームによる研究報告　その2）」『考古学雑誌』67-1　pp. 1-36

小林康夫　1974「縄文時代生産活動のあり方(1)」『信濃』26-12　pp. 56-69

1975a「縄文時代生産活動のあり方(2)」『信濃』27-2　pp. 66-81

1975b「縄文時代生産活動のあり方(3)」『信濃』27-4　pp. 25-40

1975c「縄文時代生産活動のあり方(4)」『信濃』27-5　pp. 73-85

沢田　敦　1993「石器使用痕分析における多変量解析」『考古学における計量分析』III　pp. 76-84

須藤　隆・阿子島香　1984「下ノ浦遺跡SK 2 土壙出土の石包丁」『仙台市文化財調査報告書第69集仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報III』　pp. 55-66

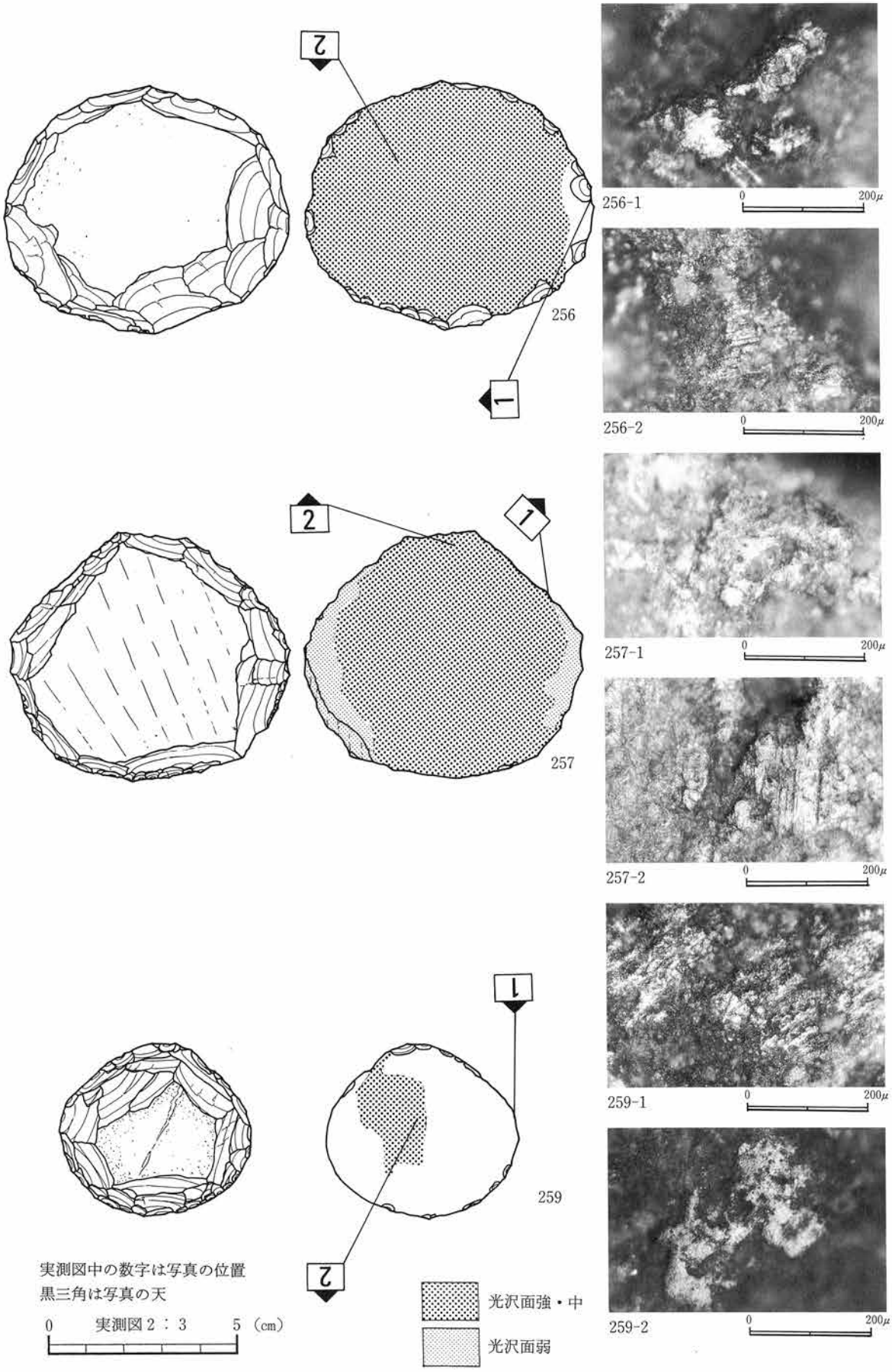
芹沢長介・梶原　洋・阿子島香　1981「実験使用痕研究とその可能性（東北大学使用痕研究チームによる研究報告　その4）」『考古学と自然科学』14　pp. 67-87

高橋　保・高橋保雄・茂田井信彦・藤巻正信・北村亮　1992『新潟県埋蔵文化財調査報告書第57集　関越自動車道関係発掘調査報告書　五丁歩遺跡、十二木遺跡』新潟県教育委員会

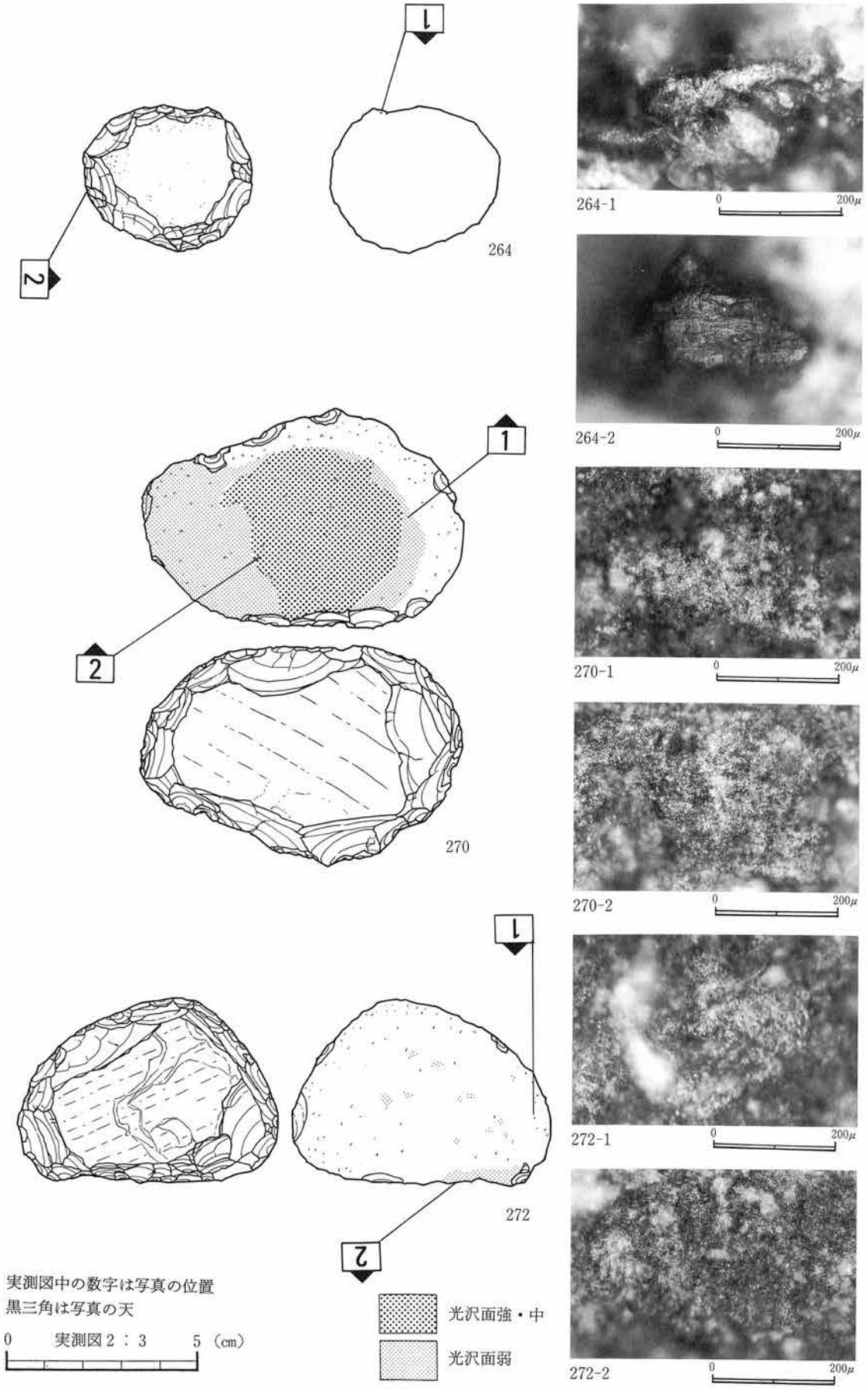
高橋保雄　1992「g)板状石器について・C石器について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第57集　関越自動車道関係発掘調査報告書　五丁歩遺跡、十二木遺跡』　pp. 138-141・299-321

田海義正・高橋　保・高橋保雄　1990『新潟県埋蔵文化財調査報告書第55　関越自動車道関係発掘調査報告書　清水上遺跡』新潟県教育委員会

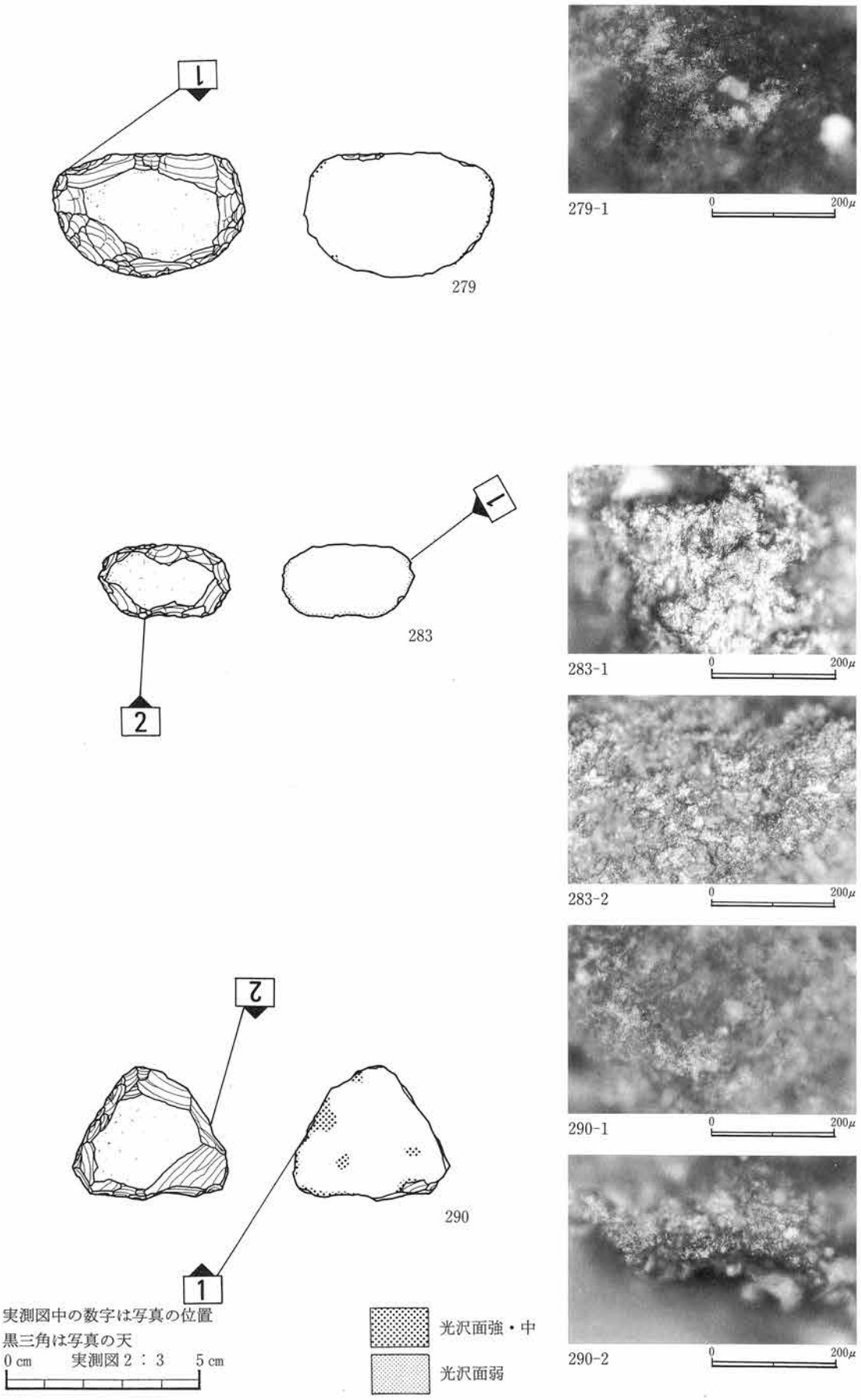
藤巻正信・国島　聡・北村　亮・田辺早苗・田中　靖
1991『新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集　関越自動車道関係発掘調査報告書　城之腰遺跡』新潟県教育委員会
御堂島正　1986「黒曜石製石器の使用痕－ポリッシュに関する実験的研究－」『神奈川県考古学同人会10周年記念論文集　神奈川考古』23　pp. 51-77
御堂島正　1988「使用痕と石材－チャート、サヌカイト、凝灰岩に形成されるポリッシュ－」『考古学雑誌』74-2　pp. 1-28
山田しょう1986「使用痕研究の現状と針路」『歴史』67輯　pp. 72-95
Grace, R. 1989 *Interpreting the Function of Stone Tools.* BAR International Series 474
Keeley,L.H. 1980 *Experimental Determination of Stone Tool Uses.* University of Chicago Press
Newcomer,M.H. R.Grace. and R.Unger-Hamilton. 1986 Investigating Microwear Polishes with Blind Tests. *Journal of Archaeological Science, 13* pp.203-217.
Yamada,S. and A.Sawada, 1993 The Method of Description for Polished Surfaces. *Traces et Fonction : les gestes retrouvés vol.2.* pp.433-445.
Yerkes,R.W. 1987 *Prehistoric Life on the Mississippi Floodplain.* University of Chicago Press



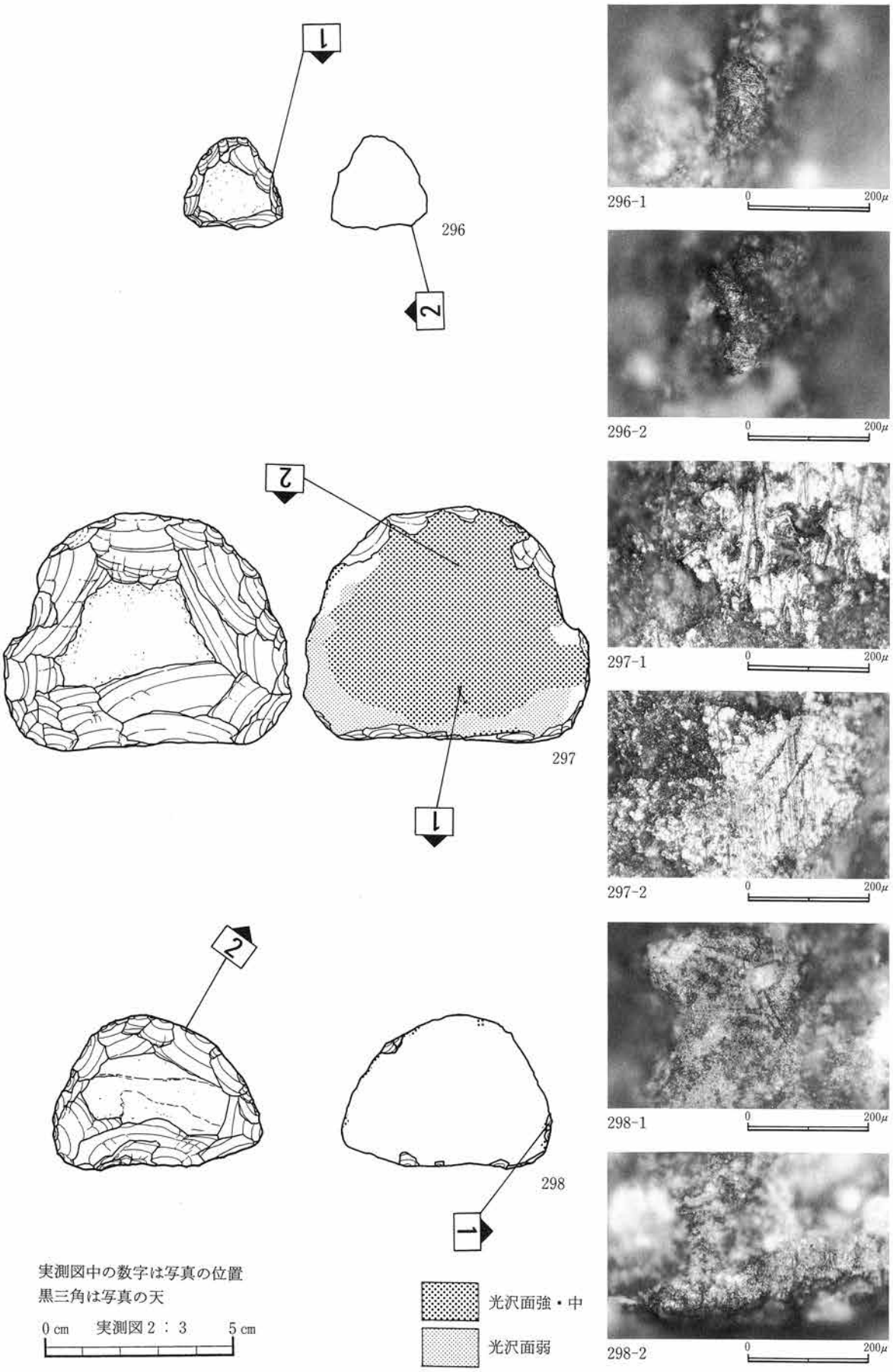
第4図　五丁歩遺跡出土板状剝片石器の使用痕(1)



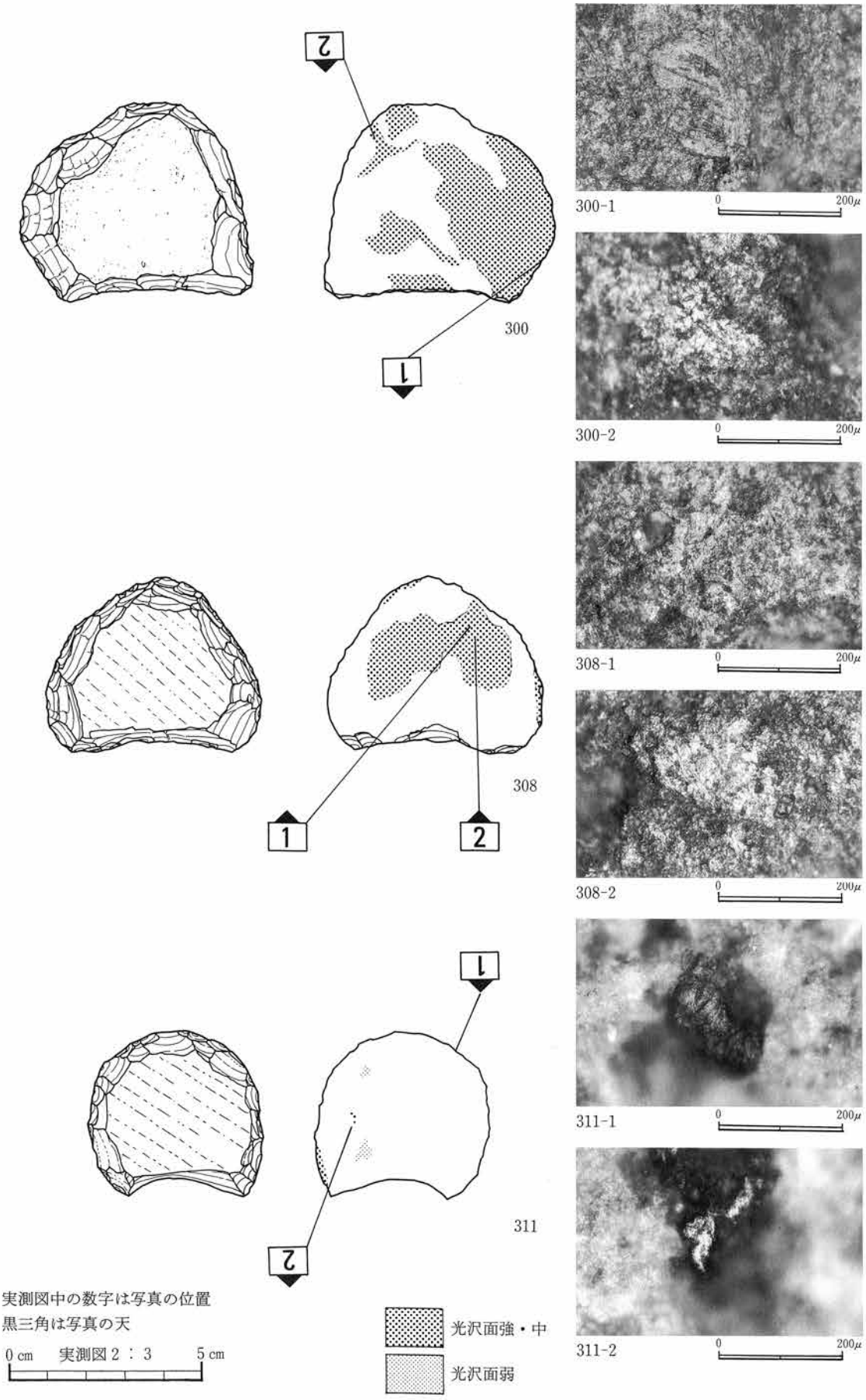
第5図　五丁歩遺跡出土板状剝片石器の使用痕(2)



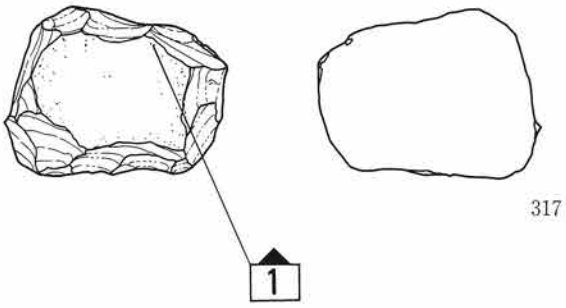
第 6 図　五丁歩遺跡出土板状剝片石器の使用痕(3)



第 7 図　五丁歩遺跡出土板状剝片石器の使用痕(4)

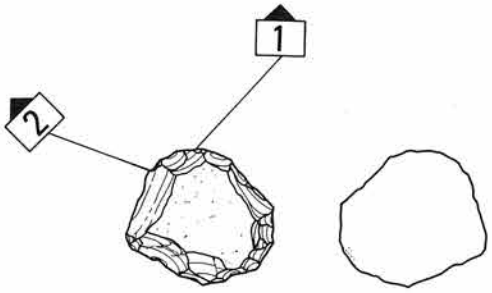


第 8 図　五丁歩遺跡出土板状剝片石器の使用痕(5)

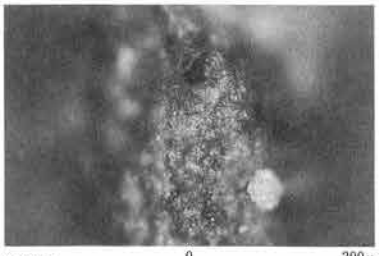


317

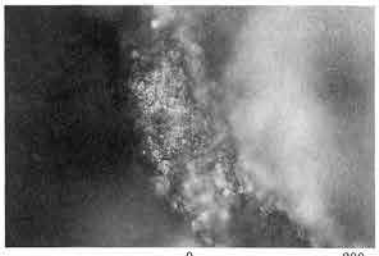
317-1　0　200μ



318



318-1　0　200μ



318-2　0　200μ

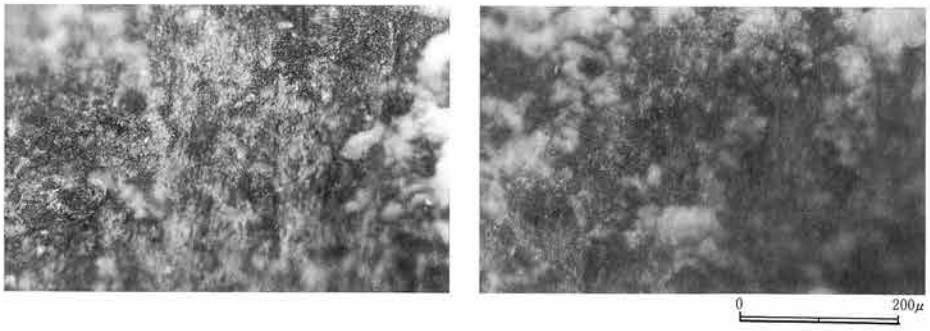
実測図中の数字は写真の位置
黒三角は写真の天

0 cm　実測図 2 ： 3　5 cm

光沢面強・中

光沢面弱

第 9 図　五丁歩遺跡出土板状剝片石器の使用痕(6)



第10図　頁岩製の剝片と石とをこすり合わせて生じた光沢面

古墳出現前後における集落の動向
――越後の集落を考える上での基礎整理として――

滝　沢　規　朗

1　は　じ　め　に

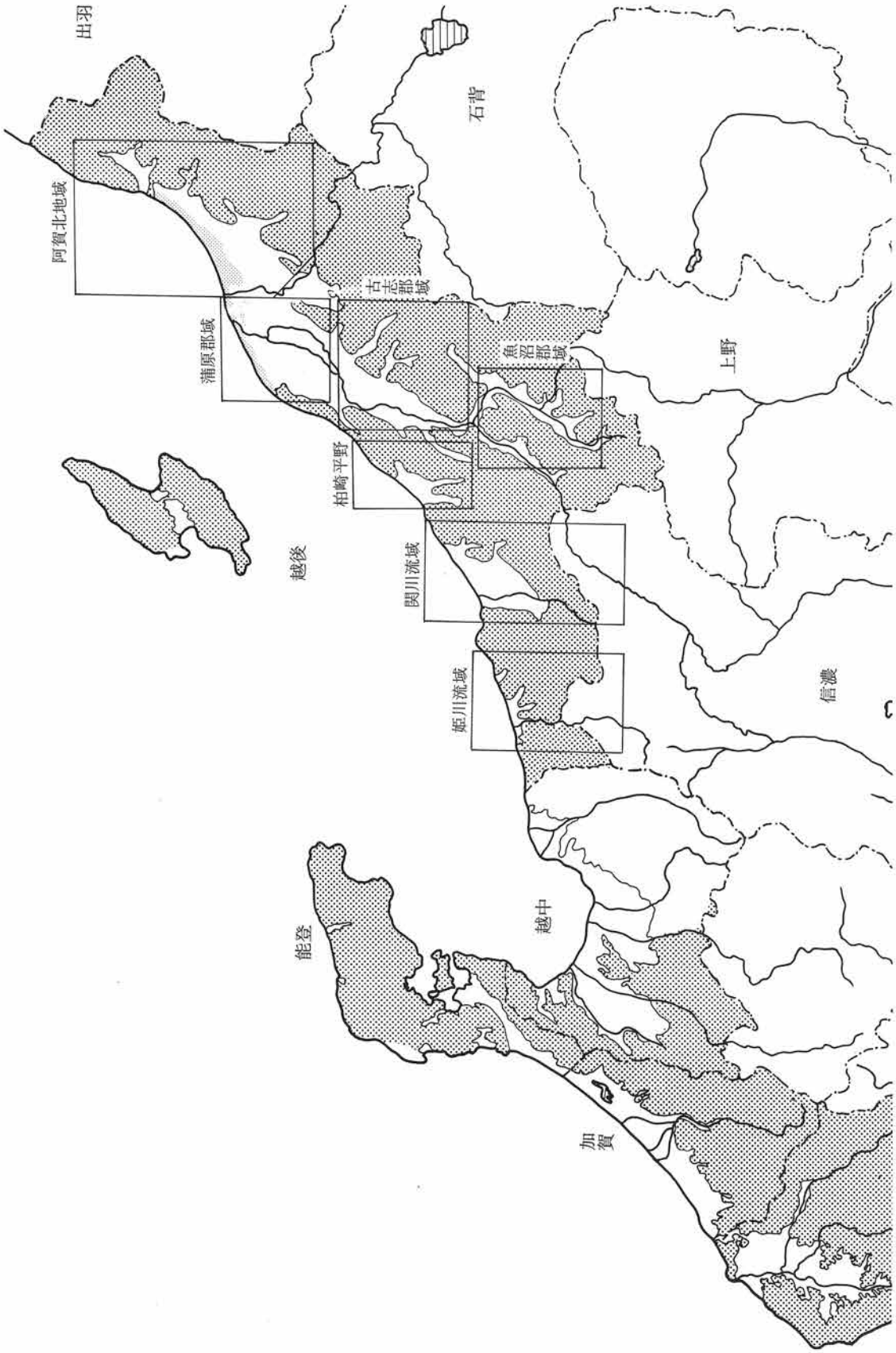
古墳という政治的な象徴としてのモニュメントが誕生する背景には、畿内中央政権の意向が多大に働いたことは多くの研究者が指摘するところである。何をもって古墳とするかという定義は各研究者によって異っているが、大規模な墓という面からのみ捉えれば、既に弥生時代には成立している。しかし、画一化した墓制の誕生を大きな画期とすれば、古墳時代の開始は前方後円墳出現以降とする説が有力となろう〔近藤1983ほか〕。古墳出現前後における社会の変革は、墓制のみならず、祭式土器の統一化や、集落の変化など、様々な面で指摘されている。

こうした社会の変革は、越後においても認められ、墓制では巻町稲場塚古墳の調査成果が特筆される〔稲場塚古墳測量調査団1993〕。稲場塚古墳は全長26.3mと極めて小型ながら、前方部の墳端線が撥形に開くことや、前方部の前端が緩い曲線を呈することから、畿内における最古式の前方後円墳からそれほど時期差を置かずに築造されていたことになる[1)]。全国的な墓制の変革に遅れることなく、越後でも最古式の前方後円墳が築造されている事実は、重要視すべきであろう。

墓制の変革だけでなく古墳に埋葬された人物や、この古墳の築造に係った人々の生活は、どのように変化していったのであろうか。こうした変化は集落そのものにも表れるであろう。一般に定式化した古墳が築造される以前の集落は、居住域の廻りを濠で囲む「環濠集落」や農耕に極めて不向きな高所に集落を営む「高地性集落」など、外的から身を守る防御的な機能を持った集落（以下、防御的集落）の存在が知られている。防御的集落の存在は戦乱があったことの根拠であり、戦乱の終結後に定式化した古墳が築造されている点は、畿内中央政権の「全国的な統一」を表すものとして注目されている〔都出1983ほか〕。

越後が戦乱の時代にどのような戦いに巻き込まれたか、またどのような役割を持って戦いに参加していたかは不明確であるが、戦乱の痕跡である防御的集落は数多く存在している。川村浩二氏の調べでは、越後では防御的集落が約30遺跡も存在しているという〔川村1990〕。これは、数量的に北陸で最高である。また現状で確認されている防御的集落の日本海側の北限という評価が可能である。越後における古墳出現前夜において、防御的集落がどういった勢力に対する「防御」を目的としたものか、また「防御的集落」の日本海側における北限という位置付けは、どう評価すべきかなど問題はつきない。

本稿では上記の問題を検討する前段階として、越後の弥生時代後期～古墳時代前期の集落の動向を整理したい。しかし越後における当該期の遺跡の調査例は少なく、また一つの環濠集落内を丸々調査した例は存在しない。一遺跡で今回、検討を行う時期の住居跡を十軒以上にわたり調査した例は聖籠町山三賀Ⅱ遺跡〔県教委1989〕と、部分的な報告しか行われていないことから詳細が不明な新津市八幡山遺跡〔伊与部1989、新津市教委1994〕が挙げられるにすぎない。集落論を展開するには、甚だ制約が多いのが現状である。将来的に集落の類型化や、集落の内部構造が明らかになると考えるが、ここでは集落論を論じるの前提として、弥生時代後期～古墳時代前期における集落の動向[2)]について検討を試みることにしたい。



第１図　越後の地域区分

2　地域別にみた集落の動向について

遺跡の動向を考えるにあたり、時間軸と地域区分、そして集落の発掘調査状況が大きな問題となる。このうち当該期における時間軸については様々な試案が提示されているが、弥生時代後期～終末期については、末だおおかたの支持を得られるものはない。このため本稿では末消化部分を含むものの、断りがない限り昨年度行われた日本考古学協会新潟大会第２シンポジウム「東日本における古墳出現期の再検討」で設定された新潟シンポ編年を使用する[3]。

一方の地域区分については、明瞭な設定をしがたいのが現状である。都出比呂志氏が行ったような地域単位の検討[都出1989b]が望ましいが、現状では困難である。このため南北に長い越後の特徴から、平野・河川を単位とし、姫川流域、関川流域・頸城平野、柏崎平野、魚沼郡域、古志郡域、蒲原郡域、阿賀北地域の７つに区分した。なお、資料の増加に伴い改善・細分していくことが望ましいのは当然である。

最も問題となるのが、越後における１期～10期にかけての集落跡の調査例が少ないことである。明確にしえない問題が多く存在するが、調査の度合いに応じた以下の定義に基づいて検討を試みたい。

発掘調査が行われて、遺構が確認された遺跡をランクＡ、発掘調査が行われて遺物が検出されたものの、遺構が確認されていない遺跡をランクＡ'とする。また試掘調査が行われた遺跡をランクＢ、分布調査によって今回検討する時期の遺物が確認された遺跡をランクＣとする。ランクＡについては全て網羅したつもりであるが、ランクＡ'・Ｂ・Ｃについては見落としたものや、遺物を実見していないため本稿では取り扱わない遺跡も存在する。これは、現状で指摘できることを明確にする立場からである。ランクＡ'・Ｂ・Ｃについては、特に重要と考えるもののみを扱う事としたい。

上記の定義に基づいて検討する項目は、以下の二点である。一つは遺跡消長の画期である。これまで比較的明瞭であった時期区分であるが、北陸の土器編年に、微妙な違いが生じてきたこと〔田嶋1993〕により、多面的に越後を捉える必要が出てきている[4]。現状では土器編年を十分に解決しえないが、画期の設定については、おおよその時期をつかむようにしたい。

二点目は集落構成要素の一つである住居跡の構造である。この問題については、川村浩二氏の指摘〔川村1992〕や、品田高志氏の総合的な研究成果が提示されており、大枠はこれに準じる立場にある。ここでは遺跡の消長も踏まえて、北陸内の他地域と比較し、越後の独自性を抽出することにしたい。

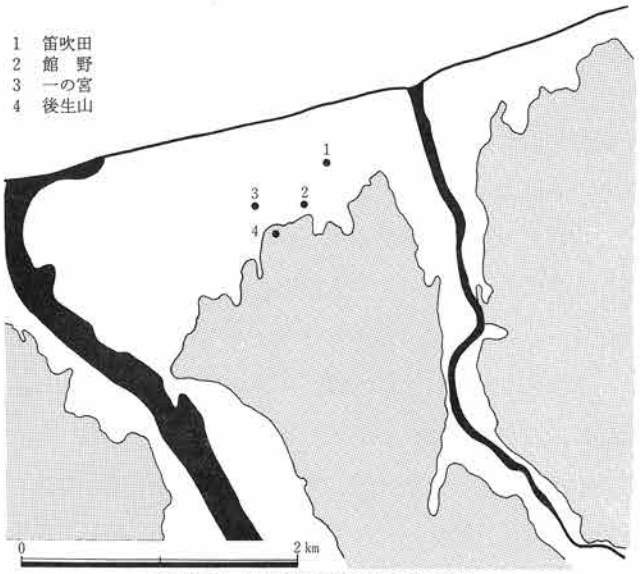
第１表　時期区分

		北陸			南加賀	北加賀	北陸	能登			越後
		試案（加賀地域）			田嶋（1986）	楠（1992）	吉岡（1991）	栃木（1994）			坂井・川村（1993）
1	古	庄内古段階以前	1期	前		4期	（＋）V_1期				
1	中	庄内古段階以前	1期	後		5期	V_2期				
1	新	庄内古段階以前	2期	前		6期	V_2期				
1	新	庄内古段階以前	2期	後		7期	V_2期				
2		庄内古段階以前	3期	前古新	2群	8期	VI_1期	7期	前半	古新	
2		庄内古段階以前	3期	前古新	2群	8期	VI_1期	7期	後半	古新	
3		庄内古段階以前	3期	中	（＋）	9期	VI_1期	8期	前半	古新	
4		庄内古段階以前	3期	後	3群	10期	VI_2期	8期	後半	古新	
					4群	11期	VI_3期				I（最新）
5		庄内新段階以降	1a	I_1	5群	12期	古1-1	1期	前半		II－1
6		庄内新段階以降	1a	I_2	6群		古1-2	1期	前半		II－2
7		庄内新段階以降	1b	I	7群			1期	後半	古新	II－3
8		庄内新段階以降	1b	II	8群			1期	後半	古新	III
9		庄内新段階以降	2	I_1	9群			2期	古新		IV
10		庄内新段階以降	2	I_2	10群			2期	古新		

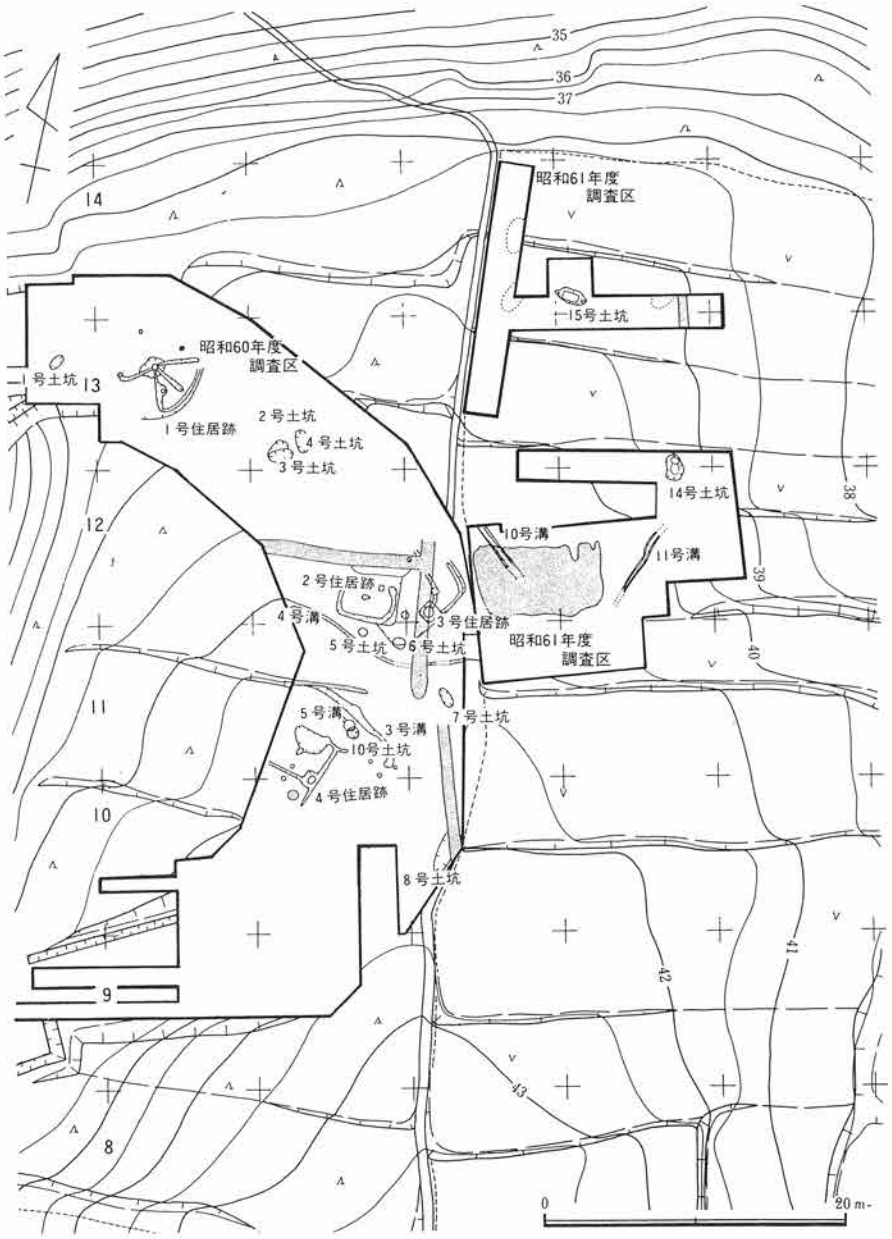
(1) **姫川流域**（第２図）

北側が日本海に、西側は白馬山地が日本海まで連なり断崖（親不知海岸）に、南側～東側にかけては西頸城山地に囲まれた地域であり、東北日本と西南日本とを地質的に二分する糸魚川―静岡構造線（フォッサマグナの西端）が、姫川流域付近をほぼ南北に走っている。硬玉の産地として名高い姫川流域では、ランクＡの遺跡に糸魚川市後生山遺跡〔糸魚川市教委1986・1987、木島1988〕・笛吹田遺跡〔糸魚川市教委1978・1983・1984〕、ランクＣの遺跡に一の宮遺跡〔糸魚川市教委1988〕、館野遺跡〔糸魚川市1986〕がある。現状でこの地域の集落構成は、１期から開始されるようである。

後生山遺跡では４軒の住居跡が検出されており、遺構だけでなく弥生時代後期の土器編年試案を行う場合にも重要な意味を持つ。標高約40m（比高約30m）の丘陵上に位置しており、広義の高地性集落と考えられよう。残存する住居跡の形態は次章以降で触れるが、床面には数条の溝が残ることから、「玉作り工房跡」という推定がなされている〔木島1987〕。検出された土器は、未公表のものが多く時期を明確にしえないが、出土量の多い３号住居跡は、１期(中)、２号



第２図　姫川流域の遺跡分布図



第３図　後生山遺跡全体図（市教委1987より）

第２表　姫川流域の遺跡の動向

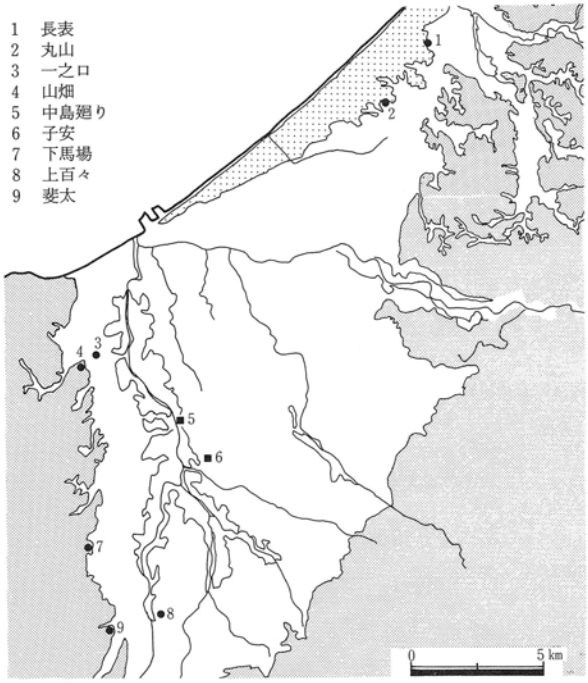
遺跡名	中　期	１　古	１　中	１　新	２	３・４	５・６	７・８	９・10	ランク
笛吹田										A
後生山										A
一の宮					……		……			C
館　野								……		C

住居跡は２期、４号住居跡は１期（新）～２期の幅で納まると考える。また１号住居跡の出土遺物は、３号住居跡のそれと似た形状を呈することか、同一時期の可能性が指摘されている〔糸魚川教委1986〕。その後の確認調査で検出された土器群も２期を中心としており、現状ではおおむね１期（中）～２期に営まれた玉作り集団の集落と考えられる。

後生山遺跡とは対照的に、標高10m前後の沖積地に位置する笛吹田遺跡は２期の方形周溝墓と、７・８～９・10期以降と長期的に営まれた玉作り跡が展開している。姫川流域の西頸城地域は硬玉の産地で、玉作り遺跡が多く存在することで著名である。古墳時代中期～後期では、糸魚川市三ツ俣遺跡〔木島1989〕・田伏遺跡〔糸魚川市教委1972〕や青海町大角地遺跡〔青梅町教委1979〕が玉作り遺跡として著名であるが、これに先行して営まれたのが笛吹遺跡である。

玉作り遺跡が多いことから、当地域では多くの祭祀遺物が確認されているが、実際に祭祀が行われた可能性の高い「祭祀遺跡」は少ない〔滝沢1993a〕。その中で、式内社である天津神社の境内に位置する一の宮遺跡〔糸魚川市教委1982〕が数少ない例として注目される。正式な発掘調査は行われていないが、滑石製の祭祀遺物が多数検出されている。年代については明確にしえないが、公表された土器は２期、５～７・８期とやや幅を持たせておきたい。

現状では１期（中）から遺跡が認められ、短期間に消滅してしまう。低地への移行は早く、２期には確認されるが、３・４～５・６期の動向は不明である。再び集落が営まれるのは７・８期以降と考えるが、これ以降は玉作り集落を中心として



第４図　関川流域・頸城平野の遺跡分布図（麻柄1983を一部改変）

第３表　関川流域・頸城平野における遺跡の動向

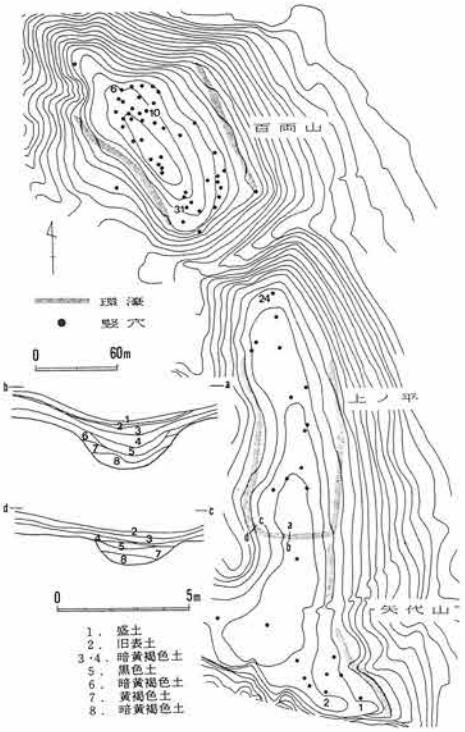
遺跡名	中　期	１　古	１　中	１　新	２	３・４	５・６	７・８	９・10	ランク
斐　太	……									A
山　畑										A
一之口										A
下馬場										B
長　峰										A
篭　峰									……	B
上百々	……						……			(A)

展開した可能性が高い（第２表）。

(2) 関川流域・頸城平野（第４図）

北側には日本海が、西側には南葉山麓に広がる標高2000m以上の山々が、東側は開田山脈に挟まれた地域で、関川・矢代川と二本の河川が南北に走る。確認された遺跡には新井市斐太遺跡群〔駒井・吉田1962〕・上百々遺跡〔新井市教委1990〕、上越市山畑遺跡〔上越市教委1987〕・中島廻り遺跡〔上越市教委1992〕・一之口遺跡〔県教委ほか1994〕・下馬場遺跡〔上越市教委1992〕・子安遺跡〔上越市教委1993〕、中郷村籠峰遺跡〔中郷村教委1987ほか〕、吉川町長峰遺跡〔吉川町教委1986〕、大潟町丸山遺跡〔大潟町教委1988〕などがある。このうちランクＡの遺跡は斐太遺跡群、山畑遺跡、長峰遺跡があるにすぎない。籠峰遺跡では弥生時代後期～古墳時代前期の土器が出土しているが、正式報告は行われていない。

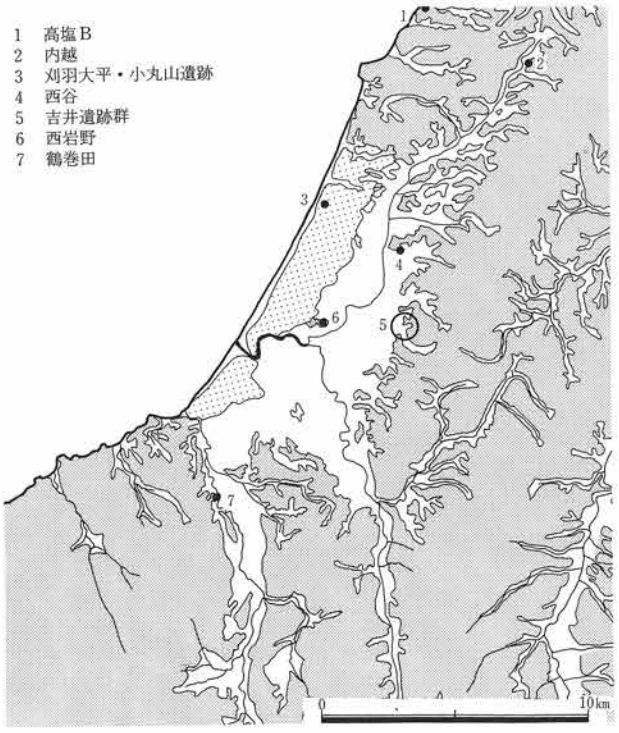
この中で、環濠を伴う高地性集落として名高い斐太遺跡群（第５図）が営まれ始めたのは、中期に下る可能性が高い。遺構は確認されていないが、中期に比定される信濃系の土器や、１期でも（新）段階頃の甕が採集されている。このことから遺構は未確認であるが、中期後半～１期(古)には集落構成が開始され、５期の上ノ平・矢代山24号住居跡まで集落が営まれた可能性が高い〔滝沢1994〕。



第５図　斐太遺跡群の全体図

斐太遺跡群と同様に遺構が埋まりきらずに地表上で落ち込みとなって確認できる遺跡に、下馬場遺跡がある。標高約40m、比高差約30mで、環濠は未確認であるが４軒の住居跡が検出されている。このうち１軒の竪穴住居跡が部分的に発掘されているが、出土土器は２期の範疇で納まるものである。２期における新集落の出現は、上越市山畑遺跡でも認められる。２期の枠内で住居跡２軒と土坑１基が確認されており、短期間に営まれた集落であろう。

３・４期は明確でないが、５・６期に入り遺跡は増加する。上百々遺跡では中期以外に、５・６期の土器が確認されている。また長峰遺跡では６期の住居跡が、一之口遺跡東地区では５・６期以降の土器が確認されている。籠峰遺跡は明確でないが、外来系の土器群が報告されており〔川村1988〕、９・10期に人の存在が確認されている。



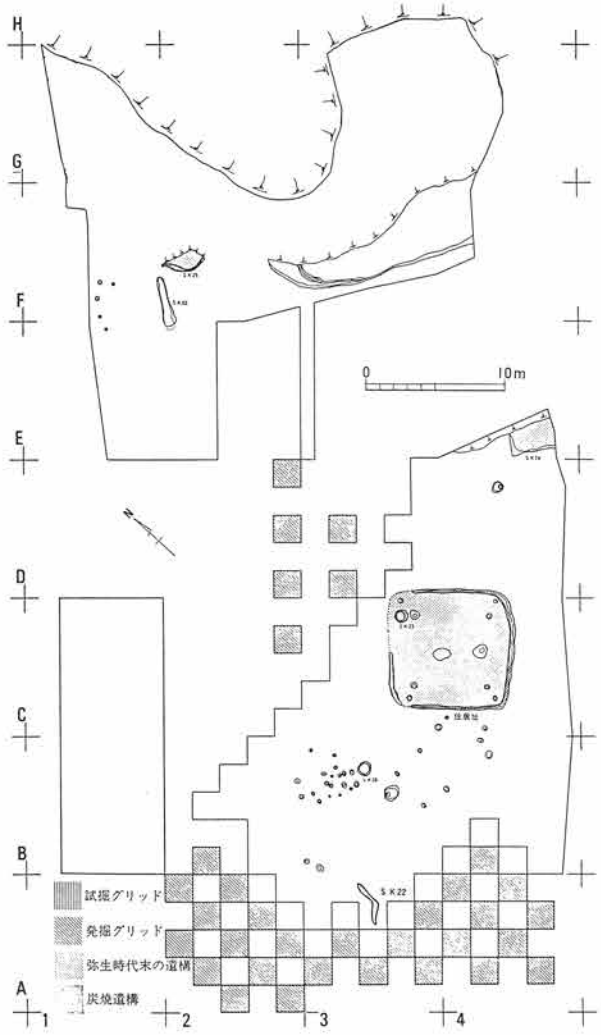
第６図　柏崎平野の遺跡分布図

第４表　柏崎平野における遺跡の動向

遺跡名	中　期	１　古	１　中	１　新	２	３・４	５・６	７・８	９・10	ランク
野附・萱場										A
西岩野										A’
戸　口				……						A
行　塚							……			A’
鶴巻田						……				A’
内　越										A
西　谷										A
高塩Ｂ						……				A’
刈羽太平	……						……			A’

(3)　柏崎平野（第６図）

鵜川、鯖石川及びその支流である別山川により形成された沖積平野である。この平野は米山・黒姫山・八石山により三方に囲まれており、北西方向は荒浜砂丘を挟んで日本海側に面している。この地域では住居跡が確認された例は少ないものの、低地に位置する柏崎市野附・萱場遺跡〔市教委1990〕、西岩野遺跡〔市教委1987〕、戸口遺跡〔市教委1990〕、行塚遺跡〔市教委1990〕、鶴巻田遺跡〔県教委1989〕、微高地に位置する西山町内越遺跡〔県教委1983〕、高塩Ｂ遺跡〔町教委1983〕、刈羽村西谷遺跡〔村教委1992〕、砂丘上に位置する刈羽太平・小丸山遺跡〔市教委員1985〕などがあり、今回の検討対象となる遺跡が最も多く確認されている。



第７図　内越遺跡全体図（県教委1983を一部改変）

当地域では国指定史跡の下谷地遺跡〔県教委1979〕の他にも、野附・萱場遺跡、刈羽太平・小丸山遺跡などで中期から集落構成が開始されている。これらは砂丘上に位置する刈羽太平・小丸山遺跡以外は、いずれも沖積地に位置している。中期に営まれたランク・A’の集落のうち、１期（古）にまで継続する集落は刈羽太平・小丸山遺跡のみである。

１期（古）の遺跡は明確でないが、１期（新）～２期に入ると、戸口遺跡、野附・萱場遺跡、西岩野遺跡、内越遺跡、西谷遺跡などで集落構成が開始されている。部分的な発掘調査であるが、野附・萱場遺跡で検出されたSD―7大溝は、推定幅が4m前後で溝底の形態は明確でないものの、平担の可能性が指摘されており、環濠状のものと推定されている〔品田1991〕。沖積地の大溝という点では、富山県江上Ａ遺跡〔上市町

教委1981〕に類似しており、戦乱に対して防御的な性格をもった溝と推定される。構築時期については溝内出土土器から1期（新）～2期と考えられ、その後、短期間で廃絶された可能性が指摘されている〔柏崎教委1990〕。柏崎平野のうち、沖積地に位置する吉井遺跡群[5]内において当該期の遺跡は、複数時期にまたがるものは多くない。今回の時間軸では2期間にまたがる遺跡は、わずかに戸口遺跡があるにすぎない。

住居跡が確認された内越遺跡も、短期間で消失している。続縄文土器が出土した1号住居跡のみであるが、品田氏が指摘するように〔品田1993a〕、土坑と報告されているものの中にも、住居跡の可能性があるものも存在する[6]（第7図）。しかし、いずれの遺構も2期の範疇に納まるものと考えられ、遺跡の継続性は認められないようである。

柏崎平野で比較的長期間営まれた集落は、西谷遺跡が挙げられるにすぎない。微高地に位置するこの遺跡は、現在では畑地となっている。住居跡は未確認であるが、丘陵縁辺沿いには環濠が確認されている。現状では2期に集落構成が始まり、環濠の機能が停止する5期まで営まれた集落の可能性が高い〔刈羽村教委1992〕。この遺跡で重要な点は、集落の直下に水田が営まれていることである[7]。居住域と、水田という生産の場が近接することは、集落構成を考える上で興味深い。

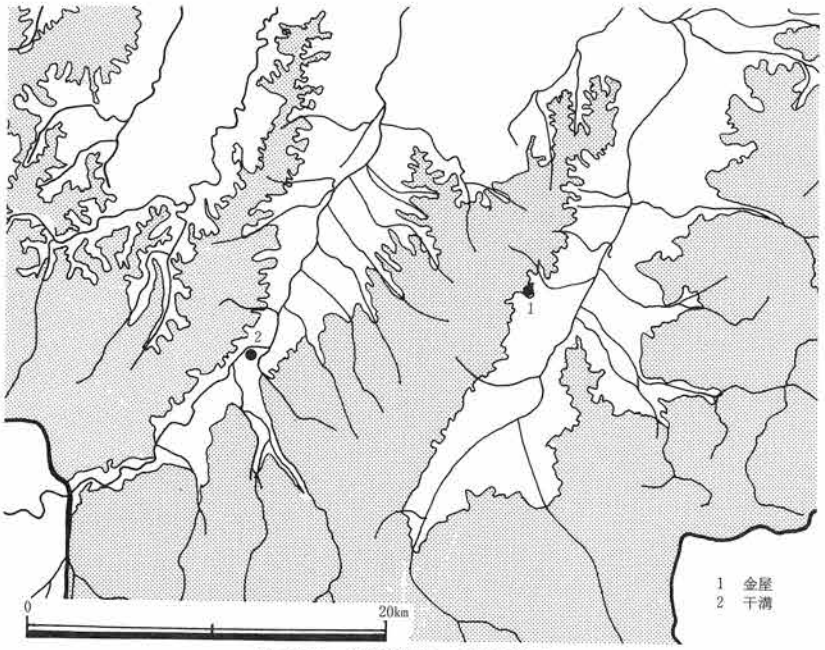
長期間継続する遺跡は少ないが、集落の動向で5期に画期があることは変わりない。この時期、新たに登場する遺跡には高塩B遺跡、行塚遺跡のほか、刈羽太平・小丸山遺跡でも再度集落が営まれている。これらはいずれも住居跡が確認されておらず、9期を待たずに消滅してしまう。

以上、柏崎平野における遺跡の動向について概観したが、比較的長期間にまたがる遺跡は西谷遺跡、高塩B遺跡があるにすぎない(第4表)。これ以外は1～2期間、または1期間で消失するか、または断続的に営まれた短期型の集落である。こうした遺跡は沖積地や砂丘状に位置するものが多く、丘陵状に位置するものが少ない点は重要であろう。いわゆる防御的集落の分村や、キャンプ型の集落なのかもしれない。こうした点は次章以降で検討することとしたい。

(4) 魚沼郡域（第8図）

四方を山に囲まれた標高200～300m程の河岸段丘上に位置する。ランクAの遺跡は、六日町金屋遺跡〔県教委1985〕があるに過ぎない。その他は、ランクCの遺跡が多い。弥生時代中期の遺跡は何例か存在するものの、1期以降では確認された遺跡は限定される。2～4期の動向は明確でないが、5・6期に入ると北陸北東部系土器群が確認されるようになる。

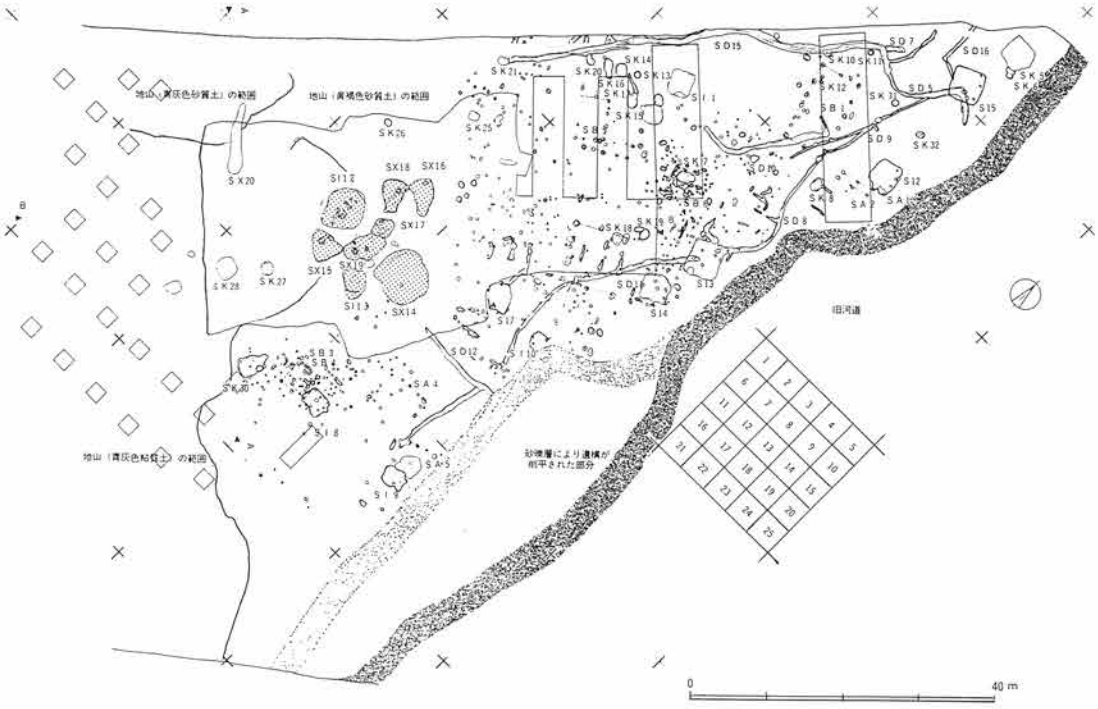
中里村干溝遺跡では、4期以前は信濃系の土器が優位を占めるようであるが、5・6期には北陸北東部系土器群が主体となる。北陸



第8図　魚沼郡域の域分布図

第５表　魚沼郡域における遺跡の動向

遺跡名	中　期	1　古	1　中	1　新	2	3・4	5・6	7・8	9・10	ランク
干　溝	………									(A)
金　屋										A



第９図　金屋遺跡全体図（県教委1985より）

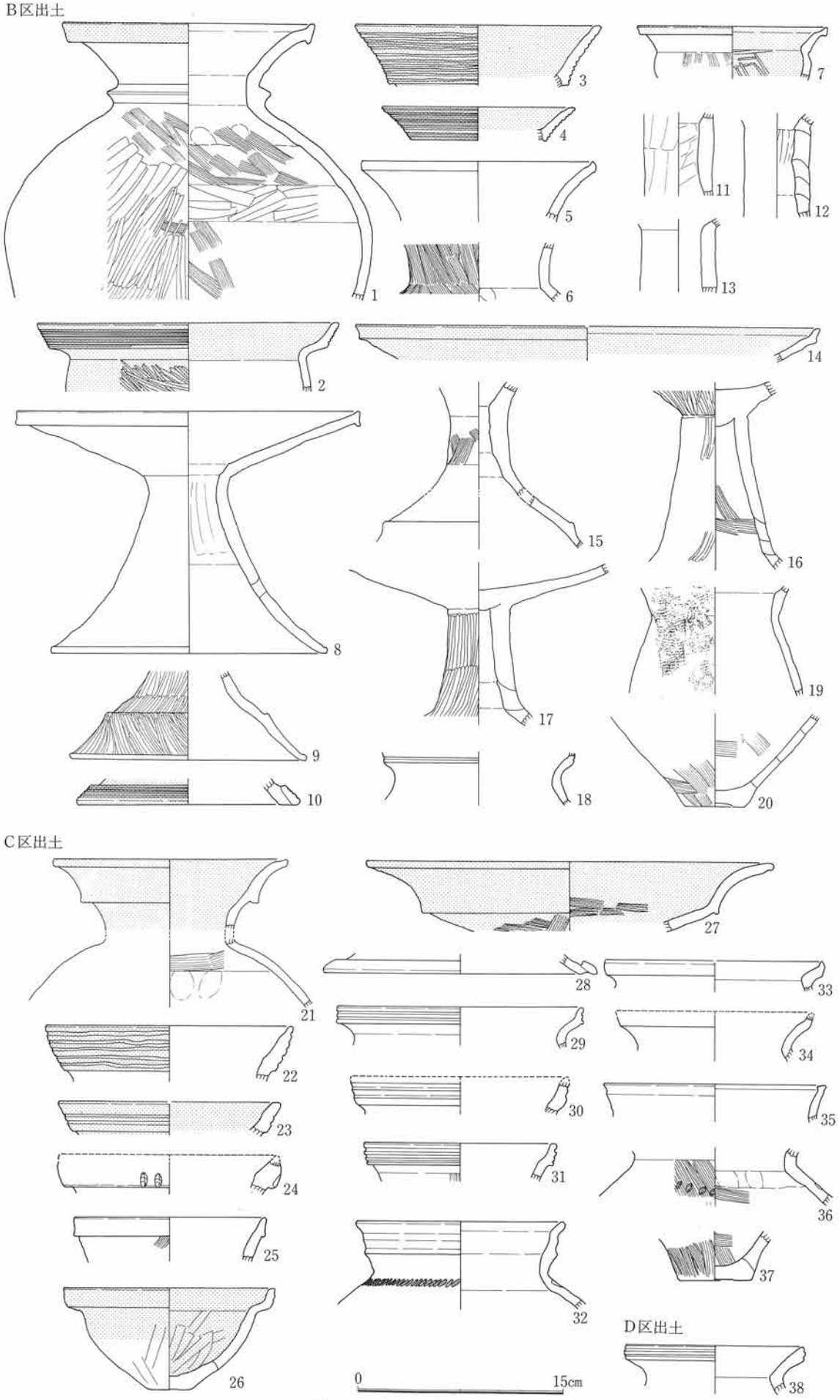
北東部系土器群が５・６期に、いかに広がりを見せるかを表している。

当地域における北陸北東部系土器群の盛行は短期間に終焉を迎え、９・10期の金屋遺跡では、およそ北陸系とは無縁の土器群が登場する。この集落は隣接する蟻子山古墳群〔金子ほか1977〕との関連が指摘されているが〔県教委1985〕、発掘調査範囲で直接関連する時期の遺構は確認されていない。また住居跡は、同時併存するものが２～３軒と考えられておりと、環濠を巡らした防御的集落とは一線をかす。

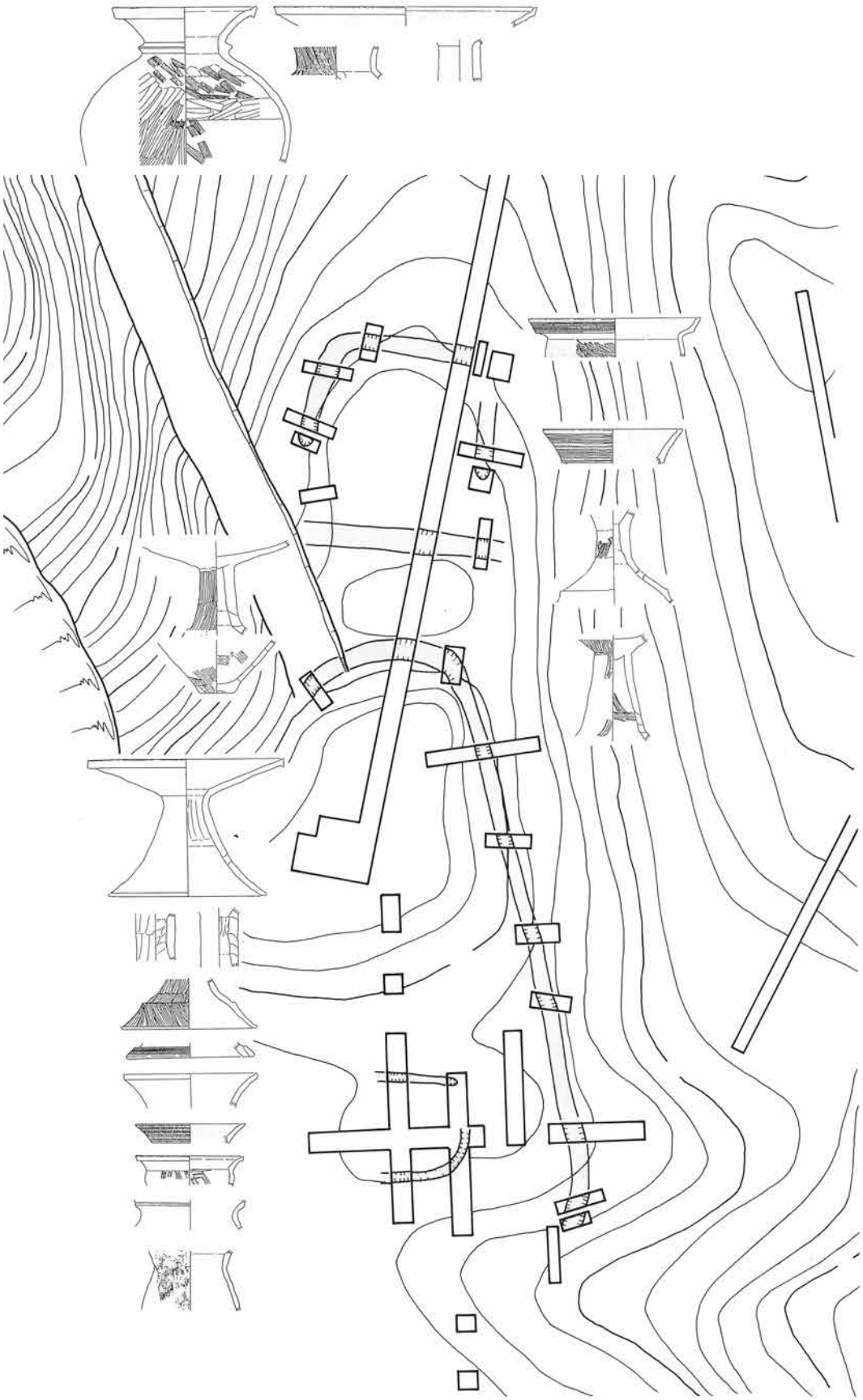
(5)　信濃川中流域

東山山麓を中心に多数の集落が確認されている。これらは平野部との標高差が著しく、防御的集落の密集地である。ランクＡ・Ａ'・Ｂの遺跡には見附市大平城遺跡[9]〔県教委1974〕、岩沢遺跡・高稲場遺跡〔見附市教委1988〕、和島村奈良崎遺跡〔藤巻1993〕、三条市経塚山遺跡[10]・狐崎遺跡〔金子1981〕、長岡市横山遺跡〔長岡市1992ほか〕などが、ランクＣの遺跡には島崎川流域の舞台島遺跡、諏訪田遺跡、横滝山遺跡、桐原神社遺跡、山王Ｂ遺跡、上桐神社遺跡、松の脇遺跡、太平遺跡、城遺跡〔田中1989〕などがある。このうち環濠の掘削時期は不分明なものの、中期から集落の構成が開始される遺跡には高稲場遺跡や奈良崎遺跡、横山遺跡（第12図）がある。一方、太平城遺跡（第13図）や経塚山遺跡などは、発掘調査範囲が限定されており明確にはできないが、１期（新）～２期に入り集落を構成するようである。

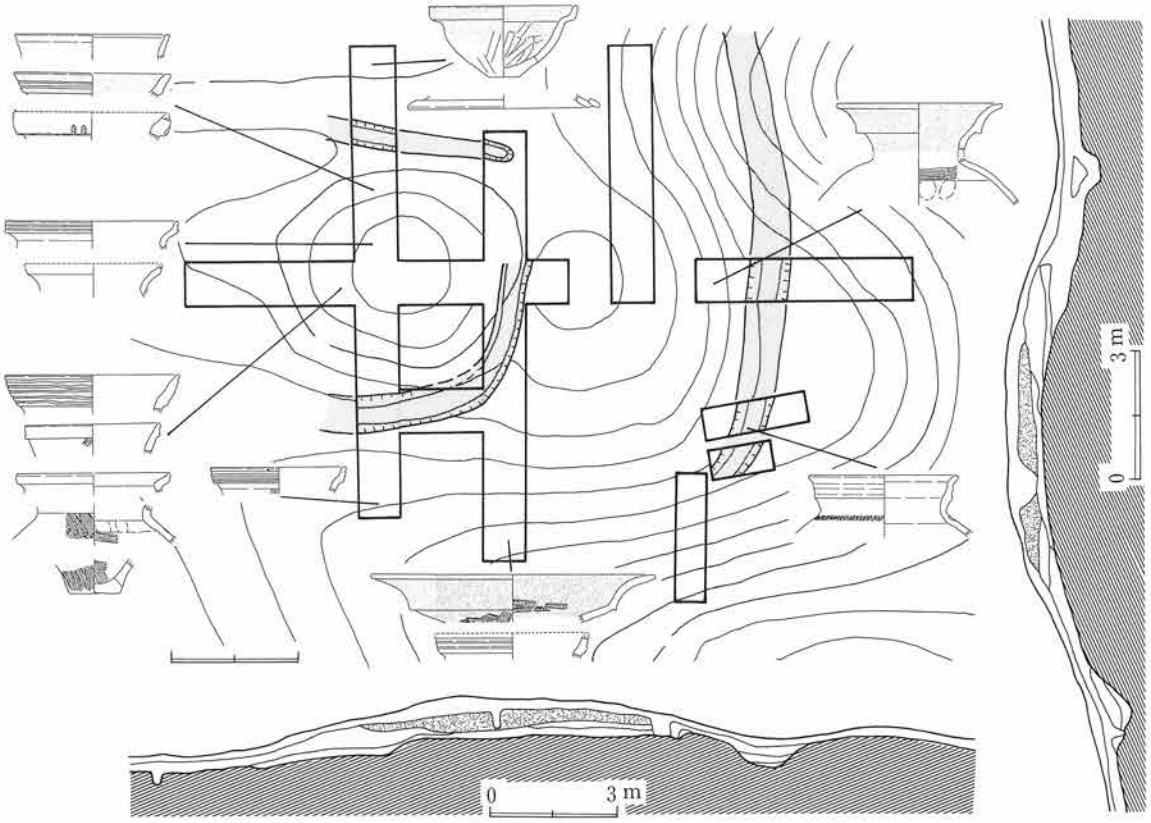
中期から集落構成を開始する遺跡のうち、横山遺跡は５期に入って環濠の機能が停止するようである。これは４期に住居跡が消失し、５期に環濠の機能が停止することを意味しない。現状では住居の廃絶・環濠の機能停止は、いずれも５期内での出来事と考える。すなわち、同じ５期という枠内で考えれば、なおも環濠集落内で生活していた人と、新たに５期に入り集落を営む人が存在していたことになる。



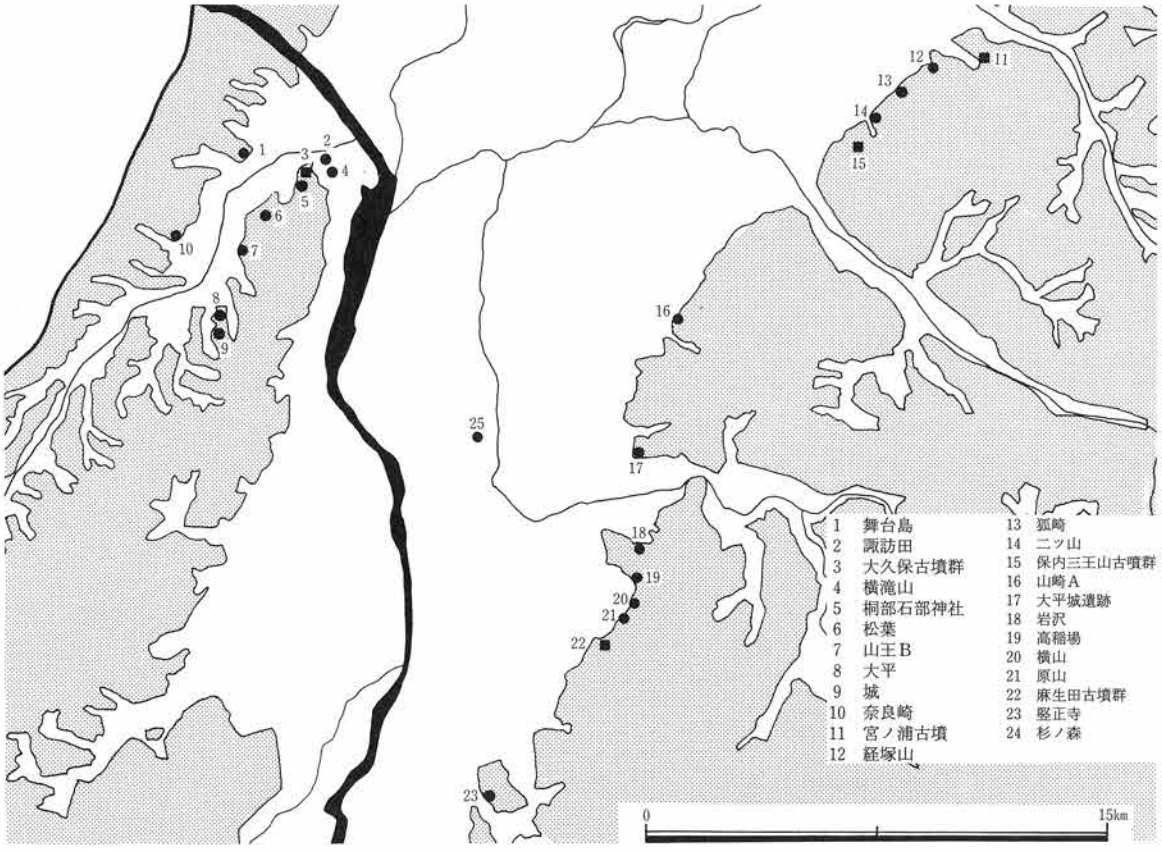
第10図　大平城遺跡出土土器



第11図　大平城遺跡全体図（県教委1974を一部改変）



第12図　太平城遺跡C区全体図（県教委1974を一部改変）



第13図　古志郡域の遺跡分布図

第14図　横山遺跡遺構配置図（広井1993ａを一部改変）

５期以降の集落については明確でないが、集落の拡散現象が進むなかで狐崎遺跡が登場している。この遺跡も長期間に及ぶものではなく、２～３期間で消滅しているようである。調査例が少ないことから、この後の動きを明確にしえないが、５～６期に入り登場する杉ノ森遺跡〔県教委1973〕などがあるが、10期をこえるものは、ごくわずかに減ってしまう。

(6)　蒲原郡域（第14図）

信濃川と阿賀野川が合流し、日本海に注ぐ地域のほか、阿賀野川下流域や弥彦山・角田山山麓など、広い地域を範囲に含めた。

中期の土器が検出された遺跡はわずかで、いずれもランクＣの遺跡である。ランクＡ・Ａ'の遺跡は、いずれも１期（古）に入ってから登場している。

新津市八幡山遺跡は環濠を伴う高地性集落であり、住居跡20数軒のほかに、前方後方形周溝墓が確認されている[11](第15図)。報告書は遺構編のみ刊行されているが〔市教委1994〕、細かな時期は不明である。一部に報告された遺物は１期～４期・５期に下る例も存在するようである〔伊与部1989〕。多くの防御的集落と同様に、５期まで継続していた可能性が高い。

防御的集落が５期まで継続するのは、巻町大沢遺跡〔大沢遺跡調査団1981ほか〕も同様である。調査された遺構は少ないものの、住居跡の変遷を追える数少ない遺跡として注目される(第16図)。防御的集落という形をとる中で、５期に入り住居跡の平面プランが隅丸方形から方形に変わっている。新しい情報の入り方を考える上で興味深い。この点は次章以降で検討することにしたい。

この他、高地性集落としては巻町山谷古墳下層遺跡〔新潟県巻町教育委員会・新潟大学考古学研究室1993〕や五泉市大倉山遺跡〔五泉市史編さん委員会1994〕などが確認されている。いずれも遺構は確認されていないが、前者の出土遺物は１期（新）～２期、後者は検出された土器が細片のため、時期を明確にしえないが、実測図から判断すれば２期～５期まで継続した集落である可能性が高い。

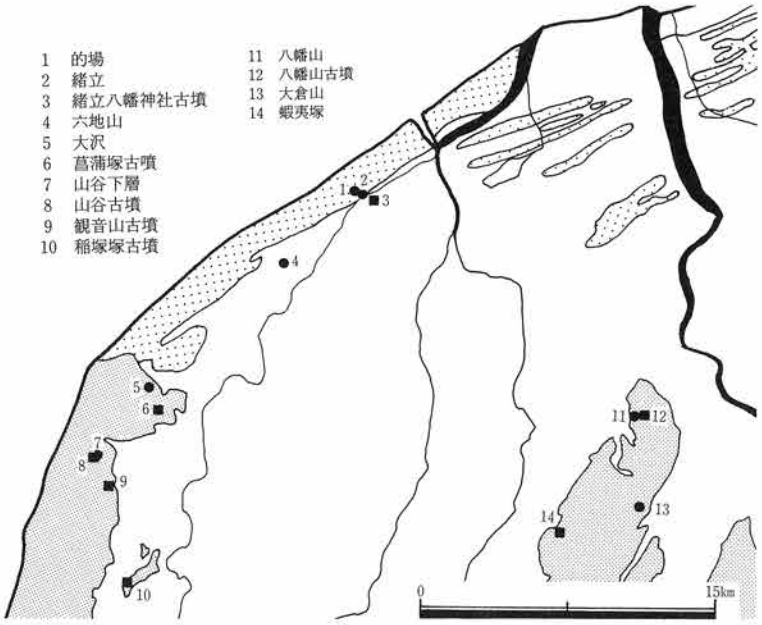
防御的集落以外で比較的長期間にわたって継続する遺跡に、新潟市六地山遺跡〔新潟市史編さん原始古

第6表　古志郡域における遺跡の消長

遺跡名	中　期	1　古	1　中	1　新	2	3・4	5・6	7・8	9・10	ランク
大平城										A
岩　沢										B
高稲場										B
奈良崎	……									(A)
経塚山				……						(A)
狐　崎										A
山崎A										
横　山	……									A
舞台島					……					C
諏訪田					……					C
横滝山					……					A'
桐原神社					……					C
山王B					……					C
太　平						……				C
城					……					C
杉ノ森							……			A'

代中世部会1994ほか〕がある。ランクA'の遺跡であるが、1期～5期までと長期間にわたり継続している。1期の段階では東北南部系の土器が確認されている他に、アメリカ式石鏃が多数検出されており、北陸系土器群とあわせ、分化の融合地域として評価できよう。

5期から集落が営まれる遺跡に、砂丘上に位置する黒崎町緒立遺跡〔黒崎町教委1983ほか〕、新潟市的場遺跡〔新潟市史編さん原始・古代・中世部会1994〕、巻町南赤坂遺跡〔前山1994〕、可能性のあるものに越王遺跡〔新潟県1986〕などがある。このうち緒立遺跡と的場遺跡は、隣接することから同一集落として考えるべきかもしれない。両遺跡は、いずれもランクAの遺跡である。



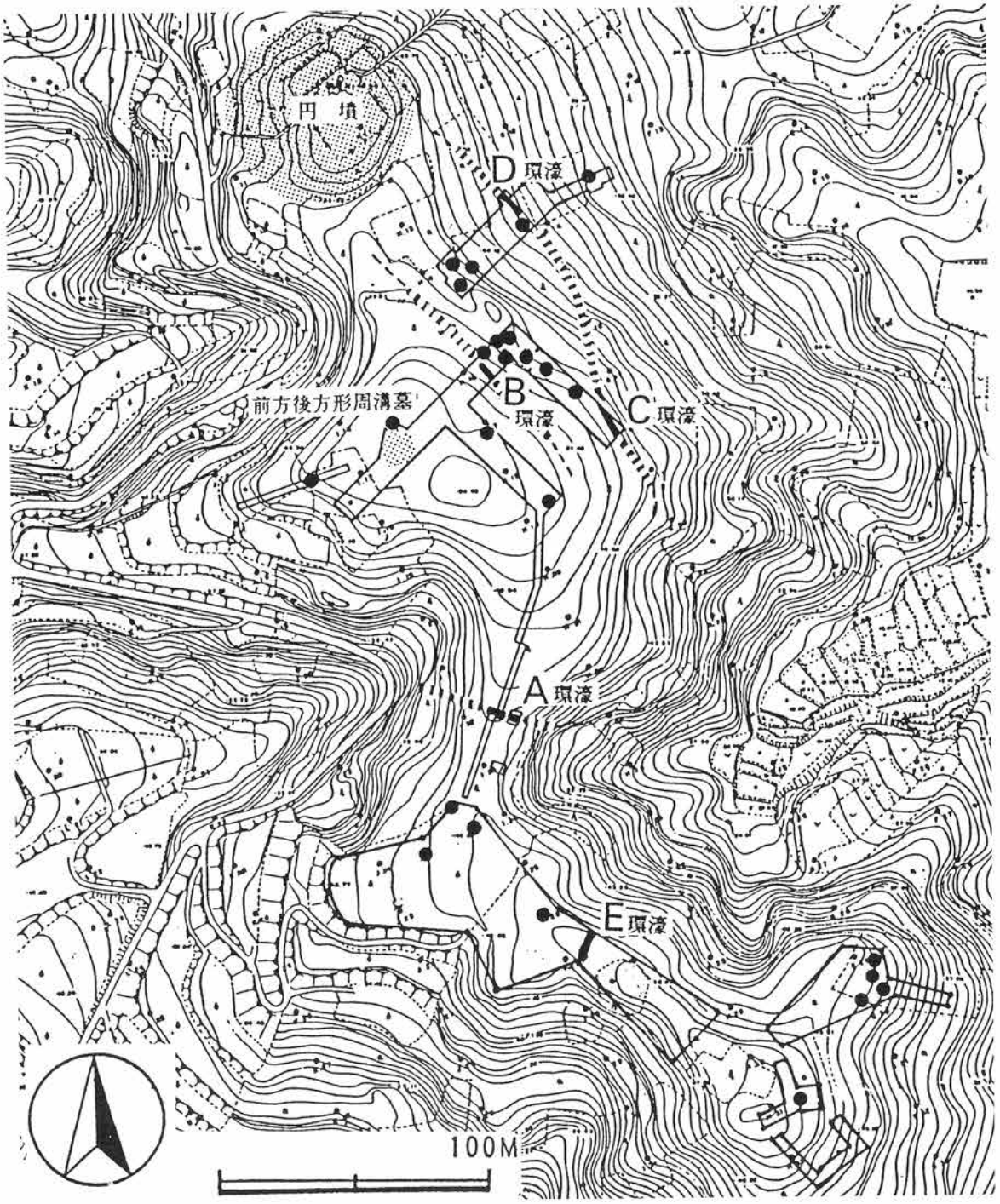
第15図　蒲原郡域の遺跡分布図

緒立遺跡で正式報告された住居跡（2号～4号住居跡）は、5～7期のものである。また包含層からの出土遺物や、これまで報告された遺物や〔永峰・磯崎1965〕、緒立C遺跡〔黒崎町教委1993〕には若干新しい時期のものが含まれている可能性もあるが、現状では8期で終結する集落と考えておきたい。

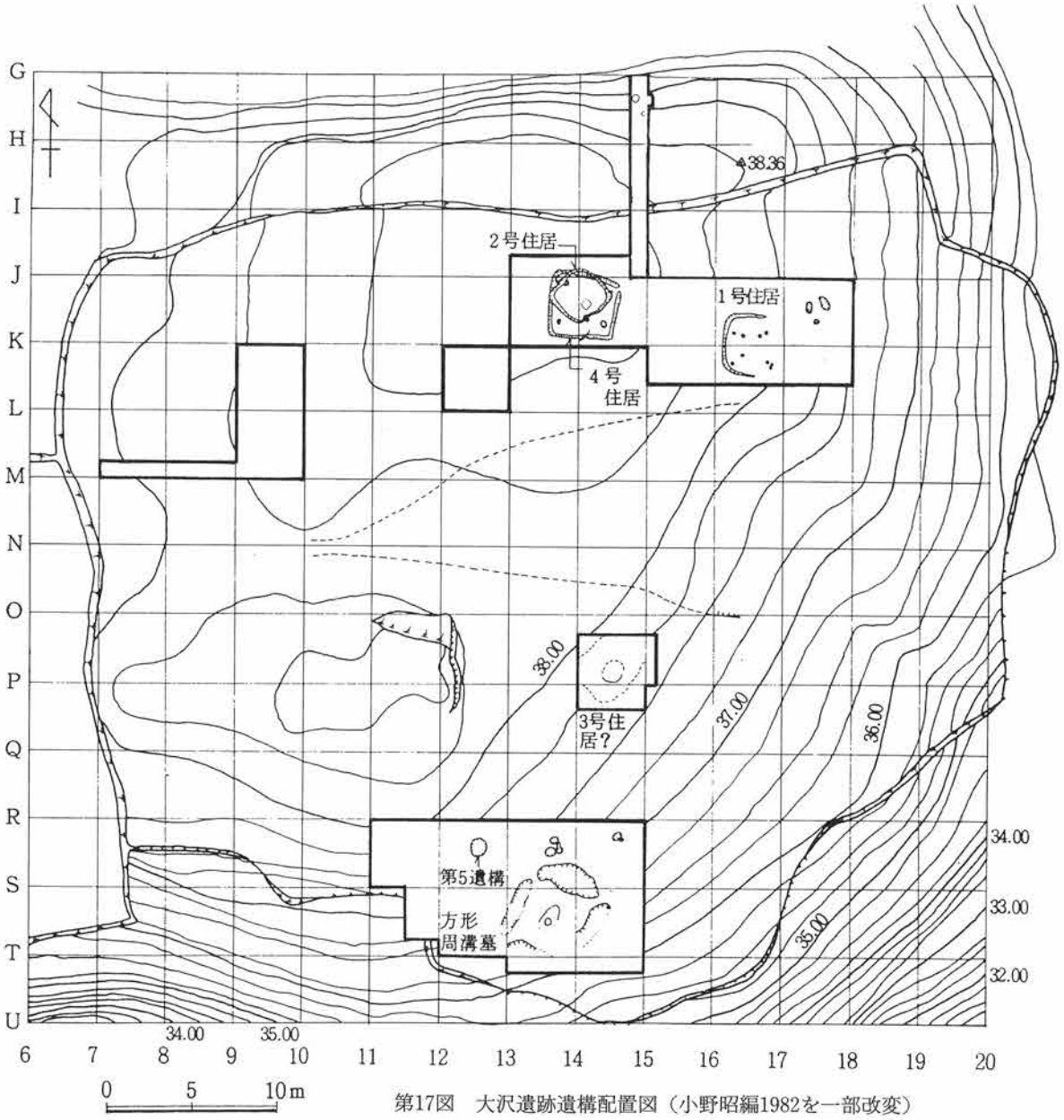
一方の的場遺跡は正式報告が行われていないが、公表された遺物を見る限りでは、緒立遺跡と同様な傾

第７表　蒲原郡域における遺跡の消長

遺跡名	中　期	1　古	1　中	1　新	2	3・4	5・6	7・8	9・10	ランク
八幡山										(A)
大倉山										
六地山										A'
大　沢										A
緒　立										A
的　場										A



第16図　八幡山遺跡遺構配置図（伊与部1989を一部改変）



第17図　大沢遺跡遺構配置図（小野昭編1982を一部改変）

向を示すようである。古墳時代中期・後期の土器が若干は認められるものの、前期（7～8期）との間には断絶が認められる。緒立・的場の両遺跡は5期から集落構成を開始して、おおむね8期を持って終結する集落と考えておく。

県内に主要な前期古墳が集中する巻町～弥彦村では、近年になって続縄文式土器が数多く確認されて著名となった巻町南赤坂遺跡がある。住居跡3軒の他に、土坑を取り囲む掘立柱建物が検出された「テラス遺構」がある。正式報告が行われていないが、公表された資料によれば、これらの遺構は8～9期が主体であるという〔前山1994〕。また3軒の住居跡のうち、1号住居跡は9期という。おおむね7・8～9・10期を主体とした遺跡であろうか。また南赤坂遺跡の西方約300mには、玉作り関連資料が多数確認されている越王遺跡〔新潟県1986〕がある。土器が明確でないことから細かな時期比定は困難であるが、剝片の形状から古墳時代前期と考える。5期以降、玉作りのあり方が変化している中で、古墳時代有力古墳が集中する地域での遺跡だけに、その評価が問題となろう。

(7) 阿賀野北地域

阿賀野川流域から北部の地域を一括して本地域とした。今回の越後の区分では、最も広範囲に及ぶ地域である。各河川が砂丘を横断できずに阿賀野川に流れ込み、ひいては信濃川に合流する地点であることから、三面川周辺の遺跡とは区分すべきとも考えるが、ここでは阿賀北地域として扱いたい。

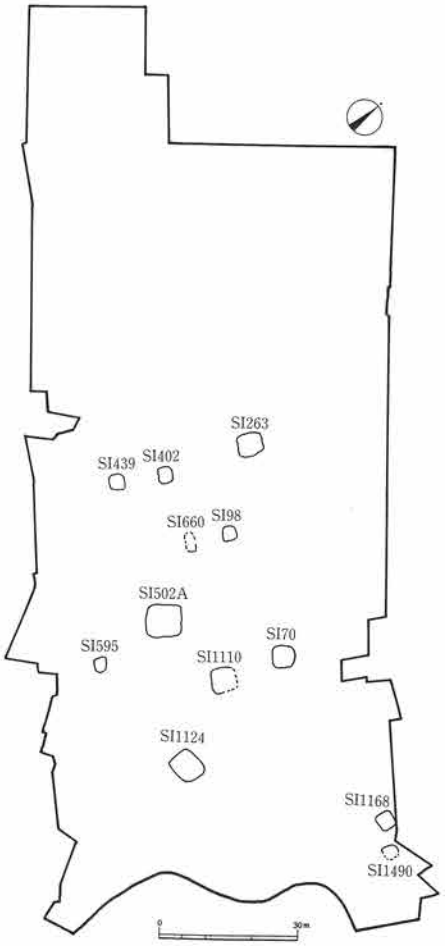
1期～2期の遺跡では村上市滝ノ前遺跡〔村上市教育委員会1972〕がある。ランクAの遺跡であるが、正式報告が行われていない。概報によれば住居跡は3軒確認されており、いずれも円形プランを呈する。細かな時期は明確でないが、1～2期の東北南部系の土器以外に、写真で掲載されている土器には5期前後のものも存在するようである。

5期以降における遺跡数の増加は阿賀北地域で特に顕著である。ランクAの遺跡には山三賀II遺跡〔県教委1989〕、二本松東山遺跡〔聖籠町教委1993〕、ランクA'の遺跡には豊浦町曽根遺跡〔豊浦町教委1981・1982〕、豊栄市上土地亀遺跡〔豊栄市教委1993〕、ランクCの遺跡には豊栄市葛塚遺跡・松影D遺跡・上黒山遺跡遺跡、新発田市馬見坂遺跡・正尺B遺跡〔阿部1989ほか〕などがある。このうちランクA・A'の遺跡は集落の開始時期が異なるようである。曽根遺跡では5期から集落が営まれるが、山三賀II遺跡（第19図）・上亀地遺跡では7・8期に集落が登場する。前者は7・8期で終焉を迎えるが、後者は10期以降も継続している。終焉時期は明確でないが、集落構成の開始時期には2通りありそうである。

この時期の集落を検討する場合、山三賀II遺跡では住居跡が十数軒確認されており、特に注目される。坂井秀弥氏によれば一時期に併存する住居跡は2～3軒であるという。また、農耕を営むには極めて不向きな立地に集落が営まれていることから、外的要因（中央の権力か）によってこの地に集落を構成せざるなかった計画的な村落と評価している〔坂井1989〕。

一方、荒川流域の沖積地には荒川町古谷地B遺跡がある。居住域ではないと考えるが、数条の溝が作られており、9期～10期程の土器が確認されている。農耕係る遺跡であろうか。

第18図　阿賀北地域の遺跡分布図



第19図　山三賀II遺跡古墳時代前期の遺構配置図（県教委1989を一部改変）

第８表　阿賀野北地域における遺跡の消長

遺跡名	中　期	1　古	1　中	1　新	2	3・4	5・6	7・8	9・10	ランク
滝ノ前							……			(A)
山三賀Ⅱ										A
二本松東山										A
曽　根							……			A’
上亀地								……		A’
葛　塚							……			C
松影Ｄ							……			C
上黒山							……			C
馬見坂							……			C
正尺Ｂ							……			C
古谷地										A

3　遺跡の消長について

これまで越後における集落の動向については、遺跡数が少ないことのみならず、集落を捉えていく上で基礎となる時間軸が不明確であったことから、活発な議論は生まれなかった。しかしここ数年における遺跡数の増加は、土器編年の設定〔坂井・川村1993〕や、防御的集落の様相〔川村1990〕、当期の集落研究の現状と課題が提示されるようになっている〔品田1993〕。こうした先学の研究成果を基に、遺跡の消長の類型化を試みたい。

(1)　長期継続型

今回の検討で採用した時期区分で、５期間以上に及ぶ遺跡を長期継続型の遺跡とする。各地域の様相を検討した結果では、５期に大きな画期が存在する。５期の画期については後ほど触れるが、現状で確認できる長期継続型の遺跡は、①中期後半又は、１期から集落の構成が開始されて５期まで継続する遺跡と、②５期以降に集落構成が開始されて５期間以上に及ぶ集落とに別れる。便宜上、①を長期継続型Ａ、②を長期継続型Ｂとする。また現状では明確でないが、５期に断絶が認められず、継続して集落が営まれた可能性があるものを長期継続型Ｃとする。

〈長期継続型Ａ〉

姫川流域・魚沼郡域・阿賀北地域では未確認であるが、各地域の防御的集落が圧倒的に多い。５期をもって終了する集落のうち、現状で中期後半から集落構成が始まる可能性のある遺跡には関川流域の斐太遺跡群、信濃川中流域の横山遺跡・奈良崎遺跡、１期から集落構成が始まる可能性のある遺跡には蒲原郡域の八幡山遺跡・六地山遺跡がある。集落構成の開始期が異なるのは、蒲原郡域とそれ以外の地域の差なのであろうか。今後、検討すべき問題と考える。

〈長期継続型Ｂ〉

防御的集落の機能が停止して新たに集落を構成する遺跡のうち、長期間にわたり集落が営まれる長期継続型Ｂには関川流域の一之口遺跡、阿賀北地域の山三賀Ⅱ遺跡が挙げられるにすぎない。

長期継続型に属する集落は、比較的広範囲にわたって調査が行われたものが多いことから、越後における調査の状況によって多分に限定される。これは、上記の二遺跡においても同様である。集落構成の開始

時期は、一之口遺跡が５期なのに対して、山三賀Ⅱ遺跡は８期からである。しかし山三賀Ⅱ遺跡の南側、直線距離にして約500mに営まれた二本松東山遺跡では、５・６期の方形周形墓・円形周形墓が営まれている。山三賀Ⅱ遺跡における５・６期の様相は不明確であるが、二本松東山遺跡を山三賀Ⅱ遺跡で生活していた人々の墓域とすれば、山三賀Ⅱ遺跡の集落構成の開始は５・６期頃からであった可能性もあろう。これらの２遺跡はいずれも10期以降（漆町編年の12群頃）まで継続していた集落である。

古墳時代の開始については諸説あり、今回の時期区分でどの時期にあたるかは明確にしえない。越後の土器様相から社会の大きな変革を５期と予想する坂井・川村両氏の考え〔坂井・川村1993〕に従えば、古墳時代の初頭・前期～中期初頭まで継続したのが山三賀Ⅱ遺跡、一之口遺跡という評価が可能である。

〈長期継続型Ｃ〉

正式報告が行われていないこと、調査範囲が狭いこと、遺物が散在的に分布するのみなどのことから明確でないが、長期継続型Ｃの可能性がある遺跡には、姫川流域の玉作り集落である笛吹田遺跡と、柏崎平野の刈羽大平・小丸山遺跡などがある。

笛吹田遺跡は２期、７・８期～９・10期の土器が確認されている。調査範囲が限定されているため制約も多いが、５期を前後する時期も継続して営まれた可能性もあろう。一方の刈羽大平・小丸山遺跡では、中期後半（畿内第Ⅳ様式併行期）～古墳時代中期までの土器が確認されている。中期後半以外の土器の出土量は少なく、遺構が確認されていないことから定住的な集落の可能性は極めて低い。遺跡は海辺の砂丘上に立地しており、キャンプ的な性格が強いと考える。現状では明確でない長期継続型Ｃの遺跡は玉作り遺跡やキャンプ的な遺跡である可能性が高く、一般集落とは異なった消長をたどる可能性もあろう。

(2) 短期継続型

今回の時期区分では１～４期間程しか存続しない遺跡がある。これを短期継続型とする。短期継続型とした遺跡の中には、長期継続型と同様に５期以前のもの（短期継続型Ａ）と、５期以後のもの（短期継続型Ｂ）がある。また①１～２期間のみの遺物が確認された遺跡、②３～４期間に継続する遺跡、③２～３期間に継続したのちに断絶があり、再び短期間に営まれたものなどの細分が可能である。しかし、前述のとおり越後における調査の現状は、遺跡の全容を解明するものはなく、部分的な調査が終わっているものが大半である。短期継続型とした集落の中にも、今後の調査次第では長期継続型に属するものも現れるかもしれない。このため対象とする遺跡は、Ａ・Ａ'の遺跡を中心とする。また同じ短期継続型でも様々な分類は可能であるが、５期を境にしてそれ以前を短期継続型Ａ、以後を短期継続型Ｂに大別するにとどめ、細分を行わず①～③を含めて短期継続型の集落としたい。

〈短期継続型Ａ〉

防御的集落と、そうでない集落がある可能性がある。このうち前者は調査例が少ないこと、部分的な調査しか行い得ない遺跡が多いこと、ランクＢ・Ｃの遺跡であることなどから、現状では短期継続型に分類せざるえないものも含まれている。例えば刈羽村西谷遺跡などは２期～５期まで継続した防御的集落であるが、今後に１期の遺物や遺構が検出されれば、長期継続型Ａの集落という位置付けとなる。多分に不確定要素を含むことを念頭におき、検討を行うこととしたい。

（防御的集落）

防御的集落のうち、短期継続型の範疇で捉えられる遺跡は明確でなく、わずかに姫川流域の後生山遺跡が挙げられるにすぎない。平坦部との比高差が30m以上あることから、防御的集落という位置付けが可能であるが、玉作り集落と考えられることから、一般の防御的集落とは同等に扱うことができない。

ランクＡの防御的集落のうち、住居跡が確認された遺跡において、２～３期間で終了する集落は明確でない。ただし防御的集落の終了時期に注目すれば、すべての防御的集落が５期まで継続したとは断言できず、柏崎平野の萱場遺跡や、信濃川中流域の大平城遺跡のように２期で終了した可能性の高い集落も存在する。萱場遺跡・大平城遺跡などは、防御的集落でも短期継続型の集落であった可能性が高い。

（防御的集落以外）

短期継続型の集落のうち大部分は防御的集落以外の遺跡である。これらは、調査範囲が限定された遺跡も多いが、柏崎平野の西岩野遺跡・内越遺跡などが可能性が高い例である。内越遺跡では、住居跡が１軒しか確認されていないが、品田氏が指摘するように報告書で「土坑」として扱われたSK25は住居跡の可能性が高い〔品田1993〕。同時併存する住居跡は１～２軒程であろう。また、この集落は２期で終了していることからすると、何らかの目的で構成された「主村」に対する「分村」であった可能性も考えられる。しかし検出された１号住居跡は１辺の長さが8mをこし、床面の面積は約65m²と大型の部類に属する。古墳時代の「豪族居館」以前では、ランク的には上位の住居跡である[13]。内越遺跡がいずれかの集落に帰属する「分村」でも、単にキャンプ的要素のみで成立していたものでないことの現れとして注目される。

この他、短期継続型に属する遺跡は存在するものの、住居跡の確認例が少ないことから、現状では明確にしえない部分があまりにも多い。ただ、立地的には内越遺跡例のように比較的見通しの良い高所に立地しているものと、西岩野遺跡や戸口遺跡などのように「低地」に立地するものがある。後者は農耕に係るものという推定も可能であるが[14]、西谷遺跡例のように居住域の直下に生産の基盤を持つ集落が存在することから、慎重な評価が必要となろう。

〈短期継続型Ｂ〉

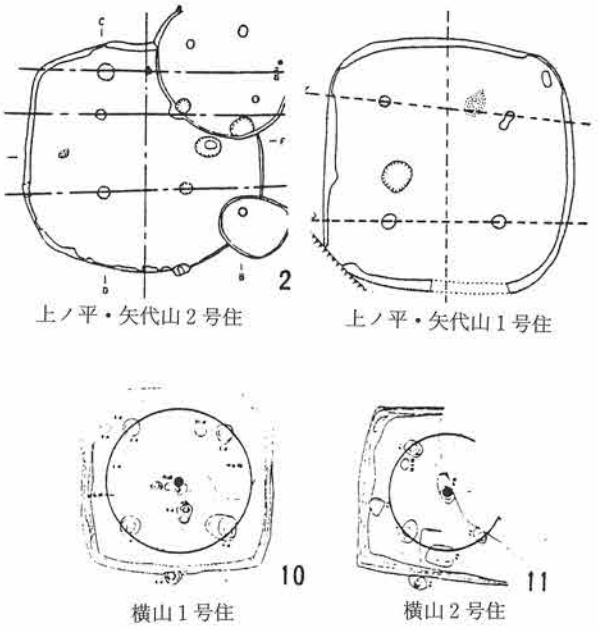
三条市狐崎遺跡、吉川町長峰遺跡、六日町金屋遺跡などランクＡの遺跡がある。これまで問題にしてきた調査上の限界を考慮しても、これらの集落はさほど継続せず、短期間に終焉を迎えた遺跡と理解できよう。同時併存の住居跡は１～２軒であり、集落として捉える場合には限界も多い。いずれも比較的高所に営まれた遺跡であり、短期継続型Ａとは立地上、変化が認められる。

4　遺跡構成要素の検討

(1)　竪穴住居跡の平面プランと構造

集落を捉えていく前提として、その消長のみならず、生活空間である竪穴住居跡の構造について検討を試みたい。竪穴住居跡の平面プランと柱穴の配置が、時期的な問題だけでなく地域色をも考慮して検討すべきことは、先学の研究成果として提示できよう〔石野1975、橋本1976〕。

住居跡の平面プランと主柱穴の組み合わせについて、より具体的に整備したのが都出比呂志氏である。都出氏は石野氏の論を更に発展させ、以下のような分類を行った。まず平面プラン以前に、炉と主柱穴の配置を問題と



第20図　住居跡の構造（品田1993ａより）

している。すなわち「住居床面の中心点を基準とする円周上に柱穴が配列されるもの」を「支柱配列求心構造」（以下、求心構造）とする。これに対し、炉が住居跡の中心には配置されず、「一本の対称軸の両側に支柱を配し、住居の規模を大きくするには中心軸と同じ向きに主柱数を増加させるもの」を「主柱配列有軸対称構造」（以下、対称構造）と定義している。この構造の違いは、弥生時代中期にまでさかのぼり、一般的に西日本では「求心構造」が、東日本では「対称構造」が基本とされ、「竈」が導入されるまで存続するとしている〔都出1989a〕。

東日本と西日本における竪穴住居跡の構造の違いは、「炉」の形態にも現れている。西日本が「灰穴炉」であるのに対し、東日本は「地床炉」が一般的である。西日本＝求心構造・灰穴炉、東日本＝対称構造・地床炉という分布の境界は日本海側が富山県、太平洋側が愛知県あたりという〔都出1989a〕。

都出氏の指摘を越後の状況に照らし合わせた論功が、川村浩二・品田高志の両氏から提示されている。川村氏は中期の下谷地遺跡と後期後半（２期）の内越遺跡で検出された住居跡を例に、越後の状況を論じている〔川村1990a〕。下谷地遺跡の炉は「灰穴炉」で、「求心構造」を採用していることから、この段階では極めて西日本的な要素が強いとしている。これに対して２期の内越遺跡１号住居跡は、炉が住居床面の中心にあり、柱穴の配置も「求心構造」を採用している点は西日本的である。しかし炉は「灰穴炉」ではなく「地床炉」である点が東日本的で、この複合形態が越後の地域色の一つであるとしている。

川村氏の論を発展させて越後の様相を検討した品田高志氏は、中期以降の竪穴住居跡を対象とし、平面形態・主柱穴の配置を関連付けた変遷を問題とした〔品田1993a〕。品田氏によれば、中期前半には平面プランが長楕円形で対称構造を呈するが（古志郡域―長岡市尾立遺跡）、中期後半には円形に変わり（阿賀北地域―滝ノ前遺跡、柏崎平野―下谷地遺跡）、以降は東北南部系の天王山式土器分布圏は円形、北陸系土器分布圏では隅丸方形に変化すると指摘している。後期後半（２期）以降、隅丸部がわずかに角張るものへ、終末期（今回の検討では５期）には方形へと変化しているという。

一方、住居跡の構造は「求心構造」を基本とするが、一部で対称構造の住居跡が認められる（頸城平野の上ノ平・矢代山１・２号住居跡、古志郡域の横山２・４号住居跡）という。住居跡の平面プラン・構造について、大きな傾向は品田説から学ぶことがあまりにも多い。６期以降の住居跡構造について、品田氏は作図を行っているものの、明言は差し控えている〔品田1993b〕。ここでは５・６期～10期の住居跡についても若干の検討を行ってみたい。

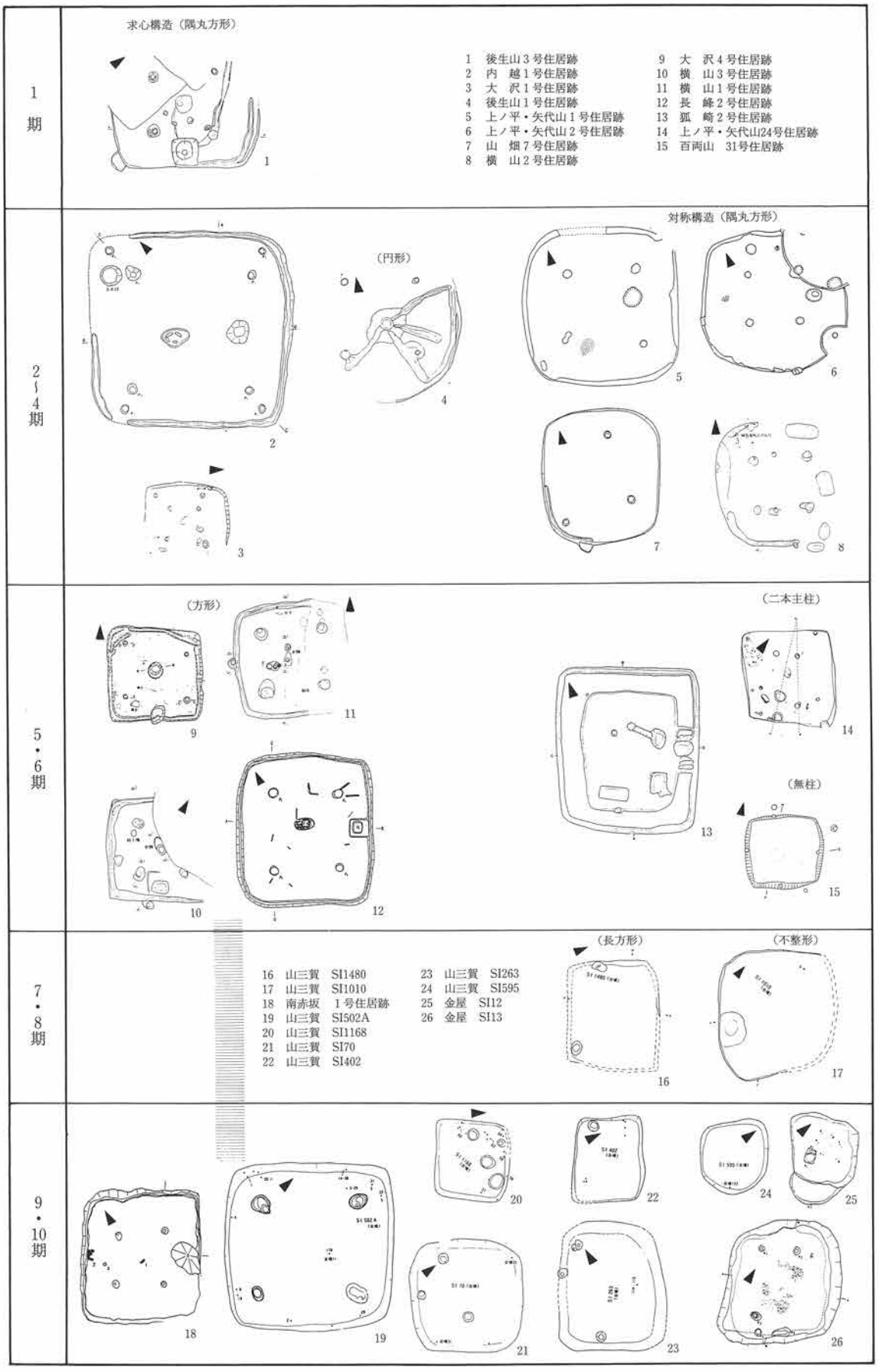
(2) 竪穴住居跡の平面プランと構造の変遷

１）５期以前

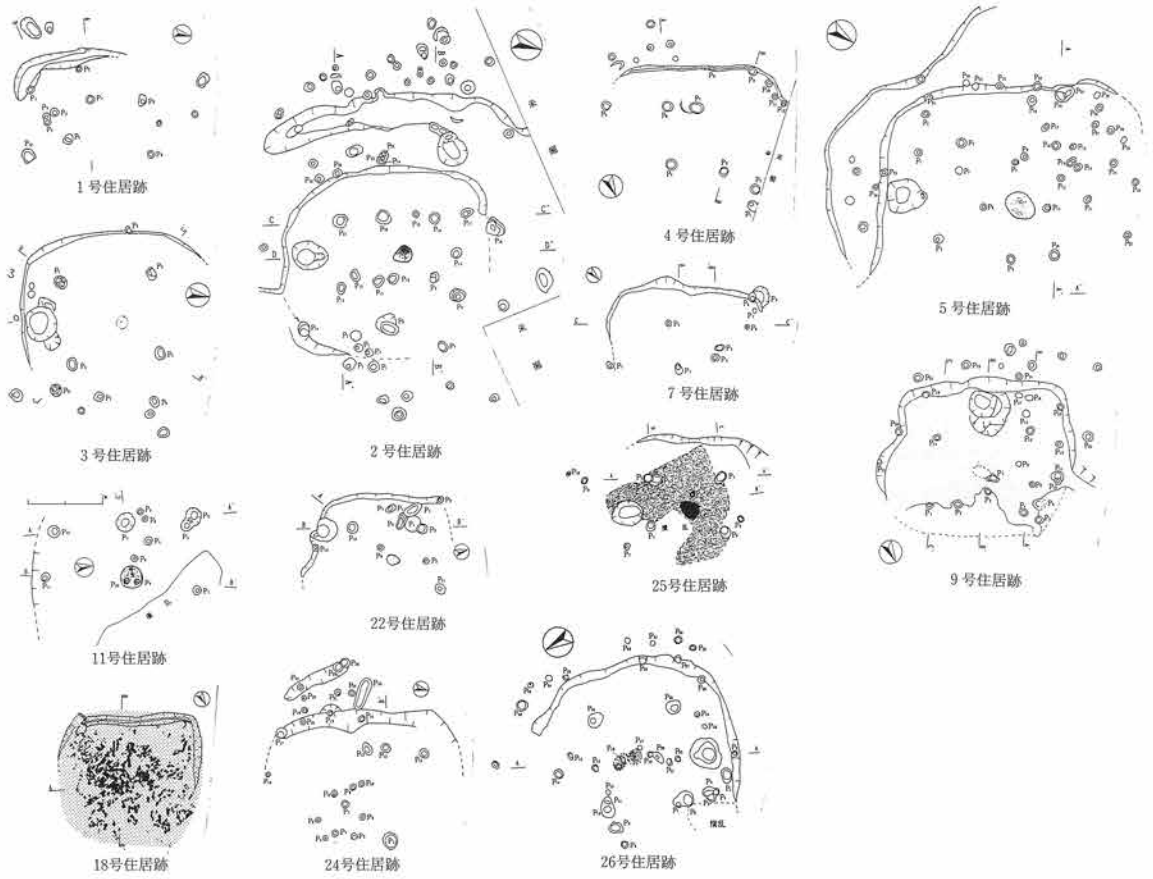
５・６期～10期までの状況を検討するにあたり、問題となるのが時期区分である。終末期以前の様相として品田氏が提示した住居跡のうち、巻町大沢遺跡４号住居跡・横山遺跡１・３号住居跡、上ノ平・矢代山24号住居跡は５期に下ると思われる。ここではこれらを５期として論を進めたい。５・６期の動向で、大きな問題となるのが「平面プランの方形化」と「求心構造への統一化」である。長期継続型Ａの集落で、住居跡の変遷がおえる斐太遺跡群・横山遺跡・大沢遺跡を例にとって検討することにしたい。

〈１〉斐太遺跡群

検出された住居跡のうち時代と構造が把握しえるのは、２期の上ノ平・矢代山遺跡１・２号住居跡と、５期の上ノ平・矢代山遺跡24号住居跡である。１・２号住居跡は、品田氏が指摘するように炉が住居床面の中央には位置せず、柱穴が左右対称に配置された「対称構造」である。これに対し上ノ平・矢代山24号住居跡は、主柱穴が二本であり構造は判別しえないが、炉が床面の中央付近に位置することから、上ノ平・



第21図 越後における住居跡の変遷（S＝1/250）



第22図　八幡山遺跡の住居跡（S＝1/100）（市教委1994より）

矢代山1・2号住居跡とは様相が異なっている。このような5期における変革は、横山遺跡の場合に更に明瞭に現れている。

〈2〉横山遺跡

検出された4軒の住居跡は、大きく5期（1号住居跡・3号住居跡）と、それよりも古い時期のもの（2号住居跡）、時期が不明なもの（4号住居跡）に分かれる。住居跡は半壊したものが大半で、明確でない部分も多いが、5期よりも古いと考える2号住居跡は隅丸方形を呈しており、主柱穴も左右対称の6本である。品田氏の指摘するように、対称構造の住居跡である。

これに対し、5期の1号・3号住居跡は平面プランが方形を呈する。炉は住居床面の中央に位置し、主柱穴が4本であることから「求心構造」の住居跡である。また3号住居跡には、住居の南東方向に二重ピットの「貯蔵穴」と考えられる土坑が存在する点からも、前段階とは異なる住居構造といえよう。

〈3〉大沢遺跡

4軒の住居跡が確認されている。このうち柱穴・炉の配置が明確な1号・4号住居跡は、いずれも求心構造である。わずか2軒ではあるが、2期の1号住居跡は平面プランは隅丸方形であるのに対し、5期の4号住居跡は方形へと変化している。平面プランは変化しているものの、住居跡の構造は伝統的に「求心構造」を採用している。

越後では前記のとうり一遺跡で住居跡構造の変遷がおえる遺跡が少ない。わずか3遺跡での検討であり推測の域を出ないが、5期の大きな画期が存在する点は重視すべきである。前代から求心構造を採用していた集落はもとより、対称構造を採用していた集落でも求心構造へと変化している。阿賀北地域・魚沼地域の様相は不明確であるが、越後では求心構造を採用した地域（蒲原郡域・柏崎平野・姫川流域）と、対

第9表　竪穴住居跡における面積の変遷

床面積	～10	～15	～25	～25	～30	～35	～45	～45	～50	～55	～60	～65	～70以上	
資料数	4	6	2	4	3	2	2	1	1				2	27
1期						1			1					2
2～4期	1	2	1		1		2						2	9
5・6期		2		2		1		1						6
7・8期			1											1
9・10期	3	2		2	2									9

称構造を採用した地域（古志郡域・頸城郡域の山間部）がありそうである。こうした地域間の構造の差異が解消されるのが5期である。

この時期、集落の周りに濠を巡らす防御的機能を持った環濠集落（全段階から継続する集落形態＝戦乱の消長）は依然として存在するが、前述のとうり住居跡平面プランが方形化を呈すること、住居跡構造が「求心構造」に変わるなど、新たな住居形態が導入されていることは重要であろう。当期•当域の集落の消長を考える上で大きなポイントとなることから、次章以降でこの意義について若干の検討を加えたい。

2）5期以降

5期に入り、新たに集落を構成する遺跡での「求心構造」の採用は、他遺跡も同様である。吉川町長峰2号住居跡は「求心構造」で、住居床面の北東に「貯蔵穴」と考えられる「二重ピット」または「二重土坑」が配置されている。住居跡の平面プランの方形化も同様である。

しかし、全ての住居跡が求心構造・方形の平面プランを採用したのではない。6期の三条市狐崎2号住居跡は平面プランが方形であること、炉が住居床面の中央に位置していること、北東隅に「貯蔵穴」と考えられる二重ピットが存在する点は、横山遺跡例や長峰遺跡例と同様であるが、主柱穴が判然としない。また用途不明の方形土坑が2基、連結する円形ピットが存在する点は上記の遺跡とは異なる。越後全域で全てが統一されたわけではない。時期的変遷、住居跡・遺跡の性格にもよるが、異なる点以上に酷似する様相が認められるのは重要である。5・6期の「統一化」は大きな画期である。

第10表　地域別にみた住居跡構造の変遷

	1	2	3・4	5・6	7・8	9・10	備考
姫川流域	求心…… 円・隅丸　隅丸……						
頸城平野		対称……		求心…… 方……			
柏崎平野		求心…… 隅丸……					
魚沼郡域						不明…… 不定形……	
信濃川中流域		対称…… 隅丸……		求心…… 方……			
蒲原郡域		求心…… 隅丸……		方……			
阿賀野川北地域	?…… 円……				求心?不明…… 方・長方・不定形……		

これに対して7・8期以降（特に8期以降）の住居跡構造は、まとまりに欠ける。検出された住居跡は蒲原郡域の南赤坂遺跡、阿賀北地域の山三賀Ⅱ遺跡、魚沼地域の六日町金屋遺跡がある。このうち南赤坂遺跡を除くと、前段階の住居跡構造や土器様相が明確でない地域の住居跡だけに、その評価は慎重にならざるえないが、現状では住居跡構造の地域色が出始める時期と評価したい。

正式報告が行われていないが、大沢遺跡と同じく蒲原郡域にある南赤坂遺跡では3軒の住居跡が確認されており、このうち1軒は平面図が公開されている(第21図—18)。住居跡の平面プランは方形で、炉は住居跡床面の中央に位置し、主柱穴は4本の「求心構造」である。9期に比定されるこの住居跡は、5期の大沢遺跡と同様な傾向が認められる。

5期以前の様相が不明確な阿賀北地域の山三賀Ⅱ遺跡、魚沼地域の金屋遺跡では異なった様相が認められる。このうち山三賀Ⅱ遺跡は8期～12期と幅があるものの、12軒の住居跡が確認されており、住居跡の変遷がおえる良好な遺跡である。8期のSI1010・SI1480は、共に後世の住居跡に切られており住居跡構造は判然としないが、いずれも主柱穴が明確でなく、これまでのあり方とは異なっている。またSI1480は平面プランは長方形化しており、前段階とは異なった様相が認められる。9期のSI502Aも後世の住居跡と切り合うが、平面プランは方形で、炉は存在しないが「求心構造」と想定されている点などから、5期以来の伝統を残す住居跡構造を採用している点が注目される。10期以降の平面プランは、方形(SI1168)、長方形[15]（SI263・402・650・1124)、楕円形（SI439・595）など形態は豊富である。炉が検出された住居跡がないこと、主柱穴が不明確で「求心構造」「対称構造」の推測はSI502A以外に不可能なことなど、様々な点で異なっている。前段階の状況が不明なことを考慮しても、住居跡の「不統一化」と評価できよう。

これは六日町金屋遺跡でも同様である。SI12・13の出土土器は北陸系という概念では説明できないものであり、正確な位置付けは困難であるが、小型丸底壺や器台が出土していることから、9期～11・12期と幅を持った時期と仮定して論を進めたい(第23図)。金屋遺跡の住居跡は崩れを想定しても、平面プラン方形とは考えがたい。また主柱穴が判然としないこと、焼土範囲の記載はあるものの、明確に炉と認定できるものが存在しないことからも、山三賀Ⅱ遺跡と同様に「住居構造の不統一化」が想定しえる。

5　集落の画期について

前章までで検討してきた①集落の消長、②竪穴住居跡の構造を中心に、墳墓・土器などの要素を加味して越後における集落の画期について検討を試みたい。

各地域での遺跡の消長を見みると、5期に大きな画期が存在する。防御的集落の大多数がこの時期を持って消失するし、5期から新集落も増加している。一つの画期として提示できる。これ以外には、どの時期に画期があるのであろうか。5期を大画期として、その前後について考えてみたい。

(中期後半)

この時期から集落構成を開始して、1期以降まで継続する遺跡には、関川流域の斐太遺跡群、古志郡域の横山遺跡、奈良崎遺跡[16]などが挙げられる。具体的な比率は不明なものの、防御的集落とされるものは、中期後半から集落の構成を開始する可能性が高い。中期の中葉（畿内第Ⅲ様式併行期）に畿内色の強い方形溝墓と共に、防御的集落の風潮（戦乱）が伝播した可能性も高いが、現状では中期後半（畿内第Ⅳ様式併行期）頃には画期が存在するようである。

(1期)

1期は第1表でも明らかなように、3小期の細分が可能なようである。このため本論で1期とした遺跡

でも、どの時点で集落の構成が開始されたのかが問題となる。八幡山遺跡の場合にはN－8号住居跡出土土器〔伊与部1989〕から、1期（中）には集落の構成が開始されていた可能性が高い。一方、姫川流域の後生山遺跡の場合にも1期（中）には集落構成が開始されていたようである。これらの集落の上限がどこまでさかのぼるかは不明であるが、防御的集落の構成開始は1期までに成立していたものが多いようである。

（2期）

一つの画期として提示できよう。各地域で短期継続型Aの集落数が飛躍的に増加している。また住居跡の平面プランが隅丸方形になるなど変化は大きい。しかし、こうした画期が越後の全域のものとは言い難い。北陸系土器分布圏に属する地域と、そうではない阿賀野北地域と魚沼地域とでは様相が異なるようである。2期には土器が信濃や会津に拡散しているが、越後全域を包括するほどの勢いはない。ここでは北陸系土器分布圏での画期を中心に記す。

新集落の出現以外に、中期後半や1期から継続する遺跡も、この時期に入って規模が拡大しているようである。当期における遺跡内の動向は、様々な面で現れている。墓制では、大平城遺跡における方形台状墓の登場が挙げられる。標高が高い台地の縁辺に位置するこの墓制の導入は、山陰地方との関連が指摘されている〔吉岡1991〕。一辺が20mを超し、越後最古の前方後円墳である稲場塚古墳（全長26m、7期か？）とは、時期や墳形が異なるものの、墓の造営に対する労力の点で大きな差異は見いだしがたい。2期における山陰系の大規模な墓制の出現や、多数の遺跡が出現している点は、一つの画期として捉えることができよう。

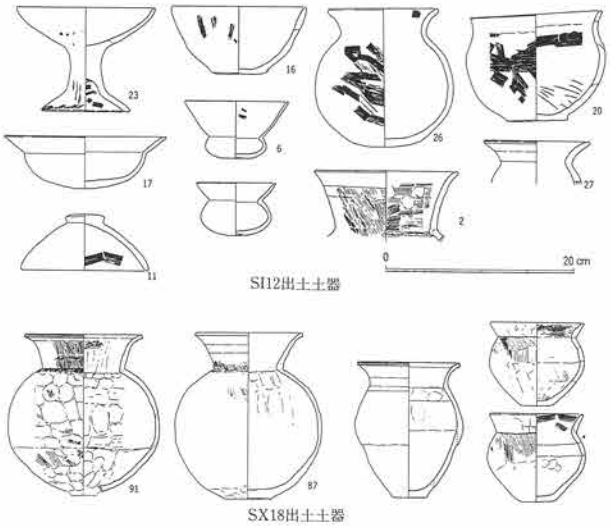
なお、土器では北陸南西部（加賀以西）との地域色が顕著になる。越後では1期の土器様相が十分に把握できないものの、地域色の顕在化や新集落の出現、新たな墓制の導入など、人の移住に加え、在地色がより濃くなるという矛盾した動向が見受けられる。

（3～4期）

確認された遺跡数が最も少ない時期である。2期に成立した短期継続型Aの集落は、ほとんど3期までは継続していないようである。また、防御的集落では後生山遺跡、野村・萱場遺跡、経塚山遺跡、大平城遺跡など3期まで継続しないものが存在する可能性が高い。越後の防御的集落は5期まで継続する場合が多いが、少数ながら3期に機能を失った防御的集落が存在することは重要である。防御的集落＝戦乱の痕跡とすれば、2期をもって廃絶する防御的集落は戦乱に破れた結果か、または（対象地域は明確でないが）ある地域との戦乱が終結した結果である可能性が高い。また、遺跡数の激減は集落の集約化が原因であろうか。2期とは異なる点が多い。

（5～6期）

最も大きな画期となる。防御的集落の機能が失われ、新集落が誕生する時期である。また土器様相の変革や新墓制の導入、地域圏の拡大など社会そのものの変化として位置付けられる。



第23図　金屋遺跡出土土器（県教委1985より）

変革は住居跡にも現れており、平面プランは方形に統一化される。また全てではないが、求心構造を採用した住居跡が多い。前段階で対象構造を選択していた横山遺跡や斐太遺跡群でも求心構造に変化するなど、集落景観そのものが変化する時期と考える。

新集落の出現は、2期の飛躍的増加を更に上回る。これまで北陸系土器分布圏に属していなかった阿賀野北地域や魚沼地域でも、北陸北東部系土器群に急激に変化し、多くの新集落が出現している。北陸系土器群はこの時期に最も拡散しており、北は信濃・会津の隣国はもとより、関東南部にまで達している〔川村1994〕。このうち、北信濃・会津では北陸北東部系土器群が在地の土器様相はもとより、生活様式そのものを変革しているなど、北陸北東部に包括された可能性が指摘されている〔川村1993a〕。防御的集落の解体に伴う社会の変革は、戦乱の終結に伴う新体制の確立と評価でき、この点は次章で検討することにしたい。

(7～8期)

現状では、5期ほどの画期は見いだしがたい。5期以降に誕生した集落は、約50%は継続して営まれている。新たに集落構成が開始される遺跡に山三賀Ⅱ遺跡があるにすぎない。また前段階まで各地に拡散していた北陸北東部系土器群は、当期で新たに拡散したものは少なく、地域圏の縮小の段階と評価できる。住居跡は、山三賀Ⅱ遺跡以外で確認されていないことから明確でないが、平面プランの崩れや求心構造を採用していないなどの変革が認められる。なおこの変革は、地域的な特徴の可能性も高い。墓制では蒲原郡域を中心に、前方後円墳・前方後方墳の築造が開始される時期である。墓制の変革が顕著なことから集落の変革が際立つと時期とも考えられるが、住居跡構造以外には明確でない。5・6期に拡散した北陸北東部系の土器群は当期まで認められるが、数量的には激減しており、移動先での変革が認められる。

(9～10期)

5期以降に集落構成を開始した遺跡のうち、当期まで継続する遺跡は約20%と少ない。一方、当期に出現する集落は阿賀北地域の古谷地B遺跡や魚沼郡域の金屋遺跡などが挙げられるが、概して少ない。確認された遺跡数が少ないことも大きな特徴である。この時期に出現する集落のうち、金屋遺跡出土土器は北陸系土器群とは言い。越後の分割が進む時期と考える。

住居跡構造でも地域色が顕著に現れてくる。前方後円墳が築造されている蒲原郡域の南赤坂遺跡では、求心構造が採用され、住居跡一辺の中央部に貯蔵穴をもつなど、5期以来の伝統が守られている。一方、山三賀Ⅱ遺跡ではこうした伝統が守られているとは言いがたい。当遺跡で大型に属し、土器様相も他の遺構と異なるSI502Aは求心構造を採用しているが、貯蔵穴を欠く。それ以外の住居跡は柱穴・構造とも判然としない。これは金屋遺跡も同様であり、平面プランの崩れ、構造に不統一化の段階と評価できる。

土器では北陸北東部系の組成とは異なるものが出現しはじめる。田嶋明人氏(1993)・春日真実氏(1994)が指摘するように、山三賀Ⅱ遺跡SI502A出土の高杯は関東北東部系のものに類似する。また、地域が異なることから山三賀Ⅱ遺跡とは単純に比較はできないが、金屋遺跡の土器群は上野の組成に類似する。こうした傾向が認められる当期は、5期以来の様相が序々に取り払われる開始期の段階として評価できる。

6　北陸他地域の動向

不確定な要素を多く含むが、越後における集落の検討を行ってきた。越後の状況は北陸内でどのように評価できるのであろうか。若狭・越後を除く加賀・能登・越中と対比してみたい。

(1) 集落の消長と画期について

〈越中〉 高橋浩二氏によれば、1期の動向は不明確なものの、2期に入り遺跡は増加するようである。2期に成立する遺跡の大半は3期まで継続するが、3期から4期の間で消失するとして、4期の画期を主張する〔高橋1993〕。これは、越後の状況と異なるようにも見える。しかし高橋氏が4期とした砺波地域の桜町遺跡〔小矢部市教委1987〕・平桜川東遺跡〔小矢部市教委1979〕、氷見・高岡地域の下佐野遺跡〔高岡市教委1992〕、射水地域の串田新遺跡〔大門町教委1981〕・中山南遺跡〔富山県教委1971〕などは、5期に下る可能性が極めて高い。越中においても5期が大きな画期である可能性もあろう。

一方、防御的集落は4期に機能が消失するようである。婦負地域の白鳥城遺跡〔富山市教委1981〕、西金屋京平遺跡〔金子1982〕、新川地域の江上A遺跡〔富山県教委・滑川市教委1982〕、本江扇平遺跡〔滑川市史編さん委員会1979〕、天神山城遺跡〔麻柄1983〕の5遺跡が挙げられるが、現状では3期までしか営まれていない。また開始時期は、江上A遺跡の1期が最古であるが、それ以外の集落はランクB・Cのものが多く、詳細は不明である。高橋氏は高地性環濠集落（白鳥城遺跡、天神山遺跡）、高地性集落（西金屋京平遺跡、本江扇平遺跡）は3期にのみ機能して短期間に解体したと評価している。しかし、いずれもランクB・Cの遺跡であることから、その評価は慎重にすべきであろう。

5期以降の動向であるが、5期に成立した可能性の高い遺跡は7・8期までは継続しないようである。これは7・8期に成立した遺跡においても同様で、9期までは継続しない。9期における新たな集落の展開は砺波地域の竹倉島遺跡〔富山県教委1978〕以外には明確でない。

越中における遺跡の動向は、越後とは若干異なるようである。部分的な調査に終わっているため明確にしえないものも多いが、長期継続型の集落は現状では確認しえない。遺跡の消長における画期は、大きくは同様の傾向が認められるものの、防御的集落の動向は異っている。

〈能登〉 栃木英道氏により、集落は3種に分類が行われている。中期後半～後期前半（1期古段階）に集落の構成が開始され、1・2期まで継続するもの（A型集落）、1・2期から集落構成が開始されて5・6期まで継続するもの（B型集落）、5・6期から集落構成が開始され9・10期まで継続するもの（C型集落）があるという。また、これらの集落の画期は「B型集落が出現し狭議の高地性集落・大型土坑群[17]が（再）出現する1期」と「A型集落と狭議の高地性集落が衰退しはじめる3期」、「大型土坑群が消滅しC型集落が出現する4期から5期」と3つの画期が存在しているという。

5・6期以降の状況は不明瞭である。7・8期から新たに出現する集落は明確でないようである。また9・10期から集落の再構成が認められるなど、ほぼ同様の傾向が認められる。

防御的集落は鹿西町杉谷チャノバタケ遺跡〔石川県理文センター1988〕や北吉田ウルフ遺跡〔石川県理文センター1988〕などが確認されているが、1期に集落構成が開始されるが、3期までは継続しない。こうした傾向は越後と大きく異なる点であろう。

〈加賀〉 安英樹氏により集落の類型化が行われている〔安1993〕。集落の変遷は「弥生時代中期のⅢ様式後半からⅣ様式の時期に、以降弥生時代を継続する集落が成立、2期には集落の増加・拡大して各地のブロック内に群在」しているという。2期における遺跡の増加、集落の拡大は越後と同じ傾向が認められる。2期以降は「5・6期に以降古墳時代前期を継続する集落が成立して交代」し、「2期的な集落の群在を払拭・解消」し、「9・10期には整備された古墳時代集落が完成」するとしている。大きくは越後と同様な変遷をたどるようである。

防御的集落は、3～4期には終焉を迎えるようである。南加賀では河田山遺跡〔樫田1993〕、北加賀には

鉢状茶臼山遺跡〔宇ノ木町教委1987〕、低地ではあるが大型の溝が確認されてた西念・南新保遺跡〔金沢市教委1992ほか〕がある。現状では、北東部に位置する遺跡ほど終焉時期が下降するとの指摘がある〔田嶋1993〕。越後とは防御的集落の確認数や、存続時期において大きな差異が認められる。

(2) 集落構成要素の比較

〈住居跡の平面プラン〉

円形・多角形プラン　円形プランは越後でも1期以前に認められる。東北南部系土器が出土した住居跡では2期以降も存在するが、現状では限定される。多角形プランの住居跡は、越後では未確認である。

円形プランの竪穴住居跡は、加賀では5期の刈安野ノ宮遺跡23号住居跡〔石川県理文センター1992〕、能登では2～3期の宿東山2号住居跡〔石川県理文センター1987〕、越中では5期の中山南遺跡3号住居跡が下限のようである。これらの住居跡は、いずれも床面積が80m²を超す特大の住居跡である。集落内の中心的な住居跡であることから、意図的に円形の平面プランを選択していた可能性が高い。

これは多角形プランを有する住居跡も同様である。能登では未確認であるが、越中では小久米A遺跡〔氷見市教委1985〕、本江遺跡〔滑川市史編さん委員会1979〕などで、加賀では1期の八田小鮒Ⅱ1号住居跡〔浜崎1993a〕から5期の刈安野ノ宮23号住居跡で確認されている。これらは五角形プランと六角形プランに分かれるが、円形プランの住居跡と同じく床面面積が大きく、5期を最後に消失してしまう。

隅丸方形から方形への変化は5期を境にして、北陸他地域でも認められるようである。ただし、能登以外で円形・多角形プランを呈する住居跡がある点は越後と大きく異なっている。

〈柱穴配置と炉の構造〉

都出氏の説く「求心構造」・「対称構造」の違いである。越後の状況は前述の通り、5期を境に「求心構造」へと変化するが、同一遺跡内でも5期より古い段階では「対称構造」は存在している。

越中・能登・加賀では「対称構造」はごく僅かで、「求心構造」を呈するものが圧倒的に多い。炉が住居跡床面の中心に位置せず、柱穴は床面中央を軸にして配置されたものが能登の国分高井山遺跡1号住居跡〈円形プラン〉〔七尾市教委ほか1984〕・宿向山遺跡13号住居跡〈方形プラン〉〔石川県理文センター1987〕、加賀の塚崎遺跡9号住居跡〈隅丸方形プラン〉〔石川県理文センター1976〕・鉢状茶臼山遺跡7号住居跡〈隅丸方形プラン〉などで確認されている。しかし、いずれも「対称構造」とは言いがたい。「対称構造」の確実な例は能登の宿東山17号住居跡が挙げられるにすぎない。越後の海岸沿いの遺跡では未確認であるが、山間部の遺跡で確認できる「対称構造」の住居跡が、北陸他地域でごくわずかで有る点は重要であろう。越後の地域色である可能性が極めて高い。

一方、炉は旧国単位で大きく異なるようである。加賀では4期まで「地床炉」と「灰穴炉」の両者が存在するが、やや「灰穴炉」が多い。しかし、5期に入ると「地床炉」が圧倒的に多くなるという。5期における「灰穴炉」の減少は、能登・越中でも認められる。しかし、5期以前の動向は加賀と能登・越中では大きく異なっている。「灰穴炉」自体、能登・越中ではごくわずかで、全体の10%にも満たず、加賀ほど盛行はしないようである。5期に一応の画期は存在するものの、「地床炉」が主体を占めている。越後の状況は前述のとうり「地床炉」のみであり、現状では1期以降に「灰床炉」は存在しない。住居の平面プラン・炉の構造と共に北陸内では、東日本的要素が豊富に認められる

(2) 防御的集落の動向

丘陵・台地上に立地して環濠を巡らすものの他に、平地に位置するが、環濠に類似する「大溝」が検出された遺跡も防御的集落に含めた。防御的集落は4加賀で遺跡（河田山遺跡、鉢状茶臼山遺跡、大海西山

遺跡、西念・南新保遺跡)、能登で2遺跡(杉谷チャノバタケ遺跡、北吉田フルウ遺跡)、越中では5遺跡(白鳥城遺跡、天神山城遺跡、西金屋京平遺跡、本江扇平遺跡、江上A遺跡)が報告されているにすぎない。また、その機能が停止する時期は、加賀が2期、能登が3期で、越中が4期とされている。環濠・防御的集落の性格を考慮すれば、その機能が停止した時期が、「戦乱」の終結を意味することは容易に可能である。越後における環濠集落の存続は、「戦乱」の状況が北陸内で最も長く続いたことを意味する。

7　古墳出現前後の越後の動向

第4章で検討した「集落の画期」、第5章の「北陸他地域の動向」から、越後の古墳出現前後の動向について検討を試みたい。検討にあたり、大きな画期である5期以前と以後に分けて考える。

(1)　5期以前

5期以前の動向で最も問題となるのが防御的集落の消長である。越後では約30の防御的集落が確認されているが、どういった要因で成立したのであろうか。これについて1993年度の日本考古学協会新潟大会『東日本における古墳出現過程の再検討』で、甘粕健氏と田嶋明人氏から見解が提示されている。いずれも北陸・東日本を視野に入れたもので、越後に限定した見解ではない。

甘粕氏は北陸の防御的集落の成立要因について、北陸勢力対畿内の抗争を想定し、抗争に一応の終止符が打たれたことで、防御的集落の機能が停止するとした。これはおよそ2～3期である。2～3期から汎北陸的土器様式は崩れ、北陸南西部と北東部の地域差が顕著になるという。これは「越連合が解体し、少なくとも東西二つの部族連合に分かれて邪馬台国に統属することになった」ことを意味するとした。また越後で遅くまで環濠集落が存続するのは「北陸勢力にとって、西方からの脅威の解消とは一応無関係に東北勢力との間に緊張関係が続いたからであろう」と結論づけている。甘粕氏の説を要約すれば、加賀・能登環濠集落が終結を迎える2～3期以前の越後は、畿内勢力に対しての防御的集落である。しかし、それ以降は北陸北東部に組み込まれ、東北勢力との緊張を北陸北東部地域の最北東部に位置して前線基地的な役割を果たしていたことになる。

一方の田嶋明人氏は、戦乱の要因に「複数の外圧」を想定し、「外圧を直接的な契機とした北陸内部間での戦闘、北陸内部での越連合形成のための抗争」とした。すなわち「東の越」と「西の越」では連携した外部勢力が異なり、背後の勢力の代理抗争的な戦いを想定しているようである。連携した外部勢力は2期以降の土器に表れる影響から、東の越(北陸北東部)が丹後、西の越(北陸南西部)が山陰となろう。田嶋氏の見解に基づけば、越後は北陸北東部に属し、北陸の南西部と抗争を行っていたことになる。

越後の防御的集落は、2期をもって終了するものと、5期まで存続するものに分かれる。前者は、甘粕説では畿内との抗争が終結した結果であり、田嶋説では北陸内の抗争の終結に伴い消失したことになる。2期で消失する防御的集落がどのような要因によるのか、北陸内の動向については筆者の力量では決っしがたく今後の課題である。ここでは越後の動向についてのみ考えてみたい。

A．防御的集落の第一次消失期

越中の状況とは異なるようであるが、越後でも加賀・能登と連動するかの様に3期には消失する防御的集落が存在することは重要であろう。3期には機能を失う防御的集落は、後生山遺跡・萱場遺跡・大平城遺跡・山谷下層遺跡など数量的には限定される。これらの遺跡は越後の各地域に分かれるが、後生山遺跡は姫川流域で唯一の防御的集落である。玉作り集団の集落と想定されるこの遺跡は、正式報告が行われていないが、1期(中)から集落構成が開始して2期まで継続している。

現状で姫川流域では、後生山遺跡以外に防御的集落は存在しない。防御的集落が未確認の魚沼郡域もあるが、越後では例外的な地域である。姫川流域は伝統的に笛吹田遺跡・三又遺跡・田伏遺跡など、6世紀前半まで玉作り遺跡が集中するが、古墳の存在は確認されていないという特殊性もある。国内唯一の硬玉の産地という地理的条件も含め、越後では特異な地域として認識すべきであろう。硬玉という特殊品をめぐり早くから掌握され、畿内勢力に組み込まれた結果であろうか。仮にこの想定が成り立つのであれば、後生山遺跡が消失する3期以降のこととなろう。

その他の地域の防御的集落のうち、方形台状墓が確認された大平城遺跡も注目される。方形台状墓は、山陰地方の影響で成立したとの指摘があり〔吉岡1992〕、これを造営しえた集落が継続せず、3期に消失することは重要である。2期以降、北陸南西部以西（特に山陰地方）の情報が少なくなり、3期には遮断される。これは2期以降の土器組成にも顕著で〔田嶋1993ほか〕、甕形土器の形態〔谷内尾1983、坂井1983、滝沢1993b〕、文様の施文法〔滝沢1993a〕に表われており興味深い。仮に田嶋氏が説くように、北陸南西部と北東部（越後はこの範疇に含まれる）の戦乱が起こったしたら、それは短期間のものとなろうか。土器の時期区分、組成を含めた地域色を明確にする必要があるが、現状では1期における北陸南西部と北東部の様相差は、2期ほど顕著でないようである。北陸南西部と北東部に戦乱が起こったとしても、加賀で防御的集落が消失する3期には終結していたことになる。1期に両地域の様相差が顕著でないことは、それほどの緊張状態があったとは考えがたい。両地域の戦乱は、土器の様相差が顕著になってから加賀で防御的集落が機能している時期となり、現状では2期に限定される。戦乱の対象が時期毎に異なったとしても、1期又は、それよりも古い段階の防御的集落の意義が明確にしえない。1期・2期の時期区分と川村氏が行ったような組成レベルの地域差を、旧国・旧郡レベルで行う必要があろう〔川村1993b〕。

3・4期には、姫川流域を除いて緊張の度合いが高まったようである。2期に出現した小集落が姿を消すにも関わらず、防御的集落が5期まで継続しているのは、集村化が進んだことを意味し、緊張状態が強まった結果と考える。

B．防御的集落の第二次消失時期

5期の変革は前述のとおり大きなものである。①防御的集落の解体、②新集落の出現、③住居跡平面プランの方形化、④住居跡構造の変革（求心構造へ）、⑤土器では「小型化」と「外来系の増大」などがある。前時代的なものの腐食した大きな変換である。

防御的集落は前述のとうり北陸他地域でも認められるが、越後では最も遅くまで認められ、廃絶時期は5期である。視点を北陸から離し、東日本全体に目を向けると越後の様相が更に明瞭になる。日本海側における環濠集落の北限は、現状では越後である。太平洋側の状況は明瞭ではないが、内陸部の上野では5・6期まで環濠集落が存続している。〔橋本1993〕。上野の状況が問題であるが、越後は全国でも最後まで環濠集落が継続した地域の一つといえる。甘粕氏が説く様に、対東北勢力との緊張状態なのであろうか。

この問題の手がかりの一つになるのが土器がある。東北南部系の天王山式土器が、越後での在地系土器（北陸系土器）と共伴するのは、今回の時期区分の1・2期までとなろう〔田中1992〕。3～4期の動向が不明確ではあるが、3期以降に天王山式土器の出土例がほとんど存在しない[18]。東北南部系の土器群は、5・6期の横山遺跡や狐崎遺跡で少量は確認されているが、主体となるのは1～2期である。1～2期における越後の天王山式土器の存在は、越後と東北南部の交流を予想させるものである。これに対して3期以降は、越後の土器様相も未解明であるが、東北南部系の土器群がほとんど確認されていない。

能登と加賀で防御的集落の機能が停止した時期は、対象は不明であるが戦乱の終結を意味するものだと

すれば、甘粕説は有利となろう。すなわち北陸南西部、北東部で戦乱が終結したにもかかわらず、越後ではなおも防御的集落が残存している。また前段階まで多数の遺跡で確認された東北南部系の土器が、全くといっていいほど確認されなくなる点も重要である。

越後は1～2期において戦乱の対象は明らかにしえないが、緊張状態が継続していた。この時期は、東北系の土器群が多く入っていることから、東北以北の勢力とは友好関係にあった考える。しかしその後、東北系の土器が途絶えるのは、東北勢力と友好関係に亀裂が生じ、甘粕氏が説くように、戦乱の対称になった結果と考える。こうした状況で、北陸北東部の越後は東北勢力との戦乱又は、防御を行う任務をおっていたとも考えられる。これは横山遺跡（斐太遺跡群は判然としないが）では、環濠という外からの情報は遮った状況で、「住居跡平面プランの方形化」や「求心構造への変化」という北陸南西部以西の情報は伝達されているが、東北の情報（土器や石器などの遺物の他に、遺構のあり方など）が十分に入ってこないことからも推測が可能である。5期まで防御的集落が残存する大きな理由は、東北以北の勢力との緊張関係というのもひとつの要因であったことと考える。

(2)　5期以降

〈5～8期〉　防御的集落の機能が消失するのと前後して新たな集落が多く築かれる。北陸北東部系土器群の分布範囲以外の地域であった阿賀北地域や魚沼郡域が包括される。こうした現象は越後のみではなく、北信濃・会津や出羽を含め、地域圏が拡大している。最も北陸系の土器群が盛行する時期であり、越後もその枠内に取り入れられた現象と評価できる。こうした動きは生活用具である土器以外にも住居跡の構造が変化しており、生活様式そのものの変換を意味する。

越後以外に拡散する北陸系土器群について、会津地方のものは能登との関連が指摘されている〔坂井・川村1993〕。出羽は異なったルートを想定せざるえないが、信濃・会津については河川を主要ルートとして考えるのが自然であろう。会津へは阿賀野川が、信濃へは信濃川から越後を抜けるルートがある。阿賀野川は信濃川と河口付近で合流して日本海に流れ込んでいたが、仮に能登からの移住者が信濃川ルートを経て、信濃・会津に赴いたならば、信濃川河口付近の緒立遺跡・的場遺跡が重要な拠点となっていたと考えられる。両遺跡は5期から集落構成を開始して、およそ8期までは継続している。的場遺跡では、その後の時期の遺物も散見しえるが、主体となるのは8期までであろう。

北陸系土器群の拡散は5・6期が主体で、7期には減少し、8期にはほとんど認められない。こうした動きと緒立遺跡・的場遺跡の消長がほぼ連動するのは、能登からの移住者を送り出すのに何らかの貢献をし、その役目を終えると急速に規模が縮小するとの想定も可能であろう。

〈9・10期〉　北陸北東部系土器群の拡散が終了すると、越後内では地域色が明確になり北関東の影響が表れてくる。集落の消長においても、確実に画期が存在する。上記の緒立遺跡・的場遺跡の消失や、5・6期に成立した集落の多くは、当期まで継続しない。的場・緒立両遺跡が8期で衰退しているにも関わらず、同じ蒲原郡域の南赤坂遺跡では、依然として5期以降の伝統的な住居構造を兼ね備えている。これは弥彦・角田山麓に位置し、前方後円墳や前方後方墳が隣接することが大きく影響している。越後で確認された9期以降の竪穴住居跡は限定されるが、平面プランが方形を呈し、求心構造を採用した住居跡が確認されているのは南赤坂遺跡のみである。山三賀II遺跡では、炉が未検出であるが、規模が最も大きく、赤彩された小型精製土器が多量に確認されたSI502のみが平面プラン方形・求心構造の可能性があるにすぎない。この他の住居跡は、平面プランや住居構造の変革が甚だしい。小地域間で異なった住居跡構造や、土器の様相差が出てくるのが9期以降の特徴と考える。

金屋遺跡の土器様相からも９・10期以降は、５・６期的なものの多くが駆逐された段階と評価できる。地域は大きく分かれ、律令期における越後の範囲とは掛け離れたものとなっている。前期の有力古墳が集中する地域では、この時期を持って古墳の造営が行われていないことも重要でる。中期的な様相への変革が進められるのが当期の特徴と思われる。

(3) 古墳時代中期・後期への展開

越後の生産力を端的に表すものに、古墳の規模がある。越後の古墳は規模が小さいことのみならず、前期古墳で群をなすものが少ないようでもある。前期では蒲原郡域に有力古墳が多く見られるが、これはあくまでも大局的な分布の現れで、首長墓と想定される稲葉塚古墳、山谷古墳、菖蒲塚古墳は同一の首長墓系譜といえる程、密接した分布は示していないようにも思われる。また、県内随一の規模を誇る八幡山古墳も群を形成していない。前期古墳で群を構成するのは、古志郡域の三条市保内三王山古墳群のみであろう。こうした点も越後の生産力に持続性がなく、不安定な勢力編成であることの現れのように考える。

前期古墳が集中する蒲原郡域・古志郡域の古墳が衰退するのと入れ替わり、中期には魚沼郡域に有力古墳が集中する。地域の有力古墳が５世紀前半・５世紀後半・６世紀前半と計３度にわたり勢力が移動すると考えた都出比呂志氏は、こうした動きが畿内の有力古墳の動きと連動するとしている〔都出1988〕。都出氏の見解に従えば、畿内における地方の支配力は古墳時代の開始当初から強大であろう。

細かな年代を整理する必要があるが、越後では古墳時代前期には蒲原・古志郡域、中期には魚沼郡域、後期には頸城郡域に古墳の分布が集中する。これは都出氏の説くように、畿内と連動しているかのように見える。しかし中期に古墳の分布が魚沼郡域に移動する状況が、全て畿内主導の動きに対応した結果なのであろうか。上記の移動理由については、日本海ルート⇨内陸ルートへの変換に伴う動きという見解がある〔春日1994〕。有力古墳の移動・集落の動向などを考えると、この説に賛同せざるえないが、畿内の一方的なルート変更という動きに対応した結果という、地方の受動的な立場によるものであろうか。中期における上野の勢力は巨大で、太田市天神山古墳は全長210mと東日本では最大の規模を誇る〔群馬県教委1970〕。この古墳が成立する要因として、在地の自立発展も考慮する必要があろう。巨大古墳を造営する基盤があってのルート変更に伴い、越後の魚沼郡域に中期古墳が集中するという地方の能動的な動きと評価すれば、都出氏の見解にはにわかに賛同しがたい。

しかし古墳時代における越後自体の動向には、それほど主体性は感じられない。生産力を考えれば、最も安定していたのは頸城郡域である。律令期に国府・国分寺が設置された最も有力な推定地である。古代には13の郷を有するなど、越後では最も栄えた地域である。この地域に何故に前期～中期の有力古墳が築造されなかったのであろうか。

第11表　越後における古墳の変遷（甘粕1992より）

	魚野川流域	高田平野	柏崎平野	新潟平野	
				信濃川左岸	信濃川右岸
1期				稲場塚●26	
2期				山谷■37	三王山４号■16
3期			吉井行塚１号●32	菖蒲塚●54	古津八幡山○55　三王山11号○22
4期		丸山□20			三王山１号●38
5期					
6期					
7期	飯綱山10号○40				
8期					
9期					
10期		菅原31号●29			

●前方後円墳　■前方後方墳　○円墳　□方墳

頸城郡域に古墳が集中するのは古墳時代後期に入ってからである。全国的にも大規模な防御的集落である斐太遺跡群を支える生産力があったのにも関わらずに、現状ではこの勢力にあった古墳は築造されていない。こうした点から、前期の蒲原・古志郡域における古墳の発展は、阿賀野川・信濃川流域から内陸（信濃・会津）に人員を排出するルートが重視されたため、中期の魚沼郡域の発展は上野の勢力拡大に伴うルート変更、後期に入って初めて生産性にあった古墳の造営が認められる。

8　ま　と　め

越後における古墳出現前後の集落を考える上で、前提となる事項について検討を行ってきた。調査例が少ないことから抽出できなかった点も多いが、以下の特徴が看取できる。

①　越後における遺跡の動向は5期に大きな画期がある。その他の時期では2期と9期に画期は認められる。これらの画期は北陸内の画期とほぼ連動したものである。

②　2期における新集落の増大は越後独自の特徴ではないが、土器・墓制から人の移住に伴う増大である可能性が高い。しかし、人の移住が想定しえる集落は比較的短期間で消失している。

③　越後では約30か所の防御的集落があり、これは北陸内では最も数が多い。防御的集落の開始時期は、中期後半頃と推定されるものが多いが、なお明確にしえない。その機能が消失する時期は大きく2期と5期に別れる。消失時期の違いは、それぞれ戦乱の対象が異なった可能性が高い。2期は明確にしえない部分が多いが、5期での消失は東北南部との緊張状態が解消されたことが要因と考える。

越後は全国でも、最も遅くまで防御的集落が継続した地域の一つである。これは上記のとうり、北陸の最北部として、東北南部系の勢力との緊張状態があったことの表れと考える。

④　住居跡の平面プランは5期を境にして大きく変化する。この変革は全国的な動向と軌を一にする。しかし、炉の構造は1期以降大きな変革は認められない。炉はいずれも「地床炉」であるが、この有り方は加賀・能登・越中とは異なり、東日本的要素が強く残存している。

⑤　5期以降、新集落が爆発的に出現する。これまで北陸北東部系土器分布圏外であった阿賀野北地域、魚沼郡域はもとより、出羽西部、信濃北部、岩背西部（会津）を包括した地域に拡大する。しかし、7期以降は変化し、9・10期には魚沼郡域が脱落する。

⑥　9・10期には北関東的な要素が序々に浸透してくる。11期以降の状況は検討しえなかったが、有力古墳の衰退と、それに伴う新集落の出現・北関東的要素の増幅は「日本海ルート」の衰退と、「東山道的なルート」への変革と考える。この下地の上で、魚沼郡域を中心に中期の古墳が突如として増大する。

越後における弥生時代後期～古墳時代前半の集落を論じる前段階として、基礎的整理に心がけてきたが検討しえなかった問題も多い。今回提示した時期区分にしても、土器編年の整備に伴い、より限定した画期が抽出しえると思われる。特に、1期、3・4期の認識は資料不足もあり、今後の課題の一つである。

本稿を作成するにあたり春日真実、川村浩二、木島勉、坂井秀弥、佐藤雅一、品田高志、田村浩司、鶴巻康志、藤巻正信、本間桂吉、吉井雅勇、渡辺朋和、安秀樹の各氏からご教示、文献の配慮をいただいた。文末ではあるが、記して感謝いたします。

註

1）甘粕健氏によれば、稲場塚古墳は奈良県箸墓古墳の1/10の企画で築造されているという〔甘粕1993b〕。

2）集落といった場合には水田・畑地なども含まれるが、ここでは集落遺跡（住居跡を伴う生活空間）を中心とする。また、

墓についてのみ、若干触れることにしたい。

3）新潟シンポ編年は、1993年度日本考古学協会新潟大会で設定された時間軸である。今回の時期区分はこれを基本に1期を細分した（表1）。石川県では2期の細分も行われているが〔栃木1994〕。越後での細分は困難である。不確定要素を含むが遺跡の年代は○期と、一方、遺跡の存続年代は○期間と表記する（1～3期まで継続する遺跡は3期間）。

4）これまで北陸地方の弥生時代後期～古墳時代前半の土器編年は、漆町編年における画期の設定が引用されてきた。特に漆町4群（月影Ⅱ式）と漆町5群（白江式古）については、「外来系土器の有無」が重視されていた。しかし北加賀以北の地域では、外来系土器の定着が遅れるとされており、画期の設定に微妙なズレが生じている。今回検討する時期区分では、シンポ編年の4期と5期の線引きは「土器の小型化」を重視したい。

5）吉井遺跡群とは、柏崎平野の東部に位置する柏崎市大字吉井・曽地・矢田地内の遺跡群である。野付・萱場遺跡、行塚遺跡、戸口遺跡が今回の検討対象に入る遺跡である。

6）内越遺跡で検出された土坑のうち、SK24は隅丸方形プラン呈する竪穴住居跡の一端部の可能性が指摘されている。また品田氏は明言していないが、壁ぎわの周溝と考えられる施設がSK25でも検出されており、SK24と同じく住居跡の可能性が考えられる。

7）坂井秀弥氏が指摘するように、中世以前の越後は農業生産に不向きであった。頸城平野以外は山間部の高低差がなく、また砂丘の存在により水がうまく海に抜けない地域であった。このことは、農業生産に必要な滞水や排水をうまく行なえなかったことにつながる。実際の農業生産は丘陵の縁辺や、丘陵直下の比較的集落に近接した場所で水田が営まれていたと可能性が指摘されている〔坂井1993〕。西谷遺跡例はこうした坂井氏の指摘に適合した立地と考えている。

8）未報告資料であるが、佐藤雅一氏の御好意により、実見して御教示をいただく機会を得た。

9）太平城遺跡出土土器については、再実測・追加実測を試みた（第10図）。これにより新たな知見も確認できている。紙面の都合上、概略のみ記す。出土地点であるが、大きくB区、C区、D区に分かれている。このうちB・C区は丘陵の頂部、D区はB・C区の一段低いテラスに位置している。出土土器は地点別に掲載した。

B区の出土遺物の分布は第11図に記した。各遺構に伴う遺構の抽出は困難であるが、3は方形台状墓の覆土に伴う可能性が高い。10・14・15・21など、多くは環濠と推定される3号溝の内部からの出土である。小破片が多いものの近江系器台（8）、赤彩された甕（2）の形状から2期の範疇で考えたい。

一方、C区出土土器は2号方形台状墓の覆土から出土したもの（23・29など）、環濠内（32）、2号方形台状墓と環濠内側間の包含層から検出されたもの（22・29など）がある。このうち環濠出土の32は口縁部が長く、やや時期が新しくなる可能性が高い。しかし、その他の土器群はB区出土土器と同様に、2期の範疇で考えたい。

調査の性格上、全体の組成を明言することはできないが以下の点が指摘できよう。一つは、甕の比率が極めて低いことである。これに対して、壺・高杯・器台の比率が高い。また、文様・赤彩の比率が高い。文様は凹線文系のが目立つ。凹線文系としたものでも幾つかに分類が可能なことは以前、指摘したが〔滝沢1993c〕、大平城遺跡出土土器は擬凹線文A類が多い。時期的な問題を考慮する必要があるが、越後では特異な様相を呈している。

10）未報告資料であるが、三条市教育委員会田村浩司氏の御好意により、実見して御教示いただく機会を得た。

11）広井造氏によれば、八幡山遺跡の前方後方形周溝墓は赤塚次郎氏の分類〔赤塚1992〕のB2型し、前方部の一隅が途切れるタイプハ千葉県北ノ作1号墳と共通するという。このことから6期前後に位置付けられている〔広井1993b〕。

12）遺跡の類型化にあたり、長期継続型・短期継続型という大別を行ったが、遺構・遺物量の増減は、分類に加味していない。例えば1～5期まで継続したランクAの遺跡では、遺構（住居跡）数が増大する時期や、ランクA'の遺跡では、遺物量が増大する時期・激減する時期を分類の対象とはしていない。分類上には現れないものの、重要な要素と考えることから、こうした傾向が把握できる遺跡については、文中で触れることにしたい。

13）越後における1期～10期までの竪穴住居跡の規模を表示した品田氏によれば、内越遺跡1号住居跡は最も規模が大きい〔品田1993〕。2期の下馬場1号住居跡が、確認調査の結果で一辺が約9mであり、内越1号住居跡と同様に大型住居跡の可能性が高いが、現状では大型住居跡（床面積65m²以上）は2期より新しい時期では確認されていない。

14）戸口遺跡では、幅約2.5mの水路と推定される「溝」が検出されている。

15）住居跡平面プランの正方形・長方形の識別は、プランの短軸÷長軸が0.85以下になるものを長方形、それよりも数値が高いものを正方形とした。

16）正式報告は行われていないが奈良崎遺跡が位置する直下に、大武遺跡がある。この遺跡では弥生時代中期の土器が出土している。奈良崎遺跡周辺では弥生中期から集落が営まれた可能性が高い。

17）貯蔵機能を持つ「倉」は北陸南西部と北東部では異なるといわれている。北陸南西部は布掘建物（両側柱列の各掘方を溝状の掘り込みでつなぐ）、北東部は大型方形土坑〔三浦1988〕と言われている〔田嶋1993〕。越後では斐太遺跡群百両山10号土坑が貯蔵機能を持つ大型方形土坑と認識されているのみである。出土土器が明確でないことから限定しえないが、八幡山遺跡の報告書中でSK1号土坑も大型方形土坑の可能性もあろう。

18）3～4期の遺跡はごく僅かであることから、天王山式土器群が未確認ということも念頭におく必要がある。

引用・参考文献

甘粕　健　1986「古墳文化の形成」『新潟県史』通史編1　pp. 281～307　新潟県

甘粕　健　1992「越後」『前方後円墳集成』1東北・関東編　pp. 54～60　山川出版社

甘粕　健　1993a「古墳文化形成過程の新潟平野と会津盆地」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』　pp. 119～125　研究者グループ

甘粕　健　1993b「みちのくを目指して　日本海ルートにおける東日本の古墳出現期にいたる政治過程の予察」『東日本における古墳出現過程の再検討』　pp. 1～6　日本考古学協会新潟大会実行委員会

阿部朝衛　1989「新潟県阿賀野川以北の古墳時代前期」『北越考古学』第2号　pp. 25～36　北越考古学会

新井市教育委員会　1985「1　上百々遺跡」『昭和59年度新井市遺跡調査報告書』

石川県教育委員会・石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査事業団　1976『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』II

石川県立埋蔵文化財センター　1987『宿向山遺跡』

石川県立埋蔵文化財センター　1987『宿東山遺跡』

石川県立埋蔵文化財センター　1988「北吉田フルウ遺跡」『拓影』第28号

石川県立埋蔵文化財センター　1989「杉谷チャノバタケ遺跡」『石川県埋蔵文化財センター年報』第9号

石川県立埋蔵文化財センター　1992『津幡町刈安野々宮遺跡』

石川県七尾市教育委員会・国分高井山遺跡発掘調査委員会　1984『国分高井山遺跡』

石川県宇ノ木町教育委員会　1987『宇ノ木町鉢伏茶臼山遺跡』

石川県金沢市教育委員会　1992『金沢市西念・南新保遺跡III』

石野博信　1975「考古学から見た古代日本の住居」『日本古代文化の探求一家一』（大林太良編）　pp. 77～192　社会思想社

糸魚川市教育委員会　1972『田伏玉造遺跡』

糸魚川市教育委員会　1983『遺跡範囲確認調査報告書（小畑遺跡　苦竹原V移籍　笛吹田遺跡）』

糸魚川市教育委員会　1984『笛吹田遺跡範囲確認調査報告書』

糸魚川市教育委員会　1986『後生山遺跡』（糸魚川市埋蔵文化財報告第13）

糸魚川市教育委員会　1987『昭和61年度遺跡範囲確認調査報告書（苦竹原C遺跡　山崎三十三塚　正面遺跡　後生山遺跡）』（糸魚川市埋蔵文化財報告書第14）

稲葉塚古墳測量調査団　1993「新潟県弥彦村稲葉塚古墳測量調査報告」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』pp. 79～108　研究者グループ

伊与部倫夫　1989「新潟県八幡山遺跡（日本海側における最北の高地性集落）」『探訪弥生の以北一畿内・東日本編一』pp. 304～311　有斐閣

青海町教育委員会　1979『大角地遺跡一飾玉とヒスイの工房跡一』

大潟町教育委員会　1988『丸山遺跡発掘調査報告書』

大沢遺跡調査団編　1981『大沢遺跡一B'・B地区の調査概報一』　巻町・潟東村教育委員会

小野　昭編　1982『大沢遺跡II一第3次調査概報一』　新潟大学考古学研究室

柏崎市教育委員会　1985a『吉井遺跡群』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第4）

柏崎市教育委員会　1985b『刈羽大平・小丸山』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第5）

柏崎市教育委員会　1987『西岩野』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第7）

柏崎市教育委員会　1989『吉井行塚古墳群』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第10）

柏崎市教育委員会　1990『吉井遺跡群II』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第13）

樫田　誠　1993「河田山遺跡」『東日本における古墳出現過程の再検討』　pp. 121　日本考古学協会新潟大会実行委員会

春日真実　1994「古墳時代前期の土器」『北陸自動車道　上越市春日・木田地区発掘調査報告書IV（一之口遺跡東地区）』　pp. 203～219　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

金子拓男ほか　1977「伊乎乃都の古墳」『南魚沼』新潟県文化財調査年報第15　pp. 413～454　新潟県教育委員会

金子拓男　1991「古墳時代の遺構について」『山崎A遺跡発掘調査報告書』見附市埋蔵文化財調査報告書第8　pp. 96～99　見附市教育委員会

金子玲子　1982「西金屋京平遺跡」『富山市考古資料館報』No. 7　富山市考古資料館

上市町教育委員会　1981『北陸自動車道遺跡調査報告一上市町遺構編一』

刈羽村教育委員会　1992『西谷遺跡』（刈羽村埋蔵文化財調査報告書第1集）

川村浩二　1989「緒立八幡神社古墳の編年的位置」『新潟県考古学談話会』第4号　pp. 30～39　新潟県考古学談話会
川村浩二　1990a「越後の弥生時代中・後期の竪穴式住居に関する覚書」『かみくひむし』第80号　pp. 12～13　かみくひむしの会
川村浩二　1990b「倭国大乱と越後」『新潟史学会例会会報』第12号　pp. 1～2　新潟史学例会運営委員会
川村浩二　1993a「古墳出現前後における北陸北東部の土器組成」『環日本海地域比較史研究』2　pp. 15～36　環日本海地域史比較研究会
川村浩二　1993b「北陸北東部の古墳出現前後の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』　pp. 7～16　日本考古学協会新潟大会実行委員会
川村浩二　1993c「山谷遺跡出土弥生土器の占める位置」『越後山谷古墳』　pp. 116～121　新潟県巻町教育委員会・新潟大学考古学研究室
川村浩二　1994「関東南部における北陸系土器の様相について」『庄内式土器研究Ⅵ』　pp. 113～142　庄内式土器研究会
木島　勉　1987「新潟県後生山遺跡」『日本考古学年報（1985年度版）』38　pp. 430～434　日本考古学協会
木島　勉　1989「三ッ又遺跡」『新潟県埋蔵文化財だより』No. 5　pp. 5　新潟県教育庁文化行政課
黒崎町教育委員会　1983『緒立遺跡発掘調査報告書』
黒崎町教育委員会　1993『緒立C遺跡発掘調査概報』
群馬県教育委員会　1970『史跡天神山古墳外掘部発掘調査報告書』
駒井和愛・吉田章一郎　1962『斐太―新潟県新井市の弥生聚落址―』　慶友社
近藤義郎　1983「前方後円墳の成立」『前方後円墳の時代』　pp. 175～210　青木書店
坂井秀弥・横山勝栄・山本　肇　1983「考察―内越遺跡出土土器の越後における編年的位置」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第33　国道116号線埋蔵文化財発掘調査報告書（内越遺跡）』
坂井秀弥　1985「越後の弥生後期についての覚書」『新潟県史研究』17　pp. 9～27　新潟県史編募委員会
坂井秀弥　1989a「古墳時代の土器と遺跡」『山三賀遺跡Ⅱ』　pp. 184～191　新潟県教育委員会
坂井秀弥　1989b「新潟県新津市八幡山古墳出土の古式土師器」『新潟県考古学談話会』第4号　pp. 66～68　新潟県考古学談話会
坂井秀弥・川村浩司　1993「古墳出現前後における越後の土器様相―越後・会津・能登」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』　pp. 1～14　研究者グループ
坂井秀弥　1993「古代越後の環境・生産力・特性」『新潟県考古学談話会』第12号　pp. 14～19　新潟県考古学談話会
上越市教育委員会　1979「Ⅱ　山畑遺跡」『岩木地区遺跡群発掘調査報告書』
上越市教育委員会　1991『中島廻り遺跡発掘調査報告書』
上越市教育委員会　1993「Ⅳ　子安遺跡」『市内遺跡確認範囲調査概要報告書』
品田高志　1990a「吉井遺跡群における遺跡の動態」『吉井遺跡群Ⅱ』　pp. 172～177　柏崎市教育委員会
品田高志　1990b「越後の後期弥生土器とその様相―柏崎平野における北陸系土器群と人の移動―」『新潟県考古学談話会』第6号　pp. 22～29
品田高志　1993a「越後の弥生集落―集落調査の現状と住居形態を中心に―」『柏崎市立博物館館報』No. 7　pp. 93～135　柏崎市立博物館
品田高志　1993b「越後・佐渡における住居の変遷」『東日本における古墳出現過程の再検討』　pp. 19～20　日本考古学協会新潟大会実行委員会
鈴木俊成　1994「古墳時代前期の遺構」『北陸自動車道　上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅳ（一之口遺跡東地区）』　pp. 243～246　新潟県教育委員会・財団新潟県埋蔵文化財調査事業団
菅沼　亘　1993「高地性集落としての山谷弥生時代遺跡」『越後山谷古墳』　pp. 122～126　新潟県巻町教育委員会・新潟大学考古学研究室
聖籠町教育委員会　1993『二本松東山遺跡』
高橋浩二　1993「越中の集落の概要」『東日本における古墳出現過程の再検討』　pp. 30～32　日本考古学協会新潟大会実行委員会
高本　実・吉田　淳・宮本哲郎・楠　正勝　1983「北陸の弥生・古墳時代の竪穴住居址―弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居址を中心として―」『北陸の考古学』　pp. 333～363　石川県考古学研究会
田嶋明人　1986「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡』Ⅰ　pp. 101～186　石川県埋蔵文化財センター
田嶋明人　1991「北陸の掘立柱建物」『弥生時代の掘立柱建物』Ⅰ　pp. 190～199　埋蔵文化財研究会
田嶋明人　1993「北陸南西部の古墳確立期前後の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』　pp. 81～90　日本考古学協会新潟大会実行委員会

滝沢規朗　1992「西谷遺跡の水田跡について」『西谷遺跡発掘調査報告書』(刈羽村埋蔵文化財調査報告書第１集)　pp. 86～89　刈羽村教育委員会
滝沢規朗　1993a「越後出土の祭祀遺物Ⅱ」中部・北陸編　pp. 469～488　第１回東日本埋蔵文化財研究会資料　東日本埋蔵文化財研究会
滝沢規朗　1993b「越後における古墳出現前後の土器様相―甕の類別構成比と内面調整を中心に―」『新潟県考古学談話会』第11号　pp. 1～17　新潟県考古学談話会
滝沢規朗　1993c「越後における弥生後期以降の土器文様―凹線文系と刺突文を中心に―」『北越考古学』第６号　pp. 1～15　北越考古学研究会
滝沢規朗　1994「新井市斐太遺跡群の出土土器について」『新潟考古』第５号　pp. 75～104　新潟県考古学会
田中　靖　1988「北陸における天王山式系土器について」『新潟考古学談話会会報』第２号　pp. 5～8　新潟考古学談話会
田中　靖　1989a「北陸地方の天王山式土器」『「天王山式期」をめぐって』の検討会資料』記録集　弥生時代研究会
田中　靖　1989b「島崎川流域における弥生時代の遺跡」『新潟県考古学談話会会報』第４号　pp. 11～15　新潟考古学談話会
田中　靖　1993「越後・佐渡の集落の概要」『東日本における古墳出現過程の再検討』　pp. 17～18　日本考古学Ｓ協会新潟大会実行委員会
都出比呂志　1983「環濠集落の成立と解体」『考古学研究』第29巻４号　pp. 14～31
都出比呂志　1988「古代首長墓系諸の継続と断絶」『待兼山論叢』　22　pp. 1～16
都出比呂志　1989a「２　竪穴式住居の平面形」『日本農耕社会の成立過程』　pp. 114～141　岩波書店
都出比呂志　1989b「地域圏と交易圏」『日本農耕社会の成立過程』　pp. 265～399　岩波書店
寺村光晴　1956「越後六地山遺跡」『上代文化』第30輯　國學院大学考古学会
寺村光晴・本間信昭・久我　勇・駒見和夫　1988「諏訪田遺跡の調査」『寺泊町史研究』第４号　pp. 15～30　寺泊町史編さん委員会
栃木英道　1993「能登の集落の概要」『東日本における古墳出現過程の再検討』pp. 33～42　日本考古学協会新潟大会実行委員会
富山県教育委員会　1971『小杉町中山南調査報告書』
富山県埋蔵文化財センター・上市町教育委員会　1984『北陸自動車道遺跡調査報告―上市町土器・石器編』
富山市教育委員会　1981『白鳥城跡試掘調査概要』　昭和55年度富山市埋蔵文化財調査報告２
富山県小矢部市教育委員会　1978『富山県小矢部市竹倉島遺跡発掘調査概要』
富山県小矢部市教育委員会　1979『富山県小矢部市平桜川東遺跡発掘調査概要』
富山県小矢部市教育委員会　1987『富山県小矢部市桜町遺跡』　小矢部市埋蔵文化財調査報告書台20冊
富山県高岡市教育委員会　1992『市内遺跡調査概報』Ⅰ　高岡市埋蔵文化財調査概報第18冊
富山県大門町教育委員会　1981『串田新遺跡』Ⅱ　大門町埋蔵文化財調査報告書第２冊
富山県滑川市史編さん委員会・滑川市　1979「本江遺跡」『滑川市史　考古資料編』
富山県滑川市史編さん委員会・滑川市　1979「本得扇平遺跡」『滑川市史　考古資料編』
富山県氷見市教育委員会　1985『富山県氷見市小久米Ａ遺跡発掘調査報告書』
豊浦町教育委員会　1981『曽根遺跡Ⅰ』豊浦町文化財報告３
豊浦町教育委員会　1982『曽根遺跡Ⅱ』豊浦町文化財報告４
中郷村教育委員会　1987『籠峰遺跡発掘調査概報』
長岡市　1992『長岡市史資料編―原始・古代―』
新潟県教育委員会　1974『北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書（内町遺跡・大平城遺跡）』(埋蔵文化財緊急調査報告書第３)
新潟県教育委員会　1976『北陸北線埋蔵文化財発掘調査報告書（焼屋敷・杉穴森遺跡）』(埋蔵文化財緊急調査報告書第８・９)
新潟県教育委員会　1979『北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書（下谷地遺跡）』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第19)
新潟県教育委員会　1983『国道116号線埋蔵文化財発掘調査報告書（内越遺跡）』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第33)
新潟県西山町教育委員会　1983『高塩Ｂ遺跡発掘調査報告書』
新潟県教育委員会　1984『新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集　今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』
新潟県教育委員会　1985『新潟県埋蔵文化財調査報告書第37集　金屋遺跡』
新潟県教育委員会　1986『新潟県埋蔵文化財調査報告書第40集　一之口遺跡西地区』
新潟県教育委員会　1989『新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集　山三賀Ⅱ遺跡』
新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　1994『北陸自動車道　上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅳ（一之口遺跡東地区）』

新潟市教育委員会　1986『六地山遺跡―1982年発掘調査を中心に―』（新潟市文化財調査報告書）
新潟市史編さん原始古代中世部会　1994「六地山遺跡」『新潟市史』資料編１　原始古代中世　pp. 54～83
新潟県巻町教育委員会・新潟大学考古学研究室　1993『越後山谷古墳』
橋本　正　1976「竪穴住居の分類と系譜」『考古学研究』第23巻第３号　pp. 37～72　考古学研究会
橋本博文　1993「関東北部における古墳出現期の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』　pp. 329～340　日本古学協会新潟大会実行委員会
長谷川二三夫・本間桂吉　1989「三条市二ツ山遺跡と表採遺物について」『新潟考古学談話会』第３号　pp. 43～44　新潟考古学談話会
浜崎悟司　1993a「加賀における集落構成要素」『東日本における古墳出現過程の再検討』　pp. 105～110　日本考古学協会新潟大会実行委員会
浜崎悟司　1993b「加賀の集落構造の遷移」『東日本における古墳出現過程の再検討』　pp. 111～112　日本考古学協会新潟大会実行委員会
見附市教育委員会　1991『山崎Ａ遺跡発掘調査報告書』　見附市埋蔵文化財調査報告第８
広井　造　1993ａ「横山遺跡」『東日本における古墳出現過程の再検討』　pp. 26　日本考古学協会新潟大会実行委員会
広井　造　1993ｂ「越後における弥生時代後期の墳墓」『東日本における古墳出現過程の再検討』　pp. 47～50　日本考古学協会新潟大会実行委員会
藤巻正信　1993「和島村奈良崎遺跡の第二期調査―方形溝墓を中心として」『新潟県考古学会第５回大会研究発表要旨』　pp. 13～17　新潟県考古学会
前山精明　1994「巻町南赤坂遺跡」『新潟県考古学会第６回大会　研究発表会発表要旨』　pp. 19～23　新潟県考古学会
麻柄一志　1983「北陸の高地性集落とその評価」『富山市考古資料館紀要』第２号　pp. 24～40　富山市考古資料館
三浦純夫　1988「大型土坑の機能について」『竹生野遺跡』　pp. 193～216　石川県埋蔵文化財センター
村上市教育委員会　1972『滝ノ前遺跡―新潟県村上市滝ノ前遺跡緊急概要―』
見附市教育委員会　1988『耳取遺跡等範囲確認調査報告書』（見附市埋蔵文化財調査報告書第７）
安　英樹　1993「加賀における集落の消長」『東日本における古墳出現過程の再検討』　pp. 91～104　日本考古学協会新潟大会実行委員会
吉岡康暢　1967「弥生―古墳転換期の土器祭司」『日本海域の土器・陶磁』〔古代編〕　pp. 392～463　六興出版
吉川町教育委員会　1984『長峰遺跡Ⅱ（新潟県中頸城郡吉川町長峰遺跡第３次発掘調査報告）』

古代集落の展開
――越後[1]を事例として――

春日真実

はじめに

小稿は集落遺跡の分析を通じ、古代社会の一端を明らかにすることを目的とするものである。筆者は前稿で9世紀後半から10世紀の集落について若干の検討を行ったが〔春日1993〕、前後の時期との差異についてはほとんど述べることができなかった。以下では、新潟県内において発掘調査が行われた6～13世紀の集落遺跡のうちいくつかの事例を取り上げ、検討をおこない、古代集落の変遷過程を明らかにしたい。

1 研究史

越後における古代集落遺跡を検討するに当たって、同一テーマを扱った論考について簡単にふれる。越後を事例とした古代集落遺跡の研究としては遠藤孝司氏・川村浩司氏・坂井秀弥氏の研究をあげうる[2]。

遠藤氏は奈良・平安時代の掘立柱建物を主体とする集落遺跡をとりあげ、掘立柱建物の主軸方位・規模について検討を行った。そして、今池遺跡・栗原遺跡などの大型の掘立柱建物が一定量存在し、主軸方位にまとまりの見られる官衙関連遺跡のほかにも、金屋遺跡・岩野下遺跡にみるような建物の規模が小型で主軸方位にもばらつきがみられる遺跡の存在することを指摘している〔遠藤1987〕。

川村浩司氏は新潟県における古代集落遺跡を集成し、掘立柱建物と竪穴住居の量比・建物の規模・出土遺物などの検討から集落遺跡を6類型に分類し、それぞれの類型の存続期間の検討と性格づけを行っている。そして①7世紀末前後、②9世紀中葉ごろ、③11世紀中葉頃にそれぞれ大きな画期があるとし、「①が官・民ともに遺跡が大規模に開始される段階、②が低地・丘陵への開発の段階」、「③が新たな集落立地の変化、あるいは遺跡の統廃合を考えた」〔川村浩司1989〕。川村氏の論考は、越後の古代集落遺跡全般をあつかった最初のものであり、集成作業として大きな意味を持つ。本稿が成るにあたったても氏の集成作業によるところが多かった。また古代集落遺跡分析の留意点・着眼点などについても学ぶべき点が多い。ただし、氏の集落遺跡の分類はやや恣意的な印象をうけ、その結果指摘した3つの画期が不鮮明なものとなった。〔川村1989〕

一方、坂井秀弥氏は、律令（体制）と王朝国家（体制）をキーワードに集落論を展開した。坂井氏によれば、越後においては7世紀末から8世紀初頭にかけて北蒲原郡聖籠町山三賀II遺跡・西頸城郡青海町須沢角地にみるような竪穴住居を主体とする大規模な集落が成立するが、これらの集落の大半は10世紀までには廃絶し、9世紀中葉以降には上越市一之口遺跡・小丸山遺跡のような数棟の掘立柱建物・井戸・土坑・畑地がセットとなった建物小群がいくつか併存する集落に変化することを明らかにした。そして前者を律令（型）村落、後者を王朝国家（型）村落と名づけている〔坂井1989〕。

また前述したように、筆者も以前上越市一之口遺跡・新潟市小丸山遺跡を事例とし、9世紀後半から10世紀の頸城地方と蒲原地方の集落構造・土器様相・水田開発について比較・検討を行った〔春日1993〕。

以上のように、新潟県では古代集落に関する研究事例は必ずしも多くないが、優れたものが多い。特に

坂井氏の律令（体制）と王朝国家（体制）をキーワードとした方向は以後の北陸地方における奈良・平安時代研究に多くの影響を与えており、今後も基本的には継承されるべきものと考える。

ただし、越後において7世紀に遡り古代集落から中世集落にいたるプロセスについて検討したものや、古代集落と中世集落との差異について述べたものはあまりない。以下ではこのような研究の状況をふまえ、集落遺跡の検討を行ないたい。

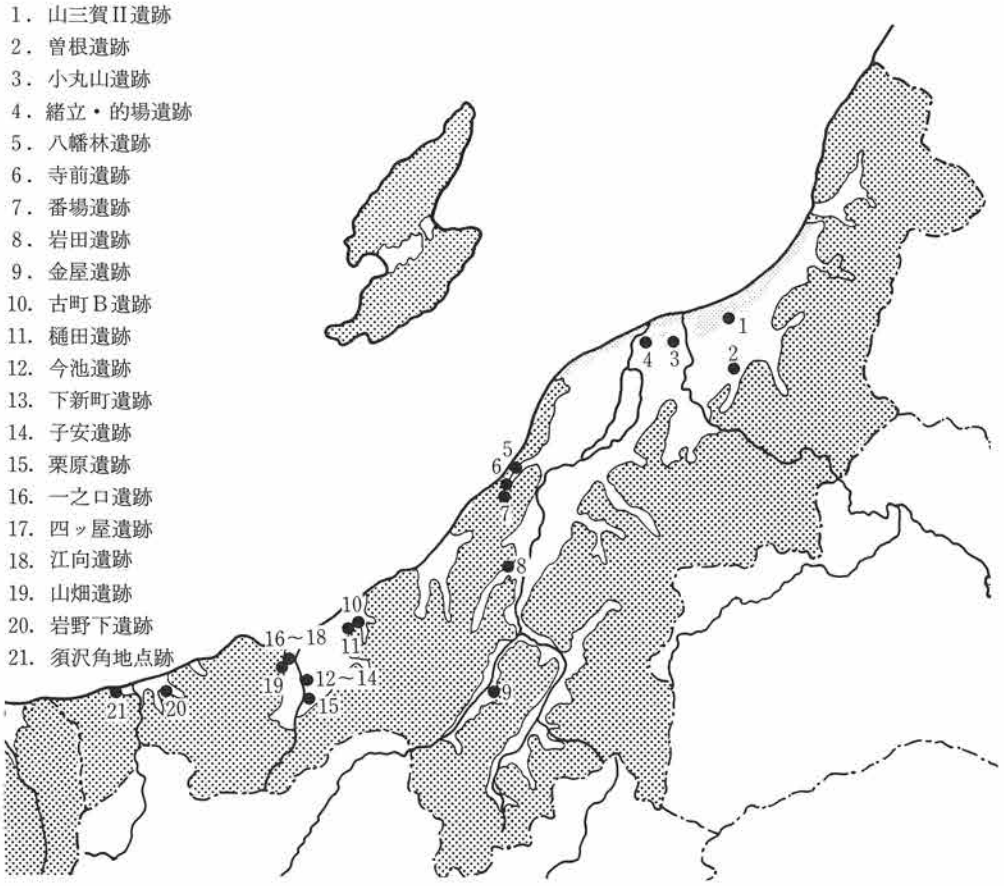
2　検討の方法

集落遺跡の実際の検討にはいるまえに、分析方法・本稿で使用する用語について若干説明を行う。

集落遺跡の分析の際に問題となることの一つは、発掘調査によって検出された掘立柱建物・井戸などの遺構群は全てが同時存在したわけではなく一定期間の累積の結果であり、同時存在した遺構を抽出する作業が必要となることである。以下の分析では竪穴住居および土坑・井戸については出土土器をもとに時期を決定した。また掘立柱建物については、建物の主軸方位に注目し、方位が一致もしくは直交し、かつ重複しないものについては同一時期と考え、年代については、柱掘方・建物の雨落ち溝・掘立柱建物に隣接する土坑からの出土土器により決定した。

用語については、1～数棟の建物の集まりについては「建物小群」、「建物小群」が複数集まって構成されたものも含め、10棟前後の建物の集まりについては「建物群」と呼ぶ。

年代の表記は西暦を用い、1世紀を四分割し、第1四半期・第2四半期・第3四半期・第4四半期とほぼ同じ意味で初頭・前半・後半・末、各世紀の50年を前後する時期については中葉と表現し、7世紀初頭のように表わす。なお、土器の年代については「今池遺跡」〔坂井1984〕、「山三賀II遺跡」〔坂井1989〕、「越



第1図　主要遺跡位置図

後平安期土器編年素描」〔坂井1989〕、「佐渡の須恵器」〔坂井・鶴間・春日1991〕、「一之口遺跡（東地区）」〔春日1993、鈴木1993〕の各編年案をもとに決定した[3]。

3　事例の検討

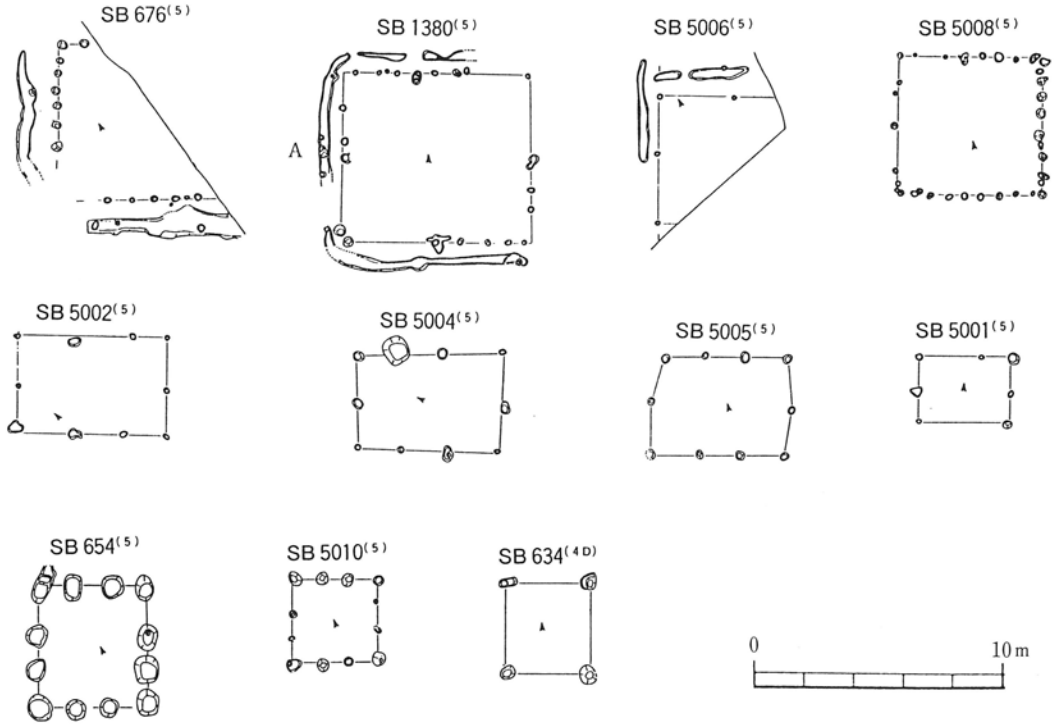
越後において集落構造がある程度明らかとなった6～13世紀の遺跡としては第1図に示した23遺跡をあげうる。以下ではそれぞれの遺跡について、同時存在した遺構の抽出を行ない、遺構の構成・建物の規模・存続期間などについて検討する。

一之口遺跡〔新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団1994〕

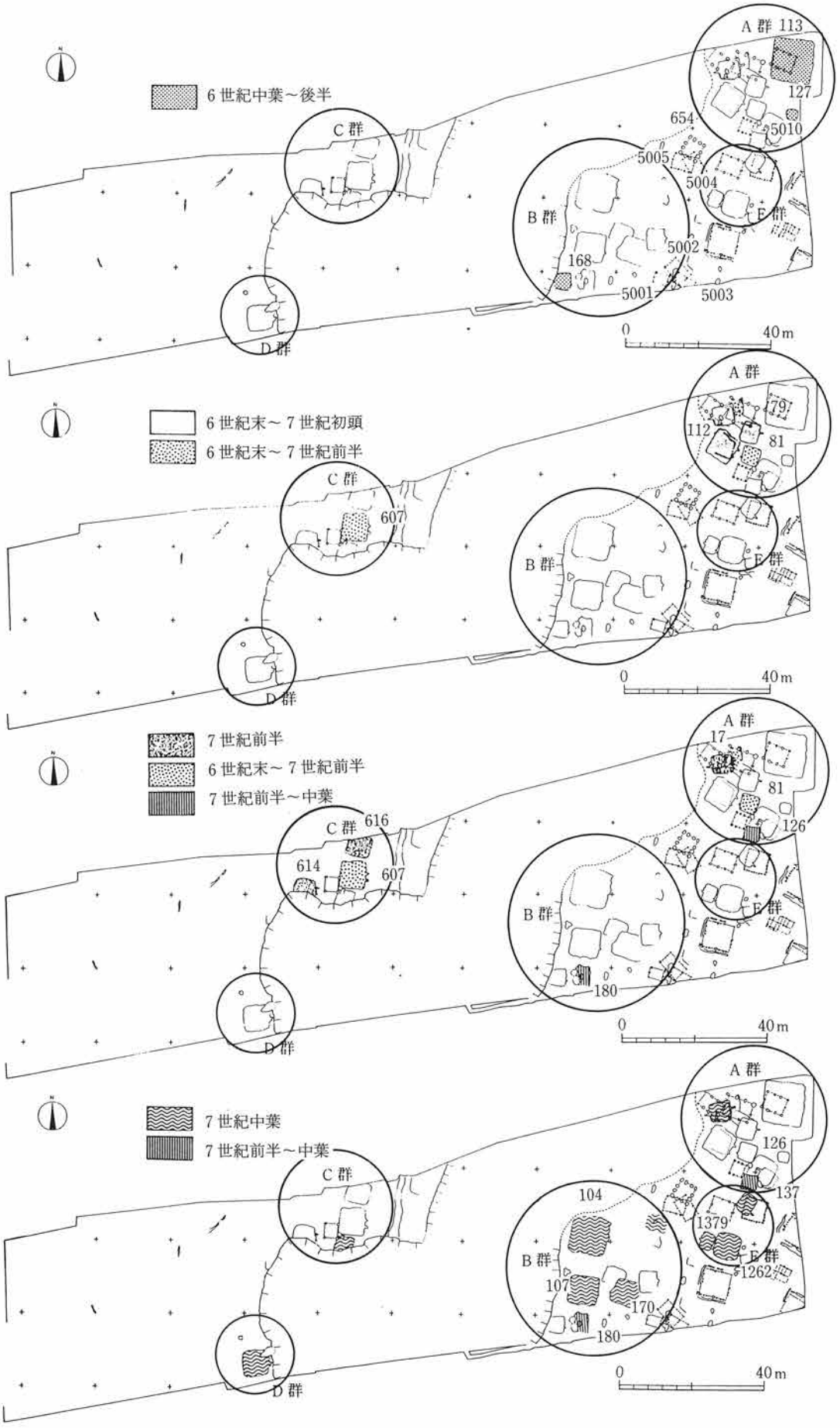
新潟県の南西部に広がる頸城平野の西側、関川右岸の自然堤防防上、上越市大字中屋敷・寺分・木田に所在する。古墳時代前期から奈良・平安時代にかけて断続的に営まれた複合遺跡であり、古墳時代前期・6～7世紀・8～11世紀の3枚の遺物包含層・遺構検出面が存在する。ここでは6～7世紀を取り上げる。遺跡は古墳時代前期の集落が廃絶した後、約100～150年の空白期間をおいて6世紀中葉に成立し7世紀中葉まで存続する。竪穴住居を主体とする集落であるが、掘立柱建物も検出された[4]。井戸は確認できない。

掘立柱建物は調査区西側を中心に分布する。平面積は30m²前後のものが多く、一般的な竪穴住居の平面積とあまり変わらない。掘立柱建物の方向には2種あり、複数の時期にまたがって存在した可能性が高いが、掘立柱建物の柱穴からは良好な出土遺物が無く年代を決めがたい。一方、竪穴住居については、鈴木俊成氏が、報告の中でその変遷を明らかにしている〔鈴木1993〕。以下では鈴木氏の示した変遷をもとに、竪穴住居の動向を中心にみていきたい。

6世紀中葉から6世紀後半、6世紀末から7世紀初頭にかけては2～3の建物小群が確認できる。調査区の中央部は河川の旧流路により破壊されており、また集落が調査区外にのびる可能性もあるが、建物小



第2図　一之口遺跡（6～7世紀）の掘立柱建物（県教委1994を一部改変）



第3図　一之口遺跡（6～7世紀）における集落の変遷（県教委1994を一部改変）

群は広い間隔をおきながら散在していたものと思われる。このような集落の様相に変化が生じるのは7世紀前半である。当期には4つの建物小群が確認でき、4～7棟（以上）の竪穴住居存在した。7世紀中葉には5つの建物小群が確認でき、竪穴住居の数も10～12棟（以上）に増加する。

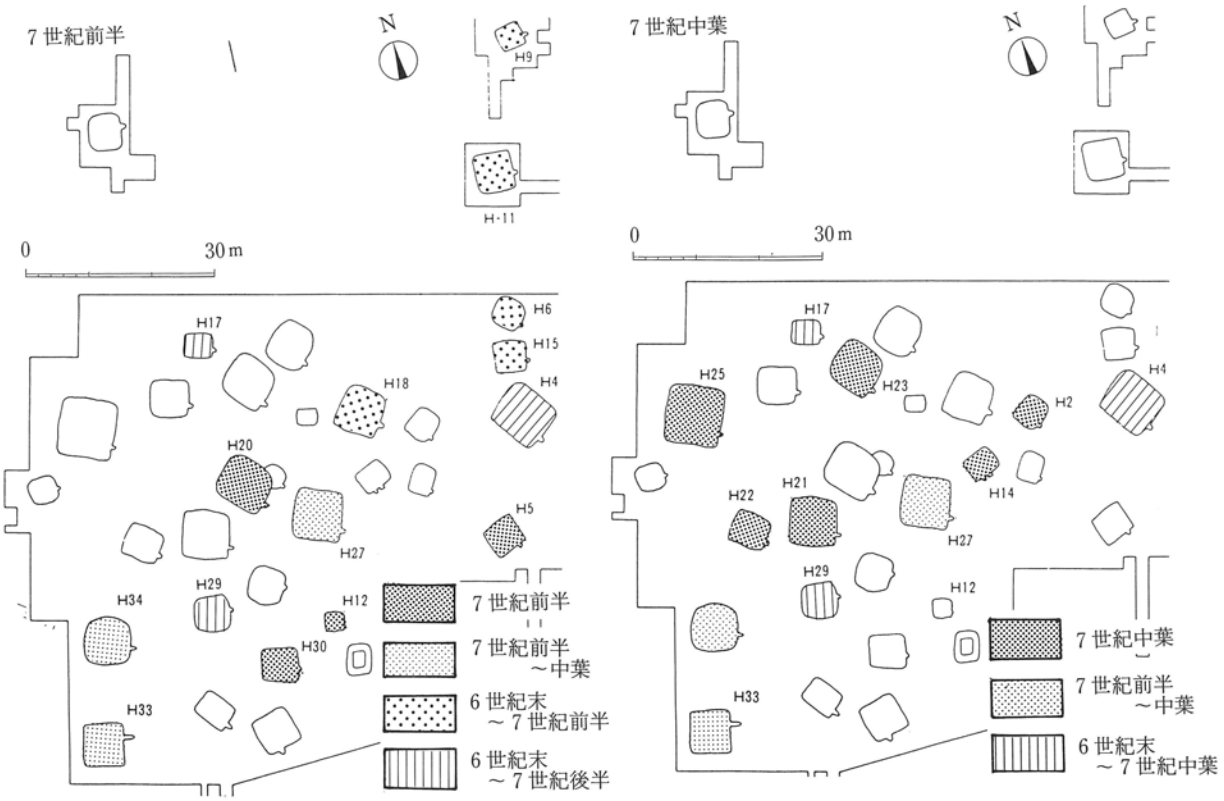
大型の竪穴住居は、6世紀前半～7世紀初頭にかけてはA群、7世紀前半にはC群、7世紀後半にはB群に存在し、一ケ所に累世的に構築されるわけではない。また、大型の竪穴住居の存在する建物小群には、多くの竪穴住居から構成される場合がある。7世紀後半のC群は5棟の竪穴住居によって構成され、このなかに平面積50m²以上の竪穴住居が3棟含まれ、同時期の他の建物小群とは隔絶した様相が見られる。

山畑遺跡〔上越市教育委員会1978・1979〕

春日山東麓の丘陵上、上越市大字山畑に所在する。一之口遺跡とは隣接し、直線距離にして約600mである。6世紀末ないしは7世紀初頭に成立し、7世紀中葉まで存続した。竪穴住居を主体とする集落遺跡であり、掘立柱建物・井戸は確認できない（第4図）。平面積50m²を越える大型の竪穴住居が一定量存在し、最大の竪穴住居は平面積約90m²を計る。建物小群の抽出は難しいが、6世紀末から7世紀前半にかけては竪穴住居が4～14棟、7世紀中葉には6～11棟が確認できる。竪穴住居同士の間隔は狭く集村的な集落景観が想定できる。

須沢角地遺跡〔新潟県青海町教育委員会1988〕

西頸城郡青海町大字須沢角地に所在する。集落は7世紀末に成立し、9世紀末には一端廃絶するが、10



第4図　山畑遺跡における集落の変遷（上越市教育委員会1979を一部改変）

世紀後半には小規模な集落が短期間成立した。竪穴住居を主体とする集落であり、掘立柱建物[5]・井戸は確認できない（第５図）。

７世紀末から８世紀初頭には５つの建物小群が確認でき、特にＡ群には５～８棟と多くの竪穴住居が存在し、規模も大型のものが多い。

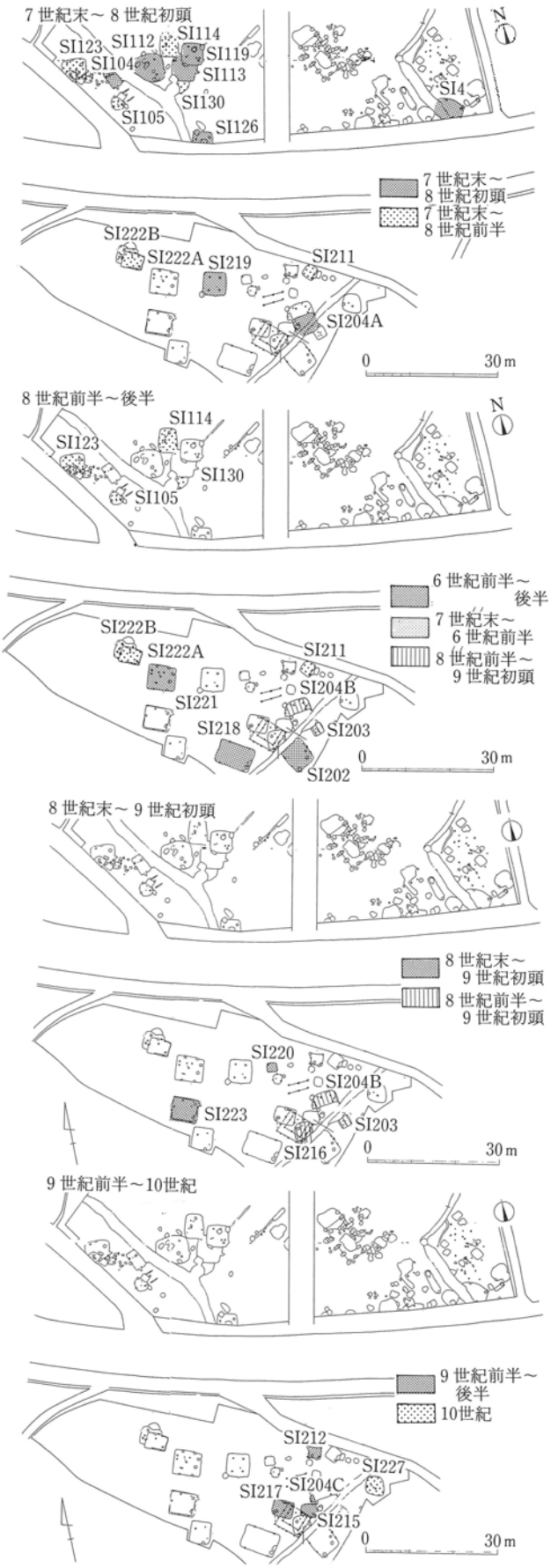
８世紀前半～８世紀後半には３つの建物小群が確認でき、４～11棟の竪穴住居が存在する。Ａ群の竪穴住居の数は減少し、大型の竪穴住居はＢ群・Ｃ群に存在し、Ｃ群には多くの竪穴住居が存在するようになる。

８世紀末以降は竪穴住居の数が減少し、８世紀末から９世紀初頭には建物小群は３、竪穴住居は２～５棟となる。９世紀前半には平面積20m²前後の小型の竪穴住居３棟のみで構成される。10世紀後半には竪穴住居が１棟確認できるのみである。

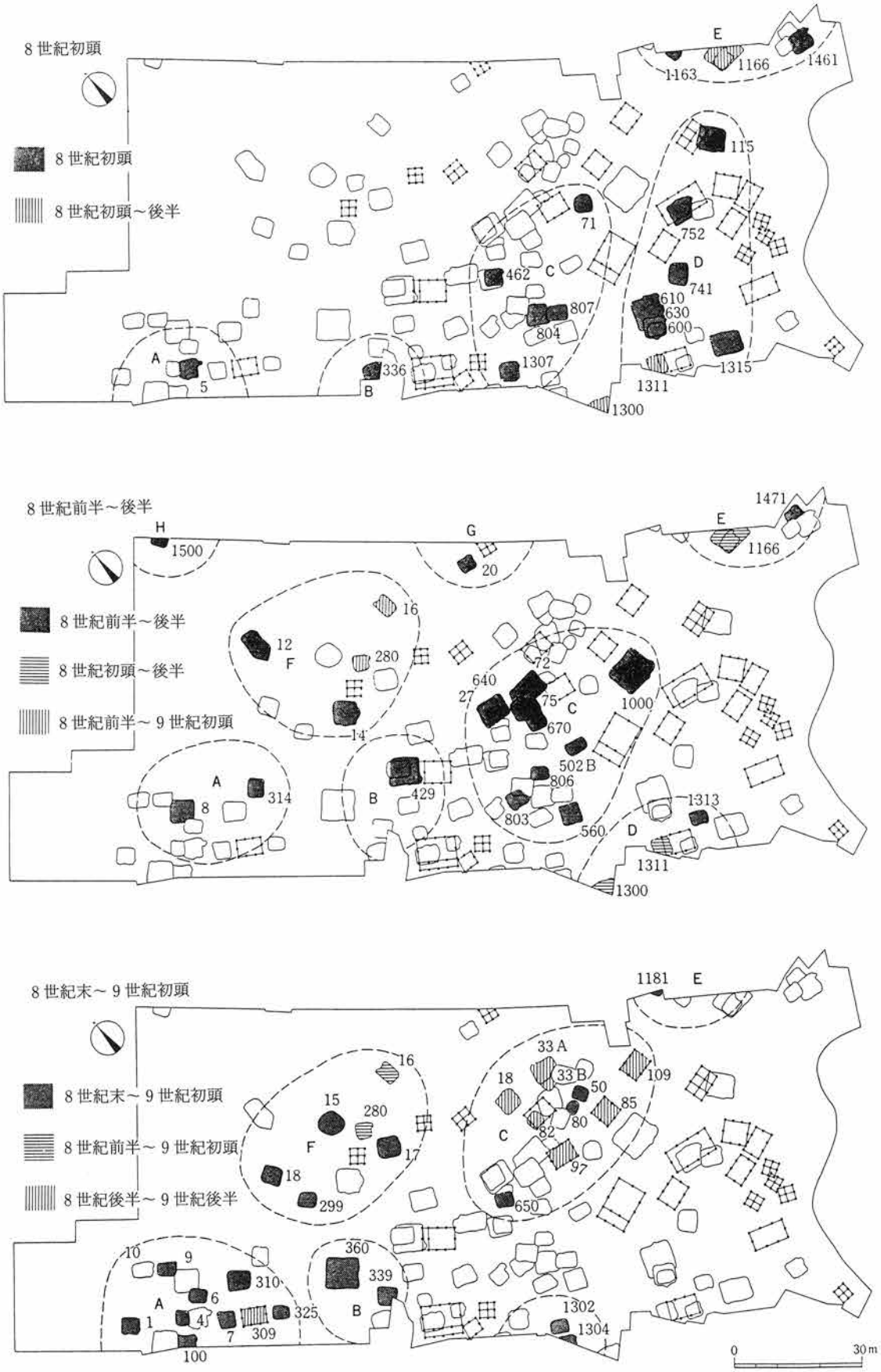
山三賀Ⅱ遺跡〔新潟県教育委員会1989〕

蒲原平野北側の砂丘上、北蒲原郡聖籠町大字三賀字白通に所在する。竪穴住居と掘立柱建物から構成されるが、掘立柱建物の数は少なく、竪穴住居が主体を占める。８世紀初頭に成立し、９世紀後半まで存続する。集落の変遷については坂井秀弥氏が明らかにされた〔坂井1989a〕。各時期とも４～６つの建物小群、20棟前後の竪穴住居・掘立柱建物が確認できる。倉庫は10棟が検出され、年代の特定できるものはほとんど存在しないが、８世紀初頭から９世紀初頭では特定の建物小群にともなうような状況は確認できない。また、井戸は検出されなかった。以下では坂井氏の変遷をもとに、建物小群と大型建物の動向を述べる（第６・７図）。

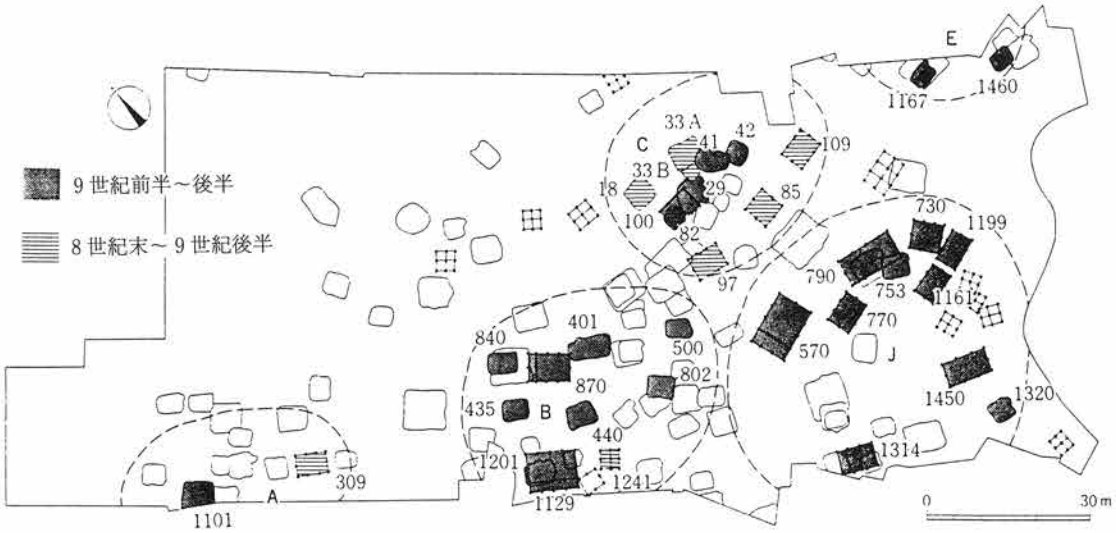
８世紀初頭には５つの建物小群が確認できる。平面積が50m²前後の大型の竪穴住居はSI115・610・1166・1315の４棟がありＤ群にはこのうち３棟が集中し、建物小群を構成する竪穴住居の数も多い。



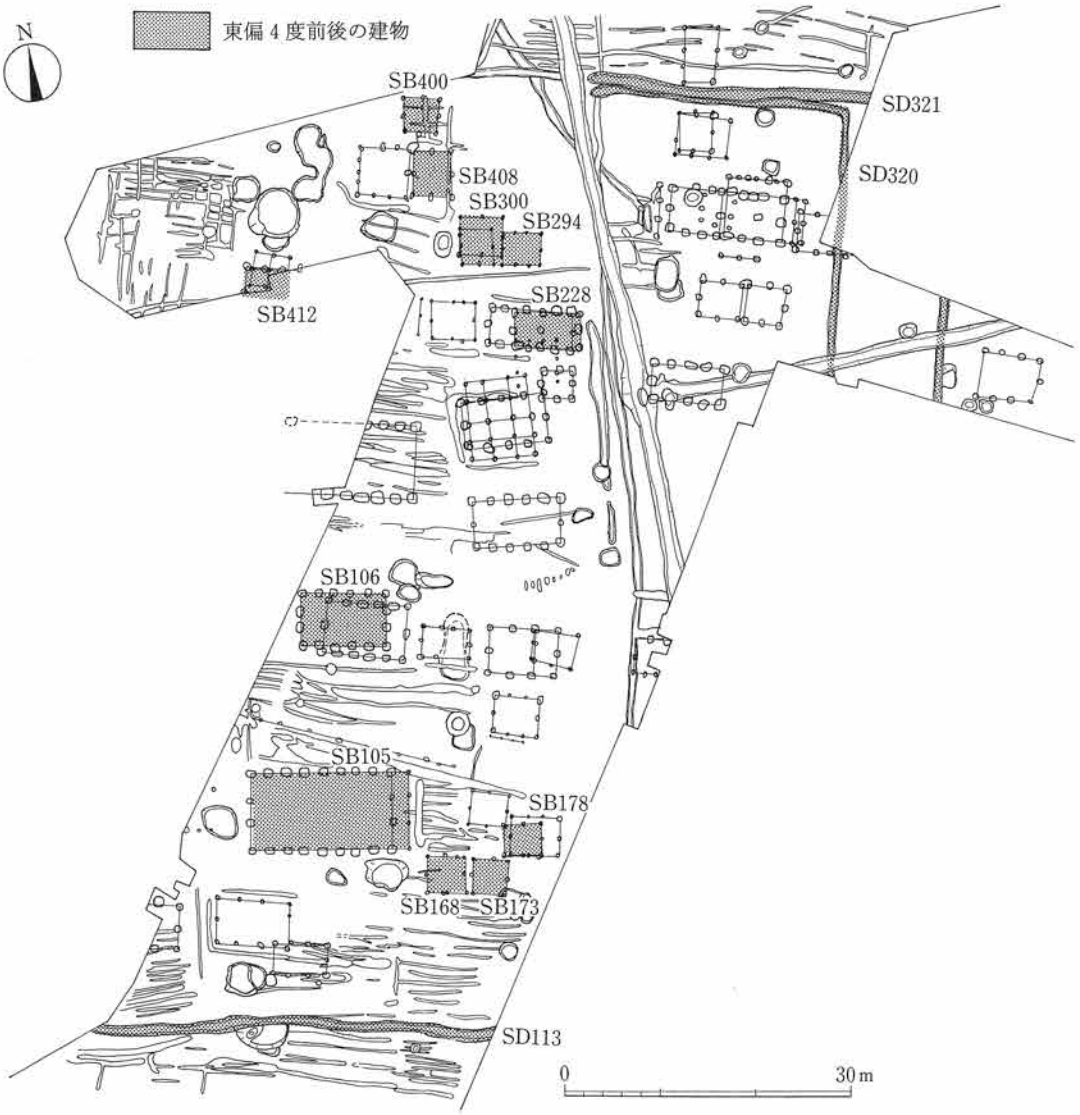
第５図　須沢角地遺跡における集落の変遷
（青海町教委1988を一部改変）



第6図　山三賀Ⅱ遺跡における集落の変遷(1)（坂井1989を一部改変）



第7図　山三賀Ⅱ遺跡における集落の変遷(2)（坂井1989を一部改変）



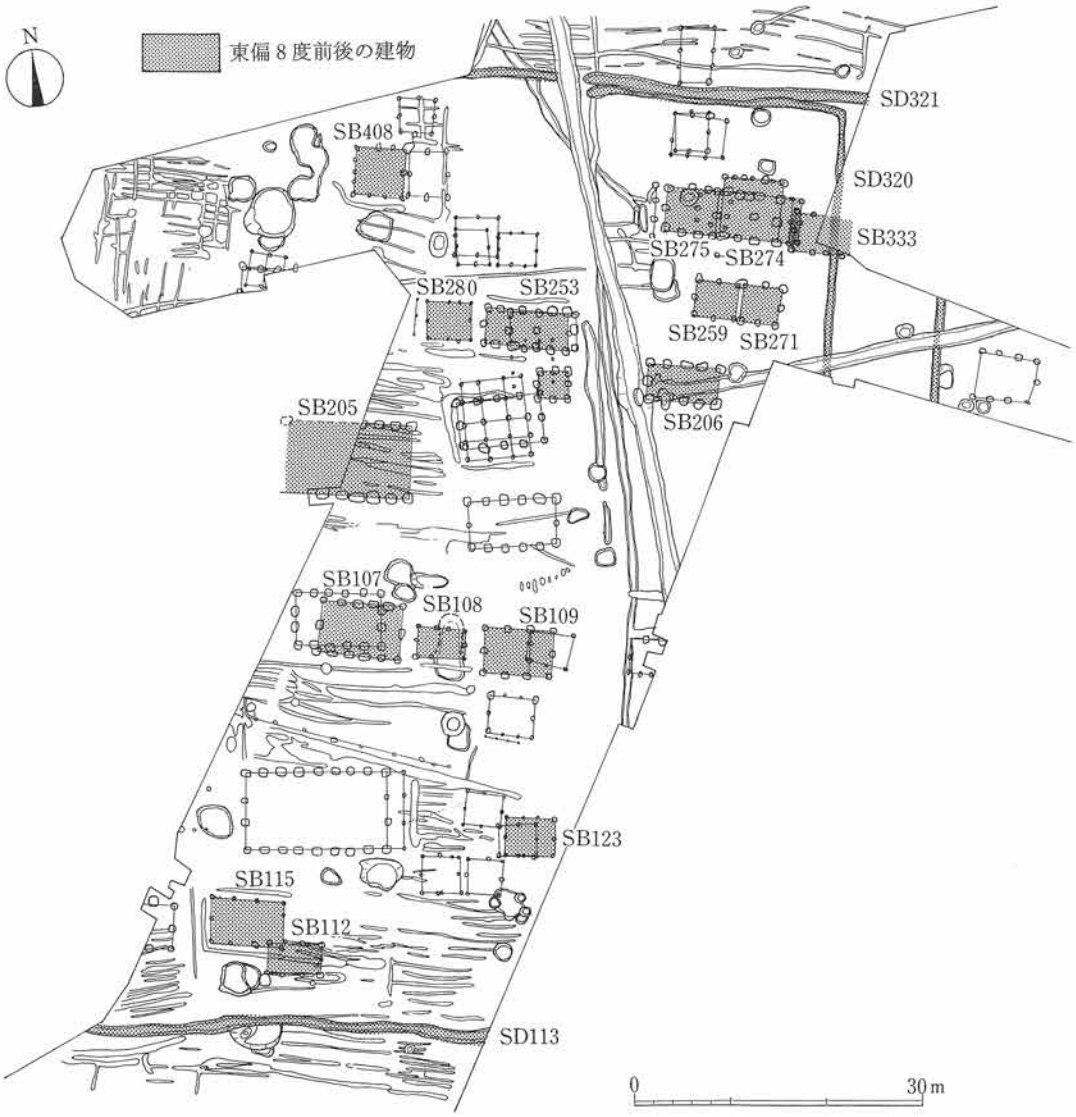
第8図　今池遺跡B地区遺構配置図(1)（県教委1984を一部改変）

8世紀前半から8世紀後半には7つ、8世紀末から9世紀初頭には6つの建物小群がある。大型の竪穴住居・掘立柱建物はともにB群・C群に存在し、B群を構成する建物の数は少ないが、C群は多くの竪穴住居・掘立柱建物から構成される大規模な建物小群である。

9世紀前半～後半には4つの建物小群が存在する。大型の竪穴住居は確認できなくなり、掘立柱建物がこれに変わる。平面積50m²をこえる掘立柱建物はB群にも存在するが、最大の平面積をもつ掘立柱建物は調査区の南側に新たに出現したJ群に存在する。J群は8棟の掘立柱建物と2棟の竪穴住居によって構成される建物小群であり、倉庫と考えるSB1162・1165・1370はこれらの建物小群に附随する可能性が高い。

今池遺跡〔新潟県教育委員会1984〕

新潟県の南西部にある頸城平野のほぼ中央部、関川左岸の自然堤防上に位置し、上越市大字今池・下新町に所在する。掘立柱建物を主体とする遺跡であり、約100棟の掘立柱建物が検出された。8世紀初頭に成立し10成立初頭ままで存続する。報告では前半期（8世紀初頭から9世紀初頭）と後半期（9世紀前半から10世紀初頭）では遺跡の性格が異なることが指摘されている〔新潟県教育委員会1984〕。



第9図　今池遺跡B地区遺構配置図(2)（県教委1984を一部改変）

前半期には大型の掘立柱建物を含む建物群が、A地区・B地区南半・C地区北半にそれぞれ確認できる（以下ではそれぞれA建物群、B建物群、C建物群と呼ぶ）。

B建物群は約40棟前後の掘立柱建物から構成される。南北および東側には建物群を区画する溝（SD113・320・321）があり、SD113とSD321の間隔は約一町（100m）である。掘立柱建物は、主軸方位が東偏4度前後のものと東偏8度前後のものがあり、4度のものが8世紀初頭から前半、8度のものが8世紀後半から9世紀初頭と推測でき、途中空白期間が存在した可能性が高い。

東偏4度のものは11棟が確認でき、南側のSB105を中心とする建物小群と北側のSB268を中心とする建物小群に分かれる。倉庫や井戸は確認できない（第8図）。

東偏8度前後のものは17棟の掘立柱建物が確認でき、建物小群は抽出しづらい。SB291は倉庫と推測でき、当期の最大のは掘立柱建物であるSB205に近接する。また南側と西側に存在する畝状遺構は当期に存在した可能性が高い（第9図）。

C建物群は、南北約80mのなかに約30棟の掘立柱建物が存在する。建物を区画する溝は確認できない。B群建物同様、掘立柱建物の主軸が東偏4度前後のものと東偏8度前後のものがある。遺構の切り合い関係などから東偏8度前後のものが古く8世紀初頭から前半、東偏4度前後のものが新しく8世紀後半から9世紀初頭と推測でき[6]、B群とは逆になる（第10図）。

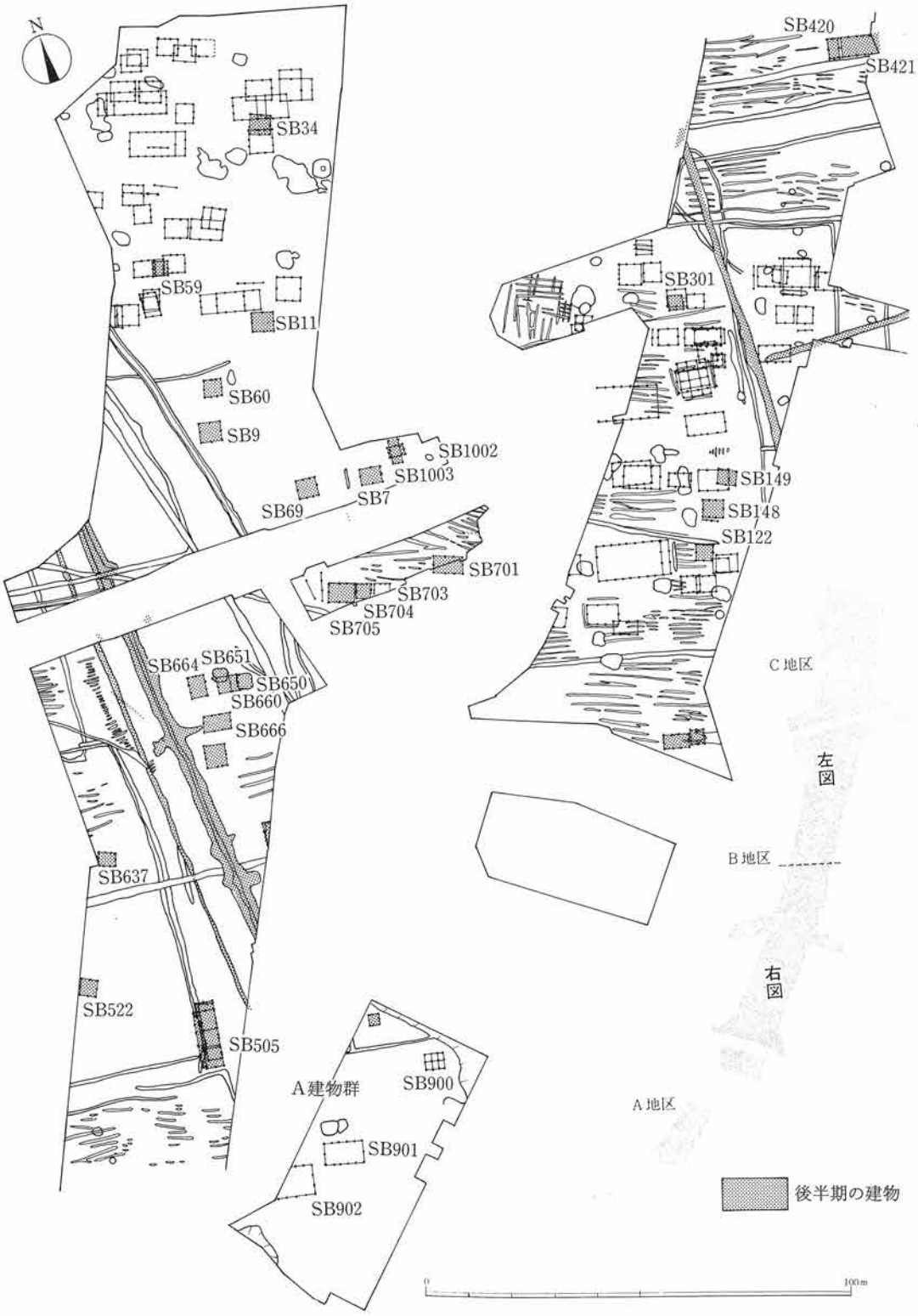
8世紀初頭から前半は2～3×7～8間で平面積60～70m²の掘立柱建物に2～3×3間で平面積の20m²前後の小型の掘立柱建物が1・2棟加わる建物小群が3つ併存する。またSB53は倉庫である可能性が高いが、特定の建物小群に帰属するような状況ではない。

8世紀後半から9世紀初頭は17棟の掘立柱建物が確認できるが、建物小群は抽出しにくい。最大の掘立柱建物であるSB41に2×3間で平面積20～30m²の多くの掘立柱建物と倉庫（SB43）が近接して存在する。

第10図　今池遺跡C地区遺構配置図（県教委1984を一部改変）

A建物群は3棟の掘立柱建物が検出された(第11図)。建物群の中心は調査区西側に広がっているものと推測でき、詳細は不明であるが、3×3間の総柱建物であるSB900は他の2棟とは離れて存在する。

9世紀前半から10世紀後半は大型の掘立柱建物を含む建物群が確認できなくなり、建物小群が広範に散在して存在するようになる[7]（第11図)。これらの建物小群に付属すると思われる土坑は存在するが井戸は確認できない。また当期の掘立柱建物はSB505・421にみるように大型のものも存在するが、2～3×4間、



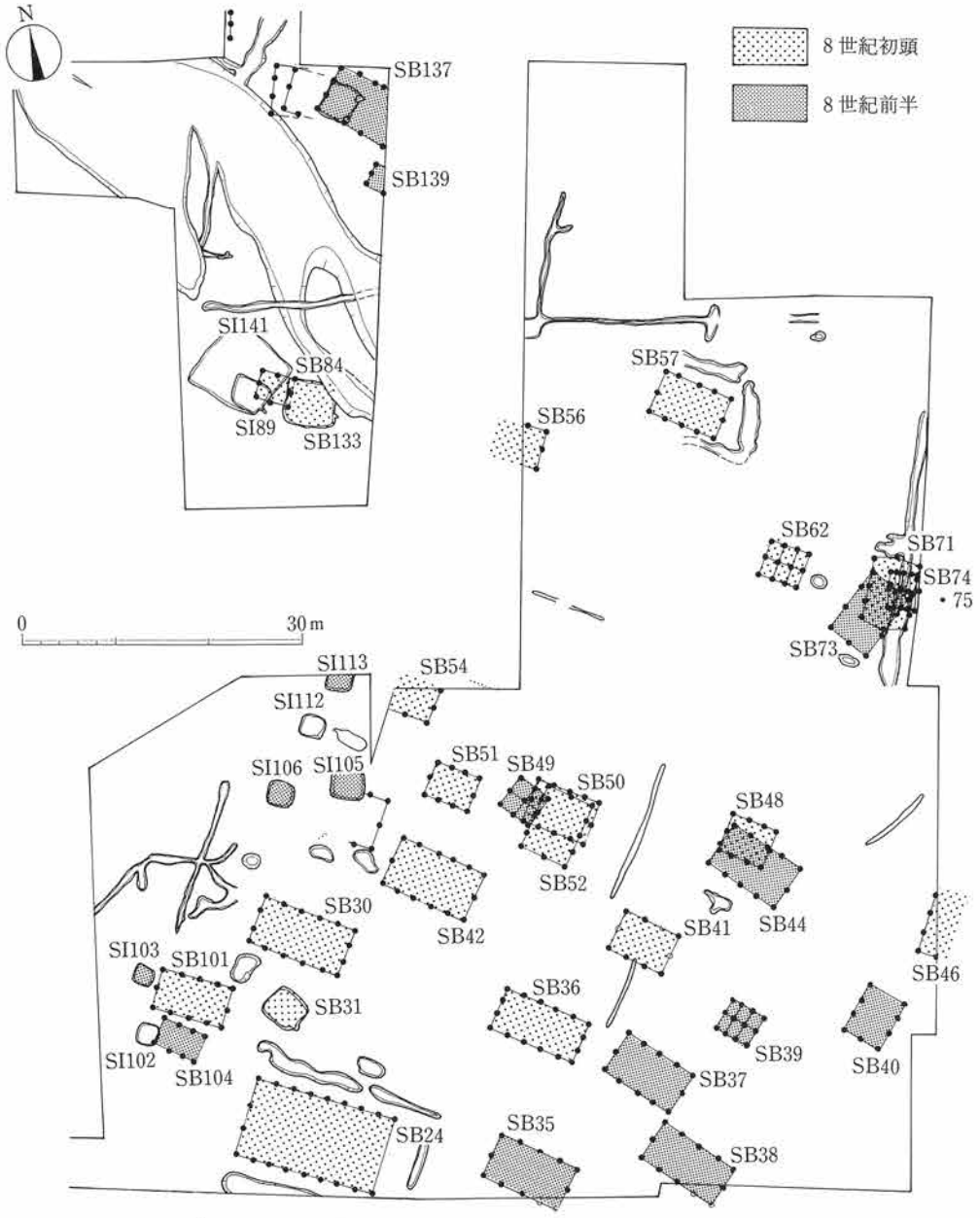
第11図　今池遺跡全体図（県教委1984を一部改変）

平面積20～40m²前後のものが多い。建物小群同士の間隔は広く、ここには畝状遺構が存在する場合があり、畑地として利用されることもあった。

栗原遺跡〔新潟県教育委員会1982・1983、新井市教育委員会1984〕

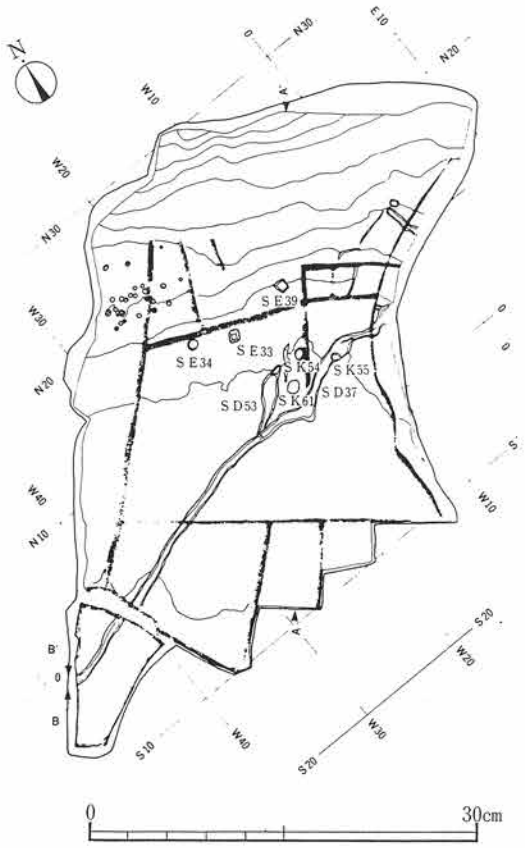
頸城平野の南西部、関川と矢代川に挟まれた舌状の台地上に位置し、新井市大字栗原に所在する。遺跡の存続期間は7世紀後半ないしは末から8世紀前半と比較的短い。掘立柱建物約30棟、竪穴住居12棟が検出された。竪穴住居は7世紀後半まで遡る可能性があるものも存在するが、大半が8世紀初頭から8世紀前半のもので、竪穴住居と掘立柱建物は併存した。掘立柱建物には東偏15度前後のものと東偏20度前後のものがあり、雨落ち溝出土土器から東偏15度前後のものが古く8世紀初頭、東偏20度前後のものは8世紀前半と推測できる（第12図）。

8世紀初頭の建物は調査区の北側と南側に分布が分かれる。南側の建物群は11棟の掘立柱建物と竪穴住

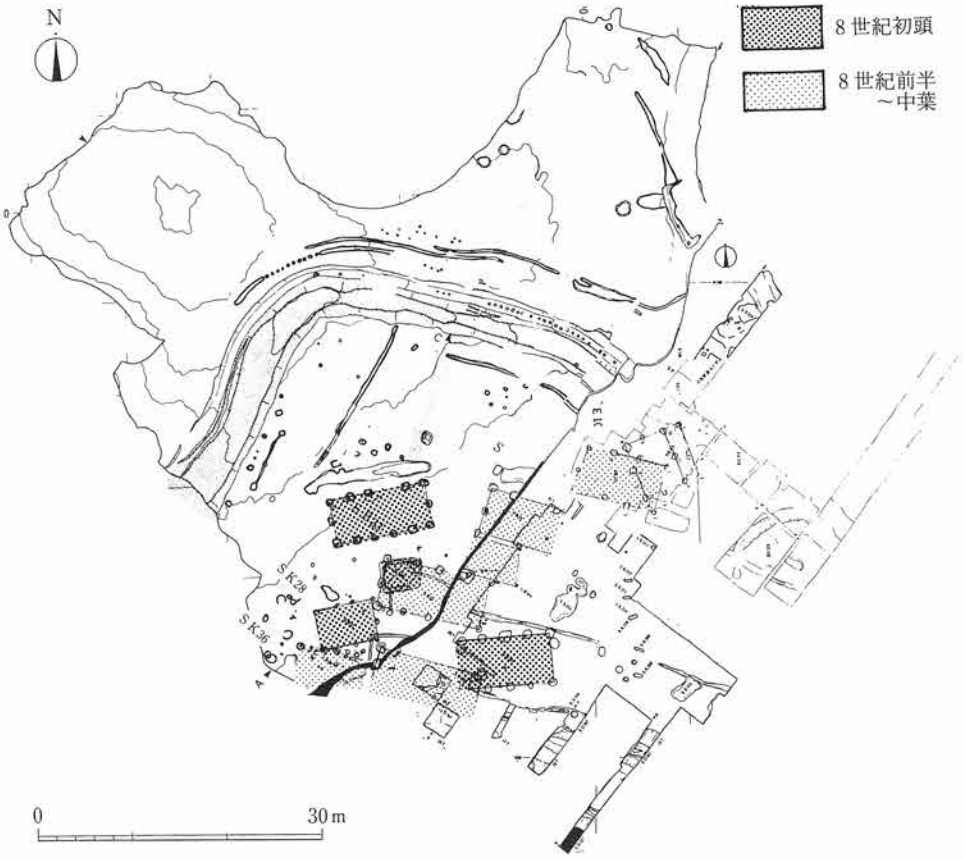


第12図　栗原遺跡遺構配置図（新井市教委1984を一部改変）

第13図　八幡林遺跡全体図
（和島村教委1993を転載）



第14図　八幡林遺跡Ａ地区遺構配置図
（和島村教委1992を転載）



第15図　八幡林遺跡Ｂ地区遺構配置図（和島村教委1992、1993を改変）

居１棟により構成される大規模なものであり、本遺跡で最大の掘立柱建物SB24がある。井戸・倉庫は確認できない。北側の建物小群は掘立柱建物５棟と竪穴住居１棟により構成される。最大の掘立柱建物はSB57であり、平面積約40m²の中型のものである。建物小群に付属する倉庫としてはSB62があるが、井戸は確認できない。

８世紀前半には建物小群が４つ確認できるが、８世紀初頭にみたような大型の掘立柱建物を伴う建物小群は確認できない。調査区南西側の建物小群は掘立柱建物６棟により構成され、最大の掘立柱建物は平面積約50m²のSB64である。倉庫は２棟（SB39・49）が確認できる。また調査区南西には竪穴住居を主体とする建物小群が出現した。

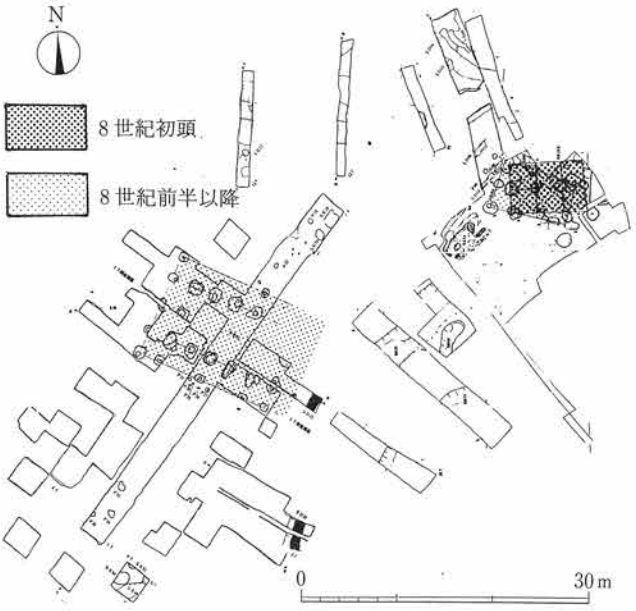
八幡林遺跡〔新潟県和島村教育委員会1992・1993・1994ａ〕

新潟県のほぼ中央部、新潟県和島村大字島崎字八幡林に所在する。遺跡は島崎川左岸に位置し、丘陵・低地をとりこみ広範に展開する（第13図）。遺跡の存続期間は８世紀前半から10世紀初頭と長期にわたるが、地点により遺構の内容・年代は異なる。以下では、Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｉ地区について年代と遺構の概要を述べる。

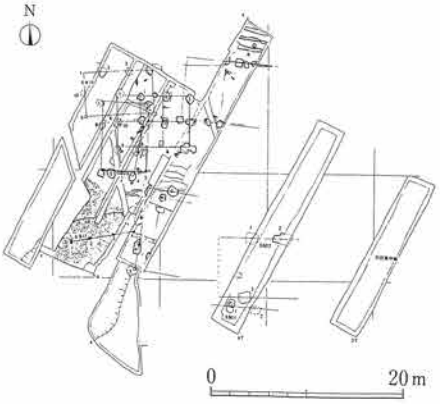
Ａ地区では住居跡は確認されなかったが、井戸３基・土坑・溝が検出された。井戸には方形の井戸側を持つものがある。また溝からは「沼垂城」「郡司符」木簡のほかに斎串や人形などの祭祀関連遺物が出土した。包含層から出土した土器には８世紀前半から中葉のものと９世紀後半から10世紀初頭のものがあるが、前述した井戸・溝は８世紀代のものである[8]（第13図）。

Ｂ地区は掘立柱建物10棟、竪穴住居１棟が検出された。存続期間は８世紀前半から中葉であり、掘立柱建物の方向は方位にほぼ一致するものと、南に約10度振るものがある。検出された１棟の竪穴住居は主軸がほぼ東西方向を向き、出土土器が８世紀前半である。このことから、方位に一致するものが古く８世紀前半、南に振るものが８世紀中葉と考える。掘立柱建物は30～50m²であり、最大のものは２×５間のSB33、平面積は約60m²となる（第15図）。

Ｃ地区では３棟の掘立柱建物が検出された。建物の主軸の方向はSB02・16Aが南に約10度前後振り、SB16Bが方位にほぼ一致する。Ｂ地区の掘立柱建物の変遷から考えると、



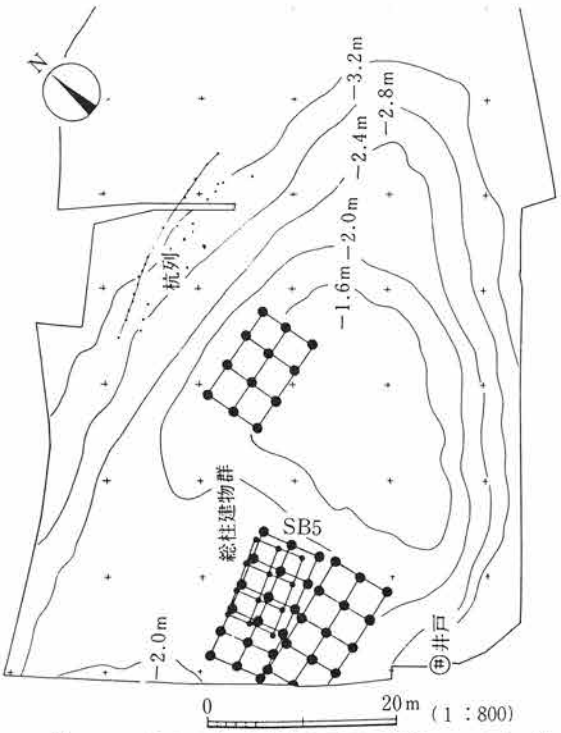
第16図　八幡林遺跡Ｃ地区遺構配置図
（和島村教委1993を一部改変）



第17図　八幡林遺跡Ｉ地区遺構配置図
（和島村教委1993より転載）

SB16Bが８世紀前半、SB16A・02が８世紀中葉となるが、SB02は柱穴内から土器が出土しており、土器の型式から考えると９世紀代に下る可能性が高い。SB02は身舎が２×５間で四面に庇を持つ本遺跡最大の掘立柱建物であり、平面積は約180m²を計る大型のものである（第16図）。

Ｉ地区では掘立柱建物が８棟検出された。これらの掘立柱建物は丘陵の斜面を平担に造成したうえに建てる。調査区の面積が少ないため土坑・井戸などの様相は不明である。年代は９世紀末から10世紀初頭ないしは前半である。全体の規模が分かる掘立柱建物は３棟であり、いずれも30m²前後であるが、SB５・６のように50m²をこえると推測できる比較的大型の掘立柱建物も存在する（第17図）。

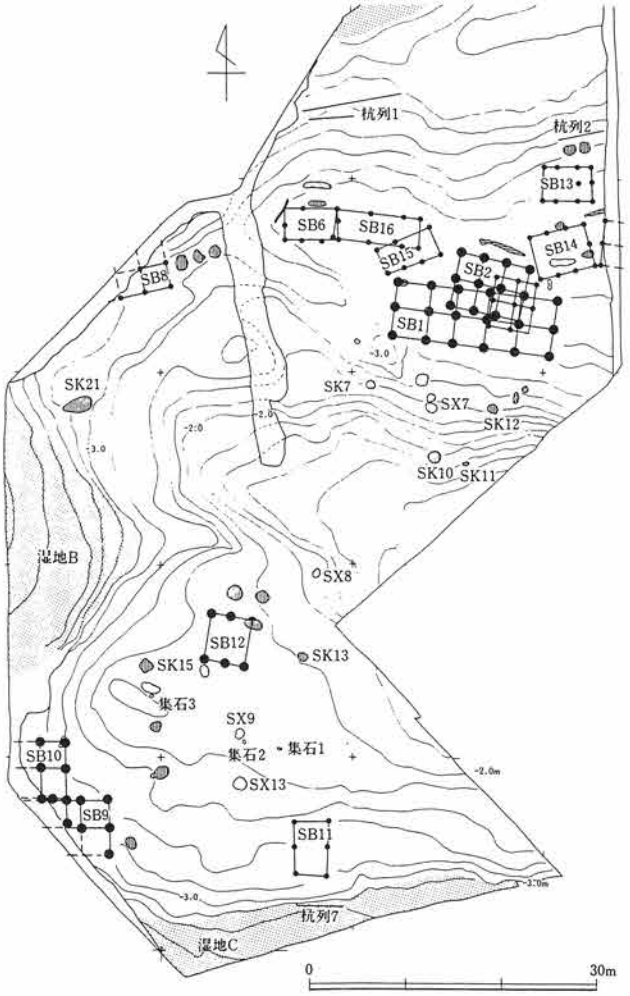


第18図　緒立Ｃ遺跡遺構配置図（藤塚1993を転載）

緒立Ｃ遺跡〔新潟県黒崎町教育委員会1993〕

西蒲原郡黒崎町字川根潟に所在し、信濃川左岸の砂丘上に位置する。古墳時代前期の集落が廃絶したのち、400年近くの空白期間をおいて、８世紀前半にふたたび集落？が成立するが、遺跡の最盛期は出土土器から考え８世紀後半から９世紀後半であり、９世紀末から10世紀初頭には廃絶する。奈良・平安時代の遺構としては、５棟の掘立柱建物が検出された（第18図）。

SB１・３・５は重複しており、同時存在したものは１～２棟であろう。５棟の掘立柱建物はいずれも２×３～５間の総柱である。最大の建物であるSB５は平面積90m²とかなり大型のものである。



第19図　的場遺跡遺構配置図
（新潟市史編さん原史古代中世部会1994を転載）

的場遺跡〔新潟市教育委員会1991・藤塚1993・新潟市史編さん原史古代中世部会1994〕

新潟市小新字的場に所在し、信濃川左岸の砂丘上に位置する。緒立遺跡とは直線距離にして約500mと隣接し、相互に関連を持つ遺跡

であろう。緒立遺跡同様、古墳時代前期の集落が廃絶したのち、約400年間の空白期間をおいて８世紀初頭に成立し10世紀後半までは存続する。調査では掘立柱建物13棟が検出された。このうち６棟は総柱であり、倉庫と推測できる。倉庫のなかには２×５間と長大なものがある(第19図)。遺構の変遷については明確にできない。

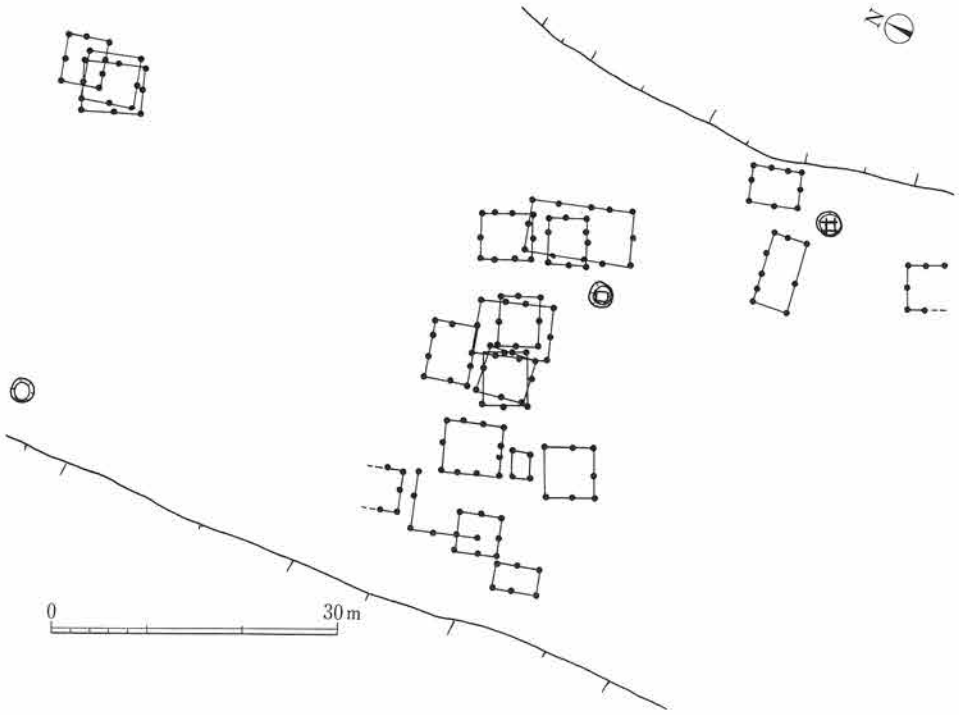
曽根遺跡〔新潟県豊浦町教育委員会〕

蒲原平野の北側、沖積平野の微高地に位置し、新潟県北蒲原郡豊浦町に所在する。８世紀前半に成立し、９世紀末まで存続した。掘立柱建物を中心とする集落遺跡であり、竪穴住居は確認できない。ただし、掘立柱建物は最大のものでも２×４間（平面積は約60m²）であり、２×２～３間で平面積20～30m²と小型の掘立柱建物が大半を占める。掘立柱建物の分布はおおむね３つのグループに分かれ、このうち発掘区南側と中央部の建物小群は方形の井戸側をもつ井戸が確認できる（第20図)。

古町Ｂ遺跡〔吉川町教育委員会1991〕

中頸城郡吉川町大字西野島字上脇原に所在する。頸城平野の北東部、東頸城丘陵の末端に立地し、沖積平野との比高差は約5mを計る。縄文時代、奈良・平安時代、中世の複合遺跡であり、奈良・平安時代は８世紀前半から後半、９世紀前半から後半、中世は13世紀と15世紀後半から16世紀の２時期がある。

東偏25度前後の掘立柱建物および竪穴住居が８世紀前半から後半の遺構、東偏30～50度前後の掘立柱建物は明確な時期比定ができないが、９世紀前半～後半ないしは13世紀代のものと推測する(第21図)。８世紀前半から後半は３つの建物小群があり、このうちａ群・ｂ群は平面積約100m²の大型の掘立柱建物[9]を中心とし、これに１・２棟の中小型の掘立柱建物と竪穴住居が加わる類似した構成である。ｃ群は大半が調査区外に広がる可能性が高く詳細は不明である。３つの建物小群とも井戸と倉庫は確認できない。建物小群同士の間隔は広いが、建物小群の主軸方向と一致もしくは直交する畝状遺構は確認できず、畑地として



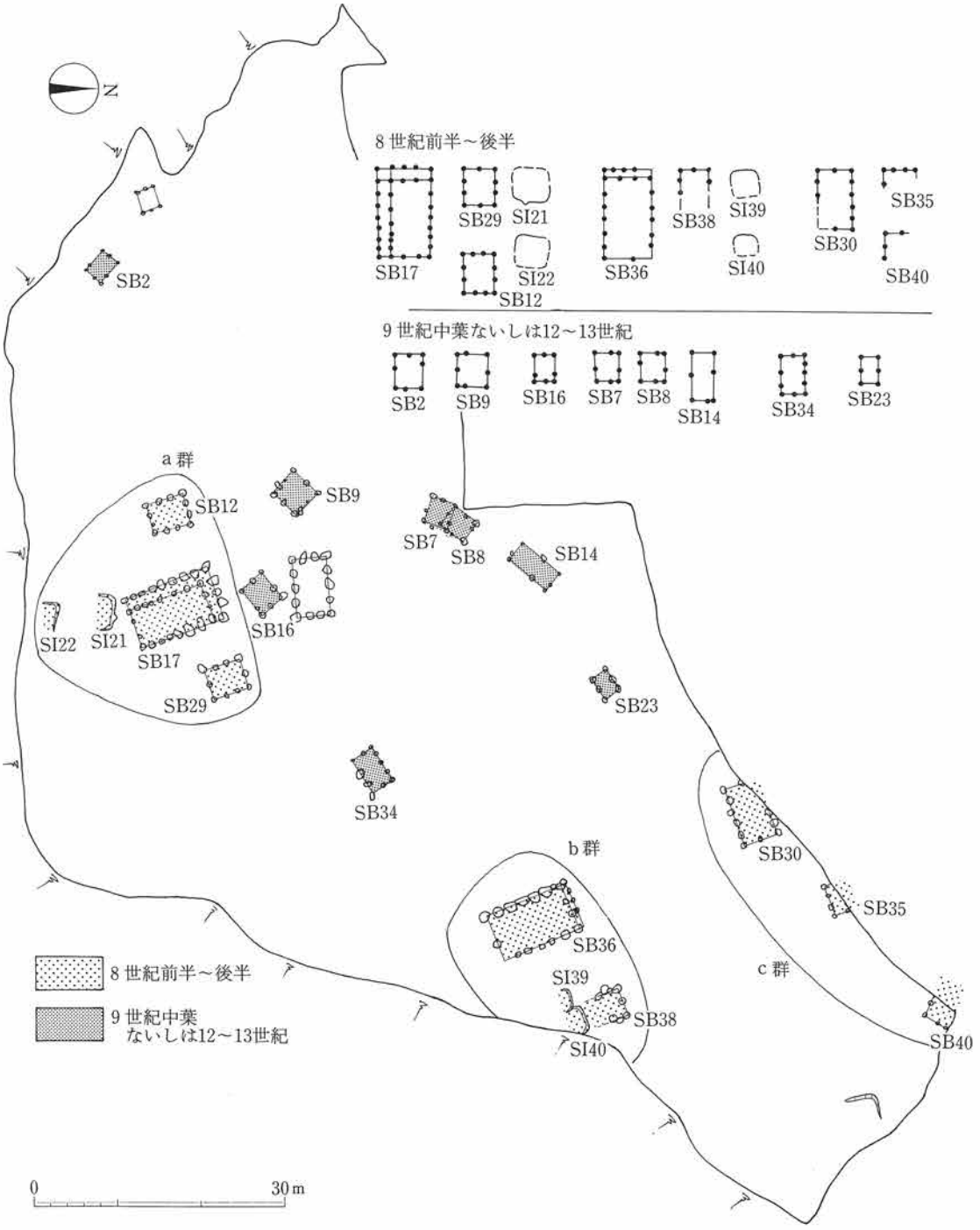
第20図　曽根遺跡遺構配置図（豊浦町教委1982を一部改変）

は利用されなかったものと推測する。

東偏30～50度前後の掘立柱建物は、調査区のほぼ中央に馬締形に７棟（SB７・８・９・14・16・23・34）、調査区西側に１棟（SB２）確認できる。建物の大半は２×３～４間もしくはそれ以下の小型の掘立柱建物である。８世紀前半から後半と同様に建物小群同士の間隔は広いが、畝状遺構は確認できない。

岩野下遺跡〔新潟県教育委員会1987〕

新潟県の南西端近く、梅川左岸の段丘上に位置し、糸魚川市大字大和川字岩野に所在する。遺跡の存続



第21図　古町Ｂ遺跡遺構配置図（吉川町教委1993を改変）

期間は８世紀前半から後半・９世紀末から10世紀初頭・10世紀後半から末の３時期があるが、このうち10世紀後半から末の遺構の様相は明確でない。

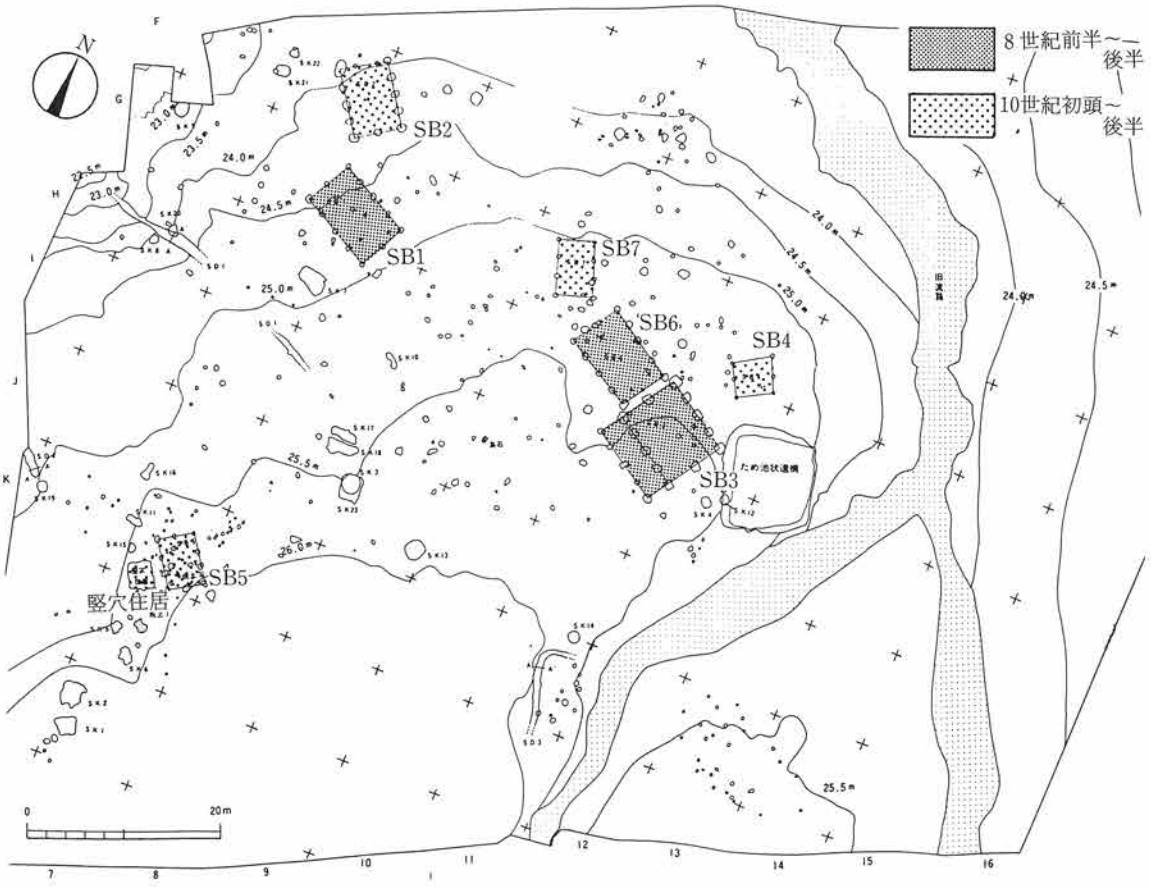
掘立柱建物７棟・竪穴住居１棟・土坑・ピットが検出された。掘立柱建物には西偏60度前後のものと西偏20～30度前後のものがある。掘立柱建物の柱穴・掘立柱建物に隣接する土坑出土の土器から、西偏60度前後のものが８世紀前半から後半、西偏20～30前後のものが９世紀末から10世紀初頭と考える。また、竪穴住居は９世紀末から10世紀前半のものである（第22図）。

８世紀前半から後半はSB１・３・６の３棟が存在するが、井戸・倉庫・畝状遺構は確認できない。SB３は３×４間で南西側に庇を持つ平面積70m²前後の大型の掘立柱建物、他の２棟は平面積40m²である。

９世紀末から10世紀前半の遺構には掘立柱建物４棟・竪穴住居１棟があるが８世紀前半から後半と同様に井戸・倉庫・畝状遺構は確認できない。掘立柱建物は２×４間、２×３間、１×３間、１×２間がそれぞれ１棟づつ確認できる。SB５と竪穴住居は隣接するが、他の掘立柱建物は１棟づつ単独で存在する。

岩田遺跡〔越路町教育委員会1990〕

新潟県のほぼ中央部、信濃川左岸の小扇状地上に位置し、三島郡越路町大字沢下条字岩田に所在する。遺跡の存続期間は８世紀後半から９世紀前半である。掘立柱建物４棟・柵列・土坑・畝状遺構が検出された（第23図）。掘立柱建物の平面積は30m²前後のものが３棟、20m²弱のものが１棟である。SB２・３は重複するが、検出された掘立柱建物４棟の主軸はいずれも同一であり、近接した時期のものであろう。また調査区の南側に広がる畝状遺構は掘立柱建物と同一方向であり、同時存在した可能性が高い。井戸・倉庫は確認できない。



第22図　岩野下遺跡遺構配置図（県教委1987aを一部改変）

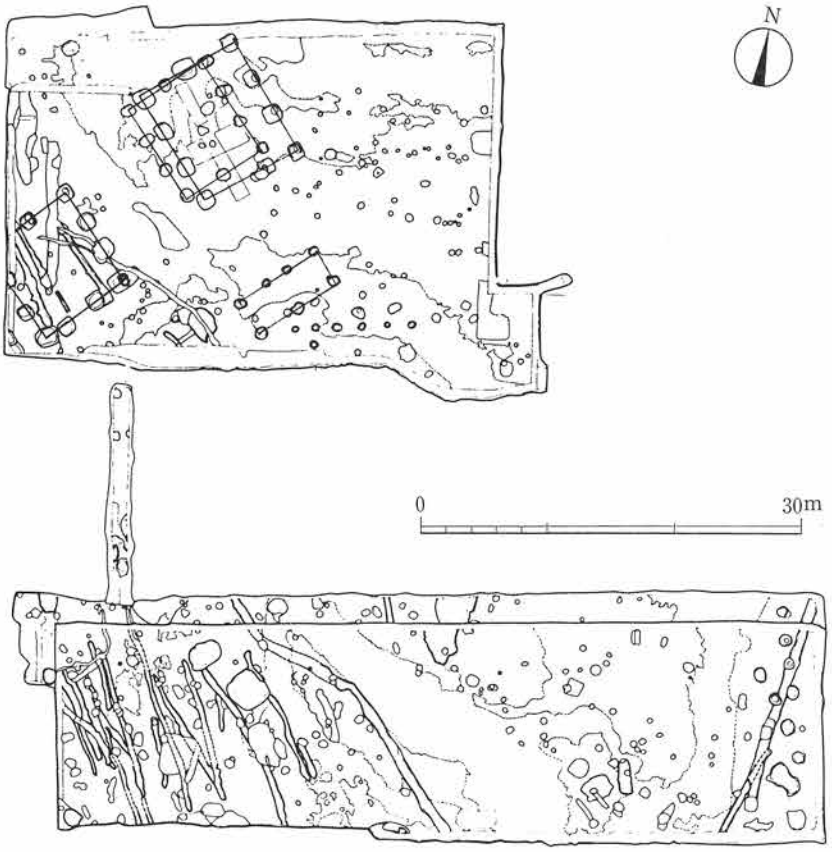
一之口遺跡〔新潟県教育委員会1986、新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団1994〕

頸城平野の西部、関川右岸の自然堤防上に位置し、上越市大字寺分・中屋敷・木田に所在する。ここでは8世紀から10世紀の遺構について坂井秀弥氏〔坂井1988〕・鈴木俊成氏〔鈴木1989〕の考察に添って遺跡の概要を述べる（第24図）。

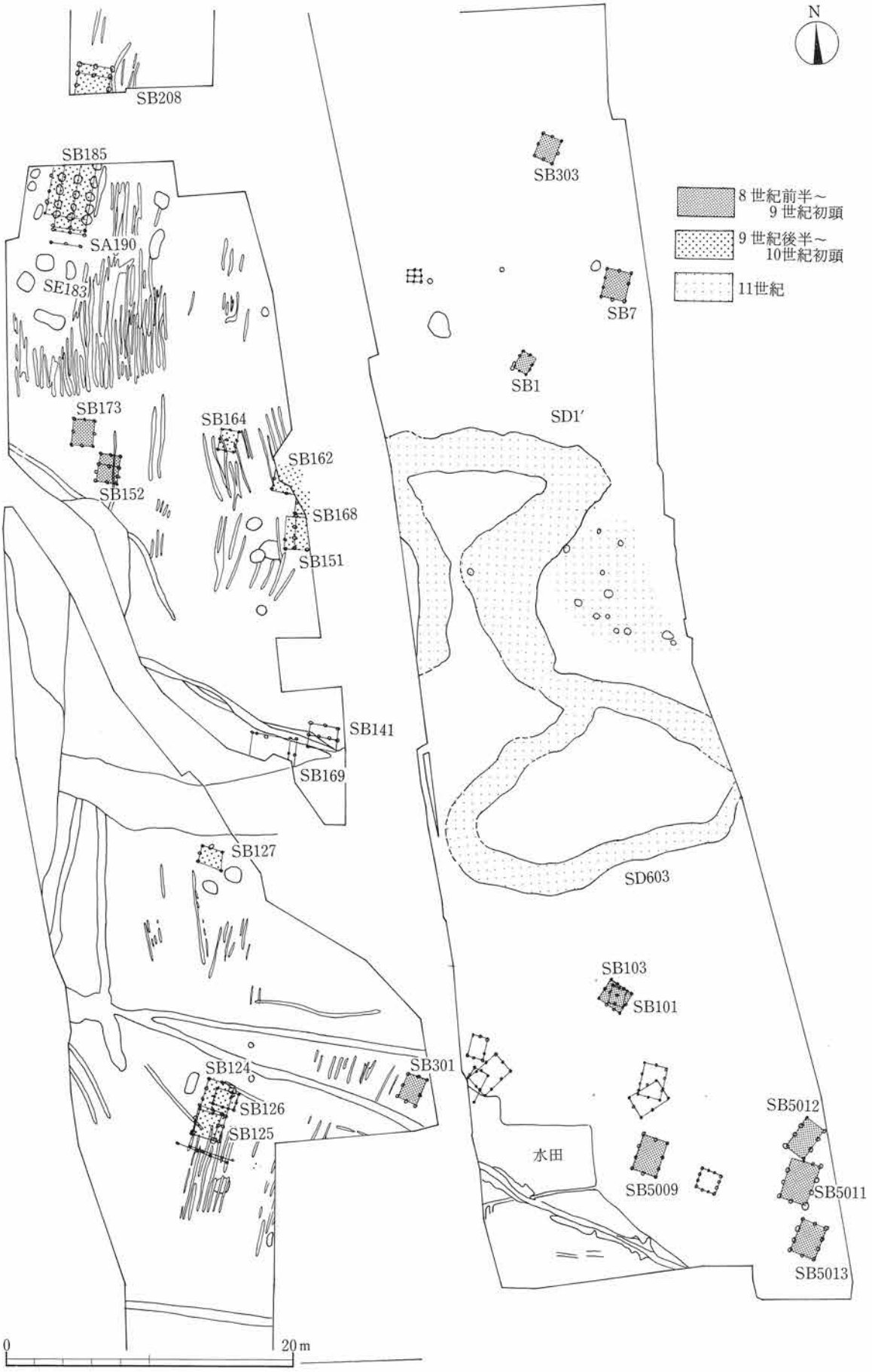
6～7世紀の集落が廃絶した後、約100年前後の空白期間をおいて、8世紀後半を前後する時期に再び集落が営まれる。8世紀後半から9世紀後半の遺構には東地区に散在する掘立柱建物がある。また西地区のSB301・152・173もこの時期である可能性が高い[10]。掘立柱建物の規模は2×3間、平面積20～30m²前後の小型のものが多く、平面積50m²を越えるものは確認できない。主軸の方向は東偏20度前後のものが大半を占める。建物小群は1～3棟の掘立柱建物から構成される場合が多く分布は散漫である。建物小群に土坑がともなう場合はあるが、井戸・倉庫が伴う例はない。また、建物小群同士の間隔は広いが、周辺に畝状遺構が広がる建物はSB301のみであり、他の建物には確認できない。

10世紀初頭から後半の遺構は調査区西側を中心に存在し、これについては坂井秀弥氏が考察を加えられた〔坂井1988〕。以下では坂井氏の考察にそって概要を述べる。当期には1～3棟の掘立柱建物によって構成される4つの建物小群が土坑・井戸・畑地を伴い併存する。建物小群の間にはかなりの格差が見られ、C群は1×2間で小型の掘立柱建物のみで構成されるが、A群は3×4間以上、平面積70m²以上の大型で総柱となる掘立柱建物（SB185）を中心とする。この東側には目隠し塀と考えられるSA190、方形の井戸側をもつSE183が存在し、他の建物小群とは隔絶した様相を持つ。

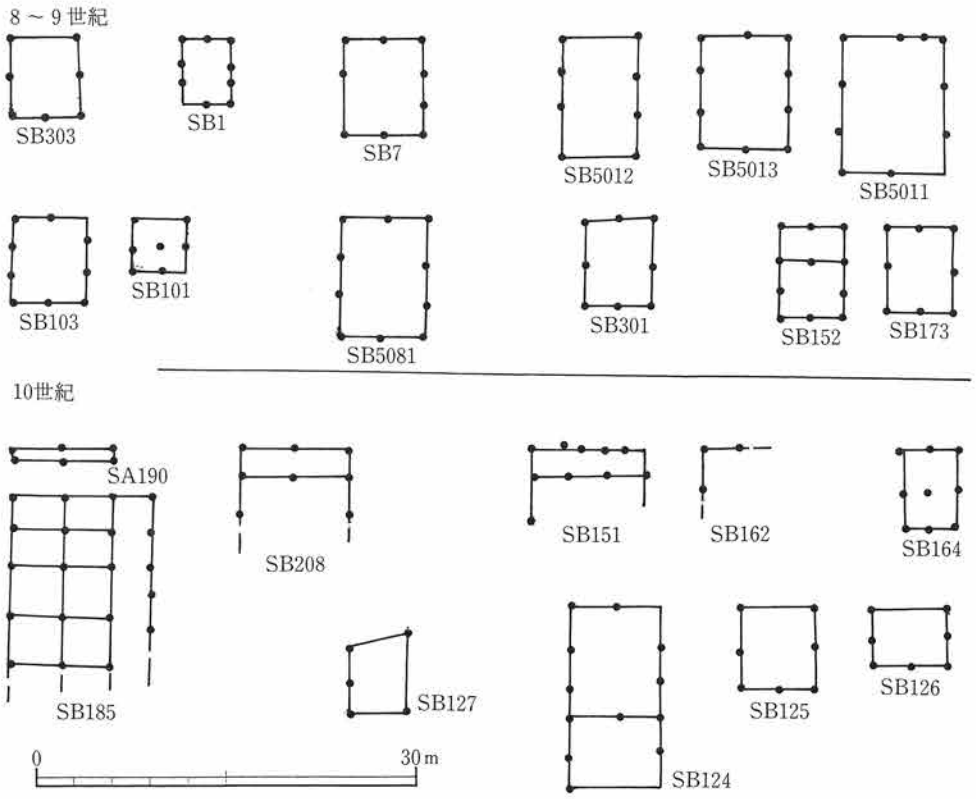
11世紀以降は建物跡は確認できない。ただし、調査区西側中央付近にある井戸は、11世紀前半から12世紀前半のものである。形態はいずれも素掘りで小型のものである。またSD1'・SD603からは11世紀代の遺



第23図　岩田遺跡遺構配置図（越路町教委1990を転載）



第24図　一之口遺跡遺構配置図（8～11世紀）



第25図　一之口遺跡の掘立柱建物（8～10世紀）

物が多く出土している。

金屋遺跡〔新潟県教育委員会1985〕

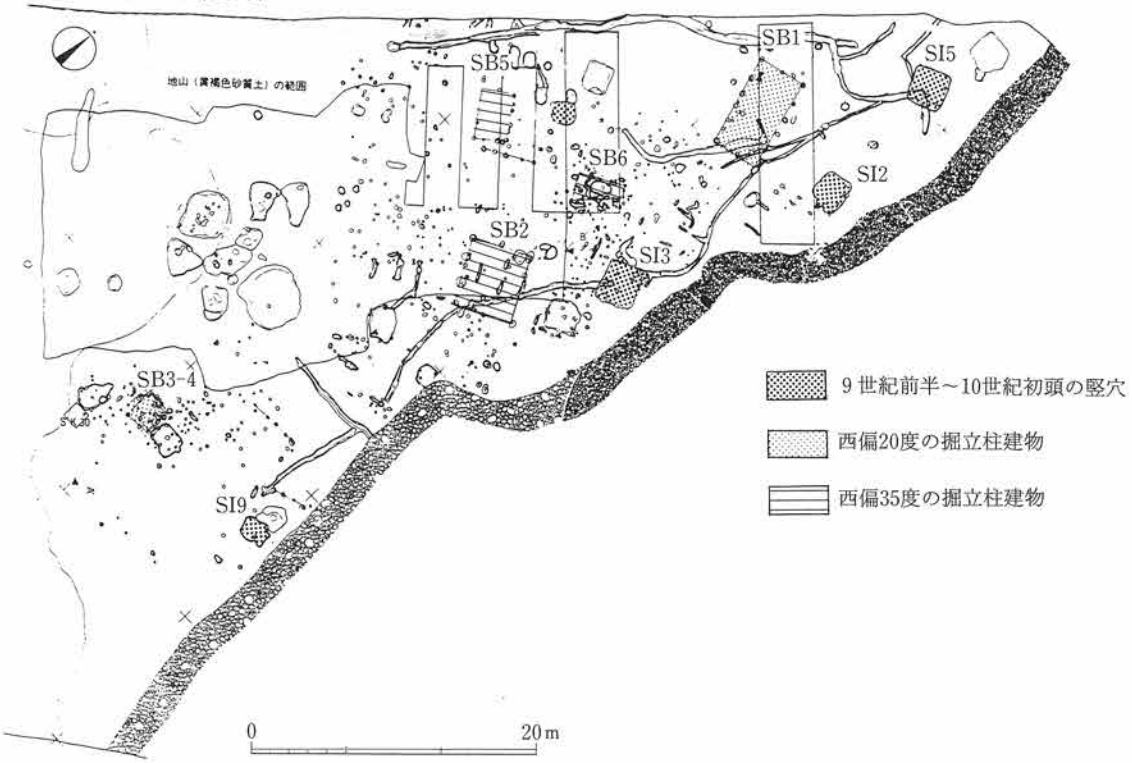
新潟県の南西部、南魚沼郡六日町大字余川字金屋道上に所在し、魚野川の支流である庄之又川が形成した扇状地の扇央部に位置する。

縄文時代、古墳時代中・後期、平安時代の複合遺跡である。古墳時代後期の集落が廃絶した後、約300年の空白期間をおいて9世紀前半に再び集落が形成される。以後11世紀初頭ないし前半まで遺跡は存続した。ただし、10世紀前半～10世紀末の遺構としてはSX20があるのみで、他の遺構は明確でない。調査では掘立柱建物6棟・竪穴住居10棟・柵・土坑・溝などが検出されたが、井戸・畝状遺構・倉庫は検出されていない（第26図）。

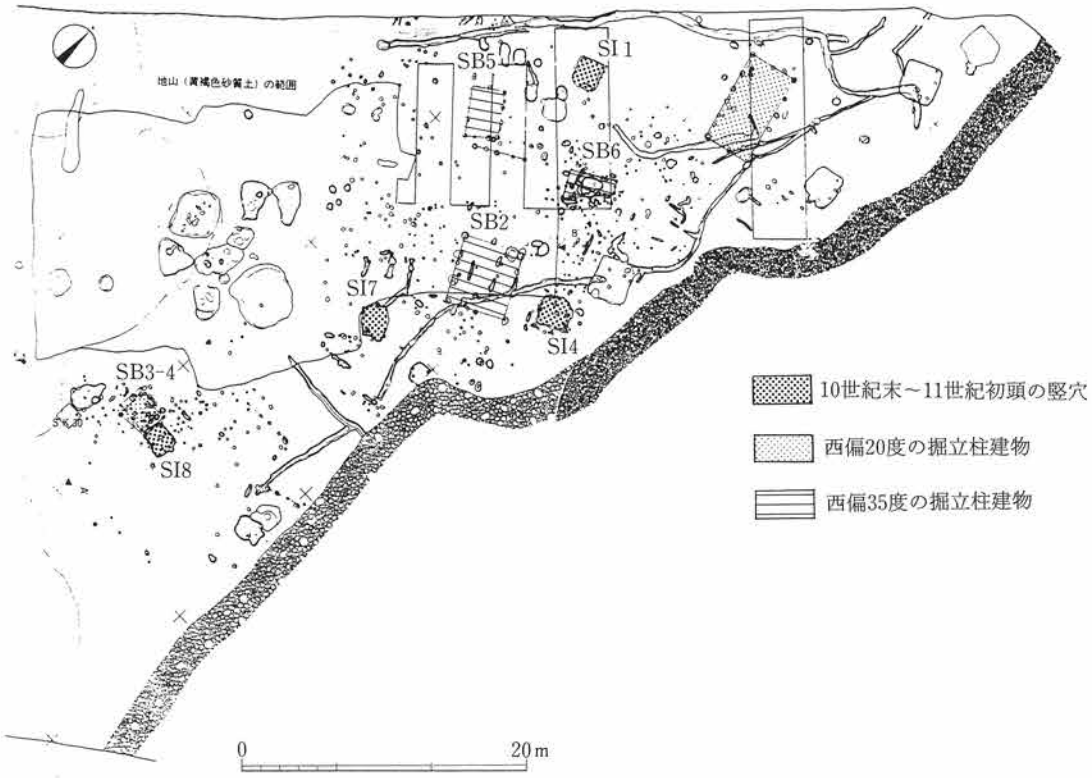
竪穴住居は9世紀前半から10世紀初頭のものが5棟、11初頭ないしは前半のものが4棟確認できる。また掘立柱建物には西偏20度前後のものと西偏35度前後の2種があるが、どの方向のものがいつの時期のものかは明確にできない。

集落の変遷については明らかにしえないが、遺構の分布から3～4つの建物小群が存在する。平面積約50m²の比較的大型の掘立柱建物を中心としこれに小型の掘立柱建物ないしは竪穴住居が数棟が加わり建物小群を構成するもの、小型の掘立柱建物と竪穴住居1棟のみで構成されるものがあり、建物小群間およびその内部には階層差が存在する。

9 世紀前半～10世紀初頭



10世紀末～11世紀初頭



第26図　金屋遺跡における集落の変遷（県教委1985を改変）

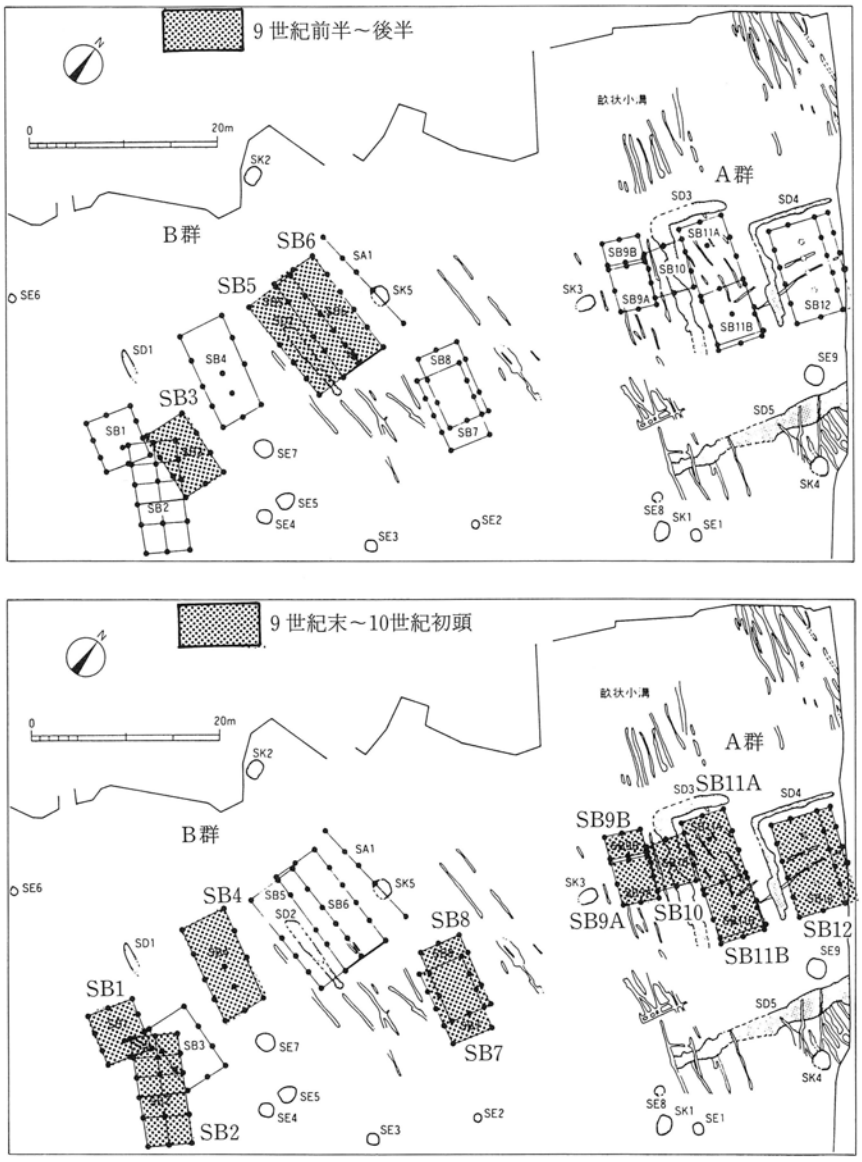
小丸山遺跡〔新潟市教育委員会1987〕

蒲原平野の中央部、現在の信濃川と阿賀野川の河口に挟まれた砂丘上に位置する。遺跡は9世紀前半に成立し、10世紀後半まで存続するが。10世紀後半の遺構の様相は明確でない。調査では掘立柱建物14棟・井戸8基・土坑・溝・畝状遺構などが検出された（第27図）。

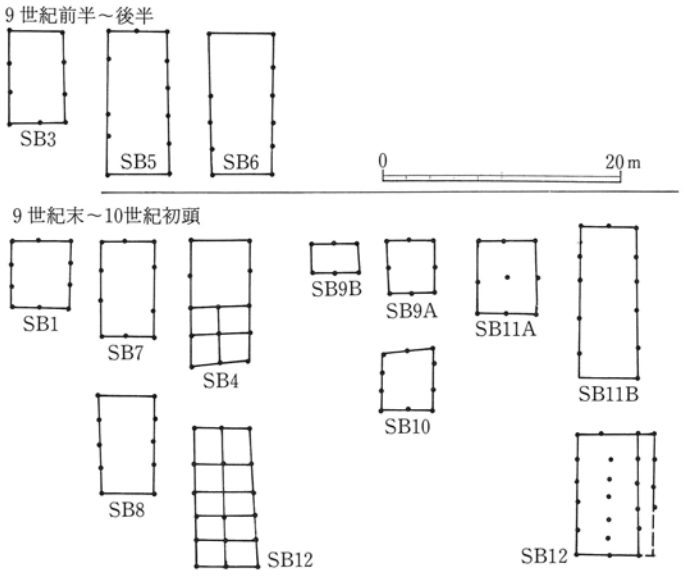
建物小群は調査区北側のA群と南側のB群の2つがある。主軸方向には東偏　度前後のものと東偏　度前後のものが古く9世紀前半から後半、東偏　度のものが9世紀末から10世紀前半である可能性が高い。

9世紀前半から後半は3棟の掘立柱建物が確認できる。いずれもB群に属するが、SB5・6は重複しており、3棟が同時存在したわけではない。SE7はこの建物小群に伴うものと考える。

9世紀末から10世紀前半にかけては建物の数が増加する。建物小群は2つ存在し、A群は5棟、B群は6棟の掘立柱建物が確認できる。掘立柱建物のなかには重複するものがあり、同時に存在し



第27図　小丸山遺跡における集落の変遷（新潟市教委1984を変遷）



第28図　小丸山遺跡の掘立柱建物

たものは各建物小群とも２～３棟であろう。２つの建物小群はともに井戸・土坑・畝状遺構が伴い、本遺跡で最大の掘立柱建物SB12が存在するＡ群に伴うSE９は方形の井戸側を持つ。

下新町遺跡〔新潟県教育委員会1984〕

今池遺跡の北側、上越市大字下新町に所在し、沖積平野の微高地上に位置する。集落は８世紀前半、９世紀中葉～後半、10世紀末～11世紀初頭にの３時期に断続的に営まれた（第29図）。

８世紀前半は掘立柱建物３棟•土坑•溝が確認できる。掘立柱建物は平面積70m²近くのSB３を中心とし、小型の掘立柱建物が２棟（SB１・２）が加わる構成となる。

９世紀中葉から後半は掘立柱建物２棟・井戸２基が確認できる。掘立柱建物は１×２間と２×３間のものであり、２棟とも平面積30m²前後の小型の建物である。２基の井戸のうち１基（SE11）は、方形の井戸側を持つものであり、小規模な２基の掘立柱建物にのみ付属するものとは考えにくい。

10世紀末から11世紀初頭は、掘立柱建物６棟・井戸３基・柵・溝・土坑が確認できる。建物・溝には重複するものがあり、方向・柱穴埋土の差により、前後２時期に細分できる。前半（10世紀末）はSB６Ａ・７・８・10により建物小群が構成される。SB８は平面積200m²弱の大型の掘立柱建物であり、四面に庇がつき一部に束柱を持つ。SB７は２×２間の総柱建物であり、倉庫と考えられる。SB６Ａも総柱建物であり建物が調査区外にのびるため不確定な要素を残すが、倉庫である可能性が高い。また、建物群の南側には井戸が存在し、北側にはSA19・SD21Aがあり、建物小群を区画する。

後半（11世紀初頭）はSB６B•９により構成される。SB９は２×５間で、中央に馬通りをもつ。SB８と比較すると小型だが、それでも平面積は70m²弱である。SB６BはSB６Ａ同様倉庫である可能性が高い。前半同様、建物群の南側には井戸が存在し、北側には建物小群を区画すると思われるSD21Bがある。

四ツ屋遺跡〔四ツ屋遺跡調査団1988・上越市教育委員会1989〕

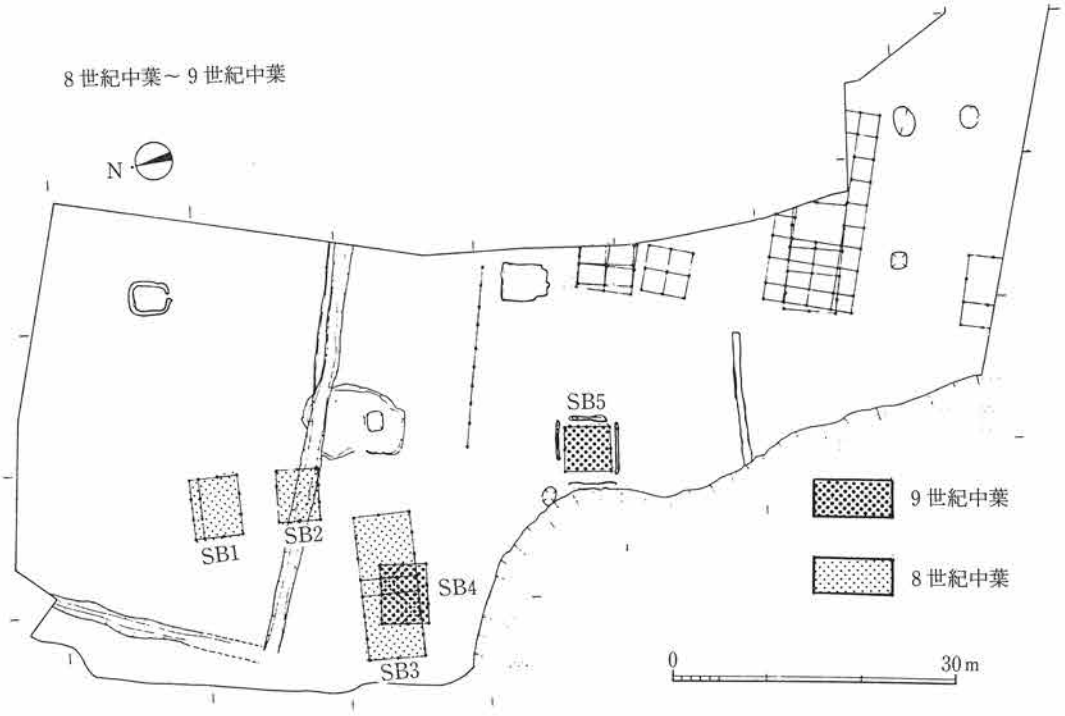
頸城平野の西部、沖積平野の微高地上に位置し、一之口遺跡の南方約1kmの上越市大字大豆字四ツ屋に所在する。1987・1988年の２次にわたって発掘調査が行われた。調査では掘立柱建物６棟のほか、多数の土坑・井戸・ピットなどが検出された。遺跡の存続期間は９世紀後半ないしは末から11世紀前半であるが、1987年度調査地区と1988年度の調査地区では主体となる時期が異なり、前者が９世紀後半から11世紀初頭、後者は11世紀前半を前後する時期である。

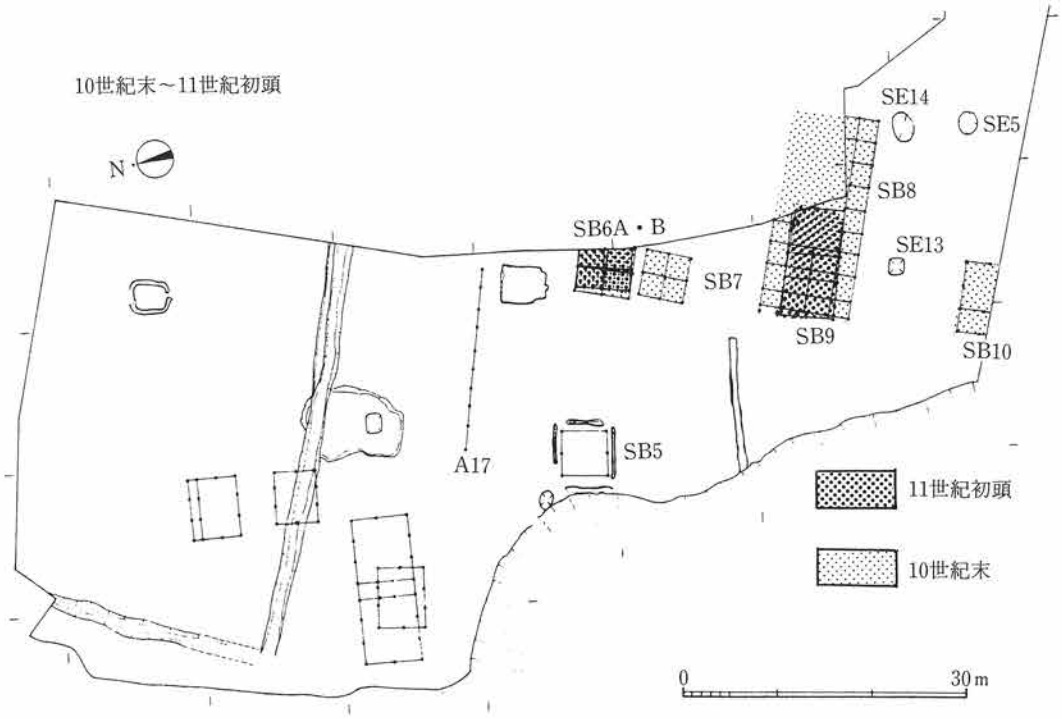
1987年度の調査地区では掘立柱建物が２棟検出された（第30図）。３×５間（SB３）と３×７間（SB２）の２棟とも大型のものであり、平面積は91.6m²と129.6m²である。２棟の掘立柱建物は一部が重複しており、同時存在したわけではない。前後関係は遺構の切り合いからは分からないが、SB２の柱穴からは大原２号窯式に比定できる灰釉陶器が出土しており、おそらくSB３が９世紀後半から10世紀初頭ないしは前半、SB２が10世紀前半から11世紀初頭の間機能したものと推測する。井戸は掘立柱建物に隣接して木製の方形井戸側をもつものが４基検出された。

11世紀前半には1987年度の調査区では明確な遺構は確認できなくなり、集落の中心は1988年度の調査区に移る。1988年度の調査区では掘立柱建物４棟のほか井戸・土坑・ピットなどが検出された（第31図）。４棟の掘立柱建物にはそれぞれ井戸・土坑が伴い、分布にもまとまりが見られないことから、それぞれ単独で建物小群を構成するものと推測する。

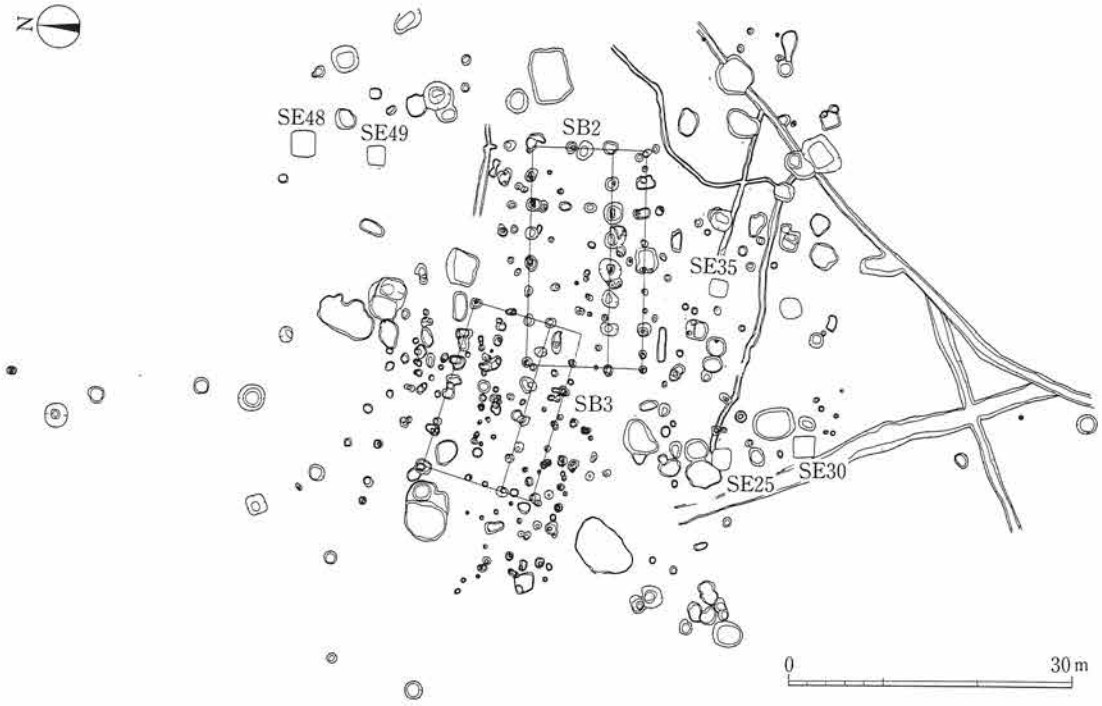
江向遺跡〔小島幸雄他1993〕

頸城平野の西部、一之口遺跡の北側約1km、上越市大字藤巻字江向に位置する。正式報告が無く、詳細は不明だが、掘立柱建物・井戸・土坑等が検出された。出土遺物には8世紀後半から10世紀後半のものが

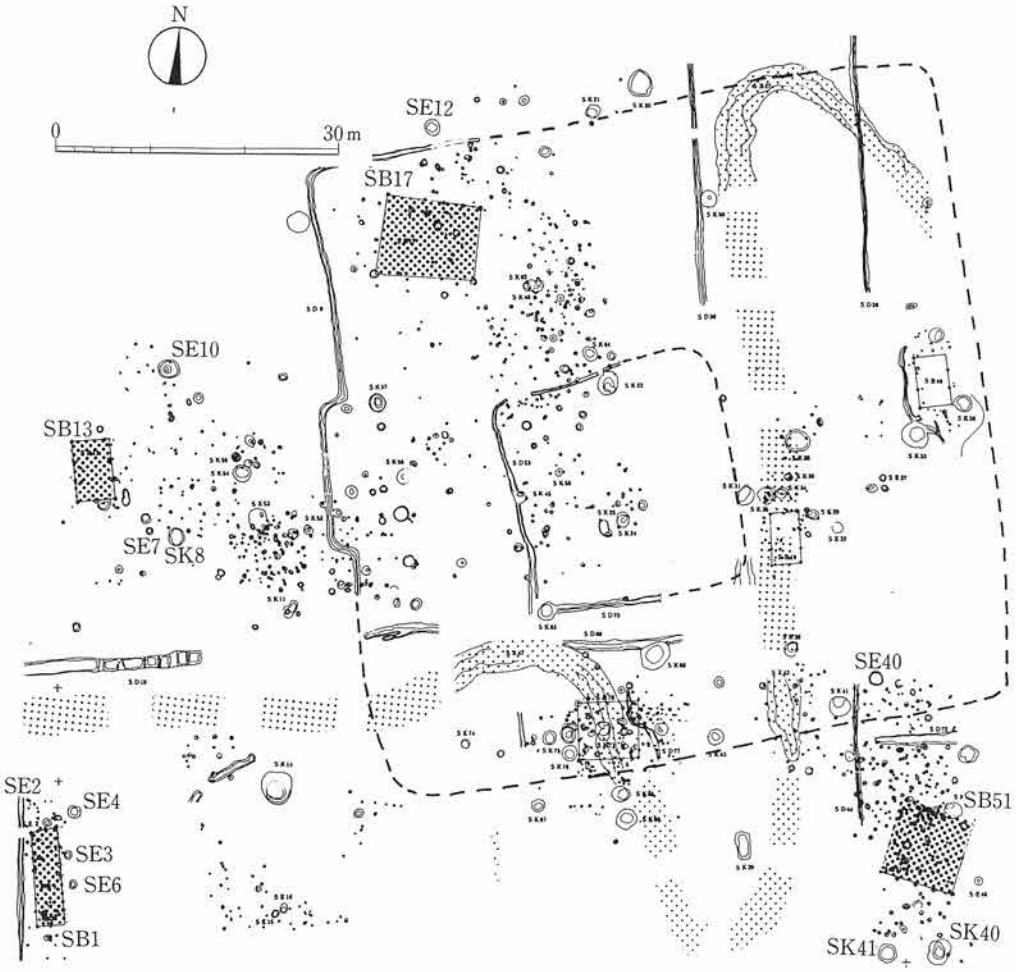




第29図　下新町遺跡における集落の変遷（県教委1984を改変）



第30図　四ッ屋遺跡遺構配置図(1)（調査団1988を転載）

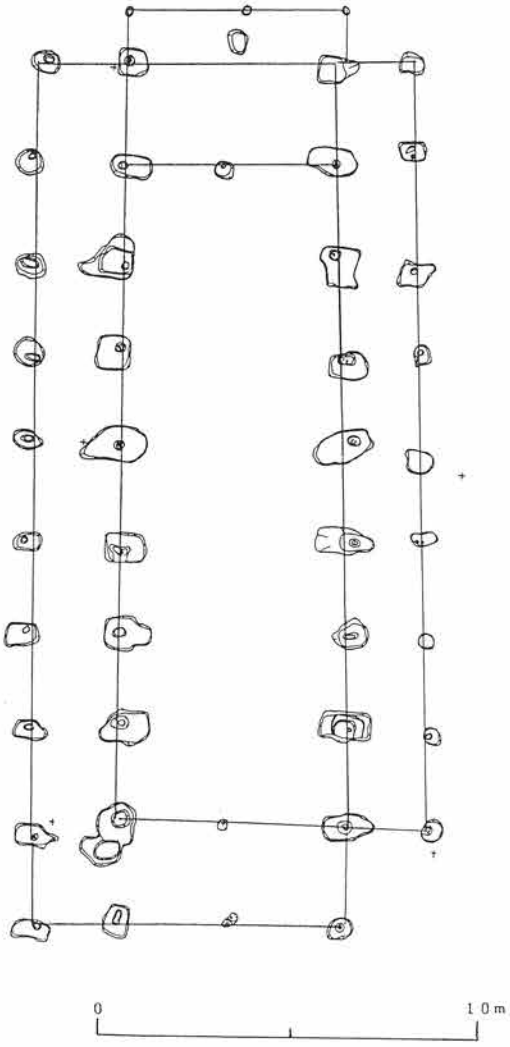


第31図　四ッ屋遺跡遺構配置図(2)（上越市教委1989を改変）

あるが、９世紀後半から10世紀後半の遺物が大半を占める。図示した掘立柱建物（SB100）も当期のものと推測できる（第32図）。SB100は身舎が２×８間で「南面と東面に庇をもち、北面と西面にも庇に類似した施設を持つ」〔小島他1993〕。掘立柱建物の平面積は、北面と西面の施設を含めた場合約230m²、含めない場合でも約220m²となる。

寺前遺跡Ａ－Ⅱ区〔坂井秀弥1990ｃ、新潟県教育委員会1990〕

新潟県のほぼ中央部、柏崎平野と蒲原平野をつなぐ西山丘陵の裾部に位置し、三島郡出雲崎町大字上中条に所在する。正式報告がなく詳細は不明だが、中世の遺物は12世紀前半から15世紀を中心とする。調査では掘立柱建物12棟、井戸４基、溝、土坑、ピットなどが確認された（第33図）。検出された掘立柱建物は、SB310を除いてほぼ同一方向であり、重複が著しい。いずれも同一の建物小群に属するものであり、三方を溝によって区画する。最大の掘立柱建物はSB305であり、平面積約120m²、またSB301も平面積100m²を越える大型の掘立柱建物である。

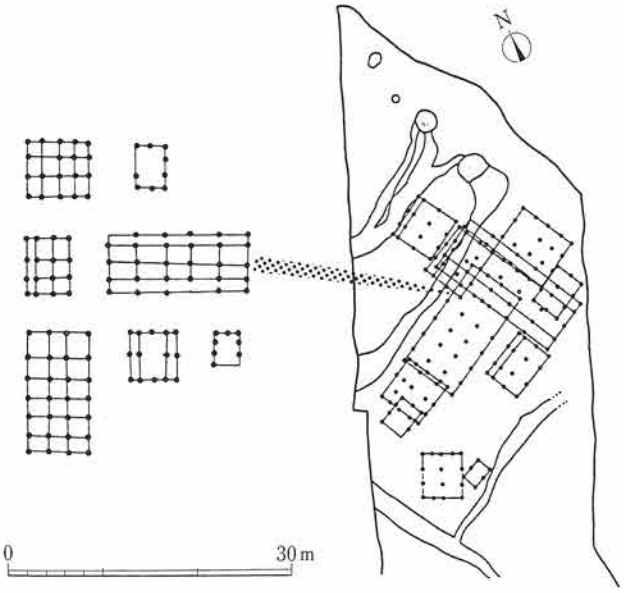


第32図　江向遺跡SB100（小島他1993を転載）

番場遺跡〔新潟県教育委員会1986〕

新潟県のほぼ中央部、島崎川右岸の丘陵裾に位置し、三島郡出雲崎町大字小木字番場に所存する。調査では掘立柱建物13棟、井戸12基、土坑、柵列、溝などが検出された（第34図）。遺跡の存続期間は12世紀後半から15世紀と長期間にわたる。

掘立柱建物は調査区の南西側に集中し、緩斜面を二段に削平しそれぞれに建物を配する。最大の掘立柱建物はSB17であり、平面積は約95m²である。調査区の西側にはこのほかにも平面積50m²をこえる掘立柱建物が複数重複し、大型の掘立柱建物が集中する。また

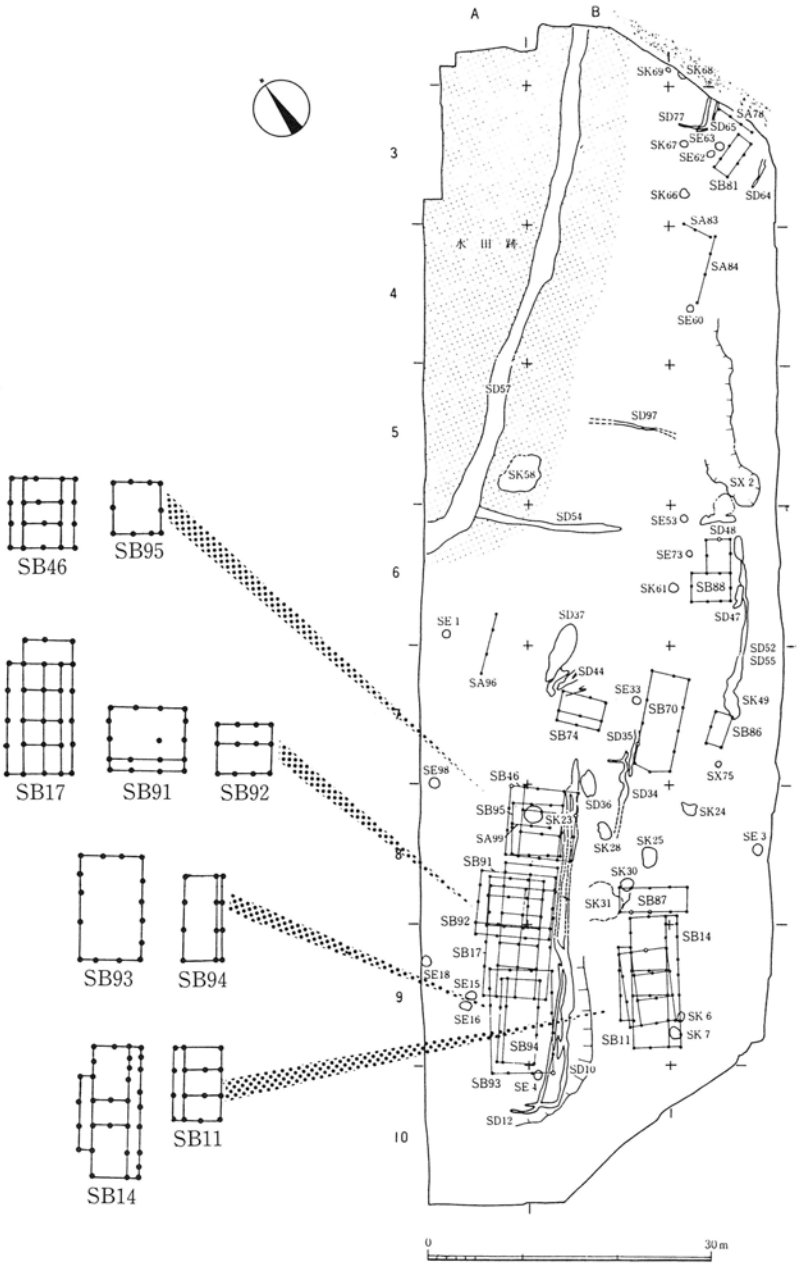


第33図　寺前遺跡Ａ－２地区（県教委1990を改変）

これらの建物群の周辺には土坑・井戸がみられる。調査区の北側には水田跡が確認されたが、これは中世の溝SD57によって切られており、平安時代に遡る可能性がある。畝状遺構は検出されなかった。

樋田遺跡〔吉川町教育委員会1990・1991・1992〕

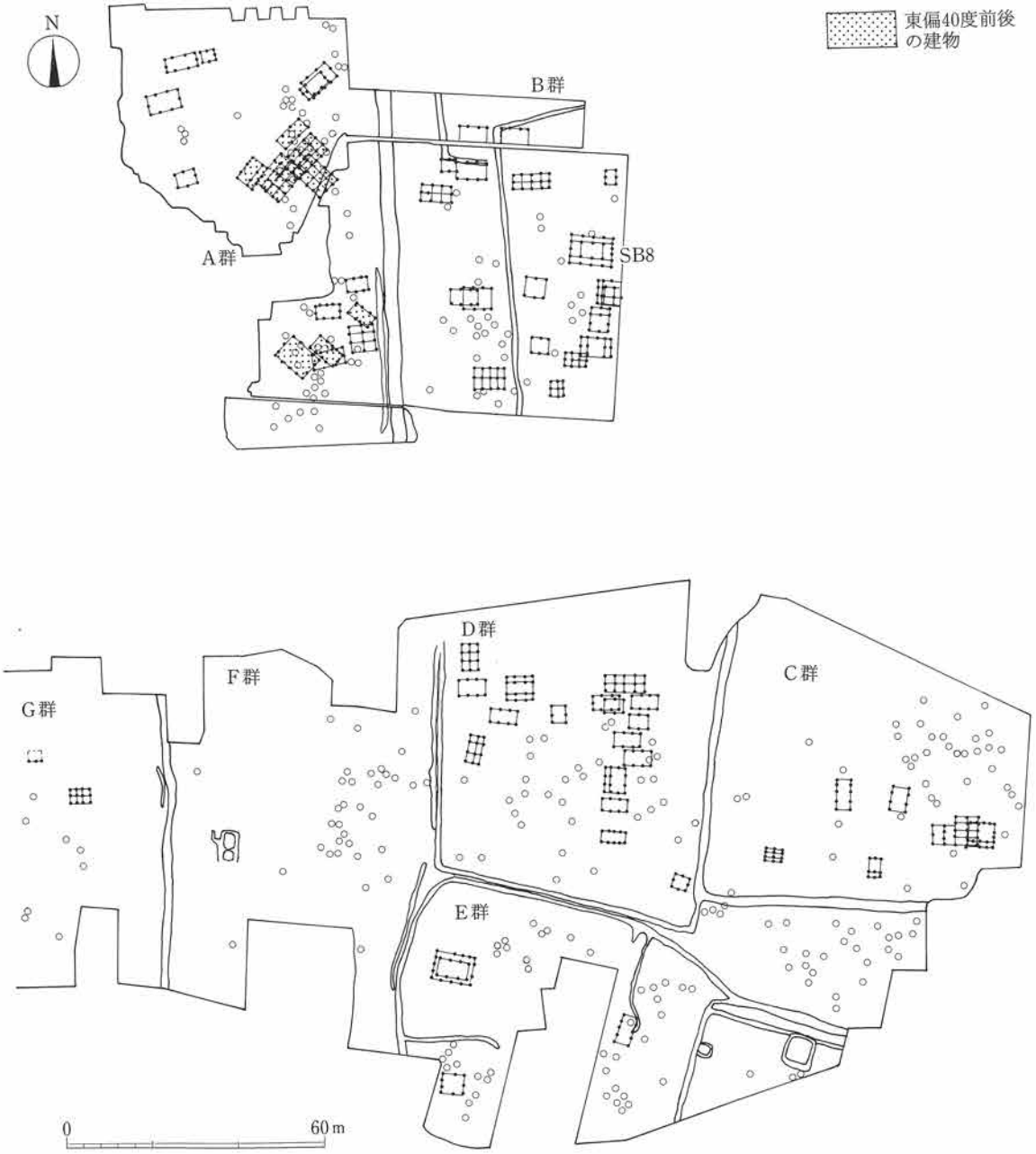
新潟県の南西部に展開する頸城平野の北東部、沖積平野の微高地上に位置し、中頸城郡吉川町大字西野島字樋田・北沢・八幡前・下堤に所在する。調査では掘立柱建物69棟のほか多数の井戸・土坑・ピットが検出された。遺跡の存続期間は13世紀初頭から15世紀である。集落の変遷については明確でないが、掘立柱建物の主軸の方向には、東偏40～50度前後のものと、おおむね方位に一致するものの２種があり、前者から後者への変遷が推測できる(第35図)。ただし東偏40～50度前後の建物は、調査区の北西側にわずかに



第34図　番場遺跡全体図（県教委1986を改変）

確認できるのみであり。存続期間は短かったものと考える。

方位にほぼ一致する掘立柱建物の分布は7群に分けられ、その周囲には溝が方形に巡る。溝の規模は幅1～3m、深さ50cm前後のものであり、防御的な機能を持つものではない。各建物群の掘立柱建物周辺には井戸・土坑が確認できるが、畝状遺構は確認できない。井戸の大半は円形もしくは楕円形の平面形を呈した素掘りのものが大半を占め、木製の井戸側を持つものはB群・D群に各1基確認できるのみである。最大の掘立柱建物はB群に存在する2次調査SB8であり、平面積は約70m²である。掘立柱建物にはあまり重複が見られないが、これが13～15世紀にわたって同時存在したわけではない。掘立柱建物の数が少ないC・E～G群には掘立柱建物が存在しない時期があった可能性もある。これに対してB群では18棟、D群には16棟と他の建物群に比べ多くの掘立柱建物があり、建物の規模も大きいものが多い。おそらく当集落における中核的な建物群として各時期を通じて存在したものと思われる。



第35図　樋田遺跡遺構配置図（吉川町教委1992を改変）

今池遺跡（新潟県教育委員会1984）

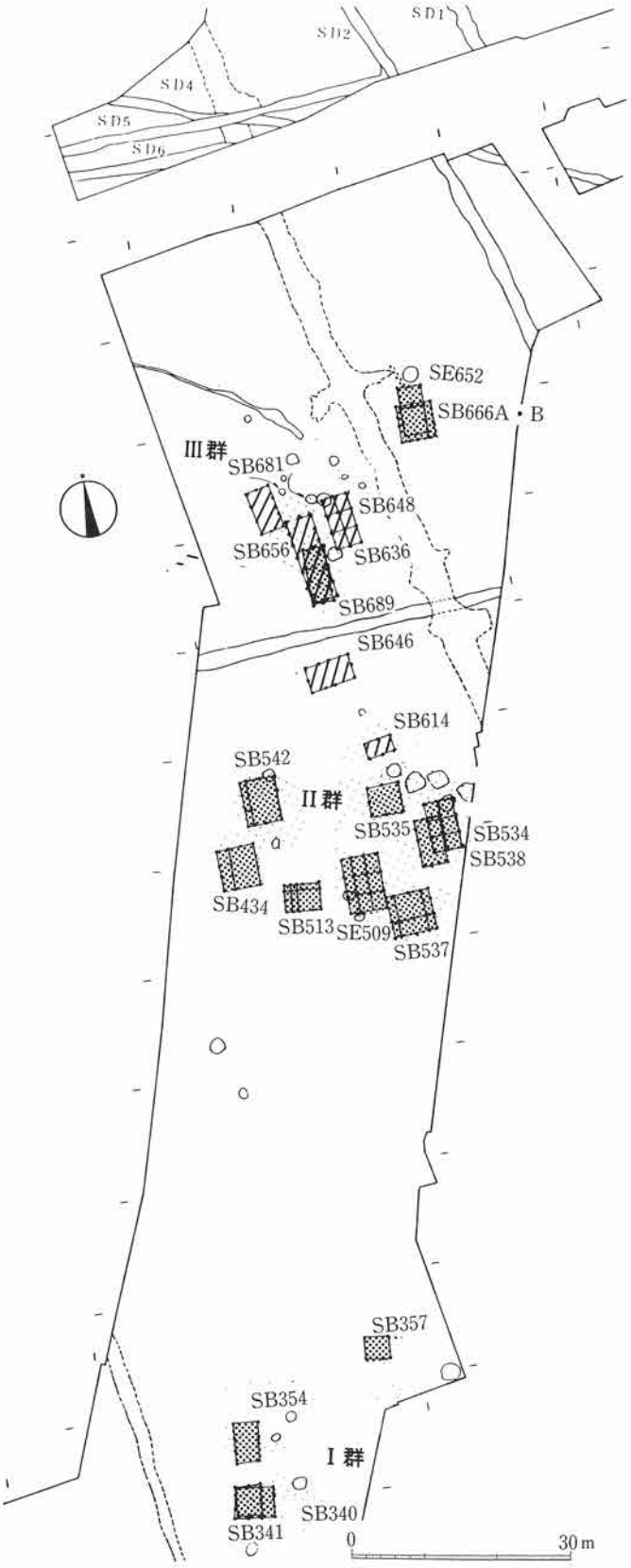
中世の遺構はB地区北半分に集中する。掘立柱建物20棟、井戸14基、土坑8基が検出された。掘立柱建物の分布は3群に分けられ、II群とIII群の間、III群の北側には建物小群を区画すると思われる溝が確認できる（第36図）。

I群は1～3×3間、平面積10～20m²前後の小型の掘立柱建物4棟によって構成される。II群は掘立柱建物10棟構成される。平面積10～20m²前後の小型の掘立柱建物のほかに、3×3間ないし3×4間、平面積30～40m²前後の中型の掘立柱建物が5棟確認できる。III群は6棟の掘立柱建物によって構成される。B群同様平面積30～40m²前後の中型の掘立柱建物と10～20棟前後の小型の掘立柱建物により構成される。三つの建物小群にはそれぞれ土坑と井戸が確認できる。井戸はすべて素掘りのものであり、井戸枠をもつものは確認出来ない。

子安遺跡（新潟県教育委員会1984）

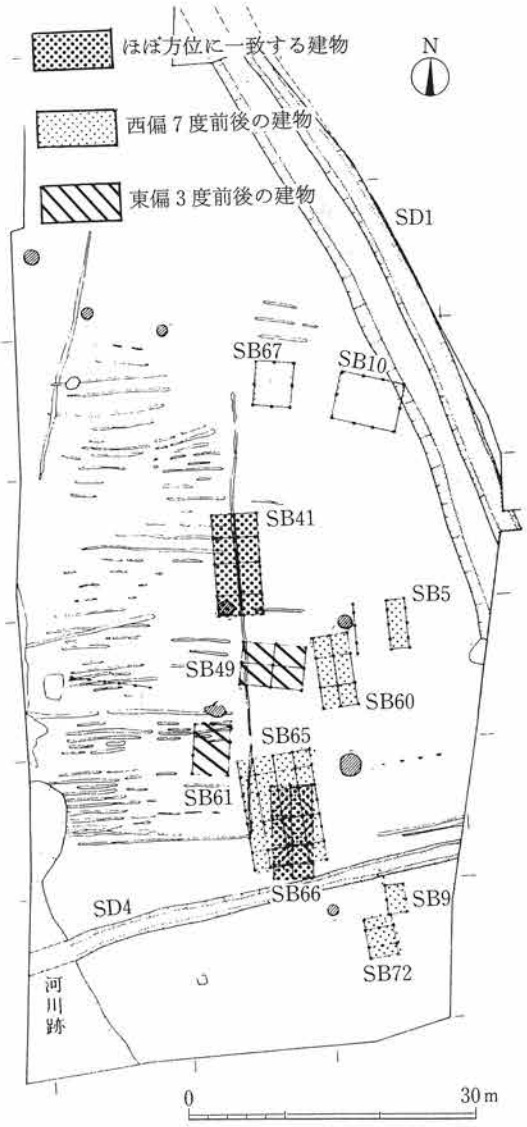
新潟県の南西部に広がる頸城平野の中央部、上越市大字子安に所在する。沖積平野の微高地上に位置し、今池・下新町遺跡とは隣接する。調査では掘立柱建物が11棟が検出されたが、このうち2棟（SB10・67）は平安時代の掘立柱建物である。調査区の西側に検出された畝状遺構も平安時代の可能性が高い（第37図）。中世の遺物は12～13世紀のものと16世紀のものが存在するが、掘立柱建物が存在した時期は12～13世紀と考える。SB65・66とSB9・72の間および、調査区の西側には溝（SD1・4）が存在するが、これは近世のものである。

中世の掘立柱建物9棟には主軸の方向がほぼ南北方向を向くもの（SB41・60）、やや東に振るもの（SB49・69）、西偏7度前後のもの



第36図　今池遺跡（中世）遺構配置図（県教委1984を改変）

（SB５・９・60・65・72）がある。それぞれ時期が異なるものと考えるが、変遷については明確でない。最大の掘立柱建物はSB65であり５×６間、平面積は約90m²を計る。井戸はSB49の周辺と調査区北側に分布が分かれる。いずれも素掘りの井戸であり、井戸枠を持つものは確認できない。



第37図　子安遺跡全体図（県教委1984を改変）

3　集落遺跡の分布

以上のように越後の古代集落は年代・階層により多様な形態をみせるが、これらの集落は以下のように分類できるものと考える。

Ａ類：竪穴住居を主体とする集落であり、掘立柱建物は存在してもそれほど多くない。３～５棟前後の竪穴住居・掘立柱建物からなる建物小群が複数集まり構成される集落であり、建物小群間の空閑地は狭く集村的な景観を持つ。倉庫は存在する場合もあるが、特定の建物小群への帰属は認めにくく、集落内の共同のものであった可能性が高い。また井戸は存在しない。集落の立地は丘陵上・砂丘上など周辺に水田適地を認めにくい場合がままある〔坂井1989〕。一之口遺跡（６世紀末～７世紀中葉）・山畑遺跡・須沢角地遺跡・山三賀Ⅱ遺跡がこれに当たるが、６世紀末から７世紀初頭にかけて成立し平面積80m²以上の大型の竪穴住居が存在するＡⅠ類（一之口遺跡・山畑遺跡）と７世紀末から８世紀前半にかけて成立し、平面積80m²を越える竪穴住居が存在しないＡⅡ類（須沢角地遺跡・山三賀Ⅱ遺跡）に細分する。ＡⅡ類は集落の存続期間が150～200年前後と長期にわるものが多い。７～９世紀の一般集落と考える[11]。

Ｂ類：官衙関連と考える遺跡を一括した。今池遺跡（前半期）・栗原遺跡・八幡林遺跡（Ａ・Ｂ・Ｃ地区）・曽根遺跡・緒立遺跡・的場遺跡がこれにあたる。ＢⅠ～ＢⅢ類の３種に細分した。

ＢⅠ類は掘立柱建物を中心とする集落で、竪穴住居は存在してもそれほど多くない。掘立柱建物２～３×３～４間で平面積30m²前後のものが多いが、100m²以上のものも一定量存在する。掘立柱建物の柱掘方はほとんどのものが方形である。後述するＣ・Ｅ類と比較すると建物小群同士の間隔は狭く、掘立柱建物が比較的密集する。大型の掘立柱建物を中心とした建物小群には倉庫を伴う場合がある。国府・群衙の官人の居宅を想定したい。７世紀末に出現し９世紀末ないしは10世紀初頭までみられる。

ＢⅡ類は掘立柱建物を中心とし、建物小群間の空閑地が狭い点はＢⅠ類と同じだが平面積60m²を越えるような大型の掘立柱建物が確認できない。曽根遺跡がこれにあたる。また、９世紀中葉から後半の下新町もこの類型となる可能性がある。存続期間はＢⅠ類に準ずる。官衙に付属する工房などなんらかの施設を想定したい。

BⅢ類は、大型の倉庫が一定量存在する遺跡である。緒立遺跡では倉庫以外の掘立柱建物は確認できない。また、的場遺跡では倉庫以外の掘立柱建物はいずれも小型である。8世紀初頭には成立するが下限は明確でない。

C類：掘立柱建物を中心とする集落であり、平面積80～100m²前後の大型の掘立柱建物を中心とし、これに平面積40～50m²前後の中型の掘立柱建物、竪穴住居が附属する。B類同様、掘立柱建物の柱掘方は方形のものが多い。建物小群同士の間隔は広いが、これが畑地として利用された可能性は低い。また倉庫・井戸は基本的に持たない。遺跡の立地は台地上が多い。岩野下遺跡・古町B遺跡がこれにあたる。類例としてあげた2例から考えると8世紀前半前後に出現し、9世紀前半を前後する時期には廃絶する。官衙とは直接関連しない有力者の居宅と考える。

なお、岩野下遺跡・古町B遺跡とも古代頸城郡に属する遺跡であるが、沼川郷(岩野下遺跡)、佐味郷(古町B遺跡）という頸城郡の外縁に位置する点は注目しておきたい。

D類：1～3棟程度の掘立柱建物ないしは竪穴住居によって構成される建物小群（掘立柱建物が主で竪穴住居は少ない）が散在する集落。建物小群には土坑を伴う場合があるが、井戸・倉庫は基本的に持たない。建物小群同士の間隔は広く、これは畑地として利用された場合がある。集落の立地は沖積平野の自然堤防・微高地上、扇状地などが多く、集落に隣接して水田が存在した可能性が高い。金屋遺跡・後半期の今池遺跡・8世紀後半から9世紀後半の一之口遺跡・岩田遺跡などかこれにあたる。建物小群間および建物小群内部の階層差は後述するE類と比較すると明確でない。8世紀後半に出現し、11世紀まで確認できるが、個々の集落の存続期間は短く100年を越えることはあまりい。8世紀後半以降の一般集落の一つのタイプと考える。

E類：1～3棟程度の掘立柱建物によって構成される建物小群が散在する集落。個々の建物小群には土坑・井戸・畑地が伴う。建物小群内部および建物小群間には明確な階層差が存在する場合が多く、大規模な掘立柱建物の存在する建物小群には倉庫が附属する場合がある。D類とは井戸の有無により区別する。集落の立地は沖積平野の自然堤防上や微高地に立地する場合が多く、D類同様集落周辺に水田が存在した可能性が高い。9世紀前半に出現し9世紀末以降増加する。個々の集落の存続期間は短く、100年を越えることはあまりない。10世紀前半から後半の一之口遺跡、小丸山遺跡を典型とし、四ツ屋遺跡・江向遺跡・10世紀末～11世紀の下新町遺跡のような一棟単独で存在するものもこれに含める。9世紀前半以降の一般集落の一つと考える。

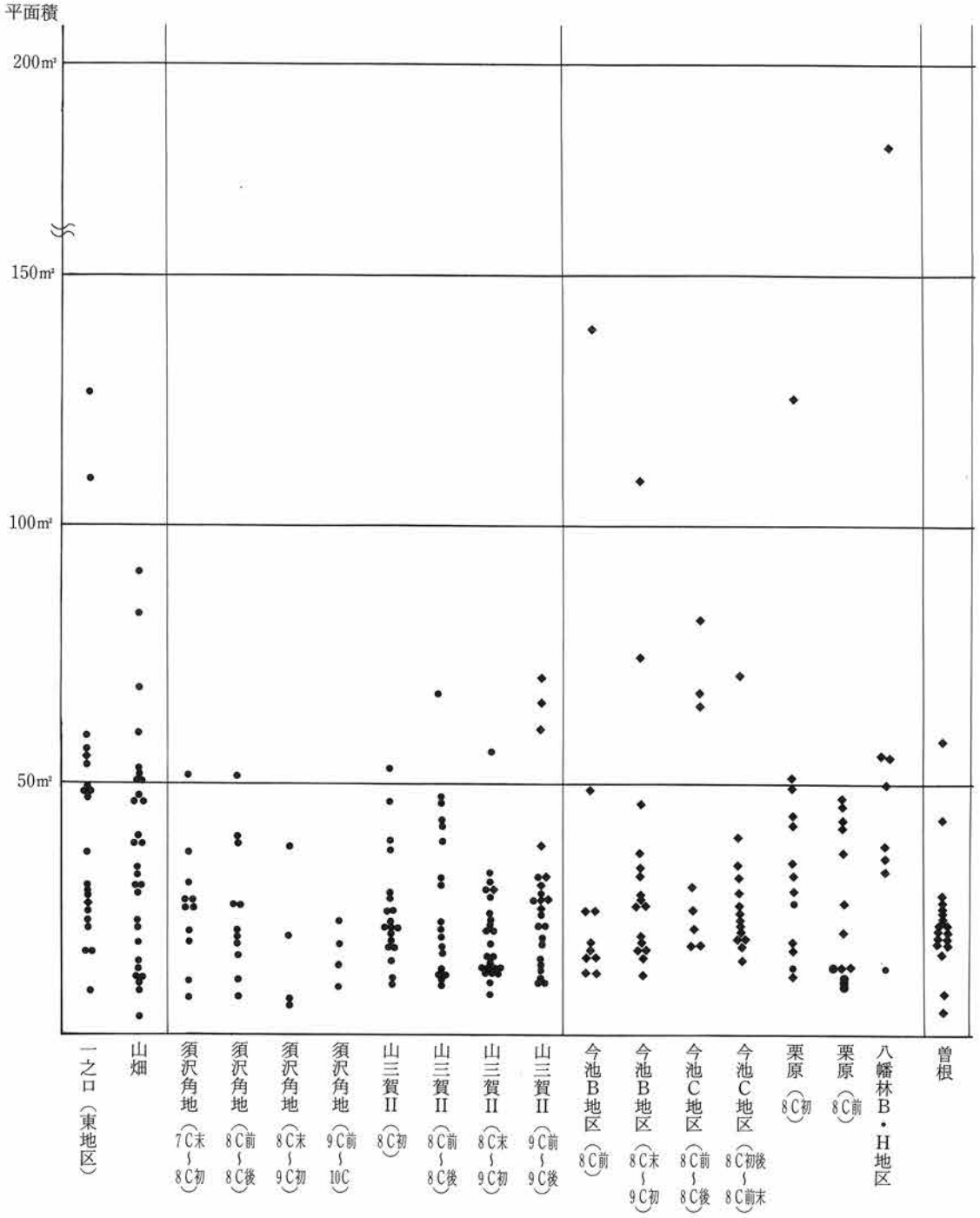
F類：1～3棟程度の掘立柱建物によって構成される建物小群が散在する集落。個々の建物小群には土坑・井戸が伴い、建物小群の四周を溝で方形に区画する場合もある。建物小群内部および建物小群間には明確な階層差が存在する。このうち大規模な掘立柱建物は総柱で、複数重複して検出される場合が多い。また個々の集落の存続期間は長く、100年以上存続する例が多い。E類とは明確な区別はむずかしいが、総柱建物の量比、存続期間の長さにより区別する。集落の立地は沖積平野の自然堤防上や微高地に立地する場合が多く、D・E類同様集落周辺に水田が存在した可能性が高い。100m²前後の掘立柱建物が存在するFⅠ類（寺前遺跡・番場遺跡・中世の子安遺跡）と、それ以下の掘立柱建物のみで構成されるFⅡ類（中世の今池遺跡・樋田遺跡）がある。12世紀後半以降の一般集落の1つのタイプと考える。

4　古代集落の変化と画期

このように考えた場合6世紀から13世紀の越後の集落に7世紀初頭・7世紀末から8世紀初頭・8世紀

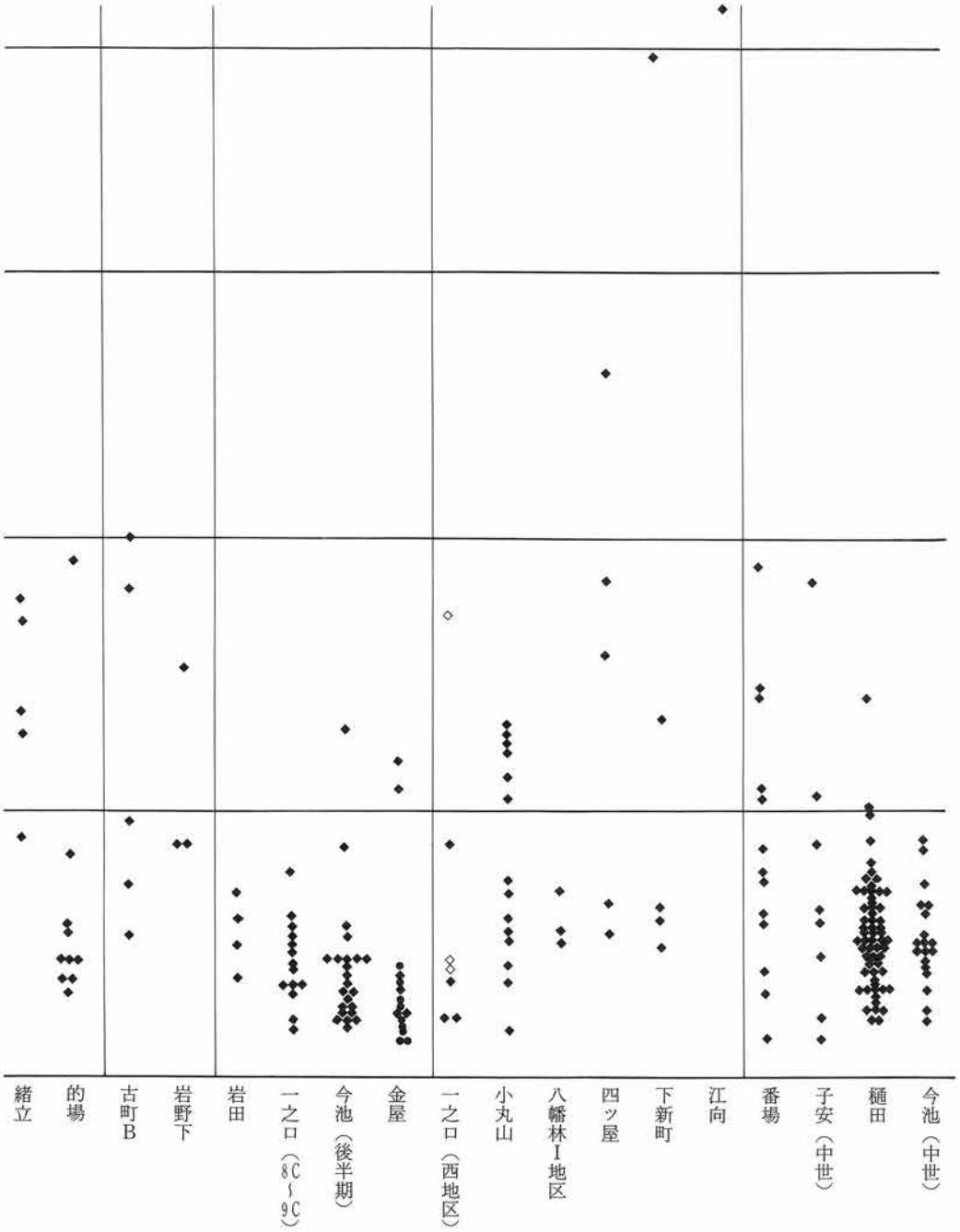
後半・９世紀前半・９世紀末から10世紀初頭・12世紀前半の６つの画期が存在する。

７世紀初頭はＡＩ類の集落が出現する時期である。越後における古墳時代後期の集落の様相は明らかではないが、２～４棟前後の竪穴住居・掘立柱建物からなる建物小群が複数集まり構成されるＡＩ類は、古墳時代後期と比較し集村的な景観を持つ大規模な集落であり、その成立には在地の集落の大規模な改変をともなったものと推測する。ＡＩ類は坂井秀弥氏のいう「律令型村落」の原型ともいえるものであり、金属器（仏器）志向の土器の出現とともに、古墳が一定量存在する７世紀を古墳時代とせずに古代とすることの理由の一つはここにあり、重要な変化の一つとして評価したい。



7世紀末から8世紀初頭は、官衙関連遺跡と推測するB類が成立する。またC類も当期に成立した可能性が高い。一般集落においても変化が見られ、AⅠ類は確認できなくなり、新たにAⅡ類が出現する。一般集落から平面積80m²をこえる大型の竪穴住居が確認できなくなることと、官衙関連遺跡と推測するB類の成立は一連のものと考えられ、当期には官衙関連遺跡の成立にともないそれまで一般集落のなかに存在した有力者の多くが、律令官人として官衙周辺に移動した可能性が高い。また方形の柱掘方を持つ大型の掘立柱建物が確認できるようになるのも当期以降であり、有力者の住まいにも変化が確認できる。

8世紀後半にはD類が出現する。9世紀前半以降明確となる集落の散村化の傾向は8世紀後半にその端

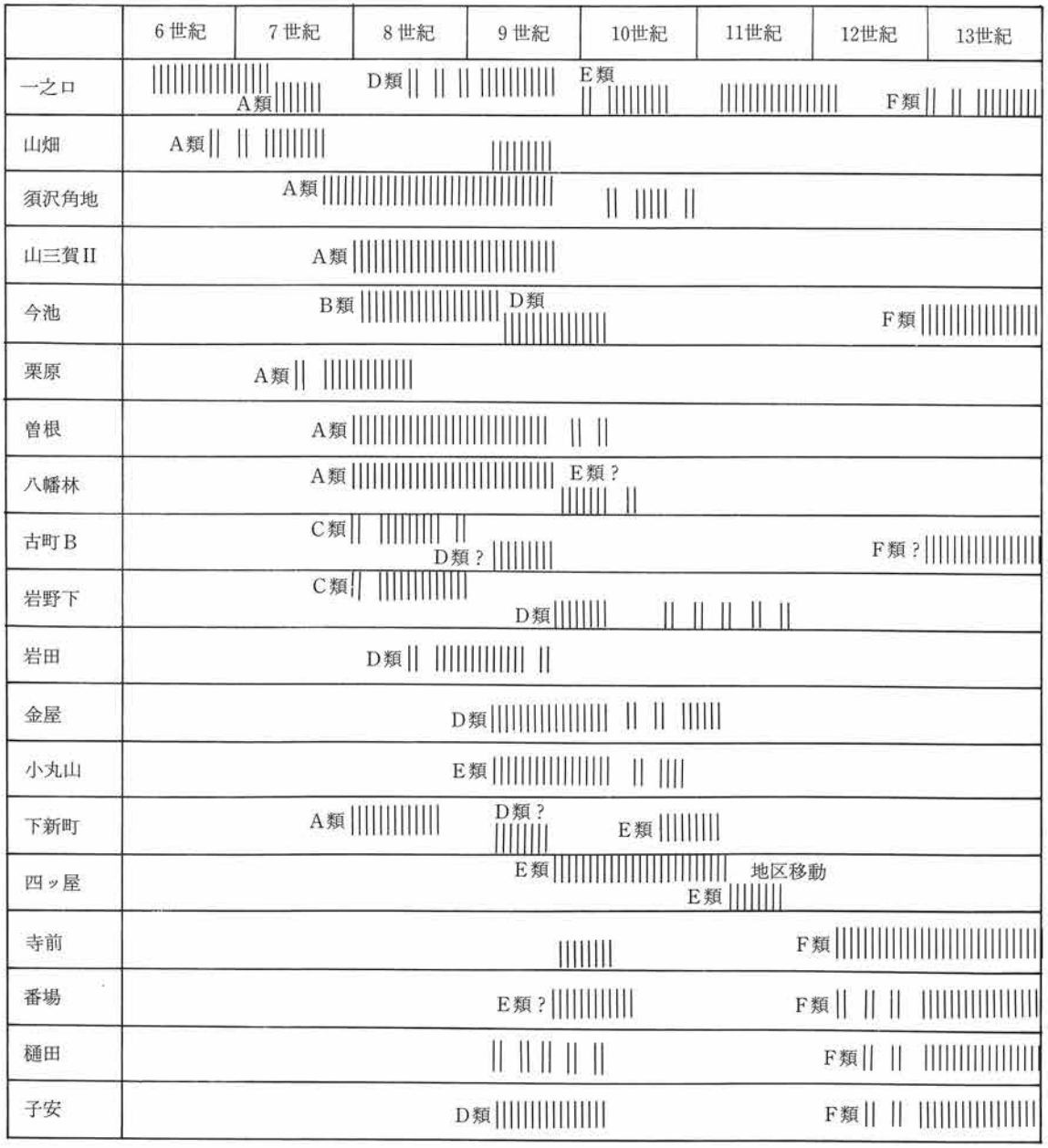


第38図　主要遺跡における建物の平面積

緒がある。ただし、当期におけるD類の数はそれほど多くないものと考える。また、A・B・C類にも変化は認めにくい。

9世紀前半にはE類が出現する。またこれと同時に須沢角地遺跡や岩野下遺跡・古町B遺跡のように規模を縮小するものや廃絶するもの、今池遺跡のように遺跡そのものは存続するが官衙関連遺跡から一般集落へと性格に変化が見られるもの、山三賀II遺跡のように建物小群に附属する倉庫が存在しない状況から特定の建物小群に倉庫が附属するような状況へ集落の構造が変化するものなど、A・B・C類の多くが変質・縮小・廃絶する。集村的なA類が人口増加を生じやすく個々の人間を把握しやすい一方で、未墾地の開発と開発後の維持には困難を伴う場合が多いが、E類はその逆で点在する未懇地の開発とその後の維持には適したものといえる。当期は7世紀以来の一連の動向が転換する大きな画期として評価できるものと考える。

10世紀初頭にはE類が増加し、D類は引き続き確認できる一方で、A・C類は確認できなくなった。8



第39図　主要遺跡の消長

世紀後半にあらわれた動向の確立していく時期と考える。当期の一般集落と考えるE類には、平面積60m²以上の大型の掘立柱建物が存在する場合が多い。この背景には農民の階層分化という側面は無視できないが、官衙関連遺跡と考えるB類の消滅と合わせて考えるならば、律令期には官人として官衙周辺に居住していた有力者の一部が、当期には中核的な存在として新たに集落を再編していった結果とも考えうる。(2)

11世紀代の集落の様相は明らかではないが、12世紀前半にはF類が出現した。F類の集落景観はE類と共通する部分が多いが、建物小群を溝で区画する例があり、大型の掘立柱建物には総柱構造のものが一定量存在するなど異なる点がいくつかある。またE類と比較し遺跡の存続期間が長いものが多い。長期間存続する集落遺跡は古代前期にも存在するが。その背景には差があったものと考えており、これについては次説で述べたい。

結　　び

以下では建物小群の動向を中心に古代集落と中世集落の差異について私見を述べ結びとしたい。

越後における古代前期の集落には、岩野下遺跡や古町B遺跡のようにそれ程規模の大きくない遺跡も存在するが、山畑遺跡や山三賀II遺跡・今池遺跡のような大規模で長期間存続する遺跡が多い。ただし遺跡を構成する個々の建物小群をみた場合、それぞれが長期間安定して存続するわけではない。山三賀II遺跡や須沢角地遺跡における建物小群を構成する竪穴住居や掘立柱建物の数は時期によりかなり変動がみられ、大型の竪穴住居・掘立柱建物も同一の建物小群内に累世的に構築されるわけではない。今池遺跡（前半期）のB建物群では掘立柱建物の主軸方向が東偏4度前後のものから東偏8度前後ののに変化するが、この間には約50年前後の空白期間が存在した可能性が高い。またC建物群は8世紀初頭から9世紀初頭にかけて継続的に建物群が存続するが、8世紀後半には掘立柱建物の配置に大幅な変更が行われた。

吉田孝氏は日本の古代社会を双系的な性格を強く残した社会であるとする立場から一般の階層の建物小群を「夫婦と子供からなる小家族が複数集まった」もので、特定の個人や婚姻を媒体として双系的に結びついた集団的な規律を欠いたゆるやかな集合体であり、「財産所有の主体にもなっていなかった」とした。また「財産や地位が庶民から卓越し、その相続や継承が問題となる階層においては、特定祖先との系譜関係を軸とした集団が形成されているが」、このような集団においても、首長位は傍系親を含む比較的広い範囲で移動し、首長の「政治的・社会的地位の変動によって絶えず再編成されていた」ことを指摘している〔吉田1983〕。山三賀II遺跡・須沢角地や今池遺跡でみた建物群・建物小群の動向はこのような解釈とよく一致するものである。

これに対し12世紀前半以降は寺前遺跡A－2地区・番場遺跡にみるように、大型の掘立柱建物が複数重複してみられるようになる。このような近接した位置での数回におよぶ建物の建て替えは、建物小群が安定して存続したことを示すものと考える。中世前期の建物小群のなかには樋田遺跡A・C・E・F群や今池遺跡A群のように安定して存続したとは考えにくい建物小群も存在するが、大型の掘立柱建物をふくむ集落内の中核的な建物小群は長期間安定して存続するものが多い点は重要である。

11世紀後半から12世紀前半にかけて中央貴族の中には「氏」が分立し、直系の男子を軸に家督が相続される「家」が確立しいくが〔吉田1983・石井1993等〕、上述した建物小群の動向は、12世紀以降越後の一般集落においても直系の男子を軸に家督が相続される「家」が確立していったことを示すものと考える。そしてこのような「家」の確立が中世村落の長期存続を支えたものと推測する。

もちろんこのような「家」の確立は、11世紀以降急速に進展したものではない。これには9世紀前半か

ら10世紀にかけての一連の変化が重要であったものと考える。9世紀前半以降の建物小群には固有の井戸と畑地を持つものが確認できるようになり、10世紀にはこれがかなり一般化する。当期における集落の存続期間の短さからもわかるように、不安定な建物小群の様相は10・11世紀も基本的には変わらなかったもの考えられるが、建物小群は「消費・生産においてある程度自立した存在」〔坂井1989〕となり、前代と比較すると建物小群内の紐帯も強まり、「家」の成立に重要な契機となったことは容易に推測できる。

また、本稿では触れることができなかったが、9世紀末から10世紀にかけて、多数の土師器無代椀と少数の高級品（施釉陶磁器・漆器）からなる食器様式が村落内の中核的な建物小群を中心に成立するが〔坂井1990・春日1993〕、このような食器様式は家長の地位の上昇と直系の男子を軸とする家督の相続の確立と強い関連を持ちながら展開したものと考える。

以上越後における古代集落遺跡の推移についてみてきたが、このような動向は他地域と多くの点で共通するものと考えるが、異なる点の幾つが存在するであろう。本稿では他地域との比較についてはまったく触れることがでなかった。今後の課題としたい。

本稿が成るにあたっては川畑　誠氏、北野博司氏、木立雅朗氏、坂井秀弥氏、笹沢正史氏、高橋　勉氏、滝沢規朗氏、田中　靖氏、出越茂和氏、原　芳明氏ほか多くの方々から御教示をいただいた。文末ながら記して感謝いたします。

註

1）ここでいう越後とは現在の新潟県のうち佐渡を除いた地域のことを指す。そのため古代における行政的な地域区分である越後とは時代によって一致しない場合がある。

2）新潟県以外の北陸地方では、湯尻修平氏〔湯尻1983〕・岸本雅敏氏〔岸本1986〕・田嶋明人氏〔田嶋1983〕・森秀典氏〔森1988〕・駒見和夫氏〔駒見1986〕・宇野隆夫氏〔宇野1991〕等の研究がある。また近畿地方では小笠原好彦氏〔小笠原1979〕・広瀬和雄氏〔広瀬1986・1989〕の一連の研究がある。

湯尻氏・岸本氏の研究は掘立柱建物の平面積を分析対象としたもので、集落内の最大の掘立柱建物の規模に注目し集落遺跡の分類を行っている。本稿の第39図のグラフは両氏と同様な方法によるものである。

広瀬和雄氏の論考〔広瀬1989〕は7世紀初頭の画期の評価の内容等について本稿と異なる点は存在するが、古代後半から中世前期にかけての集落の変化や様相や集落分析の方法については多くの点で参考となった。

また、宇野隆夫氏・田嶋明人氏の論稿は、本稿とは分析方法は異なる部分が存在するが、画期の設定とその評価については学ぶべき点が多かった。

3）9世紀前半から11世紀の年代については、ここで示した年代よりも25～50年さかのぼる可能性がある。

4）6～7世紀の掘立柱建物と8～9世紀の掘立柱建物については識別が難しい。報告〔新潟県教育委員会他1994〕ではSB676(5)・1380(5)・5006(5)・654(5)・5010(5)・634(4)については6～7世紀の可能性があるとするが、年代の特定は避けている。またSB5001(5)・5002(5)・5004(5)・5006(5)は8～9世紀の可能性が高いとする。本稿で柱穴が円形で小型のものについては報告とは異なり6～7世紀の掘立柱建物と考えた。また本文中でも述べたように、平面系が矩形で大型の柱掘方を持ち束柱を持たない掘立柱建物は6～7世紀の倉庫と考えた。

5）調査で検出された掘立柱建物はいずれも中世ないしはそれ以降のものである。

6）報告〔新潟県教育委員会1984〕では東偏8度前後のものと4度前後のものが混在して併存したとする。

7）主用建物群（A～C建物群）と分布が重複する9世紀前半以降の掘立柱建物については、柱穴の規模や埋土から判断した。

8）方形井戸側を持つ井戸が8世紀代であることは田中靖氏より御教示を受けた。

9）SB17・36の理解については報告書と異なる部分がある。

10）SB141・169は10世紀代の溝を切って建てられており、10世紀以降のものと考える。

11）本稿では触れなかったが十日町市馬場上遺跡もA類の可能性が高い。

12）脱稿後南蒲原郡田上町道下遺跡の発掘調査報告書が刊行された〔田上町教育委員会1994〕。また三島郡和島村門新遺跡の発掘調査が行われた〔新潟県和島村教育委員会1994b〕。両遺跡とも10世紀代の平面積200m²前後の大型の掘立柱建物が検出されている。

参考文献

明石一紀　1984「古代・中世の家族と親族」『歴史評論』416号　のち同1990『日本古代の親族構造』吉川弘文館収録

浅香年木　1978「第二編　第三章　古代における手取扇状地の開発」『古代地域史の研究』法政大学出版局

新井市教育委員会　1984『栗原遺跡第７次・第８次発掘調査報告書』

石井　進　1993「11～13世紀の日本」『岩波講座　日本歴史』岩波書店

宇野隆夫　1978「井戸考」『史林』第65巻５号　史学研究会　のち同1989『考古資料に見る古代と中世の歴史と社会』真陽社収録

宇野隆夫　1985「古代的食器の変化と特質」『日本史研究』208号　日本史研究会　のち同1989『考古資料に見る古代中世の歴史と社会』真陽社収録

宇野隆夫　1991『律令社会の考古学的研究―北陸を舞台として』桂書房

遠藤孝司　1987「第Ⅴ章―１　掘立柱建物について」『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第46集　岩野下遺跡』新潟県教育委員会

大山喬平　1977「中世社会のイエと百姓」『日本史研究』176号　日本史研究会　のち同1978『日本中世農村史の研究』岩波書店収録

小笠原好彦　1979「畿内および周辺地域の掘立柱建物集落の展開」『考古学研究』第18巻２号考古学研究会

小笠原好彦　1989「古墳時代の竪穴住居集落に見る単位集団の移動」『国立歴史民俗博物館研究報告』第22集　国立歴史民俗博物館

春日真実　1993「王朝国家期の越後―上越市一之口遺跡（西地区）・新潟市小丸山遺跡を事例として」『新潟考古』第４号　新潟県考古学会

春日真実　1994「第Ⅵ章―２　古墳時代後期の土器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集　一之口遺跡（東地区）』新潟県教育委員会、新潟県埋蔵文化財調査事業団

川村浩司　1989「越後の古代集落素描」『新潟考古学談話会会誌』第３号　新潟県考古学談話会

岸本雅敏　1986「新町Ⅱ遺跡の古代掘立柱建物群の性格」『新町Ⅱ遺跡の調査』婦中町教育委員会

鬼頭清明　1979『律令国家と農民』塙書房

鬼頭清明　1985『古代の村』古代日本を発掘する６　岩波書店

木村宗文　1984「文献からみた古代・中世の頸城」『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第35集今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県教育委員会

越路町教育委員会　1990『岩田遺跡』

小島幸雄・中西　聰・笹川修一　1993「上越市江向遺跡の調査」『新潟県考古学会第５回大会　研究発表会発表要旨』

坂井秀弥　1984「今池遺跡群における奈良・平安時代の土器」『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第35集　今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県教育委員会

坂井秀弥　1985「頸城平野古代・中世開発史の一考察」『新潟史学』18　新潟史学会

坂井秀弥　1989a「第Ⅶ章　まとめ」『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第53集　山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会

坂井秀弥　1989b「越後における古代手工業生産の様相」『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工業生産史研究会

坂井秀弥　1990a「越後平安期土器編年素描」『東国土器研究』第３号　東国土器研究会

坂井秀弥　1990b「越後における古代末・中世の土器様相と画期」『シンポジウム　土器から見た中世社会の成立』シンポジウム実行委員会

坂井秀弥　1990ｃ「出雲崎町寺前中世遺跡の調査」『新潟県考古学会第２回大会　研究発表会研究要旨』

坂井秀弥　1991「地籍図からみた越後・佐渡の条里と開発」『条里制研究』第７号　条里制研究会

坂井秀弥　1994「庁と館、集落と屋敷―東国古代遺跡にみる館の形成」佐藤　信・五味文彦編『城と館を掘る・読む―古代から中世へ』山川出版社

坂井秀弥・鶴間正昭・春日真実　1991「佐渡の須恵器」『新潟考古』２号　新潟県考古学会

坂本賞三　1970「王朝国家体制」『講座　日本史』２　東京大学出版会

上越市教育委員会　1978『岩木地区発掘調査報告書Ⅰ』

上越市教育委員会　1979『岩木地区発掘調査報告書Ⅱ』

上越市教育委員会　1989『四ッ屋遺跡発掘調査概報』

鈴木俊成　1994「第Ⅵ章―１　平安時代の土器、５　掘立柱建物について、６古墳時代後期の竪穴住居について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集　一之口遺跡（東地区）』新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団

田上町教育委員会　1994『道下・白地遺跡』

田嶋明人　1983「奈良・平安時代の建物グループと集落遺跡」『北陸の考古学』石川考古学研究会々誌第26号　石川考古学研究会
田嶋明人　1986「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
田嶋明人　1988「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム　北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編
石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
都出比呂志　1989「第三章一三　古墳時代集落と階層分解」『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
新潟県教育委員会　1982『栗原遺跡第４次・５次発掘調査概報』
新潟県教育委員会　1983『栗原遺跡第６次発掘調査概報』
新潟県教育委員会　1984『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第35集　今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』
新潟県教育委員会　1985『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第37集　金屋遺跡』
新潟県教育委員会　1986『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第40集　一之口遺跡西地区』
新潟県教育委員会　1987a『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第46集　岩野下遺跡』
新潟県教育委員会　1987b『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第48集　三島郡出雲崎町番場遺跡』
新潟県教育委員会　1989『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第53集　山三賀Ⅱ遺跡』
新潟県教育委員会　1990「寺前遺跡（Ａ－２区）」『新潟県埋蔵文化財だより』５
新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団　1994『新潟県埋蔵文化財調査報告書第　集一之口遺跡東地区』
新潟県黒埼町教育委員会　1993『緒立c遺跡発掘調査概報』
新潟市教育委員会　1987『新潟市小丸山遺跡発掘調査概報』
新潟市教育委員会　1989『1988年度埋蔵文化財発掘調査報告書』
新潟市教育委員会　1991『1989年度埋蔵文化財発掘調査報告書』
新潟市史編さん原史古代中世部会　1994『新潟市史　資料編１　原史古代中世』
新潟県青海町教育委員会　1988『須沢角地Ａ遺跡発掘調査報告書』
新潟県豊浦町教育委員会　1981『曽根遺跡Ⅰ』
新潟県豊浦町教育委員会　1982『曽根遺跡Ⅱ』
新潟県和島村教育委員会　1992『八幡村遺跡』
新潟県和島村教育委員会　1993『八幡村遺跡』
新潟県和島村教育委員会　1994a『八幡村遺跡』
新潟県和島村教育委員会　1994b『門新遺跡現地説明会資料』
原口正三　1977「古代・中世の集落」『考古学研究』第23巻４号　考古学研究会
広瀬和雄　1986「中世への胎動」『岩波講座　日本考古学６変化と画期』岩波書店
広瀬和雄　1989「畿内の古代集落」『国立歴史民俗博物館研究報告』第22条　国立歴史民俗博物館
藤塚　明　1993「的場遺跡の概要と予測―低湿帯遺跡の一例として」『市史にいがた』12　新潟市史編纂室
森　秀典　1988「古代の掘立柱建物について」『立山町文化財調査報告第６冊　浦田遺跡第二次発掘調査概報』立山町教育委員会
吉岡康暢　1983「奈良・平安時代の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会
吉川町教育委員会　1989『樋田遺跡発掘調査概報』
吉川町教育委員会　1990『樋田遺跡第二次発掘調査概報』
吉川町教育委員会　1991『樋田遺跡第三次発掘調査概報』
吉川町教育委員会　1993『古町Ｂ遺跡発掘調査報告書』
吉田　晶　1980『古代村落史序説』塙書房
吉田　孝　1976「律令制と村落」『岩波講座　日本歴史』三巻、後改稿して同1983『律令国家と古代の社会』収録
四ッ屋遺跡発掘調査団　1988『四ッ屋遺跡発掘調査報告書』

小重（こじゅう）遺跡出土の備蓄銭について

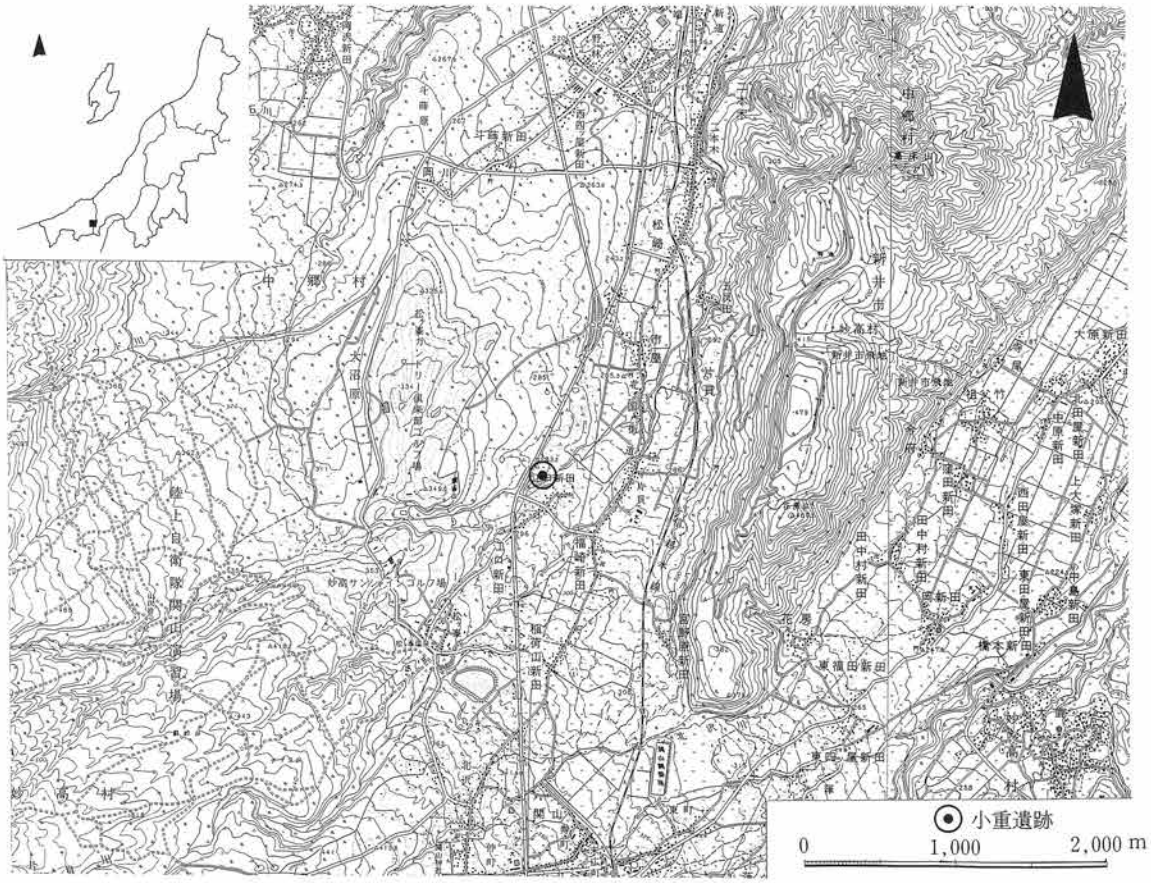
戸根与八郎・鈴木俊成

1　は　じ　め　に

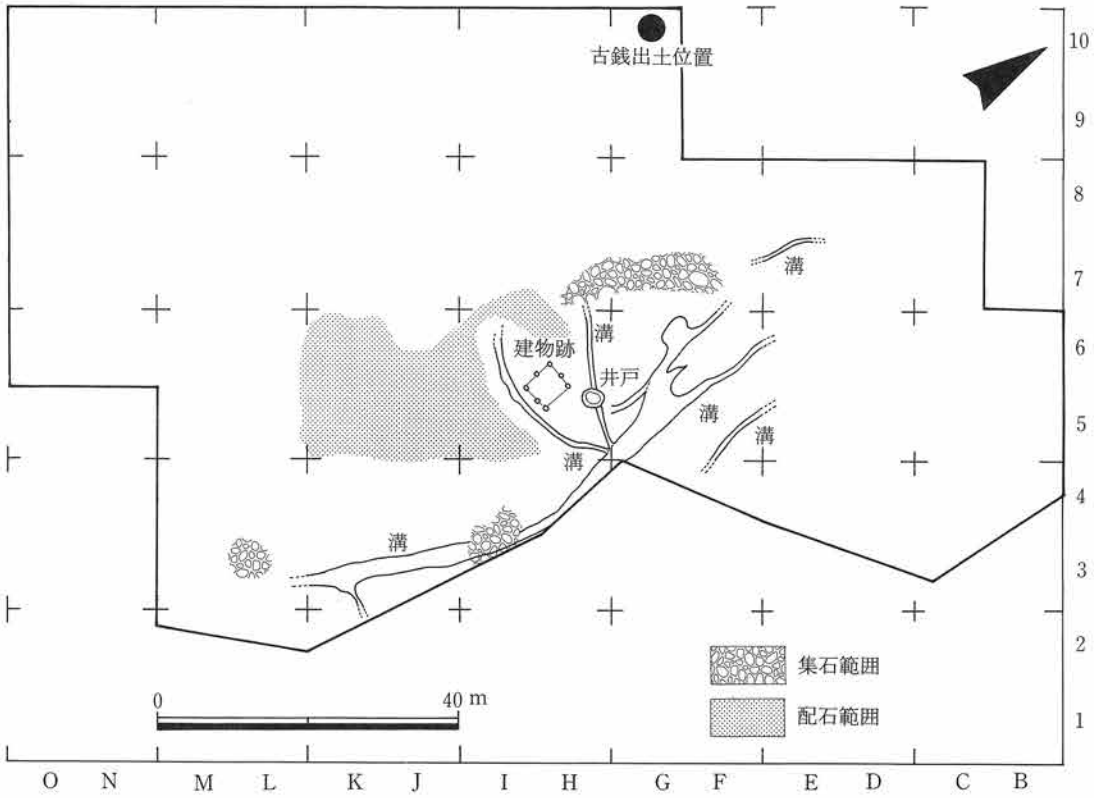
出土銭貨の研究は郷土史の解明につながるばかりでなく、当時の広域的な経済活動及び埋納の状態から推測される民俗学的思考・行動を解明する上で貴重な資料を提供してくれる。しかしながら、出土銭貨の多くは工事等により偶然発見される場合が多く、出土状態から古銭埋納の様子までを記録にとどめるものは少ない。このようにして出土したものは、貴重な資料であるにもかかわらず情報量が極めて少ないと言えよう。

本誌で紹介する小重遺跡の備蓄銭は、遺跡の発掘調査により出土したもので、出土から取り上げまで記録化され、その後の基礎整理においても、さし単位の数量・銭貨名を一覧化することができた。ここに基礎データを広く公開し、研究の早期進展をはかるため、本報告の前に本誌をかりて速報としたい。なお、基礎データーの集計は主に平成２年に行っている。

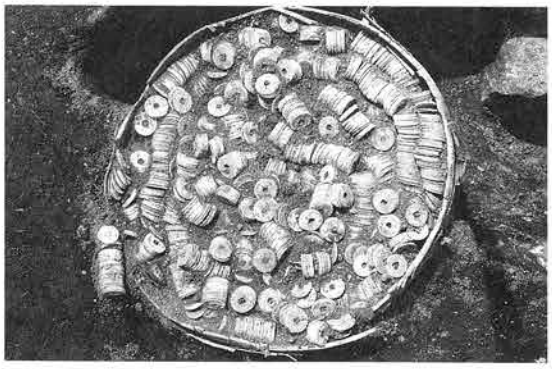
報告するにあったて慶応大学の鈴木公雄先生、東京都埋蔵文化財センターの竹尾　進氏から貴重なご教



第１図　小重遺跡の位置（国土地理院発行　1：25,000地形図　猿橋（H.3.6.1）・関山（H.3.11.1）を1/2縮尺）



第2図　小重遺跡　遺構略配置図（主に中世以降）



第3図　古銭出土状況

第4図　出土古銭サシ状態

第5図　集石群

第6図　集石下の墓坑群

示をいただいた。特に、竹尾氏からは銭貨の判読について御協力並びに御指導いただき、その成果の一部を掲載させていただいた。記して感謝申し上げる。

2　遺跡の概要と備蓄銭の出土状況

遺跡は長野県との県境に近い中頸城郡中郷村大字市屋字横引に所在する。遺跡周辺は南西に位置する妙高山の火砕流により、起伏のある緩斜面を成す。遺跡の標高は約280mで南に大きく傾斜し、東に流れる小河川に区切られ、舌状の地形をなしている。

調査は上新バイパス建設に伴い平成元年・2年の2か年にわたり実施され、約11,200m²を調査した。遺跡の時期は縄文時代前期と中近世に大きく2分されるが、ここでは古銭を中心とした中近世に絞り、その概要を説明する。

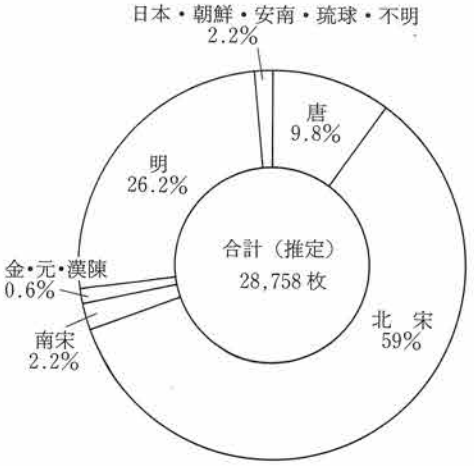
調査区のほぼ中央には、掘立柱建物1棟と井戸・溝が発見され、その北西には集石墓群と考えられる該期の遺構が検出された（第2図）。遺物は散発的ではあるが、珠洲焼片・青磁片等が出土している。これらの遺構と備蓄銭の関係は本格的な整理を待たなければ明らかにはならないが、時期的には極めて近い関係にあるものと考えらる。

備蓄銭の出土位置は前記した遺構群の中心から約40mの距離を隔てている。周辺には関連する遺構は無く、備蓄銭は砂利混じりの火砕流を掘り込んだ穴に埋められた曲物（長径36.3cm・短径32.2cm・深さ37.3cmの楕円形曲物）に納められていた。曲物は樺皮結合で側板の結合部分には漆が部分的に残り、接着剤として用いられたと考えられる。蓋は発見できなかったが、内容物の遺存状態は良好で曲物を密閉した可能性は高い。また、曲物の材は杉と考えられる。銭貨はさしに通された状態で出土したものも多く、サシに用いた軽くよった藁も生々しい。銭貨の埋納状態は曲物底部付近にバラの銭貨が湿気防止のためと考えられる多量の籾殻と混合され、その上位にサシに通された銭貨が曲物の口まで埋納されていた。また、銭貨自体の腐食は少なく銭名が容易に判読できるものが多かった。

3　ま　と　め

本遺跡出土の銭貨はすべて銅銭で、表1に示すとおり86種以上（無文を含む）、28,758枚以上を数える。この分類は銭名のみによる分類で、書体及び後鋳・私鋳などの分類を行えばさらに種類は多くなる。銭名不詳としたものは、銭面が摩滅しているために銭名が判読できないものである。また、無文としたものは打ちヒラメの鐚銭や方孔四方にたがね状のもので切り込み傷を付けた「星形孔銭」も混入しているが、その数量・銭種については未整理である。

銭貨の比率を鋳造国別に見ると、北宋銭が最も多く、26種16,932枚で全体の約59%を占めている。次は、絶対量は少ないが明銭で5種7,546枚で26.2%、唐銭が2種2,817枚で9.8%、南宋銭19種638枚で2.2%の比率を示している。このほかに比率では極めて小さい値を



第7図　銭貨の比率（銭造国別）

表１　小重遺跡出土古銭（竹尾　進氏作成）

銭　　銘	読	サシ＋バラ	不明古銭	クズ古銭	計	%
開元通宝	対	2646	15	26	2,687	9.3
乾元重宝	対	130	—	—	130	0.5
神功開宝	順	2	—	—	2	0.007
富寿神宝	順	1	—	—	1	0.003
天漢元宝	順	3	—	—	3	0.01
光天元宝	順	2	—	—	2	0.007
乾徳元宝	順	4	—	—	4	0.01
咸康元宝	順	5	—	—	5	0.02
周元通宝	対	8	—	—	8	0.03
唐国通宝	対	21	—	—	21	0.07
宋元通宝	順	64	—	—	64	0.2
太平通宝	対	126	—	1	127	0.4
天福鎮宝	対	—	1	—	1	0.007
淳化元宝	順	137	2	1	140	0.5
至道元宝	順	249	3	—	252	0.9
咸平元宝	順	330	—	1	331	1
景徳元宝	順	403	3	1	407	1
祥符元宝	順	503	1	1	505	2
祥符通宝	順	327	2	1	330	1
天禧通宝	順	376	2	1	379	1
天聖元宝	順	902	6	5	913	3
天聖通宝		1	—	—	1	0.003
明道元宝	順	86	—	—	86	0.3
景祐元宝	順	280	2	—	282	1
皇宋通宝	対	2345	21	31	2,397	8
至和元宝	順	207	2	—	209	0.7
至和通宝	対	47	2	1	50	0.2
嘉祐元宝	順	229	1	1	231	0.8
嘉祐通宝	対	417	12	2	431	1
済寧通宝		3	—	—	3	0.003
治平元宝	順	381	1	1	383	1
治平通宝	対	61	1	—	62	0.2
熙寧元宝	順	2053	2	1	2,056	7.1
元豊通宝	順	2049	12	12	2,073	7.2
元祐通宝	順	1694	18	10	1,722	6
紹聖元宝	順	783	10	8	801	3
紹聖通宝	対	2	—	—	2	0.007
海東通宝	順	2	—	—	2	0.007
元符通宝	順	258	1	1	260	0.9
聖宋元宝	順	767	6	14	787	3
大観通宝	対	483	1	—	484	2
政和通宝	対	1022	4	2	1,028	4
宣和通宝	順	133	1	1	135	0.5
建炎通宝	対	13	1		14	0.05
紹興通宝	対	2	—	—	2	0.007
紹興元宝	順	11	—	—	11	0.04
正隆元宝	順	93	—	—	93	0.3
大定通宝	対	50	—	—	50	0.2
淳熙元宝	順	91	1	1	93	0.3
紹熙元宝	順	53	—	—	53	0.2
紹熙通宝		1	1	—	2	0.007
慶元通宝	順	35	—	—	35	0.1
嘉泰通宝	対	31	—	—	31	0.1
開禧通宝	順	12	—	1	13	0.05
嘉定通宝	対	91	—	2	93	0.3
大宋元宝	順	3	—	—	3	0.01
紹定通宝	対	49	—	—	49	0.2
端平元宝	順	14	—	—	14	0.05
嘉熙通宝	対	8	—	—	8	0.03
淳祐元宝	順	61	—	—	61	0.2
皇宋元宝	順	33	—	1	34	0.1
開慶通宝	対	1	—	—	1	0.03
景定元宝	対	56	—	—	56	0.2
咸淳元宝	対	64	1	—	65	0.2
至大通宝	対	19	—	—	19	0.07
至正通宝	対	13	—	—	13	0.05
天定通宝	対	2	—	—	2	0.007
大義通宝	対	1	—	—	1	0.003
大中通宝	対	52	—	—	52	0.2
洪武通宝	対	3393	—	2	3,395	11.8

銭　　銘	読	サシ＋バラ	不明古銭	クズ古銭	計	%
咸元通宝		1	—	—	1	0.003
永楽通宝	対	3587	—	3	3,588	12
朝鮮通宝	対	261	—	—	261	0.9
宣徳通宝	対	509	—	—	509	1.8
紹平通宝	対	1	—	—	1	0.003
大世通宝	対	7	—	—	7	0.02
世高通宝	対	13	—	—	13	0.05
宣和元宝	対	1	—	—	1	0.003
万国通宝		1	—	—	1	0.003
熙寧重宝		1	—	—	1	0.003
宋聖開宝		1	—	—	1	0.003
天盛元宝	順	2	—	—	2	0.009
太平興宝	対	1	—	—	1	0.003
大治通宝	対	1	—	—	1	0.003
弘治通宝	対	2	—	—	2	0.007
判読不可		※　376	122	2	502	
——			79	—	79	
開元通宝？	対		1	16	17	
熙寧元宝？	順		—	7	7	
元符通宝？	順		—	1	1	
聖宋元宝？	順		1	—	1	
永楽通宝？	対		1	—	1	
私鋳銭　？	？		1	—	1	
景□元宝	順		1	—	1	
淳□元宝	順		1	—	1	
□宋元宝	順		1	—	1	
□祐元宝	順		2	—	2	
□聖元宝	順		1	—	1	
□和通宝	対		2	—	2	
□元通宝	順		1	—	1	
□平□宝	対		1	—	1	
□福□宝	対		1	—	1	
元□□□	順		—	1	1	
□熙元□	順		—	1	1	
□熙□□	順		—	2	2	
□熙元宝	順		—	1	1	
□□元宝	順		13	24	37	
□□元宝	対		1	—	1	
□□元宝	？		1	—	1	
□□元□	順		—	24	24	
□□通宝	順		5	10	15	
□□通宝	対		4	1	5	
□□通□	順		—	13	13	
□□通□	対		—	42	42	
□□□宝			—	85	85	
□□元宝	順	背下に六	—	1	1	
□元□宝	対	背下に二	—	1	1	
□□元□	順	背上に三	—	1	1	
乾元重宝or乾徳元宝			—	2	2	
太平通宝or治平通宝			—	2	2	
祥符元宝or祥符通宝			—	6	6	
天禧通宝or天聖元宝			—	1	1	
天禧通宝or開禧通宝			—	5	5	
天聖元宝or紹聖元宝			—	2	2	
景祐or嘉祐元宝or元祐通宝			—	1	1	
嘉祐元宝or嘉祐通宝			—	3	3	
治平元宝or治平通宝			—	3	3	
元豊通宝or元祐通宝			—	1	1	
元豊or元祐or元符通宝			—	15	15	
大観or大定or大中			—	3	3	
大観or大宋or大定or大中			—	1	1	
政和通宝or宣和通宝			—	10	10	
淳熙元宝or淳祐元宝			—	2	2	
嘉泰通宝or嘉定通宝			—	2	2	
嘉泰or嘉定or嘉熙通宝			—	1	1	
嘉定or景定or大定通宝			—	1	1	

※不明古銭　376枚　　クズ古銭　427枚
推定総数：28,758～28,986枚

註１．不明古銭は県教委作成の表の無文と銭名不詳銭を合算したものである。
２．クズ古銭は破片数が427枚あり、そのうち全ての古銭に共通する「宝」の破片数が199枚であった。
そして、当初総数の28,559枚に足したものが、上記の推定総数となった。
３．読は順読か対読の意である。
４．不明古銭の —— は摩耗が著しく、銘字の有無を確認できないものである。
５．％は、総数28,758枚と推定した割合である。

示すが、日本銭２種３枚、安南銭２種２枚、琉球銭２種20枚、朝鮮銭１種261枚など、中国以外で鋳造された銭貨も含まれる。

銭名別に見た場合、唐の開元通宝が9.3%、北宋の熙寧元宝が7.1%・元宝通宝が7.2%・元祐通宝が６%、明の洪武通宝が11.8%・永楽通宝が12.5%で、全体に占める比率も大きい。唐の開元通宝が9.3%と多いのは、中国において産出した銅銭の絶対量の多寡に影響を受けた結果と考えられる。また、永楽通宝と洪武通宝の流通については、永楽通宝が東国に、洪武通宝が西日本・九州にとりわけ流通する傾向があると言われているが、永楽通宝と洪武通宝の出土比率が近似している点は注目に値するものと思われる。

サシの状態で発見された枚数は12,765枚で、総枚数の約44.7%である。総計121連確認されたが、90から100枚の範疇にはいるものは41連で、全体の34%を占め、100枚一サシのものは１連１例のみである。このうち97枚一サシのものは18連あり、サシ全体から見ると、97枚一サシのものは約15%を占めるに過ぎない。調査時の取り扱いの不慣れ、ないしは一サシの結び目の欠失等から枚数の多寡があるのであろう。しかし、一サシの枚数がすべて同数であるという類例は、国内では現在知られていない。このため一サシの枚数に、多寡があってもよいものと思われるが、あまりにも枚数に差があるものは調査時の取扱い不慣れに起因するものであろう。

一サシの中で使用されている銭種は、限定されておらず混在している。また、サシのものとバラになっていたものとの銭種の比は76：75で大差がない。両者での銭種もほぼ同じものが多いが、枚数に差がある。バラにあってサシに無いものは海東通宝・紹熙通宝・大宋元宝・至正通宝・大義通宝・宣和元宝・万国通宝・熙寧重宝・宋聖開宝の９種が、逆にサシにあってバラにないものは富寿神宝・天漢元宝・天聖通宝・紹興通宝・開慶通宝・咸元通宝・紹平通宝・弘治通宝・紹平寧宝・天盛元宝・太平興宝・大治通宝・治聖元宝の13種あるがいずれも枚数は少ない。

出土した銭貨の上限はバラおよびサシであっても唐の開元通宝（初鋳年1488年）である。下限はバラで琉球の世高通宝（初鋳年1461年）、サシでは明の弘治通宝（初鋳年1488年）である。弘治通宝は明の孝宋の代（1488～1503年）に鋳造されている。埋納容器内の銭の納置状況から時期差があるのかも知れないが、ここでは同時期のものと考えておきたい。とすれば、本資料は鈴木公雄氏の分類によると、８期に該当し、16世紀の第３四半期の備蓄銭である。今後、周辺の環境を総合的に調査しより良い結論を出して行きたい。

引用参考　文献

出土銭貨研究会　1993『出土銭貨　―創刊準備号―』
山本幸俊　1991『上新バイパス　小重遺跡発掘調査の概要』（業務報告）
新潟県教育庁　文化行政課
鈴木公雄　1992「出土備蓄銭と中世後期の銭貨流通」『史学第61巻第３・４号』
網野善彦・石井　進・福田豊彦　1990『沈黙の中世』平凡社

表2　サシ単位の銭種および数量

銭銘	開元通宝	乾元重宝	神功開宝	富寿神宝	天漢元宝	光天元宝	乾徳元宝	咸康元宝	周元通宝	唐国通宝	宋通元宝	太平通宝	淳化元宝	至道元宝	咸平元宝	景徳元宝	祥符元宝	祥符通宝	天禧通宝	天聖元宝
鋳造国	唐	唐	日本	日本	前蜀	前蜀	前蜀	前蜀	後周	南唐	宋	宋	宋	宋	宋	宋	宋	宋	宋	宋
初鋳年	六二一	七五八	七六五	八一八	九一七	九一八	九一九	九二五	九五五	九五九	九六〇	九七六	九九〇	九九五	九九八	一〇〇四	一〇〇八	一〇〇八	一〇一七	一〇二三
1	27	1								1			1	2	2	5	8	2	4	12
2	21	1									3		1	1		2	2	2	5	10
3	18	1										1	1		3	4	3	1		5
4	11											1		1	1	1	2	1	1	6
5	15	1			1							1	2		2	2	6	1	3	9
6	10											1	1	1			2		1	3
7	3			1																2
8	15									1			1	1	1	2	2	1	1	2
9	15												1	2	1	1	1	2	2	5
10	31	3	1				1			1	2	1	1	2	5	4	7	7	5	11
11	45												1	3	6	4	7	4	8	17
12①	5																4			2
12②	4							1				1			1		1	1	1	5
12③	4										1							1		1
12④	3	2												1	1		2	1		3
12⑤	10	1											1	1	1		1	2		1
12⑥	3																1	1	1	
12⑦	10											1		3		1	1		1	5
13	6	1										1	1	2		1	2	3	1	5
14	14	2			1						1	1		2	2	1		2		4
15	11											2				4	1			3
16	12													2	2		2	1	3	3
17	9					1						2	1			2			1	2
18	6											2					5	2	1	4
19	7														1	2		1		1
20	3	1													1	1	1		1	
21	2												1		1		2			4
22	1										1			1		1	1	1		
23	4											1					4	1	3	
24	8														1	2	1	2	5	5
25	16	2										2			7	3	6	5	5	13
26	4	1										1	1	1	1	1	2	1	2	1
27	6								1			1	1				1	1	1	4
28	1																			
29	32	1							1			2		2	4	2	6	2	1	8
30	10											1		3	1	3	1		1	1
31	10	1										2		2	2	1	1	3	1	5
32	13	1							1		1	2			3	1	2	2	1	6
33	12	1								1	1	1	1			1	1	1	1	2
34	27	2							1		2	4		2	1	2	5	1	4	12
35	6	1											1		1	1	1		3	5
36	21	1												4		3	3	2	1	7
37	4																	1		4
38																				
39	5	2								1				1	1	3	1	2	2	5
40	17	1										1	1		3	1		1	3	5
41	7														1	2	3		5	6
42	10	1												1	1	2	2	1		3
43	6											1		2		2		1		2
44	2															1				2
45	13	2											1	2		1	3	1	2	7
46	6	1											1				3		1	3
47	4	1													1	1	3		1	2
48	4														2		1		1	1
49	6	1			1			1				3				3	2	2	3
50	10	1												2	3	1	4	1	2	3
51	5	1							1			1		2	1	2	1	1	1	3
52	7														1	1	1	1		2
53	11											1	1	4			2	2	2	4
54	9											3				2			3	
55	6	1										1			1	3	1	1		2
56	17											1	2						4	1
57	8						1						1	1	1	2	1	1	4	4
58	8											1		2	1	1	4	1		1
59	12											2	2	2			2	1	1	3
60	8										1	1			1	3	2	1		6
61	8	1										1		2			2			1
62	22													1	3	3	1	4	2	6
63	6										1	1		1	1	1	2	3	4	4
64	11														1	1	2	2	3	4

銭銘	天聖通宝	明道元宝	景祐元宝	皇宋通宝	至和元宝	至和通宝	嘉祐元宝	嘉祐通宝	済寧通宝	治平元宝	治平通宝	熙寧元宝	天豊通宝	元祐通宝	紹聖元宝	紹聖通宝	海東通宝	元符通宝	聖宋元宝	大観通宝
鋳造国	宋	宋	宋	宋	宋	宋	宋	宋	宋	宋	宋	宋	宋	宋	宋	宋	高麗	宋	宋	宋
初鋳年	一〇二三	一〇三二	一〇三四	一〇三九	一〇五四〜五五	一〇五四〜五五	一〇五六	一〇五六	一〇五八	一〇六四	一〇六四	一〇六八	一〇七八	一〇八六	一〇九四	一〇九四	一〇九七	一〇九八	一一〇一	一一〇七
1		2	6	21	3	1	1	6		6	1	17	20	17	8			3	8	6
2		1	3	24	1		2	3		3		15	13	13	3			4	7	3
3		1	2	11	2		1	2		5	2	11	11	5	2			1	8	1
4				10	1		1	3		2		3	6	6	1			1	2	
5			1	19	1		2	1		2		14	13	12	4			1	4	3
6				11	1		3	3		2		15	10	9	3			1	7	5
7				1			1				1	1	1					1	5
8			1	9							2	9	8	3	1			1	1	2
9		1	2	9			2	3				3	13	7	2			2	1	1
10				23	3			2		5		27	20	22	9			5	10	3
11		1	1	43	5		4	6		6	1	13	34	20	11			5	11	6
12①			1	8	1		1					3	6		1			1	7	3
12②		1	2	8	1			2		1		5	11	9	3				3	1
12③			3	3			1	1		1	1	5	7	3	3			1	1	2
12④				4			1	1		2		3	3	1	4			1	1	1
12⑤				1			1	1		1		4	2	2	2				1	1
12⑥				5	1		1			3		6	2	2	2					1
12⑦		1	1	3	2	1	1	1				8	4	4	7			3	3	3
13			1	9	2			1		1		4	10	6	3				2	2
14			3	7	1		2	3		2	2	3	13	4					4	
15				6				1				5	12	3	2			3	1	
16				5				1		2	1	7	5	3	5				1	
17		1	2	9	1			1			2	2	7	10	1			2	3	2
18				14			1	1				9	7	8	5				4	2
19		1		10	1	1				2		5	5	10	2				2	
20				5	2						1	8	2	2	3				1	1
21			1	2								2	2	1	2					1
22	1			2								1	1	2						
23		1		5	2			2		3		12	6	7				1	2	3
24			1	8	1		1					9	6	3	5			2	4	1
25		1	2	10		1		4		4		22	20	11	9			2	8	1
26				5				4		1	1	9	5	6	4				3	
27			5	5	1	1		2		2		4	6	5	2			2	3	1
28		1																	1	
29		2	1	31	2		4	5		3		23	26	18	10			3	9	4
30			1	12			1	2		1		7	8	7	4			3	2	1
31		2		14	2			1		3		5	15	6	2			1	5	1
32			1	9	3			2			1	12	4	7	2				6	1
33			1	6			1	3		1		8	9	5	3			1	1	8
34			2	18	1			5		3	1	19	15	14	4			3	7	1
35				9	1	1	1	2		1	1	13	11	5	6			2	4	1
36			1	10	1		2	2		2		10	11	10	2			3	4	2
37			1	10	1		2	2			2	7	5	4				1	3	
38				5							1		1	1					1
39			1	13	1		1	1		1		9	15	11				2	2	1
40			3	10	3		2	1		5		8	16	7	5				4	3
41			1	14			1	1				4	8	9	2				2	2
42		1		2				2		2		4	4	6	3			1	4	1
43				1	1					1		7	6	2	3			3	5	3
44				2				1		1		2	5	2	1				3	3
45			1	7	1			1		1		11	7	8	6				8	4
46			1				2	6		2		6	6	3	7				3	2
47		1		1							2	6	2	4				1	
48			1	5	1		1	1				6	4	4	3				2	
49			2	10			1			2		8	2	6	3			1	4	1
50				6			1	1		3		11	8	12	1				3	1
51			2	17			1	3		1		7	5	6	3			1	1	2
52			1	8	2		2	5		1		5	9	11	5				3	1
53				11	1	1	2	2				8	9	8	2			1	1	3
54				7		2				1		7	2	7	6			1		1
55		1	1	5	1		1	1		2		6	4	2	4					1
56			1	9			3	4		1		10	9	3	1			2	3	
57		1		7				1		1		8	7	8	1				2	1
58		1		10	1	1	1	1			1	6	11	5	5			1	1	
59			1	12		1		2		2	1	9	6	6	3			1	6	
60		1	1	7				1				11	3	7	1			2	3	3
61		1	1	3	1		1	1		1		3	5	4	4			2		
62				13	1			4		4		10	13	8	8				4	3
63		1	2	11				4		2		6	10	7	2			1	6	1
64			1	6			1	1		1		6	9	9	2			2	1	2

銭銘	政和通宝	宣和通宝	建炎通宝	紹興通宝	紹興元宝	正隆元宝	大定通宝	淳熙元宝	紹熙元宝	紹熙通宝	慶元通宝	嘉泰通宝	開禧通宝	嘉定通宝	大宋元宝	紹定通宝	端平元宝	嘉熙通宝	淳祐元宝	皇宋元宝
鋳造国	宋	宋	南宋	南宋	南宋	金	金	南宋	南宋	南宋	南宋	南宋	南宋	南宋	南宋	南宋	南宋	南宋	南宋	南宋
初鋳年	一一一一	一一一九	一一二七	一一三一	一一三一	一一五八	一一六一〜七八	一一七四	一一九〇	一一九〇	一一九五	一二〇一	一二〇五	一二〇八	一二二五	一二二八	一二三四	一二三七	一二四一	一二五三
1	10	3						2			1			1		2			2	
2	9	1			1					1				1						
3	6	1				2	1	2						1			1	1		
4																				
5	7					2		1	1		1			1						
6	2	1				1		1											1		
7	5	1				1	2													
8	4	1				1														1
9	3	1					1					1								
10	11	2	1					1	1								1		1	1
11	16	2			1	2	1		1					1		1				
12①	1	1																		
12②	4					1	1		1							1				2
12③	4	2						1												
12④	1							1												
12⑤	1													1						
12⑥	2																				
12⑦	4							1						2						
13	2							2												
14	6								1								1		3	
15	7	1		1	1				1											
16	4										1									
17	10	1					2							1					1	
18	8							1												
19	2	1					1										1			2
20						1														
21	2					1														
22	1																			
23	3				1			1												
24	5																			1
25	8	3				1							1			2				
26						1														
27	1					1														
28	3	1																		
29	9	2				2								1		1				2
30	3	2							2					1						
31	3	1				1		1												
32	4	1									1								1	
33	7	2		1							2			2				1	1	1
34	9	3				1		3				1		1						
35	3								1		1		1							
36	5		1					1	2							1				
37	1										1			1						
38	2					1								1		2				
39	1								1												
40	3	2																		
41	5	1				1	1		1										1	
42	2						1	1											1	
43	6																			
44	2						1		2												
45	4											1				1			2	
46	3	1				1	1	1						1						
47	4						1														
48	2																	1	1	
49	3							1					1						1	
50	6	1	1																		
51	4																			
52	4						1									1				
53	4					1		1			1			1					1	
54	1													1						
55																				
56														3			1			
57	2																			2
58	1	2											1						1	
59	4	1				2	1	1												
60	4	1					1		1							1				
61	2					1			1					1						
62	4							1												
63	6			1					1					1						2
64	5													1					1	

銭銘	開慶通宝	景定元宝	咸淳元宝	至大通宝	至正通宝	天定通宝	大義通宝	大中通宝	洪武通宝	咸元通宝	永楽通宝	朝鮮通宝	宣徳通宝	紹平通宝	大世通宝	世高通宝	宣和元宝	万国通宝	熙寧重宝	宋聖開宝
鋳造国	南宋	南宋	南宋	元	元	漢陳	漢陳	明	明	安南	明	朝鮮	明	安南	琉球	琉球				
初鋳年	一二五九	一二六〇	一二六五	一三一〇	一三四一	一三五九〜六〇	一三六〇	一三六一	一三六八	一四〇三〜〇八	一四〇八	一四二三	一四二六〜三三	一四三四	一四五四〜六〇	一四六一〜六九				
1									20		58	1	8							
2								1	15		14	1	2		1					
3			1						32		26	3	7			1				
4			3					1	14		13		4							
5		1							23		35									
6								2	9		25	2	4							
7		1							22		108	7	19							
8									12		14	1								
9									10		10	1	4							
10			2					1	35	1	70	1	10							
11		1							57		34	2	4			1				
12①			1						9		11		2							
12②								1	13		20	1	4							
12③									5		6									
12④									8		1									
12⑤									14		2	1	2							
12⑥									8		8									
12⑦		1							16		12	2	5							
13									1		4	1	1							
14									5		5									
15									11		15	1	5							
16									16		14	1	2							
17						1			5		14									
18									1		11		4							
19								1	5		4									
20									1		2									
21																				
22									3		3									
23		1							19		5	1								
24		1							10		12									
25		2						1	24		22									
26									3		3		2							
27									7		8									
28											66		6							
29									6		16	2	2							
30									2		12		2							
31		1									2		2							
32									4		5									
33									3		9									
34			1						26		28	1	4							
35				1					3		8		1							
36									17		17	1	3							
37									2		1									
38											25	1	3							
39		1							5		6	1								
40									19		13	1	4							
41		1						1	4		10		3							
42								1	6		4									
43									9		3									
44			1						3		4		1							
45								1	8		15	5	2							
46			1					2	7		15	2	4							
47			1						9		7	2	2							
48									11		9	1								
49									16		28		2			1				
50									7		15		1							
51									13		12		1							
52									8		7		3							
53									4		4		1							
54			1						13		15									
55									8		19	2	1							
56									3		5		1							
57				1					9		7		2							
58			1						8		16		1							
59		2							5		10		1							
60	1								11		16	2	1							
61								1	5		11	1	2							
62		1	1						13		21		3							
63			1						4		2		2							
64								1	3		3									

銭銘	天盛元宝	太平興宝	大治通宝	弘治通宝	無文	銭名不詳	計	備考
鋳造国				明				
初鋳年				一四八八〜一五〇三				
1							299	1連　紐あり
2						3	193	〃　〃
3							187	〃　〃
4							98	〃　〃
5						1	193	〃　〃
6						1	138	〃　〃
7							183	〃　〃
8							98	〃　〃
9						2	109	〃　〃
10							350	〃　〃
11					2		388	4連まとめ
12①						1	69	1連　紐あり
12②							111	〃　〃
12③							57	〃　〃
12④							46	〃　〃
12⑤							55	〃　〃
12⑥							47	〃　〃
12⑦						1	108	〃　〃
13						1	76	〃　〃
14							96	〃　〃
15							97	〃　〃
16							93	〃　〃
17							96	〃　〃
18						1	97	〃　〃
19						1	69	〃　〃
20					2		38	〃　〃
21							26	〃　〃
22							20	〃　〃
23						2	90	〃　〃
24							94	〃　〃
25					1	3	223	〃
26							63	〃
27	1						73	〃(No. 40と混入)
28							79	〃
29							246	〃
30	1					1	96	〃
31						1	97	〃
32							97	〃
33							99	〃
34		1			2	3	239	〃
35							96	〃
36					1	1	152	〃
37					2		55	〃
38					1		45	〃
39							96	〃
40					1		143	〃
41							97	〃
42					5		73	〃
43							64	
44							39	
45							126	
46							92	
47							56	
48							62	
49							115	
50							105	
51							98	
52						1	90	
53							94	
54						1	83	
55			1				76	
56							84	
57							84	
58							95	
59							102	
60						1	103	
61							67	
62					1		155	
63							97	
64							79	

銭銘	開元通宝	乾元重宝	神功開宝	富寿神宝	天漢元宝	光天元宝	乾徳元宝	咸康元宝	周元通宝	唐国通宝	宋通元宝	太平通宝	淳化元宝	至道元宝	咸平元宝	景徳元宝	祥符元宝	祥符通宝	天禧通宝	天聖元宝
鋳造国	唐	唐	日本	日本	前蜀	前蜀	前蜀	前蜀	後周	南唐	宋	宋	宋	宋	宋	宋	宋	宋	宋	宋
初鋳年	六二一	七五八	七六五	八一八	九一七	九一八	九一九	九二五	九五五	九五九	九六〇	九七六	九九〇	九九五	九九八	一〇〇四	一〇〇八	一〇〇八	一〇一七	一〇二三
65	10	1						1			1	1	1	1		1	1	2	2	7
66	7									1		1			3	1	3	1		3
67	19											1		2	3	4	2		2	3
68	5	1												1		1	2			1
69	14											1			1	2	4	1		2
70	11											1		2	1		2	2	3	2
71	11									1		3	1		1		2	1	3	7
72	8										2	1	1		3	2				4
73	8												1	2		2			2	5
74	7										1				1				1	3
75	3	1												1		1	1	1	1	1
76	9										1				2	2			2	2
77	10											1			2	3	1	1	2	1
78	11	1										2		1	1	1	4			1
79	9	1									2			2	1	1	1			5
80	8												1	2		1		1	1	7
81	11	1												1	2	4	2		1	5
82	5	1														1	1		1	2
83	10										1		1	1			2		1	7
84	6	2										3		2		3			3	3
85	5														1		1			3
86	5											2	2		1	1		1	2	2
87	4											1	1			1	3	3	1	3
88	16											1		1		1	1	2	1	1
89	6										1		1	1	2	1	2	3	1	4
90	11										1				2		3	1	2	3
91	10												1		1	4	3	2	2	4
92	15													1	1		2	1		4
93	9										1			2	1	4	2	2	1	2
94	4											1			1	1	1	1	1	1
95	6													2	1	2	2	2	1	
96	7											2		1	1	1	1	3		4
97	9											1				3	3	1		2
98	12	1											1	1		4	4	1	4	1
99	7												1	1	2	2		2	1	3
100	6														1	1	1	1	2	2
101	6													2	2			1	1	6
102	5	2										1	1	2	2	2	4	3		4
103	7	1												1		2	2	1		1
104	13											1		1		3	3	2	2	4
105	13										1	1				1	1	4	4	4
106	6	1													3	1	1		1	6
107	6											2		2	2	2	1	1	1	1
108	3											2			2		3	1	2	2
109	13										1			1		2	6		1	5
110	18	1												4	3	4	3	2	1	2
111	11	1									1	3	1	2	2	3	1	1	2	6
112	14											3		2	2	2	4	1	2	5
113	9	1											1	1		1	4		4	3
114	5												1		2	2			4	1
115	14	1											2			2		1		3
116	4	1										1	1	1	2	1			2	7
117	10	1													2		2	2	2	4
118															1		1			1

銭銘	天聖通宝	明道元宝	景祐元宝	皇宋通宝	至和元宝	至和通宝	嘉祐元宝	嘉祐通宝	済寧通宝	治平元宝	治平通宝	熙寧元宝	元豊通宝	元祐通宝	紹聖元宝	紹聖通宝	海東通宝	元符通宝	聖宋元宝	大観通宝
鋳造国	宋	宋	宋	宋	宋	宋	宋	宋	宋	宋	宋	宋	宋	宋	宋	宋	高麗	宋	宋	宋
初鋳年	一〇二三	一〇三二	一〇三四	一〇三九	一〇五四〜一〇五五	一〇五四〜一〇五五	一〇五六	一〇五六	一〇五八	一〇六四	一〇六四	一〇六八	一〇七八	一〇八六	一〇九四	一〇九四	一〇九七	一〇九八	一一〇一	一一〇七
65		1	1	12	1		1	1		1		12	7	12	4			1	3	
66		1	2	13				2		1		5	7	5	2			2		
67			2	10	1		1	6		1	2	11	10	8	3				6	2
68				7			1	2				4	4	4					3	
69				6	1			1		1		10	11	8	1				2	
70		1		15	4	1	3	3				11	7	8	4			2	2	
71		2		10			1	3		5		4	6	11	3			2	2	2
72			1	2						1		8	8	5	2			2	2	1
73			1	6								8	5	5	1				1	2
74			3	8	3			1				3	2	5	2				1	2
75				8						2		10	5	4	6				3	
76			5	12	2	1	2		2		1	12	16	8	5				6	3
77		1	3	4			1	3		1		5	8	2	2			3	4	3
78		1	2	9			1	2		2		2	7	6				1	2	2
79				3	3			2		1	1	7	3	10	2				1	5
80		1		10	3			2				9	8	5	5			4	1	1
81				6			1	2		1		5	7	7	2			2	1	1
82				5				1		1		3	8	7	1	1		1	2	1
83			2	10	2	1		1		1		6	2	2	4			1	6	2
84		1		15	2		1	1		2		13	9	11	7				4	2
85				2			1			1		4	4	2	2				2	1
86			1	6	2			4				4	5	6				1	1	1
87			1	12	1			3		1		5	8	9					1	1
88		1	1	8	1		1	2		2		5	5	7	4					3
89		1	1	9		1	2	1				9	12	10	2			1	2	2
90			2	5				4		1		7	8	3	3				4	2
91				4				4				2	10	7	1				4	1
92			1	7	1			2		1	1	10	5	7	2			1	3	
93				5			2	1		2		6	7	7	2				3	
94			2	8	3	1	1	3		1		8	4	6	1				9	2
95			1	9	1			1		1		10	3	5					2	1
96		1		8	1		1	2		1	1	11	7	3	5				2	3
97		1	2	6	2			1			1	4	8	5	4				2	
98				8	2		1	3		1		10	11	9	2				2	
99				10	2					1	1	9	6	7	2			2	4	
100				1			1	3				4	7	5	3			1	2	1
101		1	1	4				5		1	1	4	4	7	1			1		3
102			2	10	2			2				9	12	5					3	1
103				6		1		2				4	9	3				3	2	
104				10			1			1		9	5	8	1			1	1	2
105			1	9			1	1		2		8	9	4	7				4	3
106			2	3				2				11	8	3	5			1	4	
107			1	7				2		2		8	7	4	2			1	3	
108				6			1	1				4	9	12	3			3	2	1
109				11				4				12	9	12	5			3		2
110		1	1	9	3	1	3	3		4		12	9	6	4			1	2	3
111		1	1	17	1		2	3		1	3	18	14	8	7			2	4	1
112		1	3	16	3		1	4		4		12	8	11	3			1		1
113		1	2	11			1	3				7	5	8	3				4	
114			3	13			1			1		13	9	3	3			2	1	
115		2	1	9			1	2		3		4	8	5	5			3		3
116			2	17			1	1				4	6	2	2				2	1
117			4	12	1		5	3		1		6	4	9	4			1	3	
118				3									2	2						4

銭銘	政和通宝	宣和通宝	建炎通宝	紹興元宝	紹興通宝	正隆元宝	大定通宝	淳熙元宝	紹熙元宝	紹熙通宝	慶元通宝	嘉泰通宝	開禧通宝	嘉定通宝	大宋元宝	紹定通宝	端平元宝	嘉熙通宝	淳祐元宝	皇宋元宝
鋳造国	宋	宋	南宋	南宋	南宋	金	金	南宋	南宋	南宋	南宋	南宋	南宋	南宋	南宋	南宋	南宋	南宋	南宋	南宋
初鋳年	一一一一	一一一九	一一二七	一一三一	一一三一	一一五八	一一六一〜一一七八	一一七四	一一九〇	一一九〇	一一九五	一二〇一	一二〇五	一二〇八	一二二五	一二二八	一二三四	一二三七	一二四一	一二五三
65	2	3																		
66	4								1			1								1
67	6	1										1								1
68	4	1																		1
69	2											1	1							
70	2	1										1								
71	5	2				1														
72	4						1		1											
73	4																			1
74	3	2												1						
75	1							1												1
76	5	2	1											1						
77	7					2	1	1				1		2					1	
78	4					1							1	1					1	
79	4	1														1				
80	4					1		2						2						
81	3													1						
82	3						1													
83	4	1	1											1						
84	5							1					1							
85	2																			1
86	1	1																		
87	1						1							1						
88	2						1	1						1						1
89									2								1			
90	3							2				1								
91	5																			
92																1				
93	2	1									1								1	
94	4							1			3			2						
95	4																			
96	7	2						1			1			1						
97	3										1			1						
98	2	1					1	1						1					1	
99	5							1												
100	3	1												2		1				
101	3	1				1					1					1				
102	2	1														1				
103	2															1				
104	9	1				1		1												
105	1						1	1						1		1			1	
106	3					2											1			
107	4	1					1				1	1								1
108	4							1						2						
109	6																			
110	4						1							1						
111	2	1				1								1					2	
112	7							2			1								1	
113	5		1					1												
114	5	1									1						1			
115	3								1			1								
116	3	1																		
117		2	1																	
118	3					2	1					1								

銭銘	開慶通宝	景定元宝	咸淳元宝	至大通宝	至正通宝	天定通宝	大義通宝	大中通宝	洪武通宝	咸元通宝	永楽通宝	朝鮮通宝	宣徳通宝	紹平通宝	大世通宝	世高通宝	宣和元宝	万国通宝	熙寧重宝	宋聖開宝
鋳造国	南宋	南宋	南宋	元	元	漢陳	漢陳	明	明	安南	明	朝鮮	明	安南	琉球	琉球				
初鋳年	一二五九	一二六〇	一二六五	一三一〇	一三四一	一三五九〜一三六〇	一三六〇	一三六一	一三六八	一四〇三〜一四〇八	一四〇八	一四二三	一四二六〜一四三三	一四三四	一四五四〜一四六〇	一四六一〜一四六九				
65			1								2	1	1							
66				1					5		2	1								
67		1						1	17		11	2	5							
68									1		8		1							
69									12		10		4							
70									3		5									
71			1						8		10									
72				1				1	11		11	2								
73			1						9		13	2	2							
74									6		7		2							
75				1					14		7		1							
76									4		7		1							
77								1	9		10	1	1		1					
78									7		14	1	2							
79									9		9	1	2							
80			1					1	9		12		1							
81		1	1						10		12		2							
82			1						2		7		1							
83									9		7	1	3							
84									8		9	1	1	1						
85			1						4		7	1								
86									10		7									
87									10		11	1	1							
88									7		8	1	1		1					
89									7		8		2							
90									15		8	1	3							
91			1						19		10	1	1							
92									14		11		1							
93									1		10	1	3							
94									5		14									
95		1							3		7									
96									8		6	2	1							
97									4		11	1	4							
98									6		4		1							
99								2	11		15	2	1							
100									5		5									
101		1							1		5									
102		2	1						18		8	3	1							
103			1						12		12									
104								1	23		14	1	4							
105			1						6		16		1							
106									12		10	1	3							
107		1							4		10	1	1							
108		1							3			5	1							
109								1	16		24	2	3							
110		1						1	4		29	3	8							
111			1					1	10		32		3							
112		2	2						16		19		2							
113		1							13		4	1								
114									13		6	1								
115		1							9		6	1	1							
116									3		10	1	1							
117			2						12		16	2	2							
118									2		65	3	6							

銭銘	天盛元宝	太平興宝	大治通宝	弘治通宝	無文	銭名不詳	計	備考
鋳造国	明							
初鋳年	一四八八〜一五〇三							
65							96	
66						1	77	
67						1	146	
68							52	
69						1	97	
70							97	
71							108	
72							85	
73						1	82	
74							64	
75							74	
76						1	115	
77							99	
78						1	93	
79						1	88	
80							103	
81				1		1	94	
82							57	
83							90	
84						1	118	
85							45	
86					2		68	
87					2	1	88	
88							88	
89							95	
90							95	
91						1	98	
92					2	3	97	
93							79	
94							89	
95						2	68	
96					2		97	
97					2		82	
98						1	97	
99							100	
100							59	
101							66	
102							109	
103							73	
104					1		124	
105							108	
106							90	
107							81	
108							74	
109				1			140	
110							152	
111						1	172	
112					1		156	
113					2		97	連完存
114					2	3	97	
115					3	2	97	連完存
116					1	2	80	
117					1	2	116	連完存
118							97	
合計							12,765	

(番号: サシ番号)

研　究　紀　要

1 9 9 5

印　刷　　平成７年３月30日
発　行　　平成７年３月31日

編集発行　　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒951 新潟市一番堀通町5923番地46
ＴＥＬ　025―223―5642
印　　刷　　株式会社　第一印刷所
ＴＥＬ　025―285―7161

研究紀要　正誤表　　2019年9月追加

頁	位置	誤	正
64	上から13行目	…考古学Ｓ協会	…考古学協会…
104	上から17行目	『緒立ｃ遺跡…	『緒立Ｃ遺跡…
104	下から16･17･18行目	『八幡村遺跡』	『八幡林遺跡』